

---

# ゼロの使い魔～魔人の転生者～

izumonookuni

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜魔人の転生者〜

### 【Nコード】

N8485R

### 【作者名】

izumonookuni

### 【あらすじ】

日本での最強の悪魔部隊の隊長である主人公、魔族とのハーフである相馬龍牙はある戦争中突然現れたく神さまに「お前チートすぎ別世界に転生してこい」といわれゼロの使い魔の世界へと転生させられてしまう、ゼロの使い魔の世界で主人はチートを使いゼロ魔の世界にどのようにかかわっていくのか・・・  
的な物語です

この作品は作者の妄想100%と完璧なる駄文でお送りによる作

品ですこの作品が作者にとって処女作品になるのでどうか見ていた  
だけの方は指摘や意見などを言ってもらえると幸いです

主人公設定 9 / 30日 ネタばれ注意!!! (前書き)

ネタばれ注意!!!

主人公設定 9 / 30日 ネタばれ注意!!!

名前 リューガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッド  
リー

身長 幼少編最後で161cm 学院編最後で174cm

体重 幼少編最後で43kg 学院編最後で52kg

容姿

瞳 青

髪 青主体の赤メツシュ

性別 野郎

好きな

食べ物 魚介類

人物 ハッキリものを言う人

行動 太陽に当たりながら昼寝

嫌いな

食べ物 ネギ

人物 責任を取らないやつ

行動 睡眠を阻害する行為

性格 面倒事を如何にか面白い方向へとちまちま調節する  
基本的身内甘

貴族位 公爵

役職 中央騎士団隊長、総じガリア花壇警護騎士団 総団長

能力

異能 幼少編、発現しておらず

学院編、発言、使用せず

原破編、???

系統 幼少編、火のトライアングル 上

学院編、火のスクウェア 上

1系統相性

水 風 火

土

前世魔法 幼少編 全種上の下

学院編 破壊 極 他種 中の上

得物 幼少編 黒翼 杖 契約した柄だけの刀

学院編 上記に加え 黒翼破碎後、無名の刀

所持魔具 幼少編 四系炉

学院編 アスラムキーナ クロガネ 機功魔神？ 鐵

種族 魔天龍との血統 ハーフ

二つ名???

備考

神様の管理が及ばず？その世界において規格外の力を手にした結果  
神様によってゼロ魔？の世界へと転生させられる。

仲間と言うものを第一に考え

前世において存在しなかった家族にも唯なる思いがあり  
馬鹿にする行為や、敵対したものには容赦がない。

『人』として、ジヨゼフの王として品格に惚れ  
仕える事を誓うも、自分が半分人ではない事を考慮し  
人間同士の争い事には面白半分でしか関わる事が無い。  
良くも悪くも一番の友はジヨゼフ。  
二つ名に関してはジヨゼフと酒の席で  
酔っぱらった拍子にふざけ半分で決まったため  
自分からは名乗る事はなく、何故か黒くなる火の系統魔法から  
『黒炎』の二つ名で慕われると同時に畏怖されているが  
本来の二つ名ではない。

## 主な使用魔法

### 系統

『フレイム・ランス  
炎槍』

『トリアンズベル  
火の三乗呪文』

約1メートルの炎の槍を作り出す魔法。  
主な使用方法は通常の槍とは変わらないが  
投げつける事により突き刺さった場所に炎柱が立ち上げる事や  
爆発させる事が出来るため、リユーガは基本投げつけることしか  
しない。

『ファイヤーボール  
炎球』

『ドット  
火の一乗呪文』



込めた精神力に比例し大きさを増す火球を打ち出す魔法。

微弱ではあるがホーミング機能を備えており

ドット スベル  
一乗呪文の中では最大の威力を誇る。

しかし、動きが直線すぎる上にホーミング機能が弱い事から

リユーガは応用の効く炎槍を好んでつかう為

フレイム・ランス

あまり登場しない。

フレイム・ウォール

『炎壁』

火の一乗呪文

ドット スベル

炎の壁を張り巡らせる魔法。

攻撃も防げ、なお且つ視界も防げる一石二鳥の魔法。

だが、リユーガは相手が逃げないようにする程度にしか使わない。

フレイム・タワー

『炎柱』

火の二乗呪文

ライン スベル

足元に巨大な炎柱を立ち上げる魔法。

立ち上げる場所は視界の届く範囲、任意で放つ事が出来るが

発生前に足元に炎の円が出来る事から、避けられやすいが

ライン トライアングル

威力は二乗で三乗に届く程。

## 1 『系統相性』

その名の通り系統との相性。

あくまで相性であるため、決して他の系統が伸びないという訳ではなく

成長が速く馴染みやすい系統と考えていただければ。

主人公設定9/30日 ネットばれ注意!!! (後書き)

はい、こんな感じでしょうか。

かなり分かりやすくなっていると思うんですけどどうでしたか？

とりあえず主人公だけとなってしまうましたが

実際これでもかなり絞った方なんですよ

こう、さあ書いて行こう！皆様に分かりやすく分かりやすく……  
って書き始める事気づくと5日。

書き終えたあ〜と思ったたら何と主要登場人物紹介だけで10000  
文字越えている……

どう言う事なの……

てな訳で設定でだらだらやって居ると唯でさえ少ない読者様が減っ  
てしまうと思っ

書きなおし、その際にとりあえず主人公設定だけでも、となりまし  
た訳で

いや〜……かなり減らしちゃったけど残りを……上げた方が良  
いのだろうか？

主人公勢設定(前書き)

題名通り

ネタばれ含みマース

## 主人公勢設定

名前 ステイル・マグヌス

身長 180cm

体重 72kg

容姿

瞳 茶色

髪 赤のセミロング

性別 野郎

貴族位 なし

地位 トリステイン魔法学院2年生、トリステイン子爵3男

役職 リューガの僕おせがや

能力

系統 火のスクウェア 下

系統相性

火 風 水 土

前世魔法 学院編 習得しておらず

得物 杖、エルフ作成魔法行使用グローブ（中級）

所持魔具 アスラマキナ ヒヒロカネ  
機功魔神火廣金

種族 人

二つ名 学院編 炎剣

備考

偶然リューガの魔族化を目撃してしまい  
トリステイン貴族には珍しく他国人を軽蔑視しない姿勢を気にい

られ、リユーガと共に行動する事に。

当初火の下位の使い手ながらもリユーガとの特訓遊びにより今ではト  
リステイン有数の火のスクウェア。

一年と少しと短いながらも濃い経験をリユーガの元でしてしまっ  
た為戦闘能力や金銭感覚などが狂ってしまっている。

普段は冷静ながらもリユーガのぶっ飛んだ行動、言動に振り回さ  
れる突っ込み役。

## 主な使用魔法

### 系統

『フレイム・ソード  
炎剣』

火の二乗ライン一呪文スペル

火系統ブレイドの剣

ステイルが最も使用する魔法。

通常ブレイドの剣とは違い、相手を焼き切るための魔法

伸縮自在で使い勝手がいいものの、威力としては火の一乗ブレイドにも劣  
る事から普通の使用者はまず剣ブレイドの魔法を使う。

『ファイヤー・クロス  
紅十字』

火の三乗トリアングル一呪文スペル

リユーガが編み出したネタ魔法。

ネタと言えども威力は三乗トリアングルの上位に位置する。

しかし詠唱が長く使い勝手が悪い。

名前 ？？？

身長 ？？？

体重 ？？？

容姿 ？？？

瞳 ？？？

髪 ？？？

性別 ？？？

貴族位 ？？？

地位 ？？？

役職 ？？？

能力

系統 ？？？



系統相性

前世魔法 ？？？

得物 ？？？

所持魔具 ？？？

種族 ？？？

二つ名 ？？？

備考

『この項目は伏せられております』

主な使用魔法

系統

名前 ユーリ・アレクト

身長 132cm

体重 軽い

容姿

瞳 薄い青

髪 膝まである長い銀髪

性別 ついてないほう

貴族位 男爵

地位 なし

役職 プチ・トロワ侍女

能力

系統 水のトライアングル 上

系統相性

火 風 水 土

前世魔法 再生 中の下

得物 杖 言葉

所持魔具

機功魔神???  
アスラマキナ

## 四系炉の水石

種族 契約者

二つ名 純水

備考

ガリア吸血鬼騒動によつて被害を受けたアレクト家の生き残り。

王家の血を濃く継いでいるにもかかわらず

ガリア王家特有の青髪とは裏腹、銀髪となつてしまった為

伝統を重んじる家族からは忌子扱いとして疎まれており、現状を変えたいと望む中

水鬼セツタと出会い契約をかわす。

しかし、屋敷にはもう一人の水鬼が潜んでおり

水鬼との相性が抜群だと言う事を見抜かれ、2人もの水鬼と契約した結果、力の歯止めが利かなくなり、口呪によつて屋敷に居た者たち全てを殺してしまつた。

事件後、2人目の水鬼に代価として無理やり抜き取られた感情が戻るも、無理に抜きとられたためか欠損部が多く

本能のまま行動することが多くなり

徐々に戻つてはいるものの言動があやふや。現状では

リユーガ、セツタ、イザベラ以外ではユーリの言語は解析不能。

主な使用魔法

系統

『アクア・ロード  
水路』

## 水のドット乗呪文スヘル

空気中の水を集め水の道を作る魔法。

本来は狙いの定めにくい水系統の魔法を当てやすくするための道順を作る魔法だが、ユーリはこれを足場として使用している。

名前 ギーシュ・ド・グラモン

身長 175cm

体重 58kg

容姿

瞳 翡翠

髪 金髪

性別 野郎

貴族位 なし

地位 トリステイン魔法学院生、トリステイン伯爵3男

役職 リューガの僕おまかせ

能力

系統 土のスクウェア 下

系統相性

火 風 水 土

前世魔法 学院編 習得しておらず

得物 杖 エルフ作成アイテム（中級）

所持魔具

アスラムキーナ バイライト  
機功魔神黄銅鉞

種族 人

二つ名 学院編 青銅

備考

リユウガの数少ない学友の1人

同じクラス、隣の席と言う事で最初は浅い関係だったが

リユウガの圧倒的強さに惹かれアピールを続けていたら何時の間  
にや深い関係となった原作キャラの中で最も変わったキャラ。

ナルシが軽減され、ステイル同様感覚が若干狂ってきてはいるも  
のの

それを異常だと認めている事から何気に適応力が高い設定。

## 主な使用魔法

### 系統

『錬金』

### 土の基本魔法

あらゆる物質の配列を変換させる事が出来る魔法。

魔力さえあればごり押し可能なので最も応用力の効き

主にギーシュは火薬を錬金、発火で爆破と言うコンボを使用する。

最もリユーガの特訓遊びにより魔力貯蔵量がリユーガ以上なため

スクウエアの下クラス遊びの技量では上手く制御できなくなり

錬金 発火だけで火のスクウエアクラスの威力に相当する。

『ゴレム  
土人形生成』

土系統 ゴレムの完成度に追ってクラスランクが変動

簡単な命令を遵守する土人形ゴレムを生み出す魔法。

この作品では大きさでクラス判別

1、2メートル台ドット一乗

3、4メートル台ライン二乗

5、6メートル台トライアングル三乗

7、…メートル台スクウエア四乗

と、なり。

ギーシュは一乗ドット一ならば約50体

ライオン  
二乗約20体、三乗約5体  
スクウェア  
四乗3体  
まで生成可能。

あくまで生成可能なだけで、呼び出して全てを操れるわけではない。

アスラマキナ  
機功魔神

リユーガとウィルが完全に悪ノリで作成した高性能人形  
一度呼び出せば、自動操縦と感覚操縦と使い分ける事が出来  
詠唱中護衛させるもよし、それ自体を土人形ゴレムの様に操るも良しと  
使い勝手が良いが、使用者の魔力に反映される為  
かなりの魔力循環の技術が必要とされる為、現在の所  
リユーガとエルフの上位の行使手位しか完全体フルサイズで呼び出す事は不  
可能。

どれだけ破損しようとも本体である影に埋め込んだ魔石を破壊さ  
れない限り  
何度でも呼び出すことが可能。

???

クロガネ  
? 鐵

所有者 リユーガ

月をイメージした装飾の施された黒い甲冑

魔力を重力に変換する事が可能。  
ベクトルを任意で決める事が出来る為  
最も使い勝手のいいアスラマキーナ機功魔神  
しかし、膨大な魔力を消費するため  
魔力の循環が巧みな者にしか扱えない。

???

???

ヒヒロカネ  
火廣金

所有者 ステイル

炎をイメージした装飾の施された赤い甲冑。  
周りの熱を吸収し蓄える事が可能。  
決められた熱量ごとに甲冑に火の紋に色が付き  
蓄えた熱を炎に変えたり、拳に熱を持たせて殴るなどが可能。

???

???

パイライト  
黄銅鉾

所有者 ギーシュ



大地をイメージした装飾の施された黄色の甲冑。

魔法の効力を蓄える事が可能。

同じ魔法であれば、蓄えられた魔法は効力を増加させていくが、別の魔法を蓄えさせると、勝手に内部で効力が混ざりあい

全く別の効力が発生するため、組み合わせ次第では強力な効力を発生させることも可能だが、

把握していないと時折、効力同士が打ち消し合って使いものにならない事もあるギャンブル性の高いアスラマキナ機功魔神

???

???

???

所有者 ユーリ

???

???

???

???

所有者 ???

???

???

???

???

所有者 ウィル

???

???

???

白銀 シロガネ

所有者 ビダーシャル

剣をイメージした装飾の施された白い甲冑。

巨大な剣を装備しており、魔力を込める事で切れ味が増し

魔力次第では空間を切り裂く事も可能だが

クロガネ ？ 鐵同様、魔力消費が激しいため

魔力の循環が巧みな物にしか使用できない。

## 主人公勢設定（後書き）

うーん・・・ユーリの備考、かなり削っちゃたな

それにまだまだ？が多いから・・・

まあ、登場次第上げていきマッスル

主人公勢があると言う事は・・・

## 一話（前書き）

この物語は作者の厨二てきな妄想を完璧なる駄文でお送りするものです。ゼロの使い魔への独自解釈やメタ発言なども含まれています。見てくれる方はどうか素人な作者に意見や指摘をお聞かせください。

## 一話

主人公相馬龍牙は放心していた

「・・・？」

目が覚めたらそこは真っ白な空間だった

目の前には三人ほど座われそうなソファ二つとその間に石でできた机があり

広いのか狭いのかよくわからない空間にいたのである

「なんだここ？」

(ここはどこだ？ いったい何で俺はこんなところにいる…)

確か俺は戦争中で某大国兵士を蹂躪していた気がするのだが)

龍牙はいきなり目の前が真っ白に光このような場所に

立っていたのだから放心もしていよう

そこへ

「こんにちは」

「!？」

ソファの反対側に男が座っていた

男は二十代後半ぐらいで眼鏡をかけており  
そして圧倒的な威圧感を放っていた

(何だこいつ…: 気配を感じなかったぞ)

ある部隊で隊長を務めていた龍牙は常に自分の周りの周りの気配を探っ  
ており

50メートルほどの距離でも知らない気配をもったものが龍牙の  
領域に入ったら気取られる

ほど常に警戒しているにもかかわらず

(どうやってここまで近づきやがった…)

龍牙はどうやって近づいてきたのかやその際に異能<デュナミス  
>を使用したかなど  
を考えていた

「まあ、そんなに警戒するな、座ったらどうだ」

(敵意はかんじられないな)

龍牙は警戒しつつもソファーに腰を下ろした

「んで、あんたは誰だ」

「ん…神」

「ぶーん」

「いやいや神つていたんだよ？」

リアクションが必要じゃない？それがなにフーンって何その反応ゴツチャン困るよ！！」

「別に神様だろーがなんだろーが、どーでもいいけど、つか何よゴツチャンて」

「Godだからゴツチャンだよ愛着わかね？」

「あーそうですねえ、で帰っていいですかねえ」

心底どうでもいいような声で言い張った

そしてさもつつとおしい様に龍牙は言葉を放った

「あーどうでもいいけどかえしてくんね今俺戦争中だからさあ」

「あーすまんすまん実はさあゴツチャンは今回の戦争見てたわけよ」

「あぁそつ」

「そんでさあこー覗いてたわけよそこでまあ龍牙・・・君さあいくらゴツチャンが」

あの世界の管理できとーにやってたからってあれはないわ、えーと」

そう言いながらゴツチャンこと神は何やら紙束のようなものを手に取りながら

目を通して言った

「魔動戦車24車 最大級魔動戦艦8隻 その他大中小魔動空母  
や魔動小型艇合わせて201隻

魔族およそ700体 幻獣およそ300体 人に関しては19  
00人ほかにもetc・・・

的な感じなわけなんですけども・・・なんぞこれ100年旅行  
帰ってきて久しぶりに

ワシの世界はどうなっておるかろう ふおおふおお みたいな  
感じで軽く見たら 赤黒い閃光が 次々と戦艦やら強力な魔  
族やらをちぎっては投げちぎっては投げ、地面焼き尽くすは大陸割  
るやら

10分ほど口あけて固まっちゃまったじゃねか」

「つい殺っちゃうんだ」

「つい殺っちゃうんだ ってお前・・・」

軽くおどけて見せる龍牙だが

次の瞬間真剣な表情へ一変する

「あれは俺が努力して手に入れた力だ、どんな使い方に使おうが  
俺の勝手ではないのか？それに俺は間違った使い方をしていると  
思ったことはない

あいつらは屑だ」

「・・・とりあえず100年分見てみた、間違った使い方とは言  
いたくはないが・・・」

「...が、なんだよ？」



「まあ1000年ほったらかしてたゴツチャンが悪いとはいえずうん…しかしだ」

神は自分の伸びきった髪をくるくるいじくりながら  
決意を固めたようにはつきりと言葉を出す

「もつぶっちゃけよ、お前この世界ではチートすぎるんだはつきり言って手に負えない

つーわけでスマンが別の世界へ転生してくれ」

「・・・ハア？」

## 一話

「……ハア？」

「モーほんとなあーすまんとおもつとるチー  
勘弁してくつれチー」

「謝る気あんのかてめえ」

そう言いながら龍牙は目の前にあつた机を横にけり消した後  
胸倉をつかもつと前に出たところで前から威圧感が放たれ

「まあそんなに怒らないでくれ、こつちとしてもお前が  
努力したことは分っているつもり……と言うのは失礼なんだ  
がな……」

一応悪気はあるのか軽く頭を下げつつ言ってくるものだから  
龍牙は怒り吐き出せずにソファーに座りなおした

「てことはあれか俺が力を持ちすぎたから邪魔になったから別の  
世界へ

転生させよう、ってわけだな」

「まあ簡単にいえばそうだな」

「しかしおかしなもんだな」

「？」

「神様からしてみりゃ俺なんて自分の世界で生まれた、唯の一人だろ？」

それなのにこんな風に話を持ちかけてくるってのがおかしいと思っただる普通、

と言っかその気になれば存在ごと俺なんて消せるだろ？」

「まあ確かに消そうと思えば消せるが今回に限っては俺が見えない間に起こったことなのだ

それなのに邪魔、きえろだとあまりにもお前が報われないと思ってな……」

「だったらおれの力を抑えるなり何なりすればいいだろう」

「そうしてもよかったのだがいい意見がないか最神審に伺に行こうとしたら知り合いの神が

「面白そうだな、そいつくれぐってゆうから」

「そんな理由？」

「そんな理由、折角手に入れた力を奪われるのも癪だろう？」

「まあそう言っことならいいか」

龍牙はソファーにドカッと座りこむ

「あれまあっさり受けたわねゴツチャン素直な子好きよお」

どこからかセンスを取り出して口元を隠しながら気色の悪いことを言っ

「キシヨイはボケ」

「失礼なこと…ゴツチャン悲しい」

「無視）それで俺はどんな世界に行くんだ？」

「えーとお前小説読むか？」

「まあラノベやらあーゆうのは好きだな」

「じゃあ知ってるかもな（ゼロの使い魔）と言う世界だ」

「マジで」

（ゼロ魔か えーと確か19あたりまで読んだなあ個人的には行ってみたい部類に入るかな）

「そうだ、ちなみにゼロ魔の神が言うにはお前の身分やらなんやらは  
お楽しみだそうだ」

「えーマジかよ、でもさ今俺がもってる<sup>デユナメス</sup>異能や身体能力はどーなるわけ？」

龍牙の能力や身体能力ははつきりとはハルケギニアではありえないほど高い

「その辺はゴツチャンからの詫びも兼ねて身体能力や（血統）についてはそのままが

ゼロ魔の神が言うにはまあ<sup>デユナメス</sup>異能は我慢してほしいそうだ」

「まあ仕方がないかあその世界で俺の異能<デュナメス>はほぼバグだからな」

「そうじゃなくても身体能力や<血統>だけで十分チートだろうが、まあそれでもゴツチャンスペシャ　ルチャンスにより好きな能力まあゼロ魔の世界でのバグ能力以外なら上げちゃおう」

「マジかそれならヴィンダールブとミヨズニトニルンの能力くれ」

「一つと言っておるのに図々しいなお前……まあいいだろう」

「ダメもとでもいってみるもんだな」

(しかしいい能力もらったな有効活用しよう)

「うううとところで抜け目ない龍牙であった」

「じゃあ準備はいいか？」

「あー……いいぞ」

「じゃあ向こうでもがんばってこいゴツチャン応援してるぞ」

「もう一度言う、キシヨイ」

そう言い龍牙の体は光に包まれていった

龍牙が最後に見たのは男ではなく若い女性の苦笑이었다



## 二話（後書き）

とゆう感じでいかがだったでしょうか

初めての投稿にびくびくしながらも投稿させていただきました  
感想、意見、指摘言ってくれる方お待ちしております

### 三話

光に包まれながら龍牙は胃が持ち上がるような浮遊感を感じていた

全体が白に見えている中、体が動かないので龍牙は考え続けた

（五年たったのか）

・・・

龍牙は日本の広島にいた

天涯孤独の身であり孤児院に入っており幼少の龍牙は近づくもの  
全てが敵だと思っており

孤児院にもなじめず10歳で戦争により孤児がなくなりストーリー  
トチルドレンとなった

その時10歳である龍牙は生きるでも死ぬでもどちらでもいいと  
考えていたが

ただ生きるのであれば力を身につけなければならぬそう考え  
努力してそのあと死ぬならいいやと考えた

まず龍牙は戦いというものを見た

もともと魔族と人とのハーフであった龍牙は目の前で起こった紛  
争をずっと見ていた

魔法が飛び交い魔族や人の戦いをずっと見ていた

魔族と人のハーフである龍牙は身体能力も高く戦いが繰り広げら  
れている



中を眺めるのに苦勞はなかつた  
まずどちらが優勢かを見極めそちら側の陣営に歩み寄つた

そして龍牙は自分の武器は魔族特有の身体能力の高さと異能デュナミスであり  
龍牙の（デュナミス）は視界にいる人物の思考と目線そして体の  
状況が分るといふ

<トレース>と云う異能デュナミスであつた

その異能を使い龍牙はまず視界の中の一歩敵を倒している人見た

この世界では魔族は身体能力と<デュナミス>  
人には魔法と数にと言ふ特徴があつた

魔族は高い身体能力と驚異的な異能<デュナミス>そして寿命が  
長いというものがあるがその分繁殖能 力が低い

対して人は目立つた弱点はなく繁殖力が高いが寿命が短く身体能  
力も魔族に比べれば非力なものとなる

しかし人には魔法が在つた

魔法には破壊、再生、腐敗、成長、創造の5つがあつた

その中でも龍牙は破壊の魔法をよくみて

真似、盗み、どんどん自分のものとしていつた

その技術を使い食料を盗んだりして一年ほどたちその努力が実り  
龍牙はすべての魔法が使えるようになった

そうして龍牙は次の一年で経験を積み十三歳で少佐の地位まで上  
がつた

14でほぼ敵なしと言われそこで一年ほど休戦となり

一年の間に技術をさらに高め

当時日本で最強の悪魔部隊の隊長を務めるまでに至り

15歳で再戦されその戦闘中に神に拉致られたとなつたわけであ

った

（まあ未練がないって言ったらウソになるがまあ家族が出来るのはうれしいかな）

龍牙は家族というものに憧れを抱いていた

戦争の先々で隊員たちの口から家族、家族と聞いていたからであるさらに隊員に勧められたラノベを読み家族への願望は強くなった

（どんな人になるのかなあ・・・）

（確かゼロ魔って貴族や平民って差別やらなんやらあったなその辺も

貴族だったら気にかかれるといいな）

こんな風に思考を巡らせていたらだんだんと視界が黒くなっていった

---

「も・す・し・・・が・・・れ」

どこからか声が聞こえた

「あ・・・ま・たよ」

人が何人かいる

目が開けられないが思考は自分のものだと気づきだんだんと意識が上がってくる

(主産の途中か?)

「あああああああああ」

(これが俺の声か?)

圧迫感から解放され龍牙は声をあげていた

(声がかつてにでるな…体もうまく動かん…思考があるってなんか変な感じだな)

「」「」「お……じ……ぞ……」「」「」

周りにいた三人が二十代後半のような男に賛辞のようなものを送っていた

(つーか赤ん坊って言葉が聞こえにくいんだな……)

おそらく父と思われる人が寝ている人に声をかけながら龍牙を手わたした

(この人たちが父と母か)

寝ていた女性は疲れた顔をしながら優しい表情で赤ん坊を抱いた

(ああ……な……んか眠……くなってきたな)

龍牙は薄れゆく意識の中でこの言葉だけははっきりと聞こえた

「あ……の名……はリユウガ・フラン・ド・ブランド」

### 三話（後書き）

はい

と言つうわけで幼少編スタートです

次は龍牙の元の世界の設定にしようかと思えます

この駄文をここまで見ていただきありがとうございます

この作品に対しての意見、感想、指摘していただけると幸いです

## 設定（前書き）

前回の話に出てきた用語の解説をしたいと思います

主人公の世界は作者の友人と一緒に考えていったものです

なお分らないことがあつたら一言で〜はどなんですかと書いていただければ逐一この設定に乗せたいと思います

## 設定

### 魔族

見た目は様々

大概は人化と獣化の二種類の形態をもっている

繁殖能力は低い

寿命が長くひとの2〜10倍（個体差あり）

魔族は主人公がいた時代で約二万體しか存在しておらず年間の繁殖数は10〜20ほどである

身体能力が高く（人の2〜20倍個体差あり）<sup>デュナミス</sup>異能を使用することができるとができる

### デュナミス 異能

魔族だけが使用できる能力

力は様々で主人公のような視覚を用いたものを<オホ>

火を操ったり自然に関するものは<ナトラリー>

体の一部を変形させるものを<トランシー>

電波を飛ばしたり意思を操るものを<インフォ>

魔族は人型になると体の一部にタトウーのようなもの通称「紋章」が浮かび上がります

大体5〜10歳で発現するようになり

その魔族の異能<デュナミス>やその魔族の個体によって浮かび上がる形や場所が変わります

### 人

文明が進化して体から発する気（ドラゴン ー ル的なやつ）を魔

力と称して魔法を放つことができる

繁殖力が高く

魔族に対すため魔法という能力を開花させた

これといった弱点はないが魔族に比べると身体能力が低く魔族の一撃で致命傷になる

この時代では魔力を発するため寿命が長くても80歳

魔法

魔族に対するために作り上げた人の唯一つの武器

属性は5種類

破壊

形を壊す魔法、気象が冷静な人ほど出やすい

成長

形を活性化させ身体能力を数倍に上げる魔法、気象が荒い人ほど  
でやすい

創造

形を構築する魔法、無邪気な人ほど出やすい

腐敗

形を退化させる魔法、短絡的思考な人ほど出やすい

再生

形を元に戻せる魔法、感情的な人ほど出やすい

魔法はこれがあるまで基本であり、ここからさらに個人個人の  
成長により個性的になっていくもの、

故に呪文などなく頭の中で考えたことがすぐに出てしまうもの  
です

幻獣

ゼロの使い魔で出てくるのもあればF やモン ンなどの作者が  
出したいと思ったものが出てきます



オリジナルもあります  
デユナメス  
幻獣のなかには異能をつかう個体もいます

## 設定（後書き）

とりあえずはこんなところでしょうか

大体8〜10ぐらいで幼少編をおわり学園編にもっていきたいと考えています

あまりややこしくなってきたら相関図的なものも上げたいと思います  
このような駄文

ここまで見ていただいてありがとうございます

この作品への指摘、感想、意見、出してほしい幻獣がいましたら一言で上げてください  
では今回はこの辺で

それでは次回またおあいしましょうノシ

## 四話（前書き）

おはこんにちこんばんわ

駄文な作者です

感想のところでは指摘を受けていろいろ直してはいますが  
まだまだ至らぬところがあります  
その辺をお許しください

## 四話

こんにちは相馬龍牙です

あー今はリユウガ・フラン。ド・ブラットリーと言う名前になっているわけだが

まあ、名前に関しては神が配慮してくれたんだと思う

そんなわけでゼロの使い魔の世界に転生し早5年たったわけだけども

ここはガリアのラグドリアン湖付近

つまりオルレアン公の領地のすぐ隣ということになります

えーとゼロ魔では登場しなかったブラットリー家と言うところに転生したようなんだが

5歳でもわかる状況はまずヴァリエール、ツェルプストーとは仲が良く

俺の誕生日には贖辞に来てくれていたようだ

母からルイズとキュルケなる同じ年がいることを聞かされていることからまず同じ年であろう

まあこの辺の時代は原作には書かれてないから学園までに一度くらい会うだろ

トリステイン領ではヴァリエールがとなりでゲルマニア領ではツェルプストーが隣

原作道理ヴァリエールとツェルプストーの中が悪いようだ

そこで小競り合いが起こるとブラットリー家が仲介に行くようだ  
暴れられるとフラン領にも迷惑がかかるからだそんなこんなで両

家と仲が良くなったと思われる

まあ大体の状況はこれくらいだと思う  
先日5歳になった俺に魔法の訓練が行われるようだ

最初は父リユーブ自ら訓練するようだ

父は火のスクウェアの下で「轟炎」の二つ名、母レイが風のトラ  
イアングルの上「陣風」の二つ名

この二人から生まれたのでそこそこ魔法の才能があると家臣から  
も期待されている

「いいかりユーガよ魔法には火、風、水、土、虚無、の五種類が  
ある

まあ虚無は最早伝説としてあるかもどうかわからん故虚無を除  
く4つを四大系統と言う」

「はい、父上」

「その中でまずどの系統でも使えるといわれる「モンマジック」の  
ライトからやってみようと思う」

「わかりました」

「ライト!!」

杖の先から青白い光が灯った

「おお！一度目で成功させたか流石我が息子だ、では次は……」

(はあ) はよ系統魔法やりたいわー)

その後も次々とコモンマジックに類するものを一度で成功させ家臣の者たちからも驚きの声が上がりはじめた

「さすがは旦那さまのご子息ですな」

30歳後半ぐらいの体つきの良い中年がリユーブに声をかけたこの男は「爆炎」の二つ名をもつ火のトライアングルの中のメイジで

名をジラル・ドーマ・ラ・ガードと言うメイジでブラッドリー領の中にある領地を管理する重臣メイジであった

「ああ、ジラルの言う通り我が息子は立派なメイジになるわ」

「いいご子息に恵まれましたな」

「ありがとうございます」

(だるい・・・)

リユーガは表面上では嬉しそうな顔をしているが内面は面倒くさいなど考えている

「リユーガの教育をジラルにまかせてもよいか」

「ええこのジラルが立派なメイジに育て上げて見せます」

「それでよいか？」

「はい、わかりました父上」

こうしてリユウガの本格的な訓練が始まった

## 四話（後書き）

というわけで主人公の本格的な訓練が始まります

1話ぐらいですが・・・

この作品における指摘、意見、感想をお待ちしております  
ここまでこの駄文を見ていただきありがとうございます



五話（前書き）

おはこんにちこんばんは  
駄文な作者です

## 五話

「いいですか魔法と言うものは……」

(はあくだる)

こんちはリユーガ・フラン・ド・ブラッドリーだす

現在ジラルによるありがた〜い魔法講座を受けているわけですがつきり言つてこれで一週間になるんですが

ジラル曰く「魔法がなんたるものか理解できなければ魔法を使いこなせるわけがありません」

と言う感じで系統魔法どころかコモンマジックすらやっていない状況です

「聞いておられるのですかな若君」

「きていますよ〜」

(だりーもう何回目だよその話)

実のところジラルは同じ話をこの一週間で30回以上話しているのだ

リユーガも困るわけである

「はあくわかりました若君は理論より体で覚えるほうが肌に合っているのでしょうか」

(お！やつと系統魔法使えるのか?)

「では、マジックアローかブレイドを唱えてみてください」

（ええー、俺はさっさと系統魔法使ってみたいんだけどなあ）

「まあそついやな顔なされるなこの二つは色を見るのです」

「色？」

「はい、この2つの色によりどの系統魔法が優れているか見ることができなのです、

たとえば私が使えば赤色のブレイドができます、見ていて下されブレイド！」

ブウン！つとジラルの持った杖からライトーバーのように光が出ており

その色は赤色だった

「おおー」

「このように私が得意とする火の魔法に合った色がでてくるわけです

私は火以外とは相性が悪いのかこのように真っ赤ですが旦那さまのように火と土を

得意とするメイジならば

その色は赤銅色のようなくすんだ色になります」

「へー」

（原作にそんな設定あったかな？）

「つてことは得意な系統がわかるってわけですね」

「その通りです、まあ中には3つの系統が得意でも、その中で一番得意な系統の色になることもあります」

「まあ一概にはどれが得意かわからないけど方向がわかるってわけですね」

「まあそうですね」

「じゃあ、ブレイドー！」

ブウン！とリユーガの杖からジラルのブレイドより一回り小さなブレイドがあらわれた

その色は……

「これも一発ですか、しかしこの色は……」

「えーと、黒かな？」

「黒ですな」

赤みがかった光を放つような黒色がリユーガの杖から放たれていた

「ジラル、これはどの系統が得意なことになるんですか」

「うーん、見たこともない色ですな、しかし少し赤がかかっているとところをみると

火になるのでしょうか……」

「そうなのかな」

(火かぁ、個人的には風が良かったんだけど)

「では、火の初歩ファイヤーボールからやってみましょうか呪文は……」

「わかった、じゃあ、ファイヤボール」

杖からサッカーボールほどの火の球が放たれた  
しかしその色は赤色ではなく

「……………」

「……………」

「えーとジラル？」

「一発で出せたことにも驚きましたがあの色は……」

「黒かったねえ」

「黒かったですなあ」

ブレイドと同じような赤みがあった黒色のファイヤーボールが出たのだ

これには流石のリユーガも驚きを隠せなかった

(酸素を送れば青くなるのは知ってたけど火って黒くなるのか?)

「まあ若君一発でファイヤーボールを出せたのです、旦那さま同

様火の素質があつたのでしよう

明日からは火を中心に訓練する方向でいきますがよろしいですか？

「はい、わかりました」

「では本日はここまでと言つことで」

「ご指導ありがとうございました」

「では、私は領地管理の仕事に戻りますので」

そう言つてジラルは屋敷のほうへと姿を消していった

もともとジラルは領地管理で忙しい中リユーガの魔法の教育を行つていたため

そこまで長い時間はできなかったのである、

そのため余つた時間はリユーガは前世での魔法の訓練を行うのであつた

(はあー今日はいつもより長かつたな、しかし黒色つて)

そう思いながらリユーガは木陰で座禅を組み意識を集中して気を練り上げる作業に取り掛かつた

体が追い付いていないのか前世の半分にも満たない気の量ではあつたが

前世では一流と称される魔法使いレベルまで気を練れるようになったのだが

リユーガは満足しない

それに神から「血統」の大まかなことは変わっていないと言われているので

身体能力も魔族としての紋章が体の一部に発現したら元に戻っていくのあろうとリユーガは考えた

（それにしても身体能力が低いと生活しづらいな、まあおいおい回復していけばいいか

明日から本格的に系統魔法に取り込めるとなると楽しみだなあ、個人的には風がよかったけど）

そんなことを考えつつリユーガは気を組む訓練を続けていくのであった

## 五話（後書き）

と言うわけで訓練が終わりました

私としてはここでだらだらと訓練描写書いても表現がへたくそな作者がやると訓練だけで5話ぐらい使っちゃいそうですので次回はすぐ上げることになりそうです。2年ほど進みます

その年でラグドリアン湖や原作キャラと合わせるつもりです。原作と地理がかなり変わっていき、オルレアン領付近にもサハラがあるってことにしていますが・・・

その辺二次と言うことにしてください

記号を使い地図を作製したのですがうまく上げることができません。なにかいいやり方が在るのなら是非お教えください

ここまで駄文を見ていただき誠にありがとうございます

この作品への意見、指摘、感想お待ちしております



六話（前書き）

おはこんにちこんばんわ  
駄文な作者です

## 六話

「うぬの名をなんと申す」

男から発せられる王としての資質が無意識にリユーガに片膝をつ  
けさせた

「リユーガ・フラン・ド・ブラットリーと申します殿下」

(どーしてこうなった・・・汗)

時はさかのぼること一時間前

こんにちはリユーガ・ど・・・めんどいんでリユーガです

現在訓練を始め2年ほど経ちました

俺の成長スピードは他のメイジより異質らしいそうで

現在7歳火のトライアングルの上位になっております

どう言うわけかなぜか炎は黒いんですしかし

普通の炎より火力が高く全力ならば鉄を一瞬で溶かすほどの

火力が出るわけですよ一度全力でやったら鉄がぶくぶくふつとし

てジラルがポカーンってなり

「決して全力ではやってはいけません！」ってすごい剣幕で言わ  
れてしまいますた

1年ほどでライン上位になりジラル一人の手に負えなくなったので  
父上から講師が3人ほどつけられ

戦術(まあほとんど知っているから意味はあまりなかったが)を

学び、

実戦訓練でトライアングル相手にしてたら

今やジラルを含めた4人との模擬戦でやっとなつりあえるようになり  
ました

まああくまで系統魔法だけ、ですが

フラン領は民村が4つほどあり工場村と呼ばれる大きな村が2ほ  
どあり

そのうち一つをジラルが経営し

ブドウ農家が一つ野菜農家が一つあるといった感じで

後は草原や森などで幻獣達の住処となっています

父リユーブも幻獣には手を焼いていましたが俺のヴィンダールブ  
の能力でその問題も解決し

今やフラン領での軍の騎獣や農家の農獣になつたりしています

やっぱりヴィンダールブ便利だわ

その中でも幻獣達のボスとなつていたティガレックスにはマジビ  
ビつた実物つてあそこまででかいんだ

そのティガにも今やブラッドリー公爵家での守護獣的な感じとな  
っています

さて説明はこのあたりで物語に戻りたいと思います

「はあ、はあ、くつ エアカッター！」

講師の一人が俺に向かってエアカッターを放ってきた

「無駄無駄無駄無駄あ」

ひょいっとよけ呪文を口に

「フレイムランス！」

黒炎が槍の形になり左手に収まりぜ 号機もびっくりな投擲で投げつける

ドガツという音と共に地面に突き刺さり耳に残るような音を上  
げ爆発する

「ぐはあー!!」

講師の2メートル前で爆発したにもかかわらず爆風が講師の一人を吹き飛ばす

ズザーーと言う音とともに講師が地面を滑り砂塵を上げ視界が悪くなり

「おおー—————!!」

ジラルがブレイド片手に砂塵の中から突っ込んでくるが腰にさした刀身が真っ黒な日本刀「黒翼」を抜き

向かってくるブレイドに斜めに構えブレイドを受け流しながら呪文を唱え

「フレイムレイン!!」

上空から黒色のファイヤーボールが8つつほど降り注ぎ破裂

ドガアーンと音とともに爆風が舞い上がりジラルを吹き飛ばす

「ぶー、ここまでですかね」

「そうですね」

「威力抑えてあるとはいえよく立ってますね」

「訓練を怠つたりはしていませんからな」

「しかしもう我ら4人でも勝てないようになりましたな」

講師の一人が言う

「いえいえまだまだ至らぬところがあります」

「御謙遜を・・・しかし旦那様も良いご子息に恵まれましたな」

「ああ」

少し離れた所からリユーブが歩いてくる

「しかし訓練を始めてから二年でトライアングル4人でも歯が立たないようになるとは

流石は我が息子だな」

「ありがとうございます父上」

「刀とやらは役に立っているか？」

リユーブが持っている刀は父リユーブがツェルプストー辺境伯爵のつてから入手した上質な鉄から

リユーブ自ら3カ月かけて作成したものである

「はい、力がまだついていない私でも十分に振るえるように作り  
ましたので」

「ジラルのブレイドをさばいたところなど見事であった今度工場  
村でも作らせたらどうだジラル」

「そうはしたいのですがこれまでの物を作る時にかかるコストと  
生産量が追いつけないのです

若君ほどの技術でも3カ月かかったのですから」

「まあそうなるか」

「私も少し無茶したようなものですから」

「確か炉と言ったか温度を一定以上に上げるための技術をよくそ  
んなものを知っていたな」

「隣国のゲルマニアでは普通に取り上げられている技術ですよ」

「家でも取り入れたいものだな」

「たとえ取り入れたとしても使えるものがないと思います父上、  
私も取り扱いは困難を極めたので」

「それもそうか、してリユーガよ今日はお前に頼みごとが在る」

「私にですか？」

「そうだ、7歳のお前に頼むことではないかもしれんが・・

驚異的な成長をしたお前に試練を与えたいと思う  
内容は最近民家を荒らしているオーク鬼を退治してこい」

「旦那さま、それはいくらなんでも早すぎるのではないのでしょうか」

「いくら若君が驚異的な成長を遂げたと言えどまだ7歳なのですよ」

貴族の子息に与える試練としては珍しくはないが

どんなに早くても歳が2桁にいつてから与えるような試練だった

「確かに7歳かもしれないがリユーガは他とは違うまるで異質だ、  
大きな力をもったものは

その力でどれだけのことができるのか早めのうちに学ばねばい  
かん、わかるなりユーガよ」

「はい、父上」

(どこのスパイーマンだよ)

「もしものことを考え熟練の兵を2名つけるしかしあくまで  
お前の試練はお前ひとりの力でやってみせよ」

「わかりました、父上」

「規模は約8体ほどだそうだが、今から一時間ほどたったら馬で出  
発するように」

「いえ、先ほどの訓練ではそこまで精神力を消費はしておりませ  
ん、今から行つてまいります」

(久々にぜんりよくでやれるかなあゝ身体能力も戻ってきたし)

「しかし若君、準備は万全でいかねば……」

ジラルが心配したようにリユーガに詰め寄るが  
リユーブにより止められ「それでいいなら行け、ただレイには一  
言いってから行け」と言われた

「わかりました父上、それでは」

屋敷に入り中庭を直指し

その中で花に水をやっている女性がいた  
リユーガは近寄り声をかけた

「失礼します、母上」

「今日の鍛錬は終わったの？」

この人がリユーガの母レイであった少し小柄であったが  
元トリステインマンティコア隊の元隊員で「烈風」のカリンの一  
番弟子であったため

トライアングルながらもスクウェアにも引けをとらない戦術で「  
陣風」の二つ名をもっていた

レイであったが今はガリア国のリユーブに戦場で惹かれ結婚した  
のである

「いえ、今から民家でオーク鬼を退治してまいりますので」

「あらあら、そんなの怪我だけはしないようにね」

「はい、行ってまいります」



(結構あっさりいったな)

そう思いつつ振りかえったところで後ろから殺気を感じすぐさま飛び退いた

案の定後ろからエアカッターが3つほど飛んでいき壁を抉りその切れ味を現わしていた

リユーガは溜息を吐きながら母のほうを眺めると  
レイは優しい顔で

「まあ今のが避けれるのなら問題ないでしょう」

「はあ〜もう少し他にないんですか？母上」

「これも愛よ最愛の息子？」

満面の笑みでいってくるものだからリユーガはあきれながら頭を掻きつつ

「行つてきます」

「行つてらっしゃいご飯までには帰つてらっしゃい」

「はい」

こうしてリユーガは母の許可をもらい

馬にまたがり兵を2名ほど引き連れ目的地へと向かった

その途中で馬車が目標と思われるオーク鬼の一団に襲われていた  
兵士が何名かいたが倒されており馬車にオーク鬼が手をかけよう  
としたその時

「フレイムランス!!」

黒色の炎の槍がオーク鬼の胸に突き刺さりオーク鬼は倒れた

「おいおい、情報より数が多いじゃないか」

オーク鬼は全部で20体はいそうなほどの数だった  
オーク鬼などの亜人にはヴィンダールブの能力が効かないことも  
知っていたので

すぐさま殲滅に走ろうと腰にさした「黒翼」を抜いた

「我らも手伝います」

「危ないから、退いてて」

「しかし・・・」

「大きな魔法使うから」

そう言いリユーガは気を練り始めた  
後あと厄介にならぬよう

呪文を唱えたふりをして一応フレイムレインを発動させ  
リユーガの世界の魔法を使った

瞬雷と言う魔法で破壊の属性に入る魔法  
目には見えないほどの速さの電撃を放ち相手の一部だけを  
破壊する魔法で前世で愛用していた魔法である

上空から降ってくるファイヤーボールに気を取られ  
逃げようとした瞬間動きが止まりオーク鬼たちはファイヤーレイ

ンをまともに受け

完全に焼けていた、実際は動き出した瞬間にはもう心臓を打ち抜かれ絶命していたが……

それを見た兵士は

「す、すごいですね坊ちやま」

「……あれだけの数を一瞬で」

など賛辞を送っていた、その顔はひきつっていたが

「まあうまく当たってくれたからだよ」

などと兵士と話していると馬車から男が降りてきた  
そうしてリユーガはその人物見ながら

「もう大丈夫で……す」

「うぬの名をなんと申す」

男から発せられる異質な威圧感  
はリユーガは前世でもあったこと  
のないタイプであった

無意識に片膝をついていたことからこの男は仕えるべき人物だと  
リユーガは確信した

「リユーガ・フラン・ド・ブラッドリーと申します陛下」

「クハハ、お前がブラッドリーの異才か、しかし俺は王ではないぞ

王の息子であるだけだ」

「お初にお目にかかりますジエゼフ殿、お噂とは全くの別人でございますな」

「なに？どうゆう意味だ」

「無能ですか？あのふざけた噂は」

「俺は無能さ、弟とは違いな……なぜ俺を陛下と呼んだ？」

「あなたが王に見えたからです、私には少なくとも其処<sup>ケス</sup>らで威張り散らしている貴族には見えなかったもので」

「クハハハ、貴族を虫と言つか面白いなお前はこれよりラグドリアン湖に向かうのだが」

「供をしてくれぬか？御覧の通り兵士がこうなのでな」

「承りましたジエゼフ様……一人は俺と、

もう一人は屋敷に戻り父上に事情を後、倒れた兵士たちを運ぶための応援を」

「し、しかし、坊ちやま」

「あ？」

俺が殺気を出しそれに押しされたか

「わ、わかりました坊ちやま」

こうしてリユーガはジョゼフの供でラグドリアン湖へと向かうのであった

## 六話（後書き）

というわけで

ジヨゼフ降臨！！

この作品でのジヨゼフは主人公の介入により変人でありながらもい  
い国王として君臨します

さて今回は長くなってしまいましたけどどうでしたか？

このような駄文をここまで見ていただきありがとうございます

この作品の指摘、意見、感想お待ちしております

## 七話（前書き）

おはこんにちこんばんは

駄文な作者ですチエツクを終えている作品は在るのですが

どうしても記号でつくった地図が上げれません（泣

いい方法がある方どうかお教えください

では本編へ

## 七話

へろーリユーガです

現在ラグドリアン湖でジョゼフと談笑しています

って言うかジョゼフ原作と全然違うじゃん！

なんでこの人無能なのこの国の奴らなんなの、バカなの、死ぬの？

まあそんなことを言ってもしょうがないので  
本編入りしたいと思います

〜ラグドリアン湖畔にて〜

今ジョゼフとリユーガは湖の前に

机と椅子を置き会話をしていた  
すると突如ジョゼフが大声で笑い出す

「クハツハハハ、先ほどのクズ呼ばわりなど

本当に面白いことを申すのだなりユーガは、俺はお前が気に入ら  
ない  
った  
様付けなどしなくても良い」

「しかしそれは・・・」

「俺がいいと言っているのだ」

「わかりましたジョゼフ殿」



「まあ様付けよりいくらかはいいか、リユーガの噂は王宮まで広まっているぞお前の父と家臣が

ふれまわっておったわ、あの魔法も見たこともない魔法だったしな」

「しかし名前は私が見つけたもののファイヤーボールが降らしただけですよ」

「確かに黒炎にも驚いたがその前だ」

「その前と申されますと、ランスのことですか？」

「それでもないわ、オーク鬼の胸を貫いたものことだ」

「っ!？」

(はあ?なんで瞬雷がみえるんだよ)

「はつきりと見えはしなかったがファイヤーボールより前にすでにオーク鬼どもは絶命しておっただろう?」

リユーガにとってそれはありえないことであった、前世の魔法それは互いが理解できない中での一撃必殺とするものが破壊の魔法だった

リユーガが前世の最強と呼ばれていたのも属性魔法を自分に馴染んだ方向で極めたからで

他にも最強たる所以である「血統」や優れた戦闘知識もあったものの破壊の魔法が

ある意味で最も恐れられていたのでリユーガは見えなかったと言ったものの

その攻撃の用途を理解したジョゼフに対して驚愕した

「あれはいつたいなんだ得意は火と聞いていたが風もそこまで使えるのか？」

「まあ・・・そんなところです」

教えてもいいと思ったが  
流石にまだジェゼフとは会って数時間自分の武器を晒さぬよう  
場を濁そうと考えたリユーガであったが

「嘘だな」

ジョゼフの一言で一蹴させられてしまう

「あんな魔法見たこともない聞いたこともないは、それになかなか嘘はつけないようだな

リユーガは顔に出るわ」

終始表情を変えていないリユーガの表情を

やすやすと見抜くジョゼフもまた異才なのであろう

「顔に出しているつもりはありませんが確かにそうです  
簡単に言ってしまうえばハルンゲニア存在する魔法ですらありませ  
ん」

「ほう、それは興味深いなどういった原理なのだ」

魔法が全く使えないジヨゼフでもやはりリユーガの魔法には興味があつたようだ

「いえ、お話しするようなことでもありませんよ  
所詮は魔法なのですから」

このリユーガの一言によつてジヨゼフは  
楽しむ顔ではなく真剣な表情、リユーガが感じた王の顔へと変わった

「所詮は魔法と申すか・・・しかし魔法はガリアだけではなく他  
国でも

貴族の代名詞 大まかに言つてみれば力の代名詞であるのだぞ  
？」

「そんなものを理由に民から無駄な税金を搾取し  
足蹴に扱つているから貴族ククス・・・いや塵の考えでしょう」

リユーガの容赦ない言葉にジヨゼフはますます楽しそうに笑う

「ククク 大半の貴族を塵扱いか」

「実質そうでしょうか？たがだか魔法一つ使えるだけで自分は選ば  
れたなどと思つている

魔法は所詮魔法、使い勝手のいい道具でしかありませんよ  
えぱり散らしている貴族たちも自分が足蹴に扱つた民の前に杖  
を取り上げ放り出せば

まず生きてはいられないでしょう」

「面白い考えだな、だがその言葉だけでほぼすべての貴族を敵に

まわすぞ」

「かまいませんよ、そんな見栄だの誇りモドキをぶら下げる塵如き恐れるに足りませんな」

堂々とリユーガが言い張るので

ジョゼフはそれを見て素直な感想を口にした

「リユーガを見ていると本当にそう思われるな」

「ご謙遜を、あくまで私が思うにジョゼフ殿も私に近い考えをお持ちでしょう?」

ジョゼフはしばらく動きを止め

湖を眺め淡泊に言葉を発したまるでリユーガを見極めるように

「なぜそう思った」

「簡単ですよ、ガリアの弟は天才言われ兄は無能と言われているそれだけで

兄のほうは私に近き考えを弟のほうは唯一つの才能を磨き続けたそういう風にしか

私には見えません」

「唯一つの才能か、しかし今は魔法一つがすべてだと思わんか?」

直もリユーガの顔を直視せず唯湖に顔を向け

ジョゼフは言葉を発する

「嘆かわしく思います魔法と言うものがなければ  
ジョゼフ殿のほうが優れていると・・・まあ私はシャルル様を  
見たことがないので断言できませんが」

「シャルルより俺のほうが優れているか・・・」

「失礼ながら私にもジョゼフ殿のような兄がいたらまず嫉妬し  
恵まれた魔法という道に走っていたかもせん」

「リユーガは俺が兄なら嫉妬すると？」

「間違いなくするでしょうな私にもこのような魔法の才ではなく  
政治の才があればフラン領も素晴らしきものに出来たかも知れ  
ませんのに」

「そうか、嫉妬するのか」

ジョゼフはどこか思うところがあるのか  
遠い目で湖を見据えた

(これは、うまくいったかな?)

リユーガはジョゼフに王の資質を感じ

狂わせるにはもつたいないと感じ、原作介入を行った

ジョゼフのどこか優しくなった表情から作戦は成功したと心の中  
でガッツポーズをとった

達成感に満ち溢れているものの表情に出さず

リユーガがジョゼフ同様湖を見ていると

波紋一つない湖が揺れ水の塊が浮かび上がってきた

「これはっ!!」

ジョゼフは突然起こった揺れに驚きながらも  
浮かび上がった水を見ていた

その水はだんだんと形を変えていき

ひとの形となり頭に響くような声を発した

「お前は何者だ、単なるものではないな」

そう、これはラグドリアン湖の水の精霊であった

(・・・今出てくるかよ)

先ほどの達成感はどこぞと

リユーガは頭を抱えた

## 七話（後書き）

と言うわけで

水の精霊出現ですちょっと無理やりかも知れませんが  
どうかご都合主義ということでは

このような駄文をここまで見ていただきありがとうございます  
この作品への意見、指摘、感想をお待ちしております

## 八話（前書き）

おはこんにちこんばんわ

駄文な作者です

最近仕事時間が長くなりPC触れていません（つゝ、）

そんなこんなでこれからは一日一本をノルマにしたいと思います  
それでは本編どうぞ



## 八話

こんちはリユーガです

前回のあらすじ的なものを言ってみましょう

ジョゼフ会話

シャルル暗殺フラグ爆殺

ジョゼフ悟りを得る（笑）

湖からこんにちは

現在

に至るわけです

いやーそのうち会うと思ってたけどまさかこのタイミングで来る  
とは

ジョゼフポカーンじゃん

いやなんとなくですがラグドリアン湖で予想はしてましたよ

ええお、驚いてなんかいませんとも（汗）

まあ茶番はこの辺で本編どうぞ

「眠れ」

「グッ!？」

水の精霊が腕を前に上げ冷たく言い放つと

ジョゼフは前のめりに倒れこもつとした

「おっと」

(何が悲しゅーておっさん抱きとめなあかんねや)

と若干嫌がりながらも

ジョゼフを椅子まで運んで行った

後ろを見るともう一人いた兵士も倒れていたことから

こつちもかとおもいつつ面倒臭いのかリユーガは放置放置と口ずさんで

水の精霊に歩み寄った

「ほいでなんのよう？」

「いやなぜ水の上を歩いておる？」

「あー魔法だよ魔法、眠らせたってことは聞かれないんだろ？  
勝手ながらまあ時間を腐らせてみた」

このときリユーガは前世の腐敗の魔法で時を腐らせた

実際自分の周りし三十メートルしか効果はないが指定した物体以外の時は腐るようにした

これで周りからは二人？が止まっているようにしか見えないのである

「奇妙なことをするな異なるもの、いや転りゆくものか？」

「まあよくわからんが俺はリユーガだ」

「我には単なるモノの体の見分けなどわからぬのだが」

「不便だな」

「体液をくれば見分けはできるし個体で呼ぶこともできるぞ?」

「なら、ほれ」

リユーガは腰にさした「黒翼」で指を少し切り体液を差し出した

「覚えよう」

指から流れ出る体液を吸収し

こちらを見定めるように体の形をぐにやぐにや変形させている  
おそらく体液を記憶しているのである

「それでなんのようだ」

変形が終わり人型に戻った水の精霊を見据え

リユーガは口を開いた

「畔に不思議なものを感じたのでな、何者だリユーガは」

「何者だつて言われてもなあ」

(転生者ついてもいいものか?)

“まあばらしてもいんじゃないかね?”

(!?)

いきなり頭に響いた声にリユーガは内心驚きつつも周りを警戒し始めた

(なんだ?)

“酷いあんなことまでしておいてワシのことを忘れるなんて、よ  
よよ〜”

ゴツチャンそんな子に育てた覚えありません!!!”

(育てられた覚え何ぞねえよ!!!)

話しかけてきたのは<神>ことゴツチャンであった

(それでどーゆうこった?)

“まあ精霊相手ならばらしても何の問題もないってこと”

(そーなんか?)

“まあ実際精霊なんてこっちの<神>が生み出した自立型メッセ  
ンジャーみたいなもんだから

地位の低い<神>みたいなもんだし”

(へ〜)

“まあそんなわけでゴツチャンのありがたーいお言葉はこれから  
も続く!”

(続かんていい)

“久しぶりだからもつと話したいんじゃない、あ。ちよおま会話きんなあゝ”

ブツと言う音とともに不愉快な声が聞こえなくなった

「なにをしておる？」

「すまん、少し考え事をな」

「それで答えは見つかったか？」

「転生者とも言うのかな？」

「転生？」

「ああもともと別の世界の生まれだが、またこっちに生まれ変わったんだ」

「ではリユーガに流れる異なる水の流れはなんだ？」

精霊の言葉にリユーガは首をかしげる

「異なる水？「血統」のことか？」

「「血統」とは？」

「あー・・・簡単に言うとハーフだ」

「ハーフ？」

「そそ半分人」

「もう半分は？」

「・・・魔族」

「魔族とは前世にいた種族のことか？」

「そう、なんか知らんが親は二人とも人なんだが前世の血が受け継がれちまつたみたいなんだ」

（＜神＞に頼んだなんて言えるかつーの）

「まあリユーガもよくわからんのだな」

「まーね」

リユーガの言葉に納得したのか  
水の精霊は喋らなくなった  
対話が終わったと思ったりリユーガは水の上から立ち去ろうとした  
その時水の妖精が口を開いた

「まて」

「？まだなんかあるのか？」

「すこしリユーガに頼みがある」

「なんだ」

（まだアンドバリの指輪は盗られてないよな）

「我を連れて行ってくれぬか？」

「……は？」

精霊の言葉にポカンとするリユーガ

そんなリユーガを気にすることなく精霊は言葉を続ける

「実はもうここにいたのだ、

トリステインと盟約は結んでいるものの自分たちのことしか考  
えていなくてな

手を貸す気にもなれんだよ、だから別のところへ行きたいの  
だ」

「なぜ俺にそんなことを言う？」

「リユーガ達の会話を聞いていたからな」

「盗み聞きでせうか」

「……聞こえてしまったのだ」

「はい！そこお！今さら言いなおしても手遅れですよ」

「まあいいのだ、それでトリステインの奴らよりはるかにいいと  
思っ  
てな」

「あー別に連れて行くのはいいけど、どうだ」

「決まっておらぬ」

「ホワイ」

「どこがいいかリユーガと共にいて決めたいのだ  
無論リユーガが決めても良いぞ、ここでなければ」

「・・・簡単に言うと住処を変えたいと」

「簡単に言つとな」

「ついて行くのは許可しよう、だがどうやって？」

「水石はないのか？」

「水石？何だそれは」

「水の力を宿したものだ」

「あーこんなならあるぞ」

そう言つてリユーガは手首に巻いてあるアクセサリー四系炉を取り出した

四系炉は四つの球が付いておりこれは

6歳の誕生日の時に父リユーブが彫金師につくらせたアクセサリーで

なんでも四系統の力が込められている御守りなんだそうだ、それにリユーガが

魔力を込めたらそれぞれから

ウインドカッター、ファイヤーボール、ウォーターシールド、アースハンド



が発動できるようにまで進化したものである

「この水の部分になら入れるが半身が限界だな」

「まあ半身で一緒にいき決めてから全体移動でいいだろ」

「まあ良いか」

そういつて水の精霊は半分に分かれ手首の四系炉にダイブした  
半身がスポツつとはいるともう半身が消えていた  
四系炉を見ていると頭の中から声が聞こえ

<まあなかなかわるくはないぞ>

「そーかい」

<両方が同意すれば頭の中で会話できるようにもしておいたから  
な>

(それはありがたいこつて)

<まあこれくらいわな、これからよろしく頼むぞ>

(お手柔らかにー、あー水の精霊って長いな)

<そうか?>

(名前ないのか?)

<そんなものはない>

(じゃあ勝手につけるぞ、うーん  
……よし、)

<きまつたか?>

(お前の名前はネロだ)

<ネロか……まあいいだろう>

(そいじゃ よろしくなネロ)

<良き住処を頼むリユーガ>

## 八話（後書き）

というわけで

水の精霊ゲットだぜ

すいません調子乗りました

この次はちよいと飛んで10歳になっちゃいます

そこで王位継承式などの話とある方々との会話になります

ちなみにエルフの達とは幼少編で絡むことにしました

長くなってしまうかもしれませんがご了承ください

このような駄文をここまで読んでいただきありがとうございます

この作品の指摘、意見、感想をおまちしております

## 十話

ジョゼフは自室でチェスの黒のキングを持ちどこか忙しく駒をくるくる回しながら扉をちらちら見ている

そこへ

「失礼します」

「おお、リユーガがよく来た・・・な？」

扉が開かれ現れたのはリユーガ  
あろうことかリユーガは体中に包帯を巻き  
ジョゼフの元へ現れたのだ

「どうしたのだいったい」

「どうしたもこうしたもありませんよ、朝っぱら龍便が死にそう  
な勢いで

家まで来て俺を王子様がよんでいるなんて言ったから・・・」

リユーガは今朝のことを思い出した

こんにちはリユーガです

今はラグドリアン湖から三年が過ぎ今は十歳  
ときどき領地の経営に口を出すこともしばしば

巫人や幻獣を討伐したりヴィンダールブの能力で解決することも  
しばしば

つかそれしかやってねえんだよ！

後はみんなジヨゼフだよ、あいつに呼び出され

暇だ相手をしるとかいつてチエスやらされたり、あれと戦ってこ  
いとか言っ

えられまわっているラオシャンロンと戦わされたり

まあヴィンダールブで八百長ですけどね

他にはルイズ、キュルケ、シャルロット、イザベラ、シャルルと  
原作重要キャラには会いました、コルベール先生に会ってみたい  
けどどこにいるか

わからなかった、少し残念だ

シャルルとシャルロットはジヨゼフが会わせてくれたんだけど

シャルルはずっとニコニコ、シャルロットはビクビクしてたなあ

原作がウソのようだ、現状そんなところですかね

今は自室で筋トレ中です

ようやく体ができてきたのかやっとな紋章が体に浮かび上がりました

ただ目の周りにできてしまったので

まあ大変、病気やらなんやらと騒がれましたが

まあ今は収まっています

おや外が騒がしいですな

扉が勢いよく開かれた

「……リユーガさん」

「どうかした？」

母レイが笑みを浮かべながら

「今王宮からすぐ出立するようにはなりましたが、なにをやらかしたのですか？」

「王宮？ ジョゼフ殿からではなく？」

「はい、王宮からです龍便が血相抱えていましたから何やら急ぎのようですね」

「では、前に潰した貴族ことが・・・」

（そーいえばジョゼフと一緒に貴族潰しまくったもんなあ）

そう言いながら可能性を上げていくリユーガ

そして前から異様な威圧感から我に返った

（し、しまったやばい）

とつさに窓に手をかけ逃げようとしたが  
すでに遅かった

「御待ちなさい」

「なんででしょうか母上、僕は日課の花に水やりを・・・あれどうして杖を振り上げるのですか」

ちよっとその呪文は洒落になら、・・・アーーーーー」

以前レイの風魔法を見たリユーガが考えた、呪文で空気を圧縮それを放ち解放、すると周りに衝撃がドーン  
対集団戦で思いついたリユーガであったが  
それだけのはずなのにレイがやると

衝撃が半端な威力ではなく屋敷の10分の1を破壊する威力にな

るのだ

・・・

「と言つことですよ」

「それは、なんと云うか・・・災難だったな・・・」

目を晒しながらバツが悪い様に答えるジョゼフ

リユーガは別段気にする様子もなくジョゼフに問いかける

「いや、それよりもなぜ王宮からジョゼフ殿の言伝が発しられたのですか」

「あー・・・もう陛下なのだ」

「は？」

「ちなみにシャルルは大公だ」

ジョゼフの言葉を聞きリユーガは原作を思い出す

「それはめでたいのですが・・・なぜ俺を？しかも龍便なんかを使つて」

(こんな時期だっけ？確か原作開始3年前じゃ・・・)

「実はお前に友として頼みがあるのだ」

「友としてですか・・・」

「ああ実はシャルルを潰してほしのだ」

「10歳に自分の弟潰してくれと頼むか普通？」

リユーガは呆れたようにジョゼフに聞き返す

「言い方が悪かったなシャルル派を潰してくれ」

「それでも10歳に・・・まあいいやなぜそんなことを」

「実はシャルルの一部が今朝決まったことをもう嗅ぎ付け反乱の準備をしているのだ」

「それは、また穏やかじゃないね」

「無能王より魔法に優れたシャルルのほうがいいのだろう」

リユーガとジョゼフで内密に貴族を

潰しまくっていたのでそんな貴族がまだいることに  
うんざりした表情でリユーガは言葉を発する

「まだそんな輩がいんのか・・・シャルル様はどうなんだ？」

「どう、とは？」

「どんな反応だったかってこと」

「それが兄さんならこの国を良くできるだそうだが自分が王ではな  
かったことを当たり前のように

今は部屋にこもっている」



「そんな思ってもないことを・・・」

リユーガがそう言い放つとジョゼフの回している駒が動きを止める  
そして威圧感を放ちつつリユーガへと問う

「思ってもいないだと？、なぜ言いきれる」

「・・・はあく・・・部屋に行ってみな先ほどはすすり泣きが  
聞こえたからな」

「・・・そう・・・なのか？」

「この耳で聞いてまいりました国王陛下」

そうリユーガが口にする

ジョゼフは手に持った駒を台の上に置き、黙った  
しばらく沈黙がつづき、リユーガがその沈黙を押し破った

「潰すのはかまいませんが提案があります」

「提案？」

「はい、いつそのこと二人でおやりになれてはどうですか？」

ジョゼフは一瞬ポカンつと間抜けな顔になる

そして無知な子供に知識を与えるかのように喋り出す

「リユーガよ王と言うものは・・・」

ジョゼフが言葉を発する前にその言葉を  
リユーガは遮った

「一人だとかそんなこと誰が決めたのですか？」

政治や経済に優れたジョゼフ殿いや、陛下とシャルル様の伝統  
への示しがあれば

国はいいほうに傾くのは当然でしょう」

現にジョゼフは三年前から政治に口を出すようになり  
民からは無能王とは呼ばれなくなった

「確かにそうだが」

「俺からしてみれば伝統だけを重んじるなんてものは無意味とし  
かありませんな

民をまとめると言う絶対条件で一人が絶対権力を持つなんてこ  
とありえない

一人の能力は限られているそれは分かっておいででしょう？」

「しかしそれでは俺とシャルルで国が分かれるのだぞ」

「それはないでしょうな」

「なぜだ」

「実質いままでわかれていたのは跡目争いのようなもの

そこで二人が王につき政治を二人であるこの二人に意味が在る  
のですよ」

「確かにリユーガの言うとおりだがそれでも納得しない貴族はい

るだろう」

「それこそ俺が出向いて屋敷ごと潰しますよそれで、この提案どう思われますか扉の」

向こうのシャルル様？」

「!？」

ジョゼフは驚き扉をのほうを見た

扉は弱弱しく開きそこには窺れ目をはらしたシャルルが立っていた

「シャルル!！」

「いつからきずいていたんだい？ブラッドリー殿」

「リユーガで構いませんよ、シャルル様がつけていたあたりですよ  
ようか」

「そんなところから・・・サイレントをかけなかったのも聞かせるためかい？」

「まあ概ねそんなところですよ、後はお二人でどうぞ日頃のすれ違い発散させて下さいな」

私は後処理やってまいりますから」

「おい、どこへい・・・」

ジョゼフが言葉を発し終わる前にリユーガは腰にさした黒翼を抜き放ち壁へと突き刺し引き抜いた

刀には血が付いておりそれをリユーガは取り出した紙で吹いた

「この方の主のところへちょっとO H A N A S I Iして参ります

二時間ほどで帰ってまいりますのでそれまでにお二人の思いでもぶちまけてくださいな」

そう言いながらリユーガは廊下へと出て行った

「ふー」

(なんでここまで不器用かね、そうは思わないネロ?)

(単なる者のことなど考えてもわからんよ)

(ネロに聞いたおれがバカだった、それで相手は誰?)

(シユレイ公爵と言う名前だと思うぞ、しかしこの刀を通して相手の考えが

聞こえてくるようにする方法は便利なのか?)

(そりゃもうチートですよ(笑))

シユレイ公爵、ブラットリー公爵家とは違い平民を長く使える道具としか思っていない

残虐でありながら伝統を重んじている故、代々ガリア王家に古くから仕えている重臣である

ジョゼフ派、シャルル派わかれた時には真つ先にシャルル派に付いたシャルル派筆頭である

シユレイ公爵曰く魔法の才がない者が王〓論外と言うことらしい

(さて白い悪魔ならぬ黒い悪魔の出击ですよー)

(今回もこっさり裏からか?)

(いやいやこれから陛下になるジョゼフに密偵なんてつけて様子を探ってたんだからこれは王家反逆の疑いありっー大義名分ができるわけですよ)

(そんなものなのか?)

(っーわけで正面突破いってみよう)

(自然に体が動いちゃうんじゃない?)

(なぜそのネタを知っている)

「あれ?リユーガ?」

ネロと話していると後ろから声が聞こえた  
振り返ってみると

「やっぱりリユーガだー」

「うお!!!」

青髪の少女が飛びついてきた

「久しぶりだね、半年ぐらい?なんで呼んでも来ないのよ!」

そっぴいっつ頭を殴られた

飛びついてきた少女はイザベラ・ミリア・ド・ガリア、ジョゼフ

の娘である

2年ほど前にジョゼフから紹介されたジョゼフから娘を紹介されるときに娘を

なんたらカントラと言われたような気がするが

あいにくその時ネロと話をしていたのであまり聞いていなかった  
このときイザベラが持つ

ガリア北花壇警護騎士団（当時は個人が持つ騎士団的なもの暗殺  
などには行っていない）に

入れられ一応専属騎士なのだがよばれても面倒と言って半年ほど  
シカトしていたのである

「俺にも俺の事情があるんだってばジョゼフ殿に呼ばれたり」

「ふーん、それで今日もお父様に呼ばれてきたの？」

「そうそう今から仕事だから」

「私の騎士団の団員でしょ！あなたは大体・・・」

イザベラはかまってもらえないのか顔を赤くして  
説教をはじめようとしたが

「そんじゃお仕事だから、またくるよお」

すでに遠くまで走り去られていた

「待ちなさいーい#」

イザベラも走るが追い付けないであろう

しかしリユーガも同じ年といれば年相応の無邪気な笑みを浮かべ

たりはするが

イザベラから顔が見えなくなるとどこか悲しげな表情である

「ハーク領」

「ふうー」

リユーガは乗っついでティガから降り

一キロメートルほど先の屋敷を見据えた

「久しぶりに全力でやりますかな」

そう言いつつリユーガは魔力を開放させ黒い魔力が体を包み込み姿を変えた

目の紋章が体全体に行きわたり紋章が黒龍の鱗のように変わる

はたから見えれば二足歩行で立つ小型の龍

しかしそんなものはハルケギニアには存在しない

リユーガは人と7魔と呼ばれる魔族の頂点であり一部の魔族からは神とまで言われる

魔天龍の血統

完璧に魔族化ができれば横にいるティガレックスほどの大きさになれるのだが

血統が魔族化できたのは文献上にしかない

完璧に魔族化できる血統を魔王と言うほど血統は大きな力を持っている

しかしリユーガが今行った魔族化は中途半端なためこう呼ばれていた

魔人化と

もはや人の範疇を超えたリユーガ  
そしてリユーガはこう言葉を放った

「イカれたパーティーの始まりか・・・派手にいくぜ!!!」

そう言いつつ背中から羽根を出し飛び上がり屋敷に突っ込んだ  
その横でティガレックが主におびえ体を小さくしていた

所変わりジョゼフ私室

「シャルルよ久しぶりにチェスでもやらぬか」

「・・・」

シャルルは無言で向かいに座る

そのままゲームは始まり二人は無言で駒を動かし続ける

「俺たちはなにをいがみ合っていたのであろうな」

ジョゼフが唐突に口を開く

「この言い方は変・・・か、いままでお前に勝ちたいと、

お前の負けた顔を見たいと思いつけそれだけしか考えられなく  
なっていたが

リユーガと出会いお前が嫉妬しているのではないかと思つよう  
になった」



「ッ!」

「俺の心は震えたが逆に虚しくもあつた兄弟で何をしているのであろうとな」

「・・・」

「ここらでいがみ合いを止めぬか?お前にはないものを俺が持ちお前が持つものを俺が持たぬこれでいいではないのか?」

「確かにそうなのかもしれないね、でも僕は兄さんに魔法以外でも勝つてみせるよ」

これは手始めで、ねチエツク」

「・・・まっ」

「まったはなしだよ」

「くッ初めてお前に負けたな」

「考えが変わったからじゃない?」

「そうかもな」

唐突にジョゼフは手を差し出した

「これから頼むぞ弟よ」

「よろしく兄さん」

二人は握手を交わした

この後二人は現王の元へ行き二人の王を認めさせた

この日からガリアの国旗の意味が変わった

双子により国がチエスのように黒と白に割れた意味ではなく

二人の王が杖を重ね国を良き方へと相容れぬ黒と白が導く

そんな意味に

## 十話（後書き）

すいません

この一言に尽きます

リユーガの魔人化はほぼ某魔人を参考しました

もうなんかすいません

ジョゼフとシャルルの会話をもっと入れかけたのですが作者の  
力不足です

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品における意見、指摘、感想をお待ちしております

## 十一話（前書き）

今回は大体が戦闘描写になります

これだけ長い戦闘は初めてなのでどこかおかしいところもあるかもしれません

## 十一話

「こ、これはまた・・・」

ジョゼフとシャルルは父に話しをした後  
リユーガが向かったと思われるハーク領 （シュレイ・ハーク・  
ド・ミラン）へと来ていた

そこは屋敷と呼べるものではなかった  
多くの幻獣が破壊し兵士を喰らい蹂躪していたのである

ジョゼフは途中でリユーガの（もといブラッドリー家）ティガレ  
ツクスを連れてきて  
屋敷の惨劇を目の当たりにすると呆れ返ったように

「お前の主人は見境なしか」

無論龍が答えられるわけでもなく  
瞬時に現れた人型のものから返事が来た

「失礼な、見境ぐらいありますよ既に殺さないと決めた人々は  
外に出してありますよ」

「!?!?」

「どこから」

「何者だ貴様」

「お下がりくださいませ」

周りの兵士は突如現れ口を開くものに驚き、  
ワンテンポ遅れ反応した

そこで現れたものは黒い光の束を体から放ち  
人へと姿を変えた

「まあ剣をおろしてくれるかな」

「な!？」

「リユーガではないか」

よこでシャルルは驚いていたもののジョゼフは興味津津  
と目を輝かせて言った

「なんなのだ今の姿は、それも魔「ストップ」」

「まあ後で話しますよ、まずは幻獣達下からせるんで後のことを  
兵士にお任せしても?」

リユーガはジョゼフにしか聞こえぬような声でいい

「わかった」

「では、ファイヤーボール!」

リユーガは呪文を唱え黒い火球を空へと打ち上げた

火球は爆ぜその音を聞き今まで暴れていた幻獣達が一斉に森へ逃  
げって行った

「すごいな」

「もともと話をつけていたので」  
(ヴィンダーブルブの力でな)

兵士たちからは先ほどの驚きがなかったかのように  
幻獣達が引き揚げていく様を見て驚きの声をあげていた

「それでいったい何をやったのだ」

「まあ帰りながらにでも、今はそれより被害の確認をよろしくお  
願います」

「それもそうか、おい大至急屋敷の状態を全員で調べる」

隊長ミシユランが近寄り

「しかし警備はいく「リユーガ」がある、全員で早急にあたれ」  
しかし彼はまだ子ども「かまわん」・・・了解いたしました」

渋々ミシユランは指示を飛ばし屋敷へかけて行った

「これでよからう、さあ話せ、さっきの姿はなんだ」

「いささか強引すぎませんかね、まあいいでしょう」

こうしてリユーガは口を開いた

（30分前）

へろりリユーガです

現在人間辞めてます（笑）

ふざけた冗談はさておき

突っ込もうとしたら気づいた、後処理どうしよう

いつもなら暗殺だったけど流石に一人で「屋敷壊しましたあ」

って言ったら

なんて言われるか

それでティンツと来たわけですよ、幻獣が襲ったように見せかけばいんじゃないかと

そんなわけで幻獣に交渉し終わり内容は合図したら屋敷襲いかかって食べるもよし、壊すもよし

火球が爆ぜた音したら撤退とこんな感じでと言ったとききました

今は魔人化し屋敷の様子を探っています

（ネ口頼みがある）

（なんだ、私は戦闘には手を貸さぬぞ、と言つかいらぬだろリユーガなら）

（いやいや、今から水に似た魔力を屋敷中に拡散させるからそれに当たったやつを片っ端から

心読んでほしい）

（なぜじゃ）

（殺すべき相手と殺すべきじゃない相手ぐらいは分つときたいからね）



(いちいちそんなことを気にかけるのか？存外優しいのだな)

(そー言えなくなるかもよ)

(？まあそれならいいが何を読むのじゃ？)

(シュレイ公爵の悪事を知っている人、忠誠を誓っている人、金で動いている人)

この三つに分類して魔力の位置から印しつけてくれ)

(この屋敷の中全てじゃろ？人の頭では制御できんと思うが)

(魔人化なめんな、いつもの10倍以上の性能だぜ)

(大概チートじゃな)

(まあそう言うな、行くぞ)

リユーガは魔力を開放しそれを屋敷中に散布していった  
10分ぐらい経ち

(おわった精霊により色つけしておいたぞ)

(精霊なんて見えんぞ、俺は)

(見えぬのか？なら目をやろう)

(は？ちょ何やってんの！？痛！目痛！)

四系炉から水が出てリユーガの右目に入って行った

(これでみえるだろう)

(なにすんじゃ#)

(精霊を見えるようにしてやったのだからありがたく思え)

(あーそうですかいそれでどんな色?)

(悪事は黒、忠誠は赤、金は黄色だ、風の精霊が色を出しておる)

(どらどら)

門に立っている2人を見つめた、すると2人の頭の上に  
黒色がだけが見えた

(あれが精霊かなんか思った以上にファンタジーだな)

(ふぁんたじー?)

(キニスナこつちの話)

(それで何色なら殺すのだ)

(黒単色か黒赤、黄色は交渉、赤単は見逃す)

(なぜじゃ?)

(黒単色は知ってて手を貸している即ち楽しんでるんだ、そんな

屑即アウト

黒赤は知ってて止めないまたは利益を考えてつるんでるこれも  
アウト

黄色はまあ交渉だなこちらに着くならよし、向こうに着くなら  
アウト)

(また随分割り切るのう)

(俺が仕える国家に反逆するんだこれぐらいでいいんだよ、まあ  
行くぞ)

そう言いリユーガは門の前へ降り立った

「こんばんは、殺戮に参りました、あ、今はこんにちわ、か」

(どつちでもいいじゃろう)

「なんだ貴様はここをシュレイ公爵邸と知っての狼ぜ【ヒュン】

」

二人の兵士は剣を突き付けたまま固まってしまっ  
チンっと乾いた音が静寂に響き二人の首が落ちた

「そんじゃお邪魔しまゝす、フレイムランス！」

杖を片手にもう片方の手に三メートルほどの黒炎の槍ができた

「おらあ！！」

鉄製の門に突き刺さり爆発、ドゴオンと音が屋敷に響く

鉄製の門は跡形もなく吹き飛びその音を聞きつけた兵士が「敵襲

「！」と叫んでいる

屋敷の奥から、中から様々なところから兵士が現れる

「なんでこんなにいるんだか」

（心を読んだ時今日には国家に反逆の狼煙を上げると屋敷の中の一人が考えておったぞ）

「そう言うことね」

「何者だ貴様あ！名乗れ」

一人の兵士が杖を抜き放ち声をあげている  
装備が違うことから隊長だと思われる

「名乗れ、か」

「ここは公爵家だぞ亜人一匹で何ができると言うのだ、おとなしく投稿しろ」

「ほうお前から殺されたいらしいな名は魔人とも言うっておこうか」

「ふざけるな！ウィンディ・アイシクル」

直径5メートルほどのスクウェアクラスの氷の刃がリユーガ目がけ飛んでくる

それをリユーガはよけようとせずに

「くだらんな」

パンつと音を立て氷がはじけた

リユーガは埃を払いのけるように手を振るった

それだけでスクウエアクラスのウィンディ・アイシクルは姿を消した

「な、なんだ・・・と」

「失せる」

リユーガは瞬時に距離を詰め

ヒュンつと風を切る音と共に隊長と思われる男の顔に拳を叩きこんだ

グチャとトマトが潰れるような鈍い音が鳴り男が倒れる

ドサツと男が倒れると同時にリユーガは刀を抜き

「ブレイド」と唱えた

「勘違いしないでもらおうか、俺は公爵家を襲撃しに来たんじゃないんだよ」

リユーガは低い声で言葉を発した

「原形を留めないぐらいに破壊しに来たんだ」

そう言い黒いブレイドを纏った黒翼を振るう

兵士たちは風を感じ一瞬何が起きたか分らなかつた

刀を振るった直線上が切れたのだ

音もなくただ人は血を噴き出しながら倒れ、屋敷には亀裂が走り兵士たちは何が起きたのか理解することができなかつた

「さあ虐殺を始めようか」

そう言いリユーガは駆けだした

所変わり

シュレイ公爵書斎

「……？外が騒がしいな、何があったのか？、誰かおらぬか」

「返事がないな、おい」

「は、なんでございましょう」

シュレイ公爵しかいなかった書斎にいきなり黒いローブを着た男  
があらわれた

シュレイ公爵が今回の王家反逆のために雇った傭兵メイジの集団；  
青き風；

・青き風；は全員が風のトライアングル以上の隠密に特化したメ  
イジ10人の集まりで

ガリアのみならずハルケギニアの中でもトップクラスの傭兵団

その団長ギークはトリステインの烈風にも負けぬ実力者で炎風の  
二つ名を持っている

「外が騒がしい、なんなのだ」

「一匹の亜人が暴れている様子」

「亜人だと？さっさと追い出せ」

「それが強力な先住魔法を使うとのことで手を焼いている様子」

「ならばお前が行けギーク、さっさと倒してこい!!!」

シユレイ公爵は自分の屋敷が亜人などに侵されていることに腹を立てたのか

机の上にあつた花瓶をギークに投げつけた

ギークは動きもせず花瓶が直撃し額から血を出していた

ギークは元々はアルピオンでモード大公直属の子爵であつたが

突然モード大公が理由も明かされず斬首刑になり

直属の家臣や貴族たちは全て失脚させられ今の傭兵団を作つたのである

金のためとはいえこのような男に仕えることには抵抗があつたが金のためと割りきつて仕事をこなしている

「かしこまりました、行ってまい「その必要はないぜ」!?チィ、エアハンマー!!!」

扉が激しい音を立て飛んでくる

とつさにギークは呪文を唱え扉を粉々にした

扉があつた場所立っているものを見た

「.....」

リユーガは一人のローブをかぶつた男の首を持ちただ立っている

「あんたがこのローブ集団の団長か? なかなかいい育て方をしているな、

最ももうみんなおねねしているがな」

そう言いながらリユーガは手に持った男を投げた

「ぐはあ！くうう、も、申し訳ありませんギーク団長」

「しゃべるな」

「な、なんだ貴様はあ！」

「お下がりを」

ギークは手でシュレイ公爵を下げ呪文を唱えた

「フレイムウエーブ」

火火風風のスクウェアスペルフレイムウエーブ

部屋一面に炎が吹き荒れ壁を溶かし

リユーガを飲み込むが

「うぎい」

まともや腕を振るうだけで

炎はかき消された

「これだけか？」

「・・・ブレイド」

「おっと」

杖から紫色の光が立ち



黒翼とぶつかった

そのままギークはつば競り合いのままリユーガを部屋の外へと突き出した

「こつちも行ける口かい？」

「シュレイ公爵お逃げくだ、いかせると思つか？」「くそッ！！」

キイン！ガキイン！

2度ほどブレイドと刀がぶつかる

「2度も受けるとはな、これならどうだい？」

「なっ！？」

「そいや！……！」

「クッ！」

刀がギークの心臓目がけ突かれるが

ギークは体をねじりブレイドで少しだけそらし紙一重のところですよけた

「ところがぎつちゃん！、そうはいかねえなあ」

「なんだと！？」

リユーガは懐から刀身のない柄だけの刀を取り出し

「ブレイドオ……！」

「不覚!！」

ギークの杖を持っていない左腕が肩からぱつさりと落ちた

「くそつたれがああああ」

ギークは顔を歪めながらも

ブレイドを展開した杖でリユーガに突きを放つが

「残念だったなあ」

ブレイドはリユーガの素手に止められてしまう

「く・・・そ・・・」

そのままギークは苦痛に耐えかねリユーガに倒れかかった

「よつと」

(ネロこいつの腕つなげられるか?)

(出来ないこともないがなぜだ)

(ここで死なすにや惜しい男だ)

(ブレスレッドを落とせ)

(あいよ)

リユーガは四系炉をギークの上に落としそこから  
水が噴き出てギークの腕をつかみ修復が始まった

「さてと覚悟はできているかあ？」

「くくくく、くるな化け物！アースバレットお！！！！！」

土の球がリユーガに当たるが  
ひるむ様子もなく

「つまらん、実につまらん、

怯えた者ほどつまらんものはないな、まあ屑にはちよつどいい  
か」

そう言いながらリユーガは刀を振るいシュレイ公爵の腕を切り落  
とした

「ぎゃああああああああ、い、痛い、死ぬ、いやだ、水の  
メイジを、誰かおらんのか！！！」

腕を切り落とされのたうち回るシュレイ公爵を見ながらリユーガ  
は切り落とした腕を踏みつけた

「おい、死にたくないか？」

「た、助けてくで、死にたくない、金なら払う」

足元にしがみついてくるシュレイ公爵

「この質問の答えで決めよう、王家に反旗を翻し反逆しようとし

たか？ yes or no？」

「そ、それは・・・NOだ！ 私は反逆など起こす気はない、だから助けてくれ！！」

涙を流しながらすすがるシュレイ公爵

されどリユーガは冷たい表情で

「残念だが、嘘をついたな、お前が yes と答えれば王家で裁いたが認めぬとあらば

王家では裁くことはできん、本当に残念なことだが・・・」

リユーガは無言で刀を振りかざし

「ま、まで、まってく」

ザシュツ

シュレイ公爵の頭に突き刺した

「こんなもんか、こっちは終わったがそっちはどうだ？ネロ」

「今終わった」

リユーガは四系炉を拾い上げ手につけた

（それで、この後処理はどうするのだ？）

（ローブ集団は俺が連れ出す）

（なぜだ？）

(なかなか兵ぞろいだからな、俺専用の情報機関となつてもらう)

(後は幻獣でここを襲わせるのか、殺さなかった者たちは我が記憶を奪つておいたから  
いいとして)

(そうだなじゃあいまから幻獣達を呼んでここを出るかな)

(ああそうだな、しかしこの者たちはどうやって運ぶのだ?)

(ああ幻獣に乗つけて森の中においとく)

すると窓から体長20メートルほどの龍が飛び込んできた

「よし、ミラ、こいつら乗つけて森の中で待機しといてくれ」

すると龍は頷きひよひよいロープの集団を背中に乗つけて飛び立った

今の龍はミラルーツ、ミラボレアスの亜種とされているが

全ての龍の祖や伝説の中の伝説言われる巨大な力を持った龍なのだ  
だが

なぜかフラン領の森の奥深くで眠っていたところを偶然発見そのままMYペットとなったのだ

「さてといくかな」

そう言いつつ幻獣が襲いだした屋敷を見ると遠くから王家の紋が入った馬車の一行が

近づき止った中からジヨゼフが出てくると何か言っているようで

リユーガはその場所に近づきつつ  
耳を済ませた

「お前の主人は見境なしか」

（むうちよつと侵害だぞ）

そうしてリユーガは一行のど真ん中へと姿を現した

「そんなことがあったのか、それにしても魔人化と言ったか？  
すごいなその能力は一体どこでそんなものを身に着けたんだ？」

「まあ企業秘密と言うことで、それにしただってえらく仲直り早く  
ないですか？お二人」

「まあ兄弟だしな」

「そうだね」

「仲よろしいことで、それで双王は見てもらえましたか？」

「二人で親父のところへ行ったら、多少講義があったが問題な  
ったぞ」

ガハハハとジョゼフは笑いながらシャルルの背中をガンガン叩いていた

「まあそれなら俺ものんびりできますな」

その瞬間二人はキョトンとした

「なにをいつておる（いるんだい）？」

「は？」

「お前は国が新たに作る部隊まあ名前は決まっておらぬがその部隊の隊長だぞ」

「えーと何をおっしゃっているんですか？初耳ですが」

「今言ったからな、来る途中でシャルルと決めた、なあシャルル」

「ええ、リユーガこの部隊は政治にも関わられるようにしそれなりの地位も与えるので

おおいに活躍してくれるでしょう」

「いやいやいや俺10歳ですよ？」

「公爵家一人で潰すような奴が何を言う」

「百歩譲って部隊員ならまだしも政治にまで関わるなんて何の地位も持たない俺が

「地位ならやるしぞ、ちょうど幻獣に襲われ潰れた公爵家があるからな」……「？」

「これからもよろしく頼むぞ我が友  
リユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッドリー  
公爵殿」

「……はあく……もういいよ」

リユーガはあきらめたような顔で  
ため息をついた



## 十一話（後書き）

もうなんかすいません

戦闘グダグダだし超展開すぎるし

なんかもういろいろごめんなさい

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品の意見、指摘、感想をお待ちしております

十二話（前書き）

おはこんにちこんばんは  
駄文な作者です

## 十二話

ヘローリユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッド  
リーです

随分と名前が長くなったなあ

公爵潰しから3年の月日が流れました

公爵家潰しの後日王宮に呼び出されシュヴァリエの称号、公爵の  
地位

拳句の果てには新設部隊隊長に任命されました

新設部隊とは簡単にいえばガリア花壇警護騎士団の上に当たる部隊  
ガリアの王国騎士団その名も中央騎士団・・・そのまんまですな  
別名リュウラン隊、理由はなぜか王宮の中庭にリュウゼツランが  
生えているから

誰が埋めたんだか、花言葉は繊細だったはずだがこちらでは：次  
代：となっているらしい

政治的統治も行いなおかつ他の騎士団東やら南などへの指示  
時には自らが任務に就くこともある

そんな部隊の隊長になってしまいました

現在団員30名

；青き風；をそのまま取り込み副隊長はギークとなっている

隊長こと俺はハーク領を引き継いだため約一年ハーク領の管理に  
追われまるでリュウラン隊の

任務や政治的統治はやっていませんでした

周りからはギークが隊長だと思われていましたがハーク領が落ち  
着き

任務に出るようになってからやっと隊長認識されました

まあ3年で目立ったこともなく

原作開始3年前

本来ならここでシャルルが討たれるはずでしたが今は仲良く国の統治をやっていますよ、ジョゼフは無能王とは呼ばれなくなりましたからね

と言っわけで説明が長くなりましたが本編へどうぞ

「リユーガよハーク領の方でまた幻獣が暴れているようだよ」

「またですか、今年始まってこれで20件目ですよ」

「まあ、ハーク領はここフラン領と森でつながり反対側はサハラだからな」

「は、今度は何が出たんですか？バジリスク、フェンリル、エスピナス、ワイバーン、etc

もう幻獣で動物園でもできそうだな」

「動物園？何だそれは」

「あー、動物を見世物にする一種の娯楽ですよ、」

「そんなものがあるのか」

ほーとリユーブは感心していた

「そんなことより今度は何が出たんです？」

「それが分らんだ」

「わからない？」

「襲われた人の話だと光を放ち体長は15〜20メートルらしいんだ」

「光？」

「ああ、なんでも村に黒い光が漂いその中でそれぐらいの大きさをした何かが養豚を

さらって行ったようなのだ」

「……」

「動くものを見た人はあんな幻獣見たことがないと言っていた」

「そうですか、では俺が直接行ってきます」

「お前が直接行くのか？」

「少し心当たりがあるので、考え通りなら誰も相手に出来ないと思うので」

「心当たりとはなんだ？」

「光を放つ者……ですかね」

「なんだそれは」

「まあ、予想が外れてくれることを祈るばかりですよ、では」

「お、おいリユーガ」

ボタンっと扉が閉まり

リユーブは溜息をつき椅子に座った

「今度は何をやらかすのやら」

そう言いつつリユーブは書類を片付け始めた

（先ほどのはどういう意味だ？）

（あー俺の世界の動物と特徴が一緒なんだ）

（なんと言う動物なんだ）

（まあその動物がそれとは限らないから）

（その動物はそれほど危険なのか？）

（まあそこそこにね）

（ふーん）

ネロと会話しつつ

リユーガはミラの元へ向かって行った

（ハーク領民村）

「これは当主様ではありませんか」

「ここで見たこともない幻獣が出たと聞いたが」

「はい、もう7人被害にあっております」

「死人は？」

「今のところ出ていませんが、豚小屋が何度も襲われております」

「どこにいるかはわかるか？」

(豚、か)

「森に新しい獣道ができていますのでそこから来るのではないかと」

「そうか、では少し様子を見てくる、念のためこいつを置いておくから出たら」

こいつのそばに寄るように」

そう言いリユーガはミラをポンポンと叩いた

「分かりました、どうかお気お付け下さいませ」

「では、行ってくる」

そう言いリユーガは森の中へ足を進めた

(ネロ、この近くに水脈がないか？)

(一つ温度が高い水脈があるがどうしてだ？)

(俺が知ってるやつは住処に温泉を選んだ)

(そうなのか？ いったいどんな奴なのだ？)

ネロが聞いた瞬間

前から黒い光が放たれた

(な、なんだ)

「やっぱりレスブランドか！！」

そう言いながらリユーガは腰の黒翼を抜きかまえた

「ドウゾクヨナニヨウダ」

「こんなところで何してんだ」

「ワカラヌキツイタラココニイタノダ」

前から現れたのは体長15メートルほどの鳥

「誇り高き7魔がねえ、訳もわからずこっちに來たってわけかい？」

「ソウダ」

(さっきから何を言っておるのだ？)

(こいつは俺と同じ魔族の頂点、7魔だよ)



7 魔の一柱、魔光鳥レスブランド  
黒色の怪鳥

特徴は頭に生えている角

角から光を吸収しそれを羽根から放出することができる  
光の色は自由自在に変えることができる

(確かに、ものすごい大きさじゃな)

(まだ生体じゃないぞ)

(なんと!!!!)

(生体はこれの2倍はある)

「シテナニヨウダ」

「村を襲うのをやめてほしい」

「イキルタメダブタガアソコニシカイナイ」

このレスブランドは豚肉しか食べないという  
変わった魔族なのだ

「ならば俺の家にこい、そこならば迷惑掛けることなく暮らせる」

「ダメレ」

「あ?」

「ナゼキサマニシタガワネバナラヌ、ワタシハマゾクノチヨウテ  
ンノイツカク、

イツカイノマゾクフゼイガ「だまりな」ナンドト？」

「まだ成体にもなっていない言葉もうまく喋られない、その分じゃ  
異能<デユナミス>も開花してない

野郎がいい度胸じゃねえか」

「キサマチヨウシニノルナヨ！！」

レスプレンドが光を集め羽根から光を放ってきた

レスプレンドが放つ光は目暗ましもあるが集束された光が当たれば  
まず並み大抵の魔族ならその光で焼き切られる

これがレスプレンドが7魔たる所以である  
リユーガは光に飲み込まれ吹き飛ばされる

ドゴオンと10マイルほど吹き飛ばされ  
リユーガは木にぶつかる

「ナナマニタテツクオロカモノヨ」

そう言いながらレスプレンドは巣に戻るつとする

「まてよ」

「!？」

レスプレンドが振り向くとすぐそばにリユーガが立っていた

「キサマナゼイキテイル」

「やつぱりまだ生まれ5〜6年か光を全然収束できていねえな、  
そんなんじゃ

この鱗はつら抜けねえよ!」

リユーガの周りに魔力が集まり  
姿を変わっていく

「キサマケツトウダッタノカ」

そしてリユーガが龍の鱗に覆われて行くと

「バカナマテンリュウダト!」

リユーガはゆっくり歩き出し  
拳を構えた

「お仕置きだぜ、boy」

リユーガは拳を振り

レスプレンドの腹へ拳はあたり

そのままレスプレンドは何本も気をへし降り  
100メートルほど吹き飛ばされる

「まだやるかい?坊や」

「ワ、ワカッタオマエニシタガオウ」

レスプレンドは立ちあがり地面に頭をつけた

「なら家に帰るか」

「オンセンハアルノカ？」

「あーネロここの水引いてくれる？」

四系炉から水があふれ

ネロが出てくる

「わかった屋敷につないでおこつ」

「ブタモヨウイシロヨ」

「わかったわかったその代わり俺を乗っけるよ」

「ジブンデトベルダロ」

「こっちの世界じゃ人間は飛ばねえんだよ」

「ソウナノカ？マアイイダロウ」

「ところでお前名前は？」

「キツイタラココニイタノデナイスキニヨベ」

「そうか、じゃあラークと呼ばせてもらおう

これからよろしく頼むぞ、俺はリユーガだ」

「ワカッタゾリユーガヨ」

「じゃあ帰るか」

「そうじゃな」

「飛べるか？」

「スコシイタムガモンダイハナイ」

「じゃあ村まで先に行っておいてくれ、豚を襲うなよ」

「リヨウカイシタ」

そういいながらラークは村へと飛んで行った

「じゃあ帰るか」

「そうじゃな」

ネロは四系炉へと引っこんでいった

（それにしてもなんで魔族しかも7魔がいたんだ？）

（呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃーんみんなのアイドルゴッ  
チャンだよーん）

（またか！！！）

（お久しぶりですなあリユウガキゅん）

（何度目か分らんが・・・あえて言おう、キシヨイ！！）

(いやーお前さんが原作ぶっちしちやっただからこっちの神さんが責任とれやっって言ってきたから

こっちの魔族送りこんじゃったテへ)

(キシヨイはっーかだからって7魔なんか送ってくんなよこっちの常識崩壊すんぞ)

(しよーがないじゃーんだってリユーガきゅんがガリアっっー敵の大御所ぶっぱしちやうんだもん)

(別にそれならそれでいいだろーが)

(物語として成り立たなくなるだろーがその辺考えてくんないとゴツチャン困っちゃう)

まあこっちの神が頑張って世界を切り離したらしいから、もう何してもいいんだけど)

(だったら別に送らんでもいいだろーが!!はあ……)

それで?送ってきたのあいつだけだろーな)

(7魔全種、魔族の集落一つ送り込みますた(ドヤァ

イヤー疲れた疲れた)

リユーガには姿が見えないが殴りたくなるようなむかつく表情になる

ゴツチャン

(ふざけんなよお前!!!)

(でー丈夫だって7魔は全部幼生だし集落は魔天龍崇拜の種族だ

から)

(余計に性質悪いわー!!)

(そんなに褒めるなよ、照れるだろ)

(ほめてねえーよ、もういいよお前帰れよ)

(えーまだ話し足りな・・・) ブチン

(ふー余計なことしやがって)

バカなやり取りをしていると

村までついた、すると何やら人だかりができていた

「当主様あいつがあらわれましたぞ、助けて下されー」

先ほど言ったことをすっかり忘れていたリユーガ

「はあーめんどくさ」

悩みの種が一つ増えたりリユーガであった

## 十二話（後書き）

と言うことで7魔のメンツを出すことにしました

ちなみに主要オリキャラは7魔位にとどめたいと思います

次話は主人公設定と7魔について上げます

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品の意見、感想、指摘をお待ちしております



## 十三話（前書き）

学院編から題名を長くしてみます

## 十三話

こんにちはリユーガです

ラークと出会ってから2年の月日が流れました

ようやく原作開始一年前になりましたな

訓練続けてたら火のスクウェアクラスの中になったぜ、たららっ  
たらっ

えーゴホンそんなことよりこの2年は

他の7魔と出会うことなく領地経営、任務をつづがなくこなして  
いき

ジョゼフとシャルルに魔族のことを話しラークを見せたら

シャルルは苦笑いジョゼフは興味津々といった具合で

「こいつをくれ」なんて言ってきやがった

さすがに任せることなど出来るわけもなくラークに断るように伝  
えたら

「せいりてきにむり」つと答えやがった

「つかお前メスだったんだ！」

そっちにびつくりだよ

ラークも2年でやっと普通に喋れるようになってきたが流石にま  
だ人間化はできず

デユナメスも開花しておりません

ちなみに俺は新たなデユナミスを開花しました

まあ必要になったら紹介しますよ

そんなわけで学園編スタートします

「ふあゝあ」

(暇そうだなリユーガよ)

現在リユーガは馬車に揺られている  
いつもラークやミラなどの背中に乗っているので馬車のトロトロ  
したスピードは暇なのである

(遅い、進まない、だるい)

(ラークにでも乗ればよかったのではないか?)

(他国の人間が学園にいきなりそんなんで行ったら目つけられる  
だろ)

(そーゆうものか?)

父リユーブにリユーガは学園をどうするか話をしたときに  
リユーガはトリステイン魔法学院に行きたいと言ったら

最初は反対したものの「他国の領地経営などを三年間で勉強した  
い」など

熱心に語りなんとか許しをもらったのだ

その旨をジョゼフに言ったらイザベラもそこへ入れると言い

その話を聞きつけたシャルルまでもシャルロットを入れると言い

始め

流石に王族2人が他国はまずいだろと言ったら

ジョゼフとシャルルが喧嘩をし始め

最終的には決闘まあジャンケンだがを行いシャルルが勝利しシャルロットがトリステ  
インへ

イザベラがガリアの魔法学院にはいることが収まった

最初は勝手にしてくれと放置していたのだが

流石に一週間で議論し続けたので手を打ったわけだが

イザベラが凄く落ち込み、シャルロットは上機嫌であった、意味

がわからないな2人とも

そんなに他国に行きたかったのかな？

ちなみにシャルロットはこのすぐ後ろ馬車に揺られている

流石に王族が本名で他国の学校に行くわけにもいかず

俺の双子の妹と言う設定にしておいた

「お？やつと次か」

「御名前を」

門の前で名簿を確認していた貴族が  
質問してくる

「リユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッドリー  
様でございます」

馬車を引いていた従者が答えた

こついつときは従者が答えるのが礼儀なんだとか  
貴族は一瞬顔をゆがめると

「少しよろしいですか？学園長から言伝がございます」

「リユーガ様少しよろしいですか？」

「様はいらんと言ってるだろ、なんだ？」

「学園長から言伝だとか」

「ん？」

「申し上げます私はギトーと申します、学園長から部屋に入る前に学園長室に妹様と来てほしいと」

「わかったすまなかつたな」

そう言いリユーガは馬車から下り  
後ろの馬車へ歩いて行った

「いかがなさいましたリユーガ様」

「様はいらんと・・・邪魔するぞ、シャル」

そう言いながらリユーガは後ろの馬車へとは行って行った

「ふえ!?!」

「名に素っ頓狂な声上げてやがる、学園長がお呼びだと、すまんが部屋に荷物運んどいてくれ

ほらいくぞシャル」

「っちよ、ちよっと待ってよリユーガ」

シャルロットの手を引いていくとなぜか赤くなっていた  
なぜ?と不思議そうな顔をしつつギトーのところまで向かって行った

「で、学園長室はどこだ?」

「案内をつけさせよう、おい此方の二人を学園長室まで案内してさし上げる」

そういつつ近くで待機していたメイドに声をかけるギトー  
こちらですと、メイドの背中へ着いていく

「ああ、すまんかったな手握ってて」

手を離れた瞬間シャルロットがあつと声をあげていた

「どうかしたか？シャル」

「なんでもない」

そう言いつつそっぽを向くシャルロット  
そんなに強く握ってたかなと見当違いなことを考えていると後ろ  
から

他国人がとギトーのつぶやきが聞こえた  
リユーガは振り返らずに

（あれがギトーか、見たとおり嫌なやつだな）

そう考えつつ学園長室まで歩いていく  
中に入り階段を上がったり廊下を歩いたりと右往左往していると  
メイドが一際大きな扉をノックした

「開いておるよ」

「失礼しますリユーガ様とシャル様をお連れいたしました」

「入りなさい」

「お初にリユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッドリーと申します」

「メイドさんや下がってくれんか？」

「失礼しました」

そう言いメイドは部屋を後にする

「トリスティン魔法学園へようこそ、ワシは学園長のオールド・オスマンじゃ

リユーガ殿とそちらはシャルロット姫殿下かの？」

「シャルで、私は今シャル・フラン・ド・ブラッドリーですから」

「そうじゃったなようこそシャル殿ここではワシしか事情は知らぬ故そのところよろしく頼む」

「それで、何用ですか？オスマン学園長」

「いやいや隣国ガリアの姫君がくるので挨拶をとの、呼びつけたのは不躰じゃったが

入学してくる者達の書類を整理しているので勘弁してくれるぬか

「そうでしたか、気にしておりませんよ」

「さすがは黒炎どの心が広いですのう」

「やめてください、その名は周りが勝手につけたものですから」

「そうなのか？まあ今のところはいいかのう、まあ三年間勉強に励んでくだされ御二方」

「はい、もとよりそのつもりです」

「では後二時間ほどで入学式が始まるので、その時に、のメイドさんや」

オスマンが声を上げると一人のメイド失礼しますと中へ入ってきた

「この二人を部屋まで案内してやってくれ」

「かしこまりました」

「それでは失礼いたします」

「失礼いたします」

そう言いリユーガ達は学園長室をでて部屋へと向かった  
シャルロットが先に部屋に入り

リユーガは男子のフロアへとむかっていた  
メイドが一つのドアの前で止まった

「此方でございます」

「ありがとうございますな」

そう言いリユーガはメイドに金貨を三枚ほど握らせた



「こ、こんなにいただけません」

「手間取らせた謝礼だ受け取っとけ」

そう言い手を振りながらリユーガは部屋へとはいって行った

実際リユーガは中央騎士団に入ってから領地管理、任務、領地管理、任務と

仕事ばかりしていたせいで領地管理と騎士団さらにはジョゼフ&シャルルの私的任務で

かなり稼いで使う暇すらなかったのでかなり金が余っているのでメイドに渡した金貨など

スズメの涙程度にしか思っていない

リユーガが学園に入ると同時に騎士団の方ではギークが完全に指揮をとっており

領地は元青き風のメンツが管理をしているのでさしたる問題はなかった

リユーガは置いてある荷物を広げ制服に着替えた

まだ時間があるなどネロの力で水を通し会話するもの水電をネロに繋げてもらった

(そっちは問題ないか？ラーク)

(もんだいはないが先ほどジョゼフが来ておったぞ)

(は？なにしに来たんだあのおっさんは)

(なんでも学園に行っても月に一回は王宮に顔を出すように伝えるように俺に伝え

リユーブの所へ行ったぞ、これから行こうと飛ぶところだったのだが、まあ伝えたからな)

(マジかよ、その時は最大速度で迎えにこい)

(人使いが荒いなリユーガは)

(うっさいぞ)

その後暫く喋り水電を切ると  
ノックの音が聞こえた

「開いてるぞ」

「そろそろ時間だよりユーガ」

「もうそんな時間が、そいじゃ行くかな」

そう言いつつ腰に黒翼を差し杖と柄を懐に入れた

「刀もってくの?」

「いかんのか?」

「いけなくはないけど・・・」

「じゃあ問題なし、ほらいくぞシャル」

扉を閉めロックをかける

「どうしてロックかけてるの?」

「見られちゃならないものがあるからな」

「リユーガでしか処理することのできない書類や魔道具があるからである」

「ふーん、まあ行きましょ」

「はいはい」

外に出るとたくさんの生徒が集まっていた

「えーゴツホン、ワシが学園長のオールド・オスマンじゃ、まずは入学おめでとう諸君

諸君はこれから貴族の作法や礼儀、魔法について学んでいったり他の貴族の子息、令嬢との

接点を持つように~~~~~」

~~~~~30分後~~~~~

(どーして学校の長と就くもの話は長いんだろっとなあ)

~~~~~1時間後~~~~~

「と言うわけじゃ、では新入生諸君これから勉学に励みなさい、以上ワシのこれで終わりじゃ.....  
ワシカツコよくな?」

(それいわなきゃな)

やっと長つたらしいオスマンの話が終わり担当する教科の先生の話が進められている

他の生徒たちもうんざりしているもののしつかりと話は聞いている様子

あたりを見ると自分の横にはシャルロットがいて近い順にルイズ、キュルケ、モンモランシー、ギーシュといった原作主要メンバーがいる

唯一違うのはタバサではなくシャルロットと言うところである

この違いが物語りをどう変えて行くのかリユーガはまだ知らなかった

話が終わり生徒がそれぞれ教室に入って行く時

「久しぶりね、リユーガ」

2人の声がリユーガにかけらる

リユーガが振り向くと

対照的な二人が立っていた言わずもがなキュルケとルイズである

「ひさしぶりだなルイズ、キュルケ」

リユーガは声をかけるとルイズはキュルケを睨み言葉を発する

「私が声をかけたのよ！ツエルプストーの女は引っこんでなさい」

甲高い声が響くがキュルケはそよ風が吹いたように無視を決め込む

「2年ぶりくらいかしら、あなたこの2年忙しかったじゃないの」

「ちょっと無視しないでくれる！！私が声を「うるさいわね、黙ったなさいよチビヴァリエール」

「な、ななな、なんですって！！も、もももう一回いってみな  
「はい、ストゥプ」

2人の肩をつかみ軽く引きはがすリユーガ

「入学式くらいは静かにね、後声が大きい周りが見ているだろ」

「「そ、それもそうね」「」

後半ドスを聞かせて喋ったから二人は委縮してしまった

周りからはあの2人を止めた！？と声が上がっている

ちなみに黒炎の名は知れ渡っているが

リユーガの顔を知っている者はせいぜいこの2人ぐらいである

「うるさくなってきたから教室行こうか、これからも妹共々よろしくな」

「あら、あなた妹なんていたの？」

「ああ、シャル挨拶」

「シャル・フラン・ド・ブラッドリーですこれから兄共々よろしく  
お願いします

ツエルプストーさん、ヴァリエールさん」

「キュルケでいいわ、跡形っ苦しいのもよしてちょうだい、これ  
からよろしくねシャル」

「わたしもルイズでいいわシャル」

「わかったわルイズ、キュルケ」

「2人と同じクラスだからシャルをよろしく頼むな」

「わかつわ」

「かぶらせないでよ（よ）ヴァ（ツエ）」

「仲がいいのはわかったからもう少し声を落とそうな？」

「は、はい」

またもドスを聞かせた声に黙ってしまう2人であった

「ふふ、面白い人たちね」

シャルロットだけがほほ笑んでいた

そんなこんなで波乱万丈な学園編始まり始まり

## 十三話（後書き）

はいッ！と言うわけで学園編始まりました

ここまで駄文を読んでいただきありがとうございます  
この作品の意見、指摘、感想をお待ちしております  
次回愚か者の末路をお楽しみに！

## 十四話（前書き）

今回は残虐回となります

作者のイメージをうまく現わせればいいのですが・・・

ちなみに作者の嫌いなキャラクターはアンリエッタ、ギター、ヴイ  
イトリーオです



## 十四話

「プギイイイイイイ」

オーク鬼総勢30匹ほどの一部がリユーガへと突っ込んでくる

「はあく、殺気だけで殺せないものかね・・・」

四系炉からウィンドカッターを出す

ちなみに四系炉から出される魔法はあくまで魔道具なので

リユーガの魔力はほとんど使われない

と言っても一度に出せるのは2つまで

戦場ではそこまで役に立たないものだった

(主、腹、減る)

5体ほど倒したら乗ってきたミラが断片的だが語りかけてきた  
ミラはすでに300歳を越え自分の魔力で人に意思ぐらいは伝えられるのである

「そくか、ミラ、食ってよし」

ミラは上空から一気に下降し1匹のオーク鬼を丸呑みしていた  
それを見たオーク鬼たちは一斉に逃げようとしたが

「まあまでYO」

そう言いながら逃げようとするオーク鬼の前に

いつの間にか立っていたリユーガは

「まあ、運がなかったと思って、ね」

黒翼を抜き放ち一振りする

そこでオーク鬼たちの体が一閃に切り落とされた

「まだ食うか？ミラ」

ミラの方を見ると先に倒した5体の死体がなかった

(腹、一杯)

「そーかそーか、ファイヤーボール」

おなじみの黒炎が杖からでて死体を焼き尽くた

「つーか入学初日からサボりか」

リユーガは今入学式初っ端からフクロウに呼び出され

「軍の連中が動かんオーク鬼20〜30匹暴れているらしい  
狩ってこい」

「20〜30匹で一人に・・・はい無駄なんですな行けばいんで  
しよ、それでいつ・・・」

はい？今日？トウデエイ？ちょ、ワタス、授業が・・・はい、  
わかります」

今に至るわけであるちなみに呼び出しは朝の4時

現在9時やったね完全に遅刻だ

ってなくわいで朝の4時に人がいるわけもなく誰にも言わず出発したため

初っ端からサボりきめこんでしまったのだ

「戻りますかな、ミラ王宮にいつて兵士に終わったて言っというて」

(主、我、王、嫌、我、触)

「我慢してくれ、流石に初っ端から授業サボりたくないんだ」

(我、承)

「んじゃよろしく」

ミラは王宮の方へ飛び立った

「帰るかな」

(ネロ、ラークと連絡とって)

(わかった・・・だめじゃ寝ておる)

(は？水使って叩き起せ)

(だめじゃ、あやつ自分の周りに光で結界はっておる)

「豚肉カットだな」

(どうするのじゃ？ここから家まで2日かかるぞ)

(仕方ない飛ぶか)

(疑問なじやが本気ならどれほど早く飛べるのじゃ?)

(魔法学園まで20分つてとこだな)

(……ミラで来ずともよいではないのか?)

(見られるとロマリアあたりに異端審問かけられるんだぞ、まあかなり上空まで上がれば問題ないか)

リユーガは上の服を脱ぎ背中だけ魔人化をし羽根を出し  
空高くまで飛び上がった

(魔人便目的地はトリスティン魔法学園です)

冗談混ぜつつリユーガは魔法学園へと飛んで行った  
魔法学園には30分ほどかかりついた  
上空で魔人化を解除しレビティションをかけ服を着て学園まで降りて行く

するとちょうどそこではルイズたちのクラスが外で実戦授業を行  
おり

ギトーがキュルケに何かを言い合い何人かは心配そうに見ていた  
ギトーがキュルケに向かって魔法を唱え放つ、それを見ていたり  
ユーガだが

明らかにギトーの様子がおかしかったので  
リユーガはレビティション解きキュルケとギトーの間に入り  
四系炉からウィンドカッターを2発出し相殺させる

「おい、今当てる気だつたる」

「「リユーガ!?!」」

「授業の邪魔をしないでただこうかミスタ・ブラッドリー」

「授業だと?」

「ミス・ツエルプストーが最強の系統を火と述べたので  
私は身をもって風の素晴らしさを教えていたのだよ」

それを聞いた瞬間溜息をつき

「アホくさ」

それだけ言い校舎の方へと歩いて行った

「な、なんだと!待ちたまへ!?!」

「授業があるので、邪魔してすいませんね疾風殿」

リユーガはそのまま:見ていた:者の所まで歩き  
扉をけり開けた

「ちくす、除き見趣味のくそ爺」

「な、何をしているのかな?リユーガ殿?」

「悪かったな、邪魔してよ」

「な、なんの「と」じゃ？ピュ〜ピュ〜」

「わざとらしいぞ、覗き見してさりげなく呪文で威力を弱めようとしただろ？」

おかけで2発出す羽目になったんだぞ」

「そこまで分かっているのか、年寄りを試すものではないぞ」

「そんなことよりなんだあの教師は？」

「ギター君はのう・・・優秀なんじゃが性格にちと、のよもや生徒にスクウェアクラスのウィンドカッターを放つとわのお〜」

「そこまで分かっているなら首にしるや」

「あゝしかしあそこの実家からの寄付でなりたつとる部分もあるから、あまり強く言えんのじゃ

察してほしい」

「そーか、ま、事情は察しようだが」

「だが？」

「殿下と俺に突っかかってきたら・・・後は分るな？」

「その場合は・・・いたしかたないかの」

「そーゆつことで、んじゃ俺は授業があるからな」

「つーかお主口調変わっておらんかの？」

「相殺しようとしなかった時点であんたへの敬意は消えた」

「最初からしておらんくせに」

「まあそうかもな」

それだけ言いリユーガは部屋に戻り制服に着替え

教室に向かい、教師に事情を話し席に着いた

ちなみに俺の席の隣はギーシュだった互いに軽い挨拶を済まし

俺加わり自己紹介が始まった

俺はリユーガだ、と端的に答え席に着いた実際興味のある生徒などいないので

朝早かったのでそのまま寝ようかと考えていると少し離れた席から声が聞こえた

「名乗る家名もないとはな、僕はヴィリエ・ド・ローヌ、風のラインだ

程度の低い者の名前など覚える気もないのでよろしく」

そう言い大声で笑っていた

(どこにでも、ああいう気遣いはいるんだなあネロ)

(この国の単なる者はこうゆうものばかりだ、あきらめろ)

(まあ興味ないな、あーゆうのは、んじゃ俺は寝るから)

リユーガは襲い来る睡魔に身をゆだねた

「き……お・たま……み」

（んあ？）

「なんだあ？」

「なんだじゃないよ君、もう次の授業だよ」

「ああ、悪いな、担当誰だ？」

「ギター先生」

（うぎ、寝起きであんな奴の顔見たくないぞ）

そこでは熱心にギターが風について語っていた

そこで不意にギターはギーシュへと質問した

「ミスタ・グラモン、最強の系とはなんだと思う？」

「虚無ではないのですか？」

「あれは伝説だけでは効き方を変えよう四系統最強はなんだと思う？」

（この学園に虚無すでにいるんだがな）

「うーん、土ですかね？錬金など応用力が効く魔法が多々ありますし」



「ほう、ではその土魔法を私に放ちたまえ」

「!?!いや、しかしそれは・・・」

「かまわない、放ってきたまえ」

「では。アースバレット!?!」

土の弾丸が無数にギトーに向かって飛ばされる

しかしギトーは風を四つ足しさらに圧縮したエアハンマーを放った  
当然まだラインのギーシュの魔法を吹き飛ばしギーシュに向かうが  
リユーガが机をけり上げエアハンマーを相殺させた

その顔には若干いらつきが見える

ギーシュが原作キャラの中で気にいっているだとかそう言った理由ではない

リユーガは最早原作とかけ離れた世界だと知っているので何が起ころうとも

こちらに利益がないなら見殺しにもする、そう言った考えなの  
では、なぜいらついているかと言つと

ギトーのエアハンマーがギーシュではなくリユーガへと向かってきたからである

「あんたもこりないねえ、生徒にそんな魔法放つかねえ? 普通」

「また君かね、いい加減授業妨害を止めてくれないかね?」

「授業妨害? 失礼なそんなことをした覚えはないのだがねえ、つ

ーかこれ授業だったの?

ただの気違いの演説だと思っていたんだが、そもそも生徒に向  
かってスクウエアクラス

の呪文を放つ人をあなたは教師と呼ぶのですか？」

「なんだと？今のは私を侮辱したととっていいのかね？」

「事実を言われ侮辱と感じるだなんて自分がいかにアホな行動し  
てるか自分でみと

「黙れ！！！名乗る家名も持たぬ君がそんなことを言える立場か  
？」あ？なんだお前」

そこでなにやら先ほどの気違い君が言葉を高らかに発した

「なんだ人の名前も覚えられないほど無能なのか？」

「あゝはいはい気違い君は黙ってようねえ」

「な、なんだと君いま僕を侮辱したのかい！！！」

「はゝい深呼吸深呼吸、アホな顔がもつとアホな顔になって行くよ  
っーかそれ以上その醜い顔で感情を出すな目の毒だ  
後こっからでも分かるほど息臭いぞお前」

「\$%&'(#\$」 声にならない怒り

「ああついに人語を離せなくなったのか・・・悲しいな、だれか  
精神を病んだ子がいる

なんとか「決闘だ！！！！」あ？」

「ギトー先生立ち会ってください、こいつは今僕を侮辱しています

「これは許せないです！……！」

「いいだろう、ただしあくまで授業、私も一手彼に享受してやるつもり君の後でいい」

「もういいです、早く行きましょう」

そう言っつてヴィリエは扉へと歩いて行く

「待てよ」

「なんだい、今さら怖気づいたのかい？」

「わざわざ遠回りしなくていいじゃん」

「「は？」」

そついいリユーガは広場に面した壁に近づき  
蹴りを放った

ドン！パラ、パラ

と蹴りを放った場所はぽっかりと開いていた

「はよ来いよ」

「か、彼はボディーパーアップが得意のようだね……」

そつ言いギターと生徒たちは広場へと出た

そこでリユーガは気づいた

（また見てやがんな爺、まあいいか仕掛けてきたのはあっちだし）

「；決闘；でいいんだよな」

「ああ、そうだが決闘と言っても礼儀には従わねばな」

「どーでもいいけではよ先生も前出るよ」

「なにを言っているのかね君は？」

「2回もやるなんて面倒だまとめてこいよ」

「ふふふふ、ふざけているのか貴様ああ！！！！」

「まあまでミスタ・ヴィリエ彼は2人相手でも問題ないと我々を見下しているのだよ

ここは貴族として彼に教えて上げねばならん徹底的に、な」

「ふ・・・ふ・・・わかりました、後で後悔するなよ！！！！」

まずは話が名はヴィリエ・ド・ロレーヌ」

「疾風のギトー、さあ君も名乗りたまえ」

「長いから嫌いなんだよなあえーと

リユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッドリー」

「な！？」

周りから驚嘆の言葉が上がっている

(なんだ？まあいいか)

「さて始めようか……決闘を」

リユーガ刀と杖を構え殺気を飛ばす

あまりにも強すぎる殺気により周りにいた生徒たちが汗を垂らす  
最初は見世物やらどっちが勝つやら騒いでいたが生徒が一斉に黙  
ったのだ

「ん？はじまつてるんだよな？」

「あ、あああ、ああああああ」

「なんだこいつ？」

ヴィリエは腰が引け倒れこんで叫んでいた

ギトーも冷や汗を流して動けづにいた

その中ヴィリエが呪文を放った

「うわああああああああエアハンマー、エアハンマー、エ  
アハンマー」

飛んできた不可視の風の球しかしリユーガにとっては

避けるに値しないものだったのでそれは頭、肩、腹に当たりリユ  
ーガ軽く飛ぶ

「……はあ」

溜息をつきリユーガは刀をしまい懐から袋を取り出した

「もう失せるファイヤウォール」

そう言いリユーガは火の壁を2人の後ろに作り  
生徒を守る壁と逃がさない壁を作り  
袋の中身を空中にばらまいた  
袋の中身は直径一センチ程の形にばらつきのある球だった  
そしてリユーガはオリジナル魔法バーンボール  
火風のラインスペル風で火を囲い一部だけ解放  
衝撃を一部に逃し衝撃を放つものである  
衝撃の前には鉄の球は衝撃に従い前へと飛んでいく  
ギトーは風の壁を造るものの数が多く防ぎきれない  
ヴェリエは言うまでもなく直撃

2人は何発も鉄の球を体に打ち込まれ虫の息となっていた  
リユーガはゆっくりと近寄り

ブレイドを唱える  
杖から漆黒のブレイドが現れる  
前からは恐怖の音が

周りからはリユーガの表情が冷たいものであるから焦りの声が聞  
こえる

しかしリユーガが決闘を受諾した時点ですでに結果は決まってい  
るようなものだった

双方名乗りを上げ正式な決闘となった以上リユーガが殺さずなど  
ありえるだろうか

答えは否

「刀の錆になる価値もないな」

「ま、ま・・・て」

リユーガはブレイドを振りおろした



十四話（後書き）

続く

グダグダですいません



## 十五話（前書き）

戦闘描写が長くならない・・・なぜだ  
はい、作者の能力不足です本当にすみません

## 十五話

学園長オールドオスマンは遠見でコルベールと共に決闘を見ていたその横ではロングビルが興味があるのかちらちらと覗いていた

「学園長！！今すぐ彼らを止めるべきです！！！」

「落ち着きなされ・・・おや？」

鏡に映し出されてるのは杖を構える二人と一人の生徒

「ふむ・・・どうやら2対1のようじゃな」

「なんですと！生徒が2人同時に相手をしているのですか？」

「ほれ、リユーガ殿の前に2人立っておるわ、どうやらギトー君のようじゃな」

「ミスタ・ギトー！？何を考えていらっしやる！！！」

そついいコルベールは扉から出て行ってしまった

オスマンはやれやれと肩をすぼめていたがとたんに表情が険しくなる

コルベールに目をやったほんの5〜6秒勝敗が決していたのだギトーと生徒は蹲りその2人へと静かに歩を進めていたのだ

オスマンは何かを感じ取り学園長室の窓から飛び出た

遠見の鏡をしまうことなく

オスマンはフライの全速力で広場へ向かった  
そこでは無情にもブレイドを振り上げたリューガの姿が目に入った  
オスマンはフライを切り  
杖を出しリューガへと呪文を発した

「ウインドキャノン！」

風の大砲は後ろからリューガに当たりリューガを炎柱の中へ  
そして炎柱を通り抜け校舎の壁へと激突した  
炎柱は消えオスマンが倒れる2人へと駆け寄る

「大丈夫かの2人とも・・・水系統の生徒は彼らに治癒を！早く  
！！」

生徒たちはハッと現実に戻され水系統の生徒が駆け寄ろうとする  
しかし吹き飛ばした方向まだ土煙が立ち込める中から殺気が放た  
れた

「！？」

オスマンはリューガへと致命傷たりえるほどのスクウェアスペル  
を放ったのだ

死なないまでも意識が在るのはおかし  
しかしオスマン達に駆け寄ろうとした生徒、周りにいた生徒は風  
によって

離され隅へと追いやられる

半径300メートルほど丁度小規模な運動場位の広さの空間が出来  
上がる

土埃から影か立ち上がりゆつくりと近づいてくる

「なぜ邪魔をした？」

「何故じゃと！？ワシが止めねば2人を殺しておっただろう！！」

「決闘での常識を知らんらしいなこの国の人間は」

「常識じゃと？ふざけるなそんなもので人を殺していい理由になるはずがないじゃろうが！！」

「先に決闘を持ちかけたのはその2人だ、俺は向かってくるなら潰すと宣言したぞ？」

「ならば動けぬ相手に何故手をかけようとしたのじゃ？誰がどう見ても勝ちは明らかだったはずじゃ」

「周りなど知らぬ、俺はまだその2人の敗北宣言を聞いちゃいないんだがな」

「口で言ってもわからぬようじゃな」

オスマンはのそりと立ち上がった

「名は捨てた、オールド・オスマン、元系統王、

今はただの学園長じゃが、生徒の歪んだ思考を正すため

ミスタ・リユーガへと決闘を申し込む！！、杖を抜けえい若造

「！！！！」

「いいねえ爺、欺くばかりではなくそっちのが俺好みだ!!!」  
そういいリユーガは呪文を唱えた  
生徒たちとの間に黒炎の炎柱が立ち上りすっぽりとリユーガ達を  
包んだ

「ここから先はR指定だ!!!」

リユーガが黒翼を抜き放ちオスマンへと突っ込んだ

ほぼ一瞬でオスマンの懐へと潜り込んだがオスマンの前にはすでに  
不可視の壁

ウィンドウォールが侵入者を遮る

「しゃらくさいわ!!!」

後方へ飛ばされるがリユーガは刀を振りウィンドウォールを消し  
さる

「!?!?なんと、剣圧だけで消し去ったじゃと」

「それで終わりかあ!!!」

刀を再度振るうが今度は水の壁に遮られる

「あ?風以外も使えるのかよ爺」

「だてに系統王とまで言われておらんかったよ、そらアースバレ  
ッドじゃ!」

リユーガへと土の弾丸が迫る

「おいおい、今度は土か」

リユーガは四系炉からウォータウォールを展開させるが  
あつさり水の壁は貫かれてしまう  
よけようとするが

土の弾丸はリユーガの体に何発かあたりリユーガを弾き飛ばす  
そして倒れたリユーガに向かい何発も土の弾がリユーガへとぶつ  
かり

リユーガをそのまま埋めた  
杖を構えたままオスマンが口を開く

「ワシはのう、四系統すべて自在に四つ足すことができる  
故に周りからは系統王などと呼ばれておったのじゃ先ほどのア  
ーสบレットには

風もついたスクウェアクラスの呪文じゃ、そのせいぜいライン  
程度の壁では防げぬよ

それにしても・・・ちと、やりすぎたかの？」

そう言いオスマンは杖を下げようとしたところで  
地面の中から先ほどとは比べ物にならない殺気がオスマンへと放  
たれた

刹那リユーガの上に覆いかぶさっていた土が弾け周りの炎柱に当  
たり土が昇華した

「フウー、And let one's guard dow  
n old man(気張れよ爺)」

「な、なんじゃ」

「すまんすまん英語はわからんか、警戒を解くな爺……本気でいくぞ」

リユーガの目から一切の感情が消える

オスマンは汗ばみながらも杖を握り閉める

三秒の沈黙、後リユーガへとウィンドカッターが放たれる

リユーガはウィンドカッターを受けるも体勢を崩さず発射元に目だけを向けた

「キ……キサマア殺す殺す殺すうつつつつつつ」

「や、やめいギトー君！……」

オスマンが忠告するも一瞬リユーガから目を離れたオスマンが再びリユーガがいた場所へと

視線を向けるとそこには、リユーガはいない

「な！？どこへ」

「ギヤアアアアアアアアア」

瞬間オスマンのの視界に腕が飛来してくる

それは先ほどまでギトーの体の一部のものであった腕は肩からぱっさり切られており今だに血があふれ横からはバタンツとギトーが倒れる音が聞こえる

「興が削がれた、続きはまた今度お願いするよミスタ・オスマン」

突如視界に現れたリユーガは黒翼をしまいつまらなそうに呟き

立ち去ろうと歩き出したところで炎柱の一部が揺らぐ

(なんだ？外から干渉しようとしているのか？)

揺らいだ部分がぽっかりと穴が空き中にシャルロットを抱えたコルベールが転がり込んでくる

「無事ですか！！リユーガく・・・ん？」

そこにはあちこち火傷になりながらもシャルロットを抱えたコルベールが

心配そうに顔を上げた

「ワシを心配してほしいくらいじゃ」

「は？自信満々に系統王じゃ〜とかほざいてたくせに何を言いやがる」

「何度も無様に飛ばされておつたくせにのう、フオフオフオ」

「第二ラウンドと行こうか爺！！」

刀を抜こうとしたところで頭をはたかれる

「アイテツ！はたくなよシャル！」

「やめなさい！こんな大規模な魔法を使・・・つれ？それって腕？」

「ギトーの腕」



「今すぐ繋げなさい！！！！！」

ドガアとシャルロットのハイキックがリユーガの後頭部に決まる

「ホゲエエ」

リユーガがうずくまるとシャルロットが  
ふざけてないで早く繋げなさい！！と催促するものだから  
渋々腕をつかみギトーの元へと近寄った

「何をするつもりじゃ？」

「黙ってみてる爺、コルベール先生も火傷してるでしょ、こっちは  
よって」

「君は水も使えるのかい？ミスタ・リユーガ」

「あーそうそう」

（ネ口後よろしく）

（精霊使いが荒いなリユーガは）

そう言いながらネ口はコルベールの火傷と切った腕、おまけに先  
ほどから

空気のヴェイリエを治していく

「これでよろしいかな、シャル？」

「このことは叔父様と父上に報告しますからね」

「2人なら許してくれるはず」

「はあくリユーガこの炎柱解いてくれる？」

「はいよ」

炎柱は一部から開いていき

生徒たちが見えるそこでリユーガは後ろから詠唱している声が聞こえた

ギトーは意識を取り戻したと同時にリユーガへと呪文をと唱え放った

小規模ながらも真空の刃を内蔵したカッタートルネードがリユーガへと迫る

リユーガは問題ないが隣のシャルロットはいくら風のトライアングルとはいえ目前に迫った

風の刃は止められない

リユーガはしょうがないと言い聞かせ

腕にだけ魔力を巡らせる

リユーガは腕を振るいカッタートルネードを消し去った

当然、炎柱が開けた前にいた一人の生徒と近くにいた3人に腕が見られる

即座に魔人化を解きリユーガはギトーへ拳を叩きこんだ

「グヘエツ」

(ネロここにいる奴らと前の生徒に干渉して頭の中に声を送れ)

(わかった)

即座にリユーガはネロの力を借り4人の頭に黙れと声を送った  
4人は目を見開きながらリユーガを見るが

(後で話がある今は何も言わないでくれ)

そう声を送ると4人は混乱しながらも黙っていてくれた  
リユーガはメンドクセと呟き溜息を漏らした

## 十五話（後書き）

戦闘おかしくないでしょうか  
もう作者はビクビクです

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品の意見、感想、指摘をお待ちしております

## 十六話（前書き）

すいませんー日投稿できませんでした>|\_|<  
お気に入り100件超えました登録して下さい下さった方々ありがとうございます  
ざいます

## 十六話

ちーすりユーガでうえす

現在面倒なことになっております

腕だけとは言え魔人化を見られてしまった

あの決闘モドキは昼休みに入ってしまったので

結構な生徒が見られていたようだそのせいで今ちよつと噂になってしまっている

俺は午後の授業には出ずシャルロットとコルベールと一緒に学園長室に来ていた

「それで、どういうことじゃな？あの腕は」

「あー、説明するのはいいんですがもう一人見ていた生徒がいるので連れてきてくれませんか？」

「誰じゃな？」

「あー顔しか見えなかったなので、同じクラスなのはわかっているんですが」

「コルベール君、一緒に行ってきたさい、逃げられないようにの（ボン）」

「分かりました、行きましようか」

コルベールとクラスに向かっている

周りは授業をしているので廊下は不気味なほど静かである  
無言で歩いていた2人だが唐突にコルベールが口を開いた

「その生徒の特徴はわかるのかい？ミスタ・リユーガ」

「リユーガでいいですよ、特徴は赤い髪と長身の野郎ってところぐ  
らいしか」

「赤い髪、長身、それだけで一年生ならミスタ・ステイルかおり  
ませんな」

「どんな奴なんです？」

「火のラインメイジで私の授業の時に火の解釈をしてくれと頼ん  
だら……」

「頼んだら？」

「人の英知、とそれだけ答えてくれたんですよ、なかなか変わっ  
た子で無口なんですよ」

「なかなかいいことを言うなそいつは」

「リユーガ君もそう思いますかな？悲しいことに大体の火系統メ  
イジは破壊と答えてしまうんですよ

彼なら私の発明に耳を傾けてくれるかもしれない」

「発明？」

「私が考えた動力機関でしてね……」

コルベールは理解者になりえる生徒のこと、火の素晴らしさをそれからも話し続けていた

話していると教室につき、コルベールが自分の世界から帰ってきて

「少し長く話してしまいましたな、まあ特徴から、ミスタ・ステイルだと思うのですが

一応確認してください」

「分かりました」

コルベールは扉に手をかけ開き中に入った

中ではシエヴルーズ先生が授業を行っていた

教室に2人が入ると生徒たちがリユーガを見て教室がざわつき始めた

リユーガは気にすることなく教室を見渡し

一番後ろで視線を送っている生徒を見て近づき

「頭の中で声がしたか？」

そうリユーガが小声で話しかけるとステイルは首を縦に振った

「こいつで間違いありませんよ」

「そうかね、シエヴルーズ先生ミスタ・ステイルを借りて行きませんがいいですか？」

「え、ええ構いませんが・・・」



「では、ミスタ・ステイルついてきてくれませんか？」

ステイルは無言で立ち上がり教室から出て行った  
それに2人も続き出て行くと

教室がまた騒ぎ出しシエヴルーズが静かになさいつと声をあげて  
いるのが聞こえた

3人が歩いているとステイルが口を開き

「先ほどのあれはなんだい？ミスタ・リユーガ」

「リユーガで構わん、まあ学園長室でな」

「そうかい、なら僕もステイルでいいよ」

「分かった」

↳学園長室↳

「見ていたのはこれだけかな？ハーク公爵」

「リユーガでいいと言っているだろうが」

「すまんすまん、で、話してくれるのかな」

「立っている？」

「すまんが座れるものがなくての」

学園長室にはオスマンの机と本棚が二つしかない部屋だったが

「じゃあこつちこいよ」

「なにをいってお・・・る？」

突如真ん中の開けた空間に

小さな机を囲う4つつのソファーが現れた

学園長室にいるオスマン、シャルロット、ステイル、コルベール、  
は

目を見開いた

「おぬし何をした？」

「まあまあどうぞお掛けになつて下さいな」

そう言いリユーガはソファーに腰掛け

周りを促した

それぞれがソファーにいたところでリユーガが口を開き

「えー説明がメンドイので気になる個所を質問して下さいな、質  
問権は一人二回までで

嘘偽りは絶対に言わないし質問にはちゃんと答えよう」

腰かけた4人が何を言っているという表情になったが  
状況を察したオスマンが口を開いた

「では、あの腕はなんじゃ」

「俺の腕、はい残り爺は質問権一回な」

「答えになつておらんじやないか！」

「簡潔に答えたただけだ、はい！はきはき質問してみようか」

オスマンはぐぬぬ、とうなっていたが無視  
皆が考えだしコルベールが口を開き

「では、あのような腕に変わった論理は？」

「これが正しい質問だ分かったか爺、質問の返答は、昔一匹の死  
にかけの龍を見つけ

韻龍だつたらしく、先住魔法で俺の体の中に入ってきて魔力を  
纏うイメージをすると

体が龍みたいになる俺は魔人化とこのことを呼んでいる、以上、  
ちなみになぜあなるかは俺にもわからん、  
まあお試して見せてやるよ」

202

リユーガの腕に黒い魔力が纏わりつき

腕だけが黒い鱗に変わっていた

腕を見た4人は驚愕の表情だつたが最初に回復したシャルロットが  
口を開いた

「そのことはお父様と叔父様、リユーガの親は知っているの？」

「知っている、と言うかここの面子とその4人、部隊の連中以外  
は知らん」

「リユーガの親？」

リユーガの発言を聞きステイルが初めて声を出した  
その発言でシャルとリユーガに汗が流れる

「じゃあ僕の質問だ、リユーガの親とシャルの親の名前を言ってくれるかな？」

「!？」

シャルが慌てふためくが

「ステイル君その質問は今は「シャルル、リユーブ」おいリユーガ君!?!」

「嘘は言わんと言った」

「シャルルってあの双王の？」

「そうだ、ちなみにこれでステイルの発言権は消えたからな」

「あ」

「さあ後爺とコルベール先生とシャルに1つずつ扉の前で盗み聞きしている

ミス・ロングビルが二つだが」

「!?!?」「!?!?」

4人が一斉に扉に目を向けた  
扉はゆっくりと開きロングビルが立っていた

「いつからききずいていらっしやっただんですか？」

「最初っから、はい残り一つね、そんなところで立っていないで座ったら？」

「そうさせてもらいますわ」

ロングビルが腰を下ろすと

目を閉じたオスマンが口を開いた

「その魔人化とやらはどのくらい危険なんじゃ？」

「どのくらいと言われても、何を前提として考えるんだ？」

「質問を変えよう、どれだけの規模を相手に出来るんじゃ？お主は」

「そーだな・・・強いてあげるのならば・・・国？」

リユーガが短く答えると沈黙が訪れた

「すまぬ、も、もう一回行ってくれぬか？よ、よく聞こえなん  
国「もういいわ」

「それは物理的な意味なのですか？ミスタ・リユーガ」

「単純に破壊するだけならな、後シャルとコルベールだけだが」

「五年前元ハーク公爵家を潰したのってリユーガ？」

「イエス」

「な、なんと、その魔人化とやらだけでか？お主はスクウェアだ  
けではないのか？」

「お前に質問権はもうないぞ」

「最初のをカウントに入れる出ないわ!!」

「しょうがないな特別サービスだぞ、何を聞きたいんだ？」

「お主のもつとる力全て話してもらおうかの」

その発言にリユーガは眉をひそめる

「全能力だと？」

「そうじゃ、言い方を変えればお主の保持しておる武力、能力と  
言ったところかの」

「また難しい質問を、えーとまず系統魔法は今火がスクウェア、  
そのほかはライン

剣はまあ独学、魔人化、水の精霊、幻獣と会話ができる、

四系統以外の魔法五種類、魔道具の完全制御と・・・そんなも  
んかな」

「「「「「・・・はい？」「」「」」

「二度は言わん文字数が多くなる」

「なにをいつとるのか知らんがまず第一に、水の精霊とは？」

「ラグドリアン湖の水の精霊、ほれ」

リユーガは手を出した

手につけた四系炉から水があふれだし

水が手のひらサイズの人の形に変わった

「なんじゃいきなり呼び出して」

「悪い悪い」

「ほ、本物？ラグドリアン湖の？」

「ワシは真正銘のラグドリアン湖の水の精霊ネロじゃ」

「もう、何も言えんのう、幻獣と会話とは？」

「言葉の通り」

「四系統以外の魔法とは？」

「主人公世界設定を見てください」

「じゃあこれも創造ってやつなのかい？」

「もう質問権関係ないな、そうだと、ちなみに誰でも使えるはず」

「平民でもかい？」

「そーいうこと」

「それはまた・・・」

5人は黙る

そしてリユーガはコルベールに声をかけた

「最後の質問は？コルベール先生」

「では・・・君はその力で何をする？」

「難しい質問を・・・俺に害がなければ何もしない」

「任務で君は人を殺すのかい？」

「俺が判断した後でならな、なっとくしない仕事はやらんとジヨ  
ゼフ殿にも言ってる」

「そうか・・・」

言うだけ言ってコルベールは考え事を始めた

「じゃあ質問は答えたし次はこっちの要望と行こうかな」

「大方予想はつくがの」

「俺のことは他言無用、それとシャルロットのことも秘密だ  
ばらした場合は・・・言わなくていいな、別に言わなきゃ何も  
しないから

さて辛気臭い話は終わりだ、それと普段は変わらず接してくれ



てかまわん

まあどう捉えるかはお前達次第だ

いくぞシャル、今日はもう授業でなくていいんs?」

「かまわんぞい、ゆっくり休みなされ」

「はいよつと、ステイルもさつさと教室戻つとけよ」

そう言いリユーガとシャルロットは部屋を出て行った

(まあ龍が入った以外は大体ホントだからある程度これで干渉しなくなるだろう)

「シャル」

「何?リユーガ」

「なるべく黙つといてくれよ」

「分かった、もう隠し事はない?」

「なす」

「ならいいよ、はあ、初日からこんな・・・疲れちゃったよ」

「まあ、そう言つなつて、今から面白い声聞かせてやるから」

「面白いの?」

「問題学園長室では何に座っていた？」

「あ」

「さて分離」

「……!?」

4人の愉快な声が聞こえると同時にシャルロットとリユーガは学園長室前から走り出した

一週間後

ステイルはその後何の気兼ねもなく話しかけてきた  
クラスからは最初怖がられていたがステイルと話していると  
ギーシュも加わるようになりそこそこクラスには馴染めていたと  
思う

「ヴェリエ？誰それ？いつももうざつたい視線送ってくる奴なら殺気飛ばして

隅っこでガタガタなんかしてるよキノコでも栽培してるんじゃないかね？

しかし

ある日ヴェリエがいつもよりうざつたい視線を送ってきたから殺気を飛ばしたが

怯みはするものの、いつものように隅っこでキノコ栽培を始めないからおかしいと思った

午後の授業にさしかかった頃にリユーガは庭に降り立つ幻獣の気配を感じた

気配を感じ、暫くするとコルベルが教室に転がり込んできて

「リユーガ君！！学園長がお呼びですすぐに来てください」

「分かりました」

（どうせ栽培君の家の奴だろうなあ）

そう思いながらリユーガは学園長室を目指すのであった



## 十六話（後書き）

喋る人数が多いと難しい

他の作者様はなんであんなに違和感を感じさせないのだろう？

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます

この作品の意見、感想、指摘をお待ちしております

## 十七話

学院長に呼ばれコルベールと共に学院長室に来ていた

そこではオスマンは困ったような表情でリユーガを見つめていた

「なんだ爺？」

「ちと困ったことになってのう・・・実は・・・」

「どうせヴィリエの家の奴らだろ」

「なぜそう思つたのじゃ？」

「なんだか今日はヴィリエの調子が良かったからな、それで？  
いやちやもんでもつけにきたのか？」

オスマンはリユーガの問いに困ったように言葉を洩る  
そして10分ぐらい沈黙し、言葉を発する

「実は・・・一個中隊を引き連れてきたのじゃ」

「は？」

「ローレン伯爵とマルクス伯爵が一個中隊約50人を連れてこちらに向かっておるそうじゃ」

「それで？」

「お主じゃろつなあ」

オスマンはしわくちな指をリユーガに向け  
しかしリユーガは別に気にした様子もなく散歩にでも行くように

「ふーん、んじゃ行ってくるわ、」

「どいど行く気じゃ？」

「ちよっくら O H A N A S H I I てるYO」

「……………絶対つぶす気じゃる」

「なぐに手を出してこなきゃ何もしませんよ」

「では、君は手を出してきたらどうするのつもりですか？」

「ガキの喧嘩に横やり入れる屑は消す」

「な！？いけませんぞ、君はなぜ戦い以外で解決しようとはしないのですか！！」

「だから最初に話をするさ、それでも手を出してくるんなら仕方ないだろ？」

「しかし・・・」あんたが過去に何をしたか知らないが俺に押し付けるなよ「！？」

「それじゃ、炎蛇殿、学院長殿」

そう言いリユーガは窓に手をかけ飛んで行った

「いかなのう」



「ですねえ」

「どうにも歪んでしまっているようじゃの」

「しかし彼の言うことにも一理ありますし」

「まあおいおい治していくしかあるまい、それより見てみるかの」

オスマンは杖を振るい鏡にはリユーガの姿が映し出された

リユーガはフライで飛びが学院から一キロメートルほど離れた場所で学院に歩を進める一団を見つけた

（馬車2台、兵士40人メイジ10つてとこか）

リユーガは高度を落とし馬車の前に降り立った

「何者だ貴様！！この馬車をローレヌ伯爵の馬車と知っての」「あー五月蠅い」「んぐツ！？」

「どうした？」

馬車の中から一人の中年が現れた

「あんたがローレ又伯爵？」

「何者だ貴様は？」

「失礼ですが学院に何用で？」

「……リユーガとか言うものを粛清に」

「俺がそのリユーガだよ」

「貴様が……おい、この者を好きにしていよいよお前ら」

「「「は！！！」「」」

「私も一発はやらねばな……ウィンディ・アイシクル！！」

リユーガに無数の氷の槍が降り注ぐが

リユーガは黒炎柱一本をだし全て溶かしてしまっ  
その円柱が一個中隊を全て覆い隊員たちをすっぽり包んでしまっ

「はあゝ・・・こっちは平和的に解決しようと思ったのに・・・  
先に手を出したということは殺されても文句はないな？」

前半はうつつとしい様に

後半は低く殺気を込めたので一団に緊張が走る

「なんだ！？この炎は」

「逃げ場なんてないぞ・・・フレイムランス」

リユーガの手に黒炎の槍が現れ

それを軽く前に押し出した

槍はゆっくりと後ろにあった馬車へと飛んでいき触れた瞬間

ゴオオオオと20メートルほどの火柱が上がり馬車を燃やして行  
くが

馬車が燃える寸前に風を纏ったこれまた中年親父が現れた

「いきなりとは、なかなか無礼だな」

「先に手を出したのはそっちだぜ、それでどっちか選べ  
決闘するのか虐殺にするのか」

「決闘？何を言う、貴様は不意打ちでギトーを攻撃したそうじゃないか」

「そんな奴と決闘なんてできるわけがないだろう、この卑怯者め！！！！」

「だったらなんだってんだ？双方が了承した決闘だ、どんな手を使おうが勝てばいいのだろうが」

「貴様には貴族としての誇りがないらしいな、おい、殺せ」

兵士やメイジが一斉に攻撃を放つが

リユーガはファイヤーウォールで防いだ

「守ることしかできないのか？不意打ちをしなければギトーが勝っていたな！！恥を知れ！！」

「不意打ちしたのはお宅の息子さんです・・・よつと」

リユーガは突然後ろから現れた、炎柱で視界から消えた瞬間ブリズンを一部だけ解放

そして外から回って兵士の団体の中に四つの槍を投げ込んだ

槍は兵士の真ん中で爆発、馬車を燃やした二倍ほどの大きさで兵士たちを焼き尽くす

「あらあら、かわいそ」

「貴様あー!!」

マルクス伯爵とローレヌ伯爵が魔法を放つがまたもや炎柱によって遮られる

「ツクそ!!正々堂々勝負しろ!!!!!!!!」

「いいよ」

「「!?!」」

リユーガは並んでいた2人の後ろに現れた

「もうお宅の兵士さんたち全滅してるからねえ」

「な、なんだと!!」

2人が後ろを見るとそこには兵士だった者たちがいた

「つーかこんだけ連れてきてよく正々堂々なんて言えるねえ、っ  
と」

「グー！」

リユーガの蹴りがローン伯爵の腹にめり込み吹き飛ばされ  
馬車の残骸に当たり気絶する

「ば・・・ばかな一個中隊がこんなに簡単に・・・」

「1つ問う、なぜこんなものを引き連れ俺に攻撃を仕掛けた？」

「貴様が卑劣なことで我々の息子を陥れたからだ」

「それはきちっと2人に聞いたか？」

「息子がウソを言うわけがない」

「はあ、お前馬鹿じゃね？」

「なんだと？」

「自分の息子に踊らされる親滑稽だねえ」

リユーガはクスクスと笑い  
手を叩きながら笑った

「その2人はね、俺が気に入らないからと言う理由だけでつかか  
つてきて負け

それでもプライドが高いからか親を使って復讐しようと考えた  
ってか、蛙の子は蛙だが

蛙の親も蛙だねえプククク」

「・・・それは本当なのか」

「周りになんとも聞けば？」

「・・・」

「んじゃ俺帰るから、後処理よろしく」

そう言いリユーガは飛んで行った

その10分後隊員たちは死んでおらずただ仮死状態になっていた  
だけと分かり

マルクス伯爵は自領へと帰っていた  
その後ギトーとヴィリエは親に説教させられたとか  
戦闘の一部始終を見ていた2人は

「・・・なんじゃあの威力は・・・」

「火の槍のようですね・・・一体どういう原理で黒くなっているのか・・・」

「とんでもないではないか」

「あれを防げる自信おありで？学院長」

「・・・あれが本気ならの」

「どう見ても遊んでいる風にしか見えませんでしたな」

「・・・確かに・・・のう」

「しかし彼は殺しが好きなわけではない用ですな」



「それでも性格に問題はありじやがな」

「しかし今日ので確信しましたな」

「ああ」

「彼を怒らしてはだめですな（じゃ）（）」

爺と中年がエロ以外で心通った珍しい瞬間であった

## 十七話（後書き）

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品の感想、意見、指摘をお待ちしております

## 十八話（前書き）

お久しぶりです

ほんの一日だけ休みが出来たので久々にはいつてみたら・・・

PV10万超えている・・・（；。□）ナン！（；。□

）。（デス！！）（；。□）。（トー！！

これは上げるしかないとかんばっています少々短いかもしれませんが  
がお許しを

色々仕事中書き方などを勉強したので少しは良い文になっているか  
と・・・

## 十八話

暑い・・・マミー体がとけるようだよ・・・

どうも冒頭から失礼いたしました

リユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッドリーです  
いやー時がたつのが早いこと早いこと

親馬鹿二匹学院襲撃事件（未遂）からはや二ヶ月こっちの月の名前  
前はえつと・・・忘れた

まあ元の世界で6月くらいかな？それくらい経ちましたよ

あの後ギトーの親はわざわざ国境越えて家の親まで謝りに来たよ  
なんでも家の馬鹿がご迷惑をだつて、それでもヴェリエの親はこ  
なかつたがな

その後はギトーも俺のところへ謝りに来たよ顔がトマトのように  
真っ赤だったから

どうちたの？それで誤ってるつもり？

誇り高い貴族なんだから誠意をみせるや

つて馬鹿にしたら逆切れして魔法放つてきたからヘッドバッド決  
めといた

まあどうでもいいので詳しい所はカット、現在俺は学院に長期休  
暇を提出しデイガの背中で

ぶらり砂漠横断の旅をしている最中でありんす

え？なんでそんなことしてるかって？・・・それはじゃのう深ー  
ーい訳があるようなないような

「……ぶつちやけないんだが前日にね我が主ジヨゼフサンマに呼び出されてなあ」

「よくきたなりユーガまあ座れ」

「今日はなんのようだYO、ミーは今日も学院生活エンジョイする予定なんだYO」

「エンジョイだが炎上だか知らんが今日は頼みがあつて呼んだのだ」

「今日はじゃなくて今日もだと思えますYO、はあく真剣ならそれなりに対応しますが？」

「別にそれでよい、俺とお前の仲だかしこまる必要もあるまい」

「まあ楽でいいけどよ、それで？」

椅子に座り内容を聞く

ジヨゼフは例の如く駒をいじりながら答える

「実はな……お前に使者として出向いてほしいのだ」

「……あゝ、OKOKわかたわかた、使者と見せかけてそこを滅ぼしてくりゃいいんだな

それでお相手は？」

「いや、滅ぼさんでいいのだ普通の使者として行け……相手はサ

ハラに住人だ」

「あゝ・・・だから俺ね・・・つまりあれ？エルフと貿易でも始めようってこと？」

「お前は話が早くて助かるな、そうだ、俺は気付いたのだこの国をよりよくするためには

エルフと手を組むことが何よりだと」

「一応理由だけは聞いたときましようか」

「わざわざ聞かずとも分かっているのだろ？最早まともに我が国と貿易できるのはゲルマニア程度

そのゲルマニアですら最近は勢いはあるものまるでつり合っ  
ておらぬ

国の土台もそこそこできて、そろそろ糞坊主共の言うことなど  
無視できるぐらいにな」

「そんでエルフか・・・まあ俺は賛成するが周りの頭が固い連中は  
どうなんだ？」

「俺とシャルルで話し合い決めたことだ半々と言ったところだが  
・・・まあ問題はない

それでお主の領土が筆頭で貿易を進めてほしいのだ丁度サハラ  
と隣合わせだからな」

「まあゆくゆくは勝手に俺がやるつもりだったし丁度いいか、ん  
で？いつ行けばいい？」

「明日」

ジョゼフの返答にリユーガはポカンと表情を変えた

「……いささか急すぎませんか？国王陛下殿」

「善は急げだ、ほれ資金だ」

そう言いジョゼフは足元から袋を取り出し机の上に乗せる  
ズシリと重いことからかなりの量である

「……御幾らでせうか？」

「ざっと1000エキューだ」

「……多すぎませんか？一応こっちでもそれなりに準備を  
進めていたんですが」

「まあ足しにでもしておけ、国からの金だせいぜい向こうになめ  
られんようにな」

「オーライ」

リユーガは袋を持ち退出しようとする

そして扉は先に開かれなかにシャルルが入ってくる

「もう話は終わったのかい？」

「そいつはこっちのやることをすぐに理解してくれるのでな、話  
はほぼ無用だ」

「良き成果をご期待下さい、なぐにのんびりチェスでもおやりになつていればすぐでしょう」

そう言いながらリユーガはシャルルと入れ違いで部屋を出る  
シャルルはジョゼフの前に座り駒を並べ始め  
ポーンを動かした

「ホントによく動いてくれるよね、あの強さに加え政治的知識も持ち合わせているんだから」

「確かに、な・・・さらにカリスマ性もありどこか人を引き付ける」

ジョゼフも駒を並べ兵を動かす  
しかし台の外に異質な黒色の駒がある

「兄さん、その駒はなんだい？」

「これか？ああ作らせたんだ、シャルルよりリユーガがもしチェスの駒の一つだとしたら

お前はなんだと思う？」

「やっぱりクイーンかな？男だけれど」

2人は会話をしつつも淡々と駒を進めて行く

「俺も最初はそう思ったが、やはり違うと思うのだ」

「？それじゃ兄さんはなんだと思うんだい？」

「そこで、これだよ」



「え？ちよつと兄さん？」

ジョゼフはゲームの中盤いきなり外にあつた異質の駒を動かしてシャルルの白のクイーンを倒す

「台の外から全てを見渡し、全てに介入できる神のような駒しかどこか人間味を帯びている故にこれだ」

「・・・卑怯じゃないかい？」

「はッ！シャルルよお前もリユーガのような駒を見つけてみる」

「もう見つかりっこないよ」

ジョゼフは異質の駒で白のキングを倒して紅茶を啜る

異質の駒はドラゴンのような形でシャルルをその恐ろしい両眼で見つめる

まるで人間を馬鹿にしたように

所変わり砂漠

まばゆい太陽がリユーガ達の真上からじりじりと照らし続けている中

リユーガが砂漠に入り3時間は経過しただろうか

「だぁー暑い」

「なんで魔族の頂点である我が・・・ブツブツ」

「ブツブツうっせーぞラーク、そこらの岩で焼き鳥にしてくっちまうぞ!」

ちなみに今回ティガの背中に乗っているためラークは荷物持ちである

リユーガはエルフとの交渉材料として二つの物を用意したのだ  
一つは数は10つとほどのある物で既にハーク領とフラン領には設置したため込んでいる

もう一つはコルベール先生に急ぎで作ってもらったある物品

(まあこの二つで十分だと思いがいざとなったら虚無情報でも与えてやりやいいか)

「ハーク殿、一体これはなんですか?」

「あ?」

問いかけてきたのは同じくティガの背中に乗っている他二名の内の女性

ジャネットであるもう一人ドウドウが乗ってはいるが暑さで同じく頂垂れている

この2人は元素の兄弟と呼ばれる北花壇騎士の団員たちだ

「かった苦しいからリユーガでいって

これねえーつと魔法をつかわずに・・・ん?」

「どうかしましたの?」

「めんどくさ……」

「……？」

突如リユーガは説明を止め徐に杖を取り出し

呪文を唱えリユーガの手には黒炎の槍

そしてリユーガが軽く放るとものすごいスピードで前方に飛んでいき

黒い火柱が上がるすると、ティガが何かに反応する様にスピードを速めた

そして火柱によって抉られた場所には丸焼の鮫のようなものが10匹ほど横たわっていた

ティガは丁度よく丸焼きにされた鮫を貪り始める

「……なんだいこれ？」

「確か……サンドシャークだったかな砂漠にすむサメだよ

ジヨゼフから貰った砂漠の生物に書いてあった

こいらの一番うっとうしいのは向こうが出るまで気付かないってこと」

「ならどうして分かったんですの？」

「ちらっと見えた」

「……冗談だろ？」

ドウドウが聞き返すのにも無理はない

なぜならここまで軽く見積もっても1000メートル以上約1キ

口ほど距離があるのだ

「君も体を強化してるのかい？」

「生まれてこの方ナチュラル100%だが？」

「……君と戦いたくなってきたな……」

「ちよつとお兄様？」

ドウドウーは獲物を見るかのように目を光らせ

リユーガに殺気を送るがリユーガにとっては心地いいものである

「いつでも相手してやるっど……言いたいところだが今は任務中だ  
やり合いたきゃ帰ってからな」

「ちえツ、ちよつとぐらいいいじゃんかよ……」

「お兄様？あまりふざけたことを言わないでくださいな  
一応私たちはこの人の護衛任務なんですよ」

「あ？そんな任務だったの？誰から？」

「そりゃ僕らのクライアントからだよ、いや言い方が悪いか？  
団長様からだよ」

「あーとイザベラか、別にいらねえのに（ボン）」

「ま！そんなわけでエルフが来ても追っ払ってやるよ」

「交渉相手追っ払ってどーすんだおめえ！」

そんな感じにうだうだ話しているとふと暑さが消える  
そして視界に集落のようなものが見え始める

「おおーやつぱエルフの技術すげえーな  
暑さが全然なくなっただぞ」

リユーガは周りを見わたす  
すると所々に機械のようなものが置いてあり  
それで暑さを遮断しているのかなと考えたりし始めた  
集落に進んで行くと何人か気配を感じその方向を見つめると  
前方から5つほど殺気が飛んでくる  
そして現れたエルフの中一人が片手を上げ叫ぶ

「何をしに来た蛮人！！即刻この場から立ち去れ！！さもないと  
．  
．  
．」

「まあまあ、そうギリギリしやさんな」

「くくくく！？」  
「くくく」

リユーガは300メートルほど離れたエルフ御一行の叫んでいた一  
人の肩をポンポン

叩きながら言葉を発する

エルフたちはおるか横にいた2人までも驚愕している

リユーガははなれた場所へ瞬間移動したかのように現れたのだから  
仕方ないと言えよう

「別にとって食おうってわけじゃない、唯話し合いをしに来ただ

「けだ」

「黙れ！！貴様ら蛮人などと話すことはない！！」

「エルフ御一行は距離をとり先住魔法を唱えようとするがリユーガが発した強烈な殺気によつて一斉に口を止めるそして一人のエルフの前に杖と刀を放り投げる」

「……何の真似だ」

「戦いに来たんじゃないのでな、こんなものいらんだろ？」

「おい！お前らも杖捨てな！！」

「2人は渋々杖をエルフたちの前に投げる  
エルフは杖を拾い、リユーガへと話しかける」

「何の用だ蛮人」

「とりあえず蛮人やめようか、別に俺がお前らになんかしたわけじゃないだろ？」

「そんな言われ方だと俺のガラスのハートに罅が入りそうだからよ」

「……私はエルフの戦士ウィルだ」

「俺はリユーガよろしく、それでウィル」

「俺はガリアの使者として来たんだけど……あー……なあ  
とりあえずお前らさ、うつとうしいから警戒態勢やめようぜ」

「戦闘の意味はないんだからさ、お前らだって戦いたくないだろ？」

「すまないな、私は少し変わっているが他の者は悪魔の使徒を良くは思っていないので」

「ちなみにブリミル教徒じゃないから、俺

なんなら踏み絵でもやってやるうか？ブリミル像ぐちゃぐちゃにしてやんよ」

「……おい、お前らいいだろ武器も持っていないんだ」

ウイルの掛け声にエルフ達は少し警戒を緩める

しかしその瞬間リユーガは一瞬だけ消え

ウイルの背後へと立つ

「まあ……ね……50点ってところかな」

「……!?!?」「」「」

リユーガの手にはエルフたちの帽子を全て手に持ちなお且つ

ウイルの肩に手を置いている

「……何の真似だ」

「こつちが頑なに戦闘の意思がないつつつてもろくに体調べずに警戒といちゃだめでしょ？」

もし俺がナイフ一本でも持っていりゃ全員首ポーンだよ？お前さん以外」

背後に立っているリユーガだが

リユーガの腹にはナイフの先端がピタリとついている

「それもそうだな、しかし殺気がなかったものでな、こいつらも油断したんだろ」

「殺気を出さぬ暗殺者なんかごまんといえるんだが・・・まあそれでも抵抗できたことに

+20点上げよう」

リユーガは帽子をふわりとエルフたちに返し身をひるがえしウィルの前に立つ

「それでは改めて、失礼を許されよ

我が名はリユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラツドリー

今回はガリアの使者としてエルフの皆さま方と良き関係を結ぶためこの地に訪れました

そのためのささやかな贈り物もございます

どうか我らの話しを聞いていただけぬか？」

いきなり豹変したリユーガの対応に兄弟の2人とエルフたちはポカんと

口を開けるがウィルだけは少し悩み言葉を出す

「蛮人の中には我らと貿易する者もいるが・・・国から来るのは初めてだな・・・

私の一存では決めかねん、が私はその話聞こう

そして首都ネフテスの長に使いを出そう、それで構わぬか？」

「そこまでしていただければ結構でございます、と

あーこの話し方めんどいからやめていい？」



そしてこの落ち方、元素兄弟の2人が小さく笑うと  
それにつられエルフたちも先ほどの緊張感などどこぞへとそれぞ  
れに微笑を浮かべる

「貴殿は変わっているな、かまわんさ

ここはエルフの中の5集落の一つインダス、技術ならば首都ネ  
フテスにも引けを取らぬ

それで贈り物とはその積み荷のことか？」

「そうだ、まあ一つくらいな上げてもいいがほしいか？」

「私も向こうの技術には興味があった、できれば一つ頂戴したい  
な」

「構わんさ、おいラーク」

「お前は我をナンダトおもっているのだ」

「使い勝手のいい鳥、あー文句なら後で聞くからはよ降りてこい」

ラークは渋々とリユーガの下へ降り立つとウィルが啞然としなが  
ら質問してくる

「すばらしい鳥だな・・・こんな大きさ見たことないぞ」

「まあこいつが異常なだけ

それよりほれ」

リユーガがラークの背にくくりつけてある板を一つウィルに差し

出す

「なんでお前はこんなもの軽々と持てるんだ・・・おい！」

エルフが三人がかりで板を受け取ると  
ウィルがマジマジとその板を見つめる

「これは・・・」「ああ、それな」・・・いや言わなくていい！自分でこれの使い方を見つけるのも

楽しみの内だ・・・」

「さいですか・・・それより今日はもう日が暮れそうだからよ、泊めてもらっていいか？」

しかしリユーガの問いにウィルは答ええない  
板を見つめながら自分の世界へと入ってしまったようだ  
代わりに横にいた背の大きいエルフが答える

「すまん、あの人はどうも興味の持った物を見ると自分の世界に入ってしまう」

まあ他の者たちからは遺憾の目で見られるだろうがそれでかまわんなら我が家に招待しよう

おれはコザード、貴殿の戦い方に少し興味があるし」

「ああそれで構わんぞ、もう片方は・・・まあお前が興味あるならな」

そう言い2人は握手をする

そしてウィルは一人板のことで唸り続けていたとさ



## 十八話（後書き）

どうでしたか？

書き方を変えてみたんですが・・・良かったですかね？

中途半端なところで切ってしまいました。今回はここまでと

今後もこのように時間があれば上げて行きたいと思いますが・・・

あまり期待はしないでください！！

それでも7月1日には前のような投稿スピードに戻せると思いますので

待つてやんよ！と言う方はお待ちください

ちよくちよくと全話もこのような書き方に直そうとも考えているので

7月1日には全部見直した方がいいかも？

最後にここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、意見、指摘をお待ちしております

## 十九話（前書き）

皆様とりあえずこれを見てほしい、私はあー今日は良い日だった  
そうだ久々に上げたことだしアクセス履歴でも見て寝ようと思いい見  
たのだが

これはユニークの記録

5 / 1 . 7 6    5 / 2 . 7 6    5 / 3 . 6 5

ここまでは何らおかしくはないだが

5 / 4 . 1 2 9 4

（ ; □ ） ° °

□あけて10分ほど固まってしまいましたよ

そんなわけで徹夜で一本書きました

もうね、あの連載一時中断とか失礼な気がしてきた

そんなわけで毎日更新に戻るのは7月1日からですが  
その間もちょくちょく上げさせていただきます

## 十九話

う・う・うん・．．．ここは？知らない天井だな．．．

はい、すみません一度やってみただけです

どうも皆様リユーガ・F・ド・S・H・ブラッドリーです  
フラン シュヴァム主ク

快適な起床を迎えた俺はすこぶる上機嫌です

昨日はそのままコザートの家にやっかいになりました

しかし、あれですねエルフマジパねエ

だって信じられますか？洗濯機あるんですよ洗濯機！！

なんでも風石と水石を用いたものらしいんですけど、ああこれを

俺の領土に取り入れたい

そうそう俺が持ってきた板、なんだかわかる？

ちなみに現在目の前にウイルが目の下に大きな隈作って正座して

ることから分らなかったんだね

ざまあ、未来の技術なめんなよ、ここじゃ俺の知識はドラえもん

並みだからなマジで

「それで？結局分からなかったと」

「．．．グッ！．．．一体何なのだこれは！魔力でもないし我らの知る科学とも違う」

「ちなみにな、どれだけ頑張ってもお前さんの努力は無駄だったんだよ」

「なんだと!?!」

「これは時間が関係してるんだよ」

「時間だと?」

「ちよつと来てみ」

そう言いリユーガは板をもちあげ外に出る

ウィルは何をするつもりなのか好奇心により目を光らせていたが  
リユーガは唯板を置いただけ

「それでどうするのだ?」

「これで終わり」

「は?」

リユーガの問いにウィルは素っ頓狂な声を上げてしまう

「これが何だと言つうのだ?」

「こつち来てみんしゃい、はい、ここに触って」

「……?……のわッ!」

「分かつた?」

「ま……まさか、これは電気か!?!……微弱とはいえ電気を生

み出せるとは……

風のマジックアイテム？……いや魔力は感じられなかった……  
ブツブツ」

「あゝららまた自分の世界にはいつちやった……ん？」

リユーガが視線を向けるとそこにはポカンと人が立っていた  
元素の兄弟のジャネットである

「……驚いた……ねえリユーガさんそれがそのアイテムの使い  
方なの？」

電気なんて風のスクウェアのものなのよ」

「これはな、光から電気を生み出してるんだ」

「光からだ？一体どういう原理だ！！」

「ちょ！近いつてウィル」

リユーガが軽く説明するとウィルが攻めよってくる  
ウィルを落ち着かせそしてリユーガは再度口を開く

「まあ詳細は省かせてもらっけど……分かりやすく言うとな  
まず今もじりじりと太陽光がさしているよな、そこで問題  
ジャネット光を使うと何ができる？」

「え？……一つにまとめるとそれなりの熱量になると思っわ」

「それはなんでだと思っ？」



「それは・・・難しいことは分らないわ」

「私が答えよう、光の熱は微弱だが集めれば大きくなる、そんな感じであるっ？」

だが熱量と電気になんの関係があるのだ？」

「ある言っちゃあるけどこれはそこまで関係してない  
でもこれを理解するには順番が必要だ、まず光には様々なエネルギーがある

代表を上げるなら熱だ、その他にも・・・」

遠まわしにリユーガが熱量やら電子やらを説明していくと

ウィルはなるほどと理解はしていたがジャネットの頭の上には？  
マークが浮かんでいる

大体説明が終わるとウィルは一つ質問をしてきた

「生み出せるのは分ったがしかし生み出した電気を貯める術がないではないか」

「なめちゃいけやせんよ、このあたりはあんた等の専売特許ですよ？」

「どつ言つことだ？」

「エルフは確か精霊を一か所に圧縮することで火石や風石をつくれるでしょ？」

「・・・そうか！つまり生み出した電気を圧縮するわけだな」

「その通り！それで出来上がったものがこちらその名も雷石」

リユーガは懐から手のひらにギリギリ乗るぐらいの大きさの石を取り出す

しかしその石は透き通っており中ではまばゆい稲光のようなものが常に動き回っている

「こ、これほど高密度に精霊を圧縮するとは・・・」

「え、と・・・ウィルさん？これってどれくらいすごいのか？」

「見せてやるのか？」

「「え？」」

リユーガは手に持った雷石を高く放り上げ

杖を構え呪文を唱えるふりをする実際使う魔法は破壊の魔法

唯の系統魔法ではあれには傷をつけることすらできないからなるべく火系統と思わせるべく

爆発を起こすと、雷石に罫が入りそこから光が溢れだす

咄嗟にリユーガはあらかじめ持っていた金属の棒を遠くへ投げると光は棒へと一直線に飛んでいき

金属の棒が一瞬で溶けた

「どうよ（キリッ）」

「・・・何も言葉がでないな・・・」

「まっただくだわ」

「それより一つ疑問なんだが、リユーガ、君はどうやって精霊を圧縮したんだ？」

「どうやって、と言われても・・・うーん、生み出された精霊にここに集まらって命令しただけだし」

「・・・すまない、私にはリユーガが精霊の姿が見えるように聞こえるのだが？」

「見えるけど？」

「「ッ!?!」」

その言葉に2人が驚愕する

しかしリユーガは何故驚いているのだろうと首をかしげるが頭の中に流れてきた声によってリユーガも焦る

(馬鹿者が、あれは私の力だと言ったことを忘れたか)

ポクポクチーン

リユーガマツハで後悔ちゆう

「わ、我らエルフでも感じることでしかできぬのに何故見えるのだ  
!?!」

「あー・・・えーと、驚かない？」

「今さら何に驚くって言うのかしら？」

「そんじゃ、ネロ」

徐にリユーガは片腕を前に出す、すると

「はあ、お主は少しは考えてものを喋ったらっとうだ？」

「……なにこれ」

「水の精霊」

「水の精霊ってラグドリアン湖の？……あなたって……」

「どこまで規格外なんだ……他にはないだろうな？」

最早突っ込む気力がなくなる2人

ウィルも半分やけくそ気味で聞いたのだが

「あと私は1段階の変身と4つの能力を持っている(ドヤア」

「いやドヤアじゃなくて、言っていいのか？」

「もういんじゃないね？ここまで来てなんだし」

「……どんだけえ」

流行に乗り遅れている言葉を放つ2人

その後リユーガは自分の所有する魔人化や現世魔法

ミヨズとヴィンの能力に加えデュナミス異能力についても話した

話してしまった後で先ほどカモフラージュした意味ないなと思い始めるリユーガであった



## 十九話（後書き）

ちよつと短めですが

改めて主人公の規格外ツプリを表現してみたつもりです・・・

次投稿は・・・未定です

正直徹夜きつすぎる

## 二十話（前書き）

感想が・・・私に力をくれる!!!

はい、初っ端から意味不明なことを口走る駄文な作者です

やはり見知らぬ人の意見、指摘は参考になると思います

そんなわけで指摘道理今までのやつを修正し見やすくしたのですが・  
・

どうでしょうか？

徹夜覚悟だったんですが思いのほか早く修正作業が終わったので

一本上げたいと思います

あまった缶コーヒーやドリンク・・・どうしよう・・・

## 二十話

太陽の日差しが心地いほどに感じられる、午前・・・  
ほら・・・見て御覧、水辺に可愛い可愛い水龍たちがその綺麗な瞳  
で・・・瞳で・・・



牙を向けながらその獰猛な瞳で睨んでくるよ……

「ちょ……リユーガ……大丈夫なのかい？」

「きききき、君！！ほら早くなんとかしたまえ！！」

「おい、蛮人……大丈夫なのか？」

「あーもう……うつつうしいな！離れるステイル！ギーシュ！  
ついでにビダーシャル、次蛮人ついたらキレルからな」

まわりついてくるギーシュとステイルを引きはがし  
ビダーシャルに軽い殺気を向ける

ちなみになぜこうなっているのかと言うと

デーン！！……（ムキムキ神拳使いのアニメの効果音）

はい、初っ端から意味不明ですね、リユーガ・F・ド・S・H・  
ブラッドリーです  
フラン シュヴァア从士ク

俺がエルフの村については1ヶ月ちょい

ここの村は最初こそ俺達を嫌な目で見ていたが1ヶ月もいればそ

ここまで視線を向けられなくなっており

ちなみにウイルがネフテスへと送った使者はそのままとんぼ返りしてきたんだよ

今はそれどころじゃないって、なんでも海の水龍たちがエルフを襲いだしたんだとか

その対応に困ってるらしい

しょうがないので俺は一旦ガリアに帰り状況報告したら

ジョゼフは

「お前が解決すればいいだろ？」

と言い一刀両断、しかし、そんなことネフテスの評議員が許すはずもなく

問題解決するまで待つておれ！！って釘までさしてきやがった

お目付役としてビダーシャルが来たんだが・・・まあ原作ではそこまで嫌いじゃなかったが

気を許してないのか肩に力入れてギスギスしてるもんだからやりにくいったらありゃしない

仕方がないので、3日に一度学園に行き、帰りに王宮に寄り

それ以外ではインダスでネフテスの報告待ちとワーカーホリック状態ですよ

トウライ・・・まあそれでも学院が夏季休暇、つまり夏休みに入ってくれたから

往復しないで楽ちんだ・・・おまけが2人ついてきたけど・・・いや？連れてきたかな？

「なあ……リユーガ、君はいつもどこに行っているんだい？」

「そうだぞ、それに前前から頼んでいる僕らの魔法を見てくれる約束どうなったんだ？」

夏季休暇前日、この日が終われば長期休暇に入るのでリユーガは往復しないで済むと

気分よく教室に来ており、周りにはもうすっかり夏休み前の浮かれた学生の雰囲気なんだが

この赤髪と金髪はリユーガの周りですっと抗議している  
リユーガが休みの申請を出してからはちよくちよく学校に来るたびこうなのであるから

流石のリユーガもこめかみがピクピク動いている  
いい加減うつつとうしくなったのかリユーガは2人の襟首をつかみ教室の外へと出て行った

「そんなに知りたいか？そんなに稽古付けてほしいか？そんなに俺の睡眠時間を取りたいか？」

「ああ？だつたらお前らもついてこいや！！！」

「え……ちょ……どこに行くつもりだい？」

「楽しいところ」

「は？……ちょ……何だいこの馬鹿デカイ鳥は！！！」

2人を引きずりながらリユーガは中庭に出て行くとそこには焼いた豚肉を頬張る黒い鳥

ラークがいた

「何だ？もう終わったのか？」

「「なツ！？・・・鳥がしゃべった！？」」

「俺にそんな物関係ない、行くぞ」

リユーガは2人の襟首を掴んだままラークの背に乗るとラークは空高く飛び上がり

そこらの風龍とはダンチのスピードで空を駆けて行く

リユーガに連れてこられた2人は状況を把握できぬまま唾然とすることしかできなく

おまけにリユーガが眠りについてしまったので聞く相手もない  
そして30分ほど空を飛んどいると、次第に周りの気温が高くなってくる

そしてステイルが何かに気づき背に冷や汗が伝う

「・・・なあ・・・ギーシュ・・・もしかして」

震えた声でギーシュに問いかけるステイル

しかしギーシュは乗ったこともないようなスピードで空をかけているので

気温が高くなっていることに気づかず空の旅を満喫している

「どうしたんだい？もしかしてステイル・・・高いとこだめなのかい？」

「そんなじゃない・・・聞いてくれ・・・もしかして僕達・・・」

そこまで言うとなラクが徐に高度を下げる  
今まで青い空いっぱい視界がどんどん熱気で揺らめく世界へと  
変わる

そこでギーシュも気付いたようで先ほどのハイテンションから  
一気に気分がすぐれなくなる、そして2人の視界には広大な砂が  
覆う世界

そして不意に暑さがなくなったと思うと目に入ってくるのは一つ  
の村

「ここ・・・サハラじゃ・・・」

「んあ？・・・ついたかラク」

「いつも人の背中で眠りこけよって・・・その2人に説明しな  
くていいのか？」

「ああ悪い悪・・・」「リユーガ!!!」「・・・おわッ!!!なん  
だよ？」

「信じたくはないが答えてくれ!!!ここはもしかして・・・」

「ああサハラ砂漠、エルフの一つの村インダスだ」

淡泊に言い張ったリユーガの言葉で2人は一気に青ざめ  
硬直し動かなくなってしまった

「何だこいつら？・・・まあいいか、ラク、いつも道理コザート  
の所に行ってくれ」

「分かっている」

そしてラークが村の丁度真ん中に位置する家に降り立つと同時に  
2人が機械のように首を動かしながら周りを見渡すと  
耳の長い男が近寄ってくる

「リユーガ！今日は早かったじゃないか！

さあ今朝の続き教えてくれ・・・よ？・・・何だそいつら？」

「ああこいつらな、俺の・・・ん？・・・おい」

リユーガは2人の目の前で手を振る

しかし2人は白目をむいておりそのままボタンと倒れた  
それを見たコザートが

「なんで気絶してんだこいつら？」

「さあ？」

リユーガも訳が分からずそう返すしかなかった

その後2人はコザートの家で寝かされ目が覚めるとエルフが目に  
入り気絶

その行動を5回ほど繰り返すとリユーガに泣きながらすり寄って  
3日くらい

そばを離れなかった

とまあ、そんなことがあったわけだ

ちなみにあいつらが慣れるまで1週間かかったから大変だったよ  
エルフ見るたびに奇声上げて走り回るんだから

なれてきたあたりからコザートと一緒に2人の修行つけてやったんだけど

この2人軍人家系だからかやけに伸びがいいんだよ  
おかげで2人はトライアングルの上くらいまで成長してなお且つ  
ステイルにはネタ技教えちまった・・・反省はしているだが後悔  
はしていない・・・

こんな感じであいつらがいるわけは分ったと思う  
こんどは何故冒頭のようなことが起こったかを話そう

2人が住みはじめて2週間

最初こそは怖がっていたものの今は冗談を言い合えるほど急成長  
していた

2人を鍛えつつネフテスの返事待ちの俺はいい加減ビダーシャル  
のギスギスした感じが

うつつうしく感じてきた・・・ん？・・・なぜかって？  
だって！！！！あいつ便所にまで監視してくるんだぜ！！

村にいる間常に一定距離保ってこつちがん見してくるからいい加  
減うつつうしくなつて

こつちから話しかけたら無視、シカト決めこむもんだから  
俺はビダーシャルの熱視線を逃れるべく

村の奴に海の場合を聞いて訪れたと言うわけだよ

最初はビダーシャルも止めてきたが逆にシカト返しして海まで来  
たら・・・

まあ、綺麗な瞳が一杯だわ・・・ってなつたわけよ  
そして冒頭に戻る

「それはすまないが・・・それで？勝手にここまで来てどうする  
つもりだ？」

「とり間、こいらなんとかしてほしいんだろ？」

はあくこんな簡単なこと俺に任せりゃよかったのに」

「どう言う意味だ？」

「同じ言つこと」

リユーガが手のひらを水龍に向けると

水龍は顔を近づけてくるそしてリユーガの腕に触れるや、獰猛な瞳は穏やかなものになり

水龍たちは水の中へと帰って行く

3人ははその光景に啞然としながらも、ビダーシャルが問いかける

「……何をした？」

「なんも、唯敵じゃなよおつて言っただけ」

「馬鹿な……我々にすら対話しようとしなかったのだぞ……」

「へーそうなん？……しかしありゃこつちに関わってるもんだな……」

「関わってるも……の？」

リユーガの意味深な言葉に反応するビダーシャルだが

突如海から巨大な水柱が立ちあがり疑問形になってしまう

水柱が落ちると4人は頭から水をかぶり水浸しになってしまう

そして水柱の中から現れたのは巨大な黒い魚

「ドウゾクノカンジガシタカラデテキタガ……オマエカ？」



「はあく、水龍に触れた時になんともなく予想していたが・・・光鳥の次はデメエか・・・」

「ドルーブ」

海の戦い(2)へ続く!!

## 二十話（後書き）

すみません中途半端なところで切ってしまい

先が気になる方もいらっしやるかと思えますがすみません

長くなりそうだから二つに分けました

次投稿はなるべくはやくするつもりです・ほんと・多分・

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

感想、指摘、意見をくださった ケンタロー様、読専様、魔神13

様、junq様

横目非英様、誠にありがとうございます

駄文な作者、心よりお礼申し上げます

二十一話（前書き）

このような駄文を見てくださっただけではなく  
感想までくれた御方  
駄文な作者より心より感謝を

## 二十一話

「シテ、ドウゾクヨ、ナニユエワレノナワバリエトオトズレタ  
バアイニヨツテハキサマヲ・・・」

「・・・こいつも7魔頂点主義の馬鹿かよ・・・しかしこの姿・・・  
おっと!!」

リユーガがそう言葉を発すると

怪魚の口から火球が放たれる

ちなみに7魔頂点主義とは7魔は神であり絶対であると言う  
魔族の1/5が崇拜しているもののである

ちなみにラークも元はそうであった

リユーガは火球を軽くはじくとドループを見つめた

「・・・・・・・・ほ・・・・・・・・これはまた・・・」

リユーガは何かに気づいたのか一人で勝手に納得していると  
横から耳障りな声で突っ込まれる

「なあリユーガ!!早くこいつ何とかしてくれよ!!」

「そ、そうだ!あの力を使えばたやすいんだろ!?!」

「・・・・・・・・」

ギーシュとステイルが必死にリユーガを動かそうと頑張ると

リユーガはあることを思いつき凶悪な笑みを浮かべながら  
2人の背中を押しドループの前へと立たせる  
2人は一瞬哑然とし声を出さずドループと目が合うと  
数秒沈黙が流れる

「……………」

「ナンドコイツラハ、ワレヘノクモツカ？」

「馬鹿いうなよおちびちゃん、おいギーシュ！ステイル！お前ら  
喜べ、特訓の成果を見せる時が来たぞ！」

そうリユーガが2人に言葉を発すると

2人はお互いの眼を見合わせ、そして目の前の怪魚をみる  
またも数秒の沈黙

そして2人は涙目でリユーガへと同じ言葉を叫ぶ

「勝てるわけないだろ！！！！」

しかしそう言ったものすでにリユーガの姿はない  
いつの間にかビダーシャルと共にラークの背中に乗りはるか上空  
から不敵に笑っている

横にいたビダーシャルは呆れ顔だ

「まあお前ら頑張れ、この俺が鍛えたんだ2人なら勝てるぞー」

「じよ、冗談はやめてくれリユーガ！！こ、こんなでかいやつに

勝てるわけが・・・おわああああ!!」

リユーガの言葉に答える前に目の前から火球が飛んでくる

2人は必死に逃げ回るが、打ち出される火球の多さに目を回している

それを見つめつつも笑みを絶やさないリユーガ、それに疑問を持ったビダーシャルが

リユーガへと問いかける

「なぜあんなことをやらせたのだ？」

「あん？ビダーシャルよお前ほどのやり手が何も思わないのか？」

「・・・？」

リユーガがそういつたがビダーシャルは意味がわからず首をひねるばかり

リユーガは火球を必死でよけ続ける2人を笑いながらも指をむけビダーシャルに言葉を発する

「よく見てみな、あいつから放たれている火球を」

「何をよく見ると・・・」

そういつつもビダーシャルは逃げ回る二人を見つめる  
そしてビダーシャルは少し違和感を感じた  
ドループより放たれる火球がビダーシャルの目には少し変に見える  
のだ

「・・・何か・・・変だな・・・しかし・・・」

「知りたいか？」

「うん・・・少し癪だが教えてくれ」

ビダーシャルは諦めリユーガに答えを求める

しかしリユーガはさらに笑みを大きくし

ビダーシャルの背後へと回る、何をしているのかとビダーシャル  
は疑問に思ったが

すでに遅かった、ビダーシャルは不意に持ち上がる胃に吐き気を  
感じつつ

視界が落下していくのがわかる

そう、リユーガによってラークの背中から落とされたのだ

ビダーシャルはなんとか精霊の力を借り緩やかに着地するとリユ  
ーガへと怒りをこめ叫ぶ

「何をする貴様！！いきなり落とすな！！・・・チィ！！」

「お前なら戦ってりゃそのうち気づくだろっよ！まあその2人と協力しな！！」

「言ってくれろ・・・」

しかしビダーシャルも表情に出さぬが火球を避けつつ、若干焦っていた

ビダーシャルは1人で成人の竜と戦えるほどの力を持つてはいるが豊富な戦闘経験の中でも火を噴く魚と対峙したことなどあるわけもなく

加えてあの大きさだ、ビダーシャルの今まで対峙した最大の生物は突然変異の成人の火竜

大きさは10メートルほどつまりラクとより少し小さいと言った大きさ、火竜の中では最大級といってもいいが

しかしそれでも目の前の怪魚は全体は見えぬものの軽く3倍はある小さめのビルが横たわっているようなものだ、ビダーシャルが焦るのも無理はないといえよう

そんなビダーシャルの焦りに気づいてわいるものの、まるで手を貸そうとせず上空で必死に避ける

3人を眺めながら笑みを浮かべ笑っているリユーガ  
ビダーシャルは不快な笑え声が聞こえるたびに段々と苛立ってくる

「あの外道め・・・(ボソ)」

自分にしか聞こえぬほど小さくつぶやいたビダーシャルだが  
上空から声が聞こえるので耳を傾けると



「誰が外道だつて？・・・つーかその目え回してる2人！いい加減気づけ！！」

「・・・何を・・・言っているんだ・・・あいつは・・・」

ビダーシャルはもはや怒りでうまく喋れなくなりつつも

立ち止まり言葉を紡ぐ当然立ち止まったビダーシャルに火球が降り注ぐが

火球はビダーシャルにあたる直前でその向きを変える

「いい・・・加減鬱陶しいぞ・・・くらえ！！！！」

「ナツ！！・・・クソツ！！」

ビダーシャルが手のひらを前に突き出しそう叫ぶと空気がゆがみ薄い壁のようなものが怪魚へと迫る

怪魚はその巨体からは考えられぬスピードで避けるが、先ほどまでいた怪魚がいた場所が

衝撃を受け巨大な水柱をあげる

「・・・どここのゼルエルだよ・・・反則だなあのカウンタ  
ーは」

リユーガは誰に聞こえるわけでもなく小さくつぶやく  
ビダーシャルは精霊と契約しカウンターを使い自分へとカウンタ  
ーを放ち

何度も往復させ威力を高め放ったのだ

「……?」

ビダーシャルは怪魚の動き、そして水柱を見て首をかしげる  
怪魚の動きは明らかに物理法則を無視したかのような動きだった  
のでおかしいといえばおかしいのだが

なにより自分が放った衝撃を見て疑問に思った

確かに威力は高いのだが、それを踏まえても明らかにおかしいのだ  
ビダーシャルの放ったものはここまで水柱を高く上げるほどの威  
力ではない

そしてビダーシャルは気づいたのか動きを止め笑い出した

「ククツ……ハツハハハハハ!!……そういうことなら先に  
言わんか!」

額に青筋を浮かべながら上空に指をさす

するとリユーガはぱちぱちと手を叩きながら言葉を発する

「ハハハ、まあお前は合格だビダーシャル、ほれフライ!」

そしてビダーシャルは浮き上がりラークの背に乗るとリユーガの頭をはいた

スパアアンっという音が鳴るとリユーガは頭を抱える

「貴様！！流石の私も肝を冷やしたぞ！あんな見た目のやつの前に放り出すなんて！！」

「いつてえな・・・でも種がわかりやなんてこた、ねえだろ？」

「確かに、これで違和感の正体がわかった・・・しかしあいつらは気づくのか？」

「俺が鍛えてやったんだ、気づかなきゃ永遠と逃げ回るだけだ、  
とは言ったものの

ギーシュはともかくスタイルはちときついな？」

「なぜだ？」

「あの怪魚はドールブって言うだが、あいつに火の類は一定以下は一切効かないからな

まがいなりに火の最強魔族だけあって、な」

「魔族？何を言っているかは知らんがあれはつまり……」

そこでビダーシャルは自分の考えをリユーガに言うと  
リユーガは少し驚き、ビダーシャルを褒める

「流石だなそこまで分かったか……大方それであっているよ……  
おっと

そろそろ反撃するか？」

「まあ色々お前に聞きたいこともあるが……  
まともな人間がどれほどのやり手か私も少し興味があるので見  
させてもらっかな」

ビダーシャルがそう言うとリユーガは眉をひそめる

「なに？その俺がまともじゃないみたいな……」まともじゃない  
いんだろ？」「……」

「何を言っている、まがいなりに私は1ヶ月お前を監視してい  
ただぞ？」

その間一切隙がなかったお前がまともなわけがないだろう」

「もうやめて、俺のライフはゼロよ」

そんなふざけたことを言いながらも悪戦苦闘する2人を見つめる

視点変更、ステイル

(くそつたれめ、リユーガのやついきなりこんなのと戦えだなんて無茶言いやがる・・・)

ビダーシャルさんは早々に回収したみたいだけど、ギーシュなんて必死で走り回ってるじゃないか!!)

リユーガに対し悪態をつくステイル

だが比較的冷静なステイルは迫り来る火球を避けつつも精神力をため

杖を向け呪文を放とうとする

「なけなしだがくらえ!!ファイヤーボー・・・ル?」

ステイルがそう叫ぶも手のひらからは何も起こらない

そして目の前の怪魚が不適に笑う

「フハハハ、ムダダ、ワタシノマエデソynaヤスツポイヒガダセルトオモウナヨ!!」

ソラソラ!ヤケテシマエ!!」

「くそっ！どうしてでない！！」

再度放たれる火球を必死に避けつつも怪魚が放った言葉の意味を  
考える

（たしか、安っぽい火つていったな・・・それなら！！）

「ギーシュ！手伝え！錬金で俺の前に酸素を多くしてくれ！！」

「す、ステイル？何を言っているんだい君は！何か口調変わって  
るし・・・いや、そうじゃない

そんなことしたら余計に火が大きくなってしまっじゃないかい  
！」

「一種の賭けだ、俺を信じろ！」

「ええい、どうなっても知らないぞ僕は！錬金！！」

目の前に酸素が多くなり、ステイルは少し頭がスーと冷静になった  
そして杖をしまい両手を軽く上に構え集中する

ステイルの手には赤い指なし手袋それはエルフに作ってもらった  
アイテムで

杖ではないが、魔法を行使できるものだ

そしてステイルはリユーガに教えてもらった技を

「AshToAsh  
灰は灰に・・・」

(もつとだ・・・もつと!!!)

手のひらにこぶし大の火の塊が生み出せれる  
ステイルは火を一乗、二乗と足していく

「DustToDust  
塵は塵に・・・」

(くそツ・・・火が消えそうだ・・・)

しかし生み出された火は次第に弱くなっていく

「ナニヲスルガシランガ・・・ヤラセルトオモウナヨ!!!」

怪魚は口から火球を放つ

(空っぽになってもいい!全部搾り出せ!!!)

「吸血殺しの……」

ステイルの精神力が強まりトライアングルと言う壁をこじ開け  
三乗、四乗と足されると手のひらの火は力を取り戻したかのよう  
に大きくなる

そしてステイルは振りかぶり、技名を叫ぶ

「Bloodyy Road 紅十字！……ファイヤークロス！！！」

「ッ！？シマ……」

腕を大きく交差させ炎の十字架が迫り来る火球へと放たれる  
そしてギーシュが錬金した酸素の壁に当たるとさらに大きさをまし  
容易く火球を貫き、高速で怪魚へと迫ると  
ある一点でさらに炎の十字架は大きさを増し、怪魚に直撃する  
それを見たステイルは

（そ、そういう……こと……かよ……）

全てを理解し精神力が尽きたのかその場に倒れこむと  
リユーガに支えられた

「まさか……壁を破るなんてな……しかも俺のネタ技を……  
ボソ」

「はっ！……一応……わかつ……た……ぜ」



そのままステイルは笑顔で迫り来る睡魔へと体を委ねた

(3) に続く!!

## 二十一話（後書き）

書いてしまった・・・また徹夜だ・・・

だが頑張る、次もすぐに上げれたら上げたいと思います

ちなみに名前でお気づきかと思いますがモロ禁書技です

そしてビダールシヤルの放った技はイメージとしてはエヴァ破のゼル

エルのATフィールドの攻撃だと思ってください

## 二十二話

「よくやったな寝てていいぞ、ただしギーシュ、テメエは駄目だ」

「何がさー!!」

「お前しただ錬金しただけじゃねえか」

「しょうがないだろ!? あんなの相手にどうしろって言うのさ!」

リユーガはやれやれと言った感じで  
黒翼を抜き振るう

振るわれた黒翼から強風が吹き荒れ  
ステイルのクロスファイヤーの煙と、ドループを歪ませていたも  
のを取り払う

するとそこには・・・

「大体あんな巨体に・・・え?」

「コウナツタラ、ワガキョタイデフミツブシテクレル!!」

「サアニゲマドエ!!!」

ドループは跳躍しリューガの手前に着地する

「ハハハ、ペシャンコ・・・ダ？」

「色々見栄張りすぎなんだよおめーは！」

「・・・・・・・・膜をはらえばこの程度だったのか・・・」

「リューガ？どう言うことだい？先ほどの怪魚は一体どこへ・・・」

ギーシュは訳が分からないと言わんばかりにあたりを見渡す  
ビダーシャルは拍子抜けと言わんばかりに肩をすくめている  
そしてリューガはギーシュに落胆したかのように肩に手を置き指  
をさす

「あれ」

「？何を言っているんだい、確かに大きな魚だけどあの怪魚の十分の一にも満たないじゃないか」

ギーシュはリユーガの指差すものを見つめる  
指の先には3メートルほどの魚

色形は先ほどの怪魚と酷似してはいるものの先ほどの威厳も減ったくれもないのである

「ワ、ワレノゲンエイヲハラッタノカ!!」

「ほだよ、まさか熱幻影をそんな使い方するバカがいるとは思わなかったがな」

### 魔炎魚ドループ

黒い魚で姿かたちは水生動物のどれか

一番の特徴は生まれた時に喉に火炎袋と言う袋を持っており

ほぼ無尽蔵に火を吐き続けることができる

成体になれば体の至る箇所にも袋が生まれ火を放ち続けることから  
魔炎魚と呼ばれるようになる

そして周りの熱自在に管理下に置くことができ周りのものに火を  
使わせないようにもでき

扱いに慣れた魔炎魚ならば熱で幻影を作ったりもできる

魔炎魚の中でも鮫と鯨一族は火炎袋が進化した皇炎袋を持ち強大  
な炎を放つことから

魔炎魚と言う種類が多い魔族が7魔入りを果たせたが

鮫や鯨以外の魔炎魚はそこまで戦闘能力は高くない

「幻影もできて、鮫の魔炎魚、だがいかんせん出張るのが早すぎ

たな

「戦い方を知らないだろ？」

そしてこの魔炎魚は他の魔族と比べると寿命も長いが  
成長のスピードも遅いのだ

「コ・・コノ、イツカイノマゾクフゼイガ!!」

ドルーブが怒りに声を震わせ口から無数の火球を放つが  
上空から放たれる光によって打ち消される

「やめておけ、お前では勝てんよ」

「コノヒカリ・・・レ、レスブランド!？」

「おーおーいい仕事したなラーク」

「唯のでかい鳥ではないと思ったが・・・この魚と同類か・・・  
なんなのだ先ほどから魔族魔族と・・・」

「この私を唯のでかい鳥とな・・・」

ビダーシャルの言葉に若干へこむラーク

ギーシュは未だに頭がついて行っていないのかクエツションマー  
クを大量生産している

そしてドループがレスブランドに向かって困惑交じりに怒鳴りち  
らした

「レ、レスブランド！オマエナナマトシテハズカシクナイノカ！  
ソノヨウナマゾクニシタガワレオツテ！」

「・・・まあ、魔炎魚よそうがなるなお前が彼奴に微弱の力しか  
感じぬのも無理はない」

「ナンドト？マサカケットウダトイウノカ？

ナラバナオサラダ！ゼイジャクナルモノトノケットウナドニシ  
タガイオツテ！！」

「愚か者が・・・私がやってもいいか？いい加減鬱陶しい」

角に光を蓄えリユーガに問いかけるラーク、しかしリユーガは手  
を振り

「いやいや、ここはギーシュにやらせよう」

「正気か？いくらあの程度と言ってもそいつには無理があるのではないのか？」

「いやさ、ステイルがここまで頑張ったんだし、それに俺がこいつを御遊びで鍛えたんじゃないんだからさ」

まあ同じくらいだと思っわけよ」

そんな感じでリユーガとビダーシャルが自論を言い合っているとようやく頭が追いついたのかギーシュが言葉を発する

「僕にやらせてくれ！ステイルだって一撃当てたんだ僕に出来ないわけがない！！」

「ほれ、本人もこう言ってるんだしさ」

「はあ、まあ良いか、どうなるかと私が仰せつかったのはそちらのリーダーの監視だ」

好きにするがいい」

「よし、頑張れギーシュ、僕らのギーシュ」

「ハイニナルジュンバンハキマツタカ？」



「はっ！自分の姿を偽っていたものが大きく出るじゃないか！！」

ドループの本来の大きさが知れたのか妙に自信あふれるギーシュしかしドループはその言葉でさらに怒る

「ワタシノニガテナソウゾウガツカエヌニンゲンナド、オソルルニタランワ！！」

「僕のワルキューレ達の餌食にして上げるよ！！」

ギーシュが自信があつたのは魚であるドループが陸に上がっているからなのである

いくら火球を出せようがその場から動けぬのであつては

唯的であるからギーシュはもう勝った気で悠長に杖を振るい青銅の女騎士を出現させドループのいた方を見るが、ドループはいない

ギーシュは咄嗟に海の方を見るが海にもそれらしきものはいないそしてドループはあるうことがギーシュの出現させたワルキューレに体を炎で包み体当たりをしていたのだ

一瞬ギーシュはポカンとなり腹から炎を噴き出しながら浮いているドループを見ると

ドループのその獰猛な瞳と目が合い硬直する

そしていつの間にかラクに乗り遙か上空から眺めていたリユーガが声をかける

「ああ、腹にも袋できてたんだ、残念だったなーそいつ浮けるぞ  
」

「そう言うことは先に言ってくれ!!!」

ギーシュが上空にいるリユーガに怒り交じりに叫んでいると  
ドループの方から声をかけられる

ギーシュは錆びた機械のようにギギギと振り返ると  
出したはずの5体のワルキューレがドロドロに溶けている  
ギーシュは力なく笑うと

「コレデオワリカ？バンサクツキタノナラシネ!!!」

「ぎゃああああああああ!!!」

ぶかぶかと浮きながら口から火球を幾重にも放ってくるドループ  
ギーシュは先ほどと同じように奇声を発しながら逃げ回る

「無理ッ！無理ッ！リユーガ助けれええええええええ」

「頑張れギーシュ、僕らのギーシュ！」

「ハハハ、ソラソラハシレハシレ」

「おわああああああ、焦げた！マント焦げた！！」

「頑張れギーry」

「せめて最後まで言えよ！！！！」

そんな感じでギーシュ逃亡劇二幕が始まる最中  
ビダーシャルが苦笑いでリユーガに声をかける

「やはり無理ではないのか？」

「頑張れry・・・ん？ああ大丈夫だよ」

「何を根拠に？」

「ぶぬうっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ  
顔芸しながら回避中」

「確かに皇炎袋がもう一つあったのには驚きだが、まだ生まれたばっかの

ドループの放つ火球なんか収束させなきゃそこまで火力ないんだよ

あんなの唯、息はいてるだけだったの、馬鹿正直に避けやがって、一発受け止めりゃ気づくよ」

「どりゃああああああ」 転がりつつも回避中

「確かに唯のファイヤーボールより威力は低いかも知れんが……だがああも無尽蔵に撃たれればな」

「はいいいいいいいいい」 精神力ためつつ回避中

「だくから、大丈夫だって、それにギーシュなら絶対に勝つ方法がある」

「ぎゃーーーーーす」 精神力ためるのに夢中で一発直撃

「それは……あ……直撃した」

2人が話しているとギーシュに一発火球が直撃する

しかしギーシュは思ったほど熱くなかったのかすぐさま立ち上がり

なお且つ精神力を貯め続ける

「よっ！ほっ！はっ！」　　なんだか避けるのが面白くなってきた  
ギーシュ

「コノ！チヨコマカト！」

「流石軍人家系だけあつて体力あるなあー」

「お？反撃するみたいだぞ？」

ギーシュは貯めた精神力を使い  
少し離れた場所に土の大砲をと簡単なゴーレムを作る  
ゴーレムは岩をかき集め手に持ったまま待機する  
集め終わったのを見たギーシュは懐から袋を取り出し  
大砲の中に投げ入れ錬金で数を増やす  
するとゴーレムの手に持っていた岩もいつの間にかいびつな形の  
不純物が混じっているが  
鉄に代わっている、ゴーレムがそれを大砲の中に入れるとゴーレ  
ムが火球を放ち続ける

ドルーブへと体当たりを繰り返す  
あっさりとドルーブはそれを避け、簡易ゴーレムを尾で破壊するが  
ギーシュが咄嗟に物陰に隠れる  
そしてギーシュが大砲の内部に向かって発火の呪文をかけると

錬金で数を増やした火薬が爆ぜ葡萄弾のように詰め込んだ球が勢いよく発射される

「又オツ！コシヤクナ」

飛来する鉄の破片に若干焦りつつも

口と腹から炎を噴き出し身を包むと、小さくなった鉄の破片は当たると溶けて行く

球がで終わるのを見越して、炎を解いたドループに視界が戻ると目の前に砂の腕がある

「エ？」

「アース・・・ハンドオオオオ！！」

「・・・あ」

「グベラッ！！」

ギーシュの放ったアースハンドが浮いているドループを地面にたたきつけると

ギーシュは勝ち誇ったように叫ぶ

「よっしゃあああああ、勝ったあああああ！！！！」

そんな勝利の余韻に浸るもつかの間

アースハンドが消えたドループが焦りの声を上げる

「ス、スナ！？ヤ、ヤバイ、シヌ！！！」

「こいつまだ意識があるのか、もういち・・・ふお？」

何やら焦りながら必死に海へと入ろうとするドループ

ギーシュが再度呪文を唱えようとするも突如リユーガに投げ飛ばされ

上空のラークが銜える

「な、何をするんだリユーガ！？」

ギーシュが意味が分からないとばかりにリユーガに問いかけるがリユーガは耳を傾けずドループを海にほうりこむ

「ふー、危うくみんな吹っ飛ぶところだった、いやー油断してた  
あそこまでやって直かつ、アースハンドで全身砂だらけにする  
もんだから

・・・爆発しないよな？」

「何をそんなに焦っていたのだ？」

上空からラークが降りてきてビダーシャルがリユーカーガに問いかけると

「いや、あいつね、砂まみれになると、火を起こす袋が詰まっちゃって

大爆発するんだよね」

「お前が焦るほどにか？」

「まああのサイズじゃここから半径1リーグは吹っ飛ぶな」

「ああ、私の記憶にも魔炎魚の自爆テロはあるぞ  
あれは酷かったな、国が一つ焼け落ちたそうじゃないか」



「……………は？」

ラークの言葉に思わず聞き返すビダーシャル  
しかしリユーガがうんうんと唸っていることから  
ビダーシャルは顔を青ざめ、リユーガの頭をどこからか出したは  
りせんで叩く

「だったらなぜギーシュを戦わせたんだ!!」

「ちょ、おま、どこからはりせんを……こいつが砂系出したら  
すぐさま割って入ろうとしたさ！」

それにあんだけ連続で遠距離錬金やら使った後によもや精神力  
持つなんて思わんだろ!!」

「え？それってもしかして……」

ギーシュがリユーガの言葉に何か分かったように呟くとリユーガが

「よかったなお前もスクウェアだ」

「……………」

一瞬ギーシュの時間が止まり

そしてギーシュが目いっぱい息を吸い込む  
リユーガは咄嗟に耳を塞ぐとギーシュが叫んだ

「やったあああああああああああああああああ……！」

その叫び声は遠いハルケギニア、トリスティンにも届いたとか届  
かなかったとか

## 二十二話（後書き）

ここで補足

同じスクウェアなのになぜステイルが倒れたかと言うと

ドルーブが周りの熱を制御していたので、ステイルは精神力を余分に持って行かれたからで、決してギーシュの精神力が損なしと言うわけではありません

これにて海上の戦いは終わりです・・・え？海上じゃない？

・・・orz海上じゃなかった

でもなんか語呂がいいからこれでいいや

ついでに7魔紹介更新しときます

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます

次投稿はいつになるか分かりませんが

まってやんよ！と言う心優しい方はお待ちください

この作品への感想、指摘、意見を駄文な作者は心よりお待ちしております  
ます

## 二十三話（前書き）

学院は犠牲になったのだ、犠牲の犠牲にな・・・  
そんなわけで短めですが・・・どうぞ

## 二十三話

余は満足じゃ・・・すばらしいゾこの国・・・いや？村か？それとも集落？

まあどつちでもいいや・・・

え？何に満足かって？

そりゃあれを見てくれれば分かるはずだ・・・なに？文章だから指差したって見えないだと？

よかるうこのワタスが分かりやすく説明してしんぜよう

俺はドループを弄り回した後、僕<sup>しも</sup>2人を引き連れ

<sup>ビターシヤル</sup>道案内の後について行きネフテスに行ったんだ

当然ドループをふん縛って、ラークの背中に乗ってな、そこでネフテスが見えたわけよ

俺はまあ当然のごとく砂埃吹き荒れる日照りが強い大きめの村ってイメージで向かったわけよ

インダスもそんな感じだったしな、だが俺の想像斜め上どころか遙か上空だった

なんせな・・・

ドームに囲われてるんだぜ？

イメージで言うとうとう東京ドームが大きくなった感じだ

俺はポカンってなっちまったよ僕しも2人もそうだったけど

そんなわけでリユウガ・F・ド・S・H・ブラッドリーです

もうルビなくてもいいよな？・・・ルビってなんだ？

っと失礼何やら変な電波を受信してしまったようで変な言葉を口  
ばしってしまい申し訳ない

それにしてもなあゝ視線が痛い痛いそんなに睨まなくていいじゃ  
んかよ

現在進行形で受け入れられていない俺ら3人です

おやビダーシャル立ち止まってどうしたんだい？

っと、どうやらついたよう・・・だ？

「さあ着いたぞ」

「……国会議事堂じゃん(ボソ)」

「……凄いなエルフの王宮は」

「王宮ではない、あくまで話し合いするための場だ座談場と呼んでいる、それに我らは王を持たぬ」

目の前には劣化版国会議事堂

少し小さめだがリユーガには見覚えがあったものだ

「はあく爺共の顔が目浮かぶぜ……」

「なんだ？会ったことでもあるのか？」

「あくちやうちやうこつちの話し、そんじゃ行ってくるわ」

そう言い2人を置いて座談場に入ろうとするリユーガ  
しかし

「「ちよつとまって」「

「なんだよ？」

僕<sup>しもへ</sup>2人がつちり肩を掴まれるリユーガ  
リユーガは鬱陶しそうに振り返ると2人に泣きつかれた

「流石にこんな視線の中置いて行くのはどうかと思うぞ！」

「そ、そつだ僕らがいくら偏見を止めたからと言って向こうがあ  
あじゃ……」

「……ジ……ひそひそ」

2人の講義中でもエルフたちはリユーガ達に視線を集める  
ビダーシャルは必死でリユーガを引きとめる2人を呆れながら見  
ていた

「あのなあ……俺は今からバリバリ特使モードで交渉しに行く  
の！」

他国のお前らが聞いていい様な話じゃねえんだよ  
それにな、気さくに話しかけてみる、案外うまくいくかもしれ  
ねえぞ？」



「でも・・・あれじゃあ・・・」

「じゃあ試しに俺がいつてきてやるよ」

そう言い2人を振りはらいリユーガは作業しているエルフの元へと行く

しかしビダーシャルが少し顔を歪めた

「どうかしたんですか？ビダーシャルさん」

「ああ、リユーガが話しかけに行っただのはな、少し変わり者なんだ  
いつもああやって馬車のようなものを作っては失敗を繰り返しているんだ

それにいつも失敗続きか常時機嫌が悪いんだ」

しかしリユーガがそんなことを聞いているわけでもなく  
リユーガは作業をしているエルフに話しかけた

「凄いですね・・・これは・・・車ですか？」

「あ？何だくるまっつてのは？つーかオメエ蛮人じゃねえか

「これが理解できるのか？」

エルフは軽くリユーガを見て作業に戻りつつ答えた

「いや・・あなたが何をしようとしているかは知りませんが  
私はこれに類似したものを見たことがありますね」

そうリユーガが言うとエルフは作業の手を止め  
リユーガに体ごと向けた

「へえ〜そいつぁ興味あるな・・・その類似したのがくるまっつて  
やつか？」

「ええ、私の推測ですが貴方はこの車輪を回して走らせたいんで  
しょ？」

私の知る車っつて言うのがそう言う物ですし」

「こりゃ驚いた・・・ああ確かにそうだ俺の目標は  
結構なスピードで走らせることなんだが・・・どうにも車輪の  
強度がたらなくてな・・・

それにコントロールもうまくできねえ  
えーっと・・・」

「リユーガです」

「そうか、俺はジムツてんだ

そんで？リユーガの知るくるまってのはどんなやつなんだ？」

「私の知る車と、このジムさんが作っているものの違いを上げるとすれば……」

まずは車輪が四つあることでしょうか？これは三つですよね？

それに言うところには全部の車輪を回すようにしていますけど、

私の知る方は四つの車輪

それを後ろだけ回転させたものなんですよ」

「……そうか！全部回す必要はねえんだ、後ろを回転させて前で方向を……ぶつぶつ」

リユーガの言葉で自分の世界に入って行くジム

しかしリユーガのある言葉でこちらの世界に戻される

「なんなら実物を見せましょうか？」

「本当か！？どこにあるんだ？蛮族の国か？」

「いえいえここにすぐ出せますよ・・・少しサイズは小さいですがね・・・よつと」

そう言いリユーガが地面に向かって手を向けると急にそこに車輪のついた箱が生み出される

それは荷台が大きく広がっている車  
そう軽トラである、少しサイズは小さく子供のおもちゃ程度ではあるが

リユーガの使った創造の魔法  
それは記憶にあるものを理解していればしているほど精密に生み出される

リユーガは一度車を解体した現場を見たことがあるのでその記憶を掘り起こし

この場に出現させたのである

「・・・な、何をやったんだ？」

「ちよつとした特技ですよ、どうぞ好きに見てくださいって構いませんよ

それにこんなサイズですがきちつと動きますよ」

「……………」

ジムは生み出されたものに若干疑問を持っていたが  
それを調べ始める  
そして十分ほど調べ終わると

「なあ……頼みがあるんだが……」

「差し上げますよそちら」

「本当か！？少し待っていてくれ今金を……」

「いえ結構です、唯、それを作れるようになったら私に売っていただけませんか？」

「そんなことでいいのか？」

「ええ（本当はコルベールにやってもらおうと思ったんだが……  
まあこつちの方がいいだろ）」

おっと私はこれから評議員の方々に用事があるので失礼します  
もし完成したら……そうですねビダーシャルにでも伝えてくだ

さい」

「分かった、10日ほどでやって見せよう」

「はは、期待してます、それでは」

薄く笑いつつリユーガはビダーシャル達の元へと帰って行く  
ちらりと後ろを見ると、周りのエルフ達も車に興味馭々で群がっ  
ていた

「どや?」

「し、信じられん・・・あの男が・・・」

「・・・なあリユーガ君の魔法は反則じゃないかい?」

「先ほど聞いたけど・・・何と言っていいのか・・・」

「な?言った通りだろ?ちゃんとこっちもそれなりの対応をすね  
ばあんなふうに話すことができるんだぜ?」

「思いつきり能力頼みじゃないか!!」

ステイルがそう反抗するもリユーガはそれを鼻で笑った

「はっ！使えるものを使って何が悪い？俺は唯使える選択肢が多いだけだ

そんなわけで場は和ませた、後はお前らの好きにしろ、行こうぜビダーシヤル」

「あ、ああ」

納得のいかないステイルとギーシュだったが

リユーガの言にも一理あるので唯建物に入って行くリユーガをながめつつ

おとなしくしていようと思う2人であった

## 二十三話（後書き）

ちよつと無理やりすぎましたかね？

自分で設定しといてなんですけど・・・主人公チートってレベルじゃない・・・orz

反省はしている、だが後悔はしていない！！

今回は無理やりじゃなくてきちつとした交渉をさせますのでご期待を

後ここでアンケートをしたいんですが

この後サクツと交渉を終わらせる予定ですが

やはり作者としては四大精霊全員出したいんですが・・・どうでしょう？

今後も主要オリキャラが2人ほど出るんですが  
流石にオリキャラ多くなりすぎですかね？

7魔+オリキャラ（ガリア勢を除く）ステイル含め3人合計10人  
・・・ここに精霊三体・・・作者としては意見がなければこのまま  
行きたいんですが

これ以上オリキャラ増やしたらこっちの頭がついていかねえよ！

と言う方もいらっしやると思いますので・・・

その他精霊出すOKな方、NOな方どうかお答えください  
期間は・・・5月31日ぐらいまで

多くの方が答えてくださると駄文な作者は感激の極みです

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます

この作品への意見、感想、指摘、お待ちしております



二十四話（前書き）

PV25万なんて見てしまって喜びで小躍りしながら書いてしまった

駄文な作者は感激の極みですm（）（）m

まあ前置きはこんなところで本編へどうぞ

## 二十四話

グラントトロワ、ジョゼフ執務室

リユーガとジョゼフはボードゲームを楽しんでいた

「王手」

「ぬ？・・・どう動いても詰みではないか・・・」

「流石に3回やったぐらいじゃ負けねえって」

「うーむ・・・チェスと違って駒が多いから多少駒を持って余すなこの、将棋と言う物は

リユーガの手作りなのだろう？」

「制作時間8時間の大作だぜ、インダス滞在時に作ってみたんだけどなかなか好評だな」

リユーガとジョゼフは駒を崩しまた並べ始める

「それで、交渉はうまく言ったのだな？」

ジョゼフは駒を動かしながら問いかける

「色々条件出されたけどそこまでめっちゃくちゃな事は言われなかつたしな

ほれ角取り」

リユーガは角を奪い置き場に行っている蓋へと入れる

「ぬう・・・と見せかけて実はここで飛車成り、龍だ  
これでリユーガの飛車は死んだな」

「甘いわ、ここでこの角を使うだよ、王手」

「ぬ！？・・・飛車と王を天秤にかけたか・・・流石に避ける  
しかないか・・・」

「そんじゃ飛車ごっそさん」

飛車を奪い置き場に置く

「はあゝ・・・飛び駒が・・・それで？こちらの条件はどこまで飲んでくれた？」

「全部・・・ほい王手」

「ぬわあ！・・・また負けたか・・・っと言うか本当に全部飲んでくれたのか？」

ジョゼフは盤をぶちやまけまた並べ直し駒を進める

「技術提供、四つの精霊石の取引、ガリアへの集落ごと移住  
最初の二つはそこまで手間はかからなかったが最後のは少々手回したから面倒だったぜ」

「望んで頼んだがまさか本当に認めさせるとはな・・・リユーガよ外交・・・やだ・・・もったいない」

「俺にしかできないなら使者として行ってやるからいいだろ？  
エルフの件俺にまる投げしやがって、まあ向ここの条件の一つも俺の提供だったしな」

「なに？リユウガの提供だと？」

「ああ、向こうの条件は食料、まあこれは砂漠だからな

次は俺の知っている技術提供、これは俺の技術が役に立つし向こうなら実現できるからだな

そんで向こうの脅威を取り去ること、こりゃ主に向こうが悪魔って呼んでる虚無の事だな

ついでに向こうの治安維持だったかな？これは俺が認めたやつ以外は認めんらしい

おかげで周一で向こうに顔出さなきゃならんくなった・・・面倒だぜマジで

まあその辺は書類に書いといたから読んどいてくれ」

「まあ、移住を認めただりユウガを提供するぐらい良いかそれより一体どんな手を使ったんだ？」

「ああ・・・そうだな・・・まあ手短に話すとだな」

てれてってってって プウン

はい、どうもリユーガ・F・ド・S・H・ブラッドリーでっでいう  
某土管の戦士のテーマで颯爽登場です

まあ茶番はこの辺で

現在国会議事堂もどき内部の大きな一室で老評議会の面子とお話  
中です

「つかこいつら老評議会って言うけどさあ……長以外老要ら  
なくね？」

確かに長寿って記憶してるが……どいつもこいつも美形すぎん  
だろ……！

長はしっかり髭生やしてめっちゃ貫禄あるけどさあ〜他の奴らど  
う見ても良いとこ20前後だろお前ら！

「こら！そこお美形が爺喋りつけんな〜！だがのうとか言うじゃね  
えよ！めっちゃ違和感かんじんだろ……！」

もうこの国美形の国に改名しろよエルフじゃなくて美形族にしる  
よあ〜美形見ると腹立つ……！！

「……おっと失礼、少し感情が爆 散してしまったようです  
そんなわけでどうぞぞ

「これがガリアとしての条件です、後は私個人ですので後でいい  
でしょうし……」

如何でしょう？こちらもそちら提示すると思われる条件は受け  
入れる準備がありますが……」

「ほう……こちらの条件を受ける準備、と？」

「こちらがどんな条件を出すか予想したと……聞きたいのだが  
そちらは

我々がどのような条件を出すと思っているのか、聞かせてもらいたいのだが」

エルフの長テュリユークがリユーガを値踏みするように問いかける周りの議員、ビダーシャルも含め2人が放つ気迫や殺気とは違った独特な雰囲気額に汗を垂らしている

「では、失礼して・・・こちらがそちらのために予想し用意したものはまず食料の提供

これはそちらが砂漠の土地と予想し此方でしか作れぬような物を送り出す予定です

すでに10年以上送り出すための余裕が来ています

次に此方で考えられた技術が追い付かず基礎だけ立っている技術の提供

こちらはそちらならば実現させられると思った技術です、それで出来た物をこちらに提供していただければ

良いと、その代価は別でお支払いいたします

最後にそちらの悪魔に関することです」

リユーガの最後の言葉に老評議会全てが反応した  
そしてテュリユークが問いかける

「シャイターン悪魔の・・・事とは？」

「こちらでは虚無と呼んでいます、我が王はさほど興味がない

様で

そちらは復活など気にしているようですが我が王は  
こちらで出来ることならば何でもしよつと言つことす

「それはそちらの崇める神を否定することと受け取つて良いのか？  
そうなればロマリアとか言う此方を度々調査している者たちが  
黙つてはいないのではないのか？」

「それについては御心配なく  
我が国はこの交渉が軌道に乗れば……ブリミル教を廃止い  
たします……」

リユーガの言葉に長を含め老評議会全員が驚愕の表情を浮か場が  
ざわめく

そして老評議会の何人がリユーガに問いかける

「それはそちらではかなりの問題では？  
それに下手をすれば国が割れ戦争が起こる可能性が起きる  
そうなれば此方に皺寄せが来ることがあるのでは？」

「そうだ！その時になって我らに軍を出せと言つつもりであろう  
！！」

「やはり蛮族の考えることか」



好き放題言い始める議員達、黙って考えているのはビダーシャル  
含め数人程度

場が沸き立つがテュリユークが一蹴する

「黙らぬか！！まだそうと決まった訳ではあるまい、不躰な言葉を  
慎まぬか！！」

テュリユークが机を叩き立ち上がると議員達は一斉に黙る

「見苦しい所をお見せしましたな」

「いえ、こちらも言葉が足りなかったですから」

「足りない？」

「ええ、我が国は宗教の自由を目指します、ブリミル教を否定す  
るわけではありません

今の我らの土地ハルケギニアではブリミル教以外はすべて異端  
とロマリアの坊主が言っています

私や我が王はあくまで自由を目指し、他の宗教を一方的に否定  
などしません

貴方がたの大いなる意思もブリミル教も必ず善し悪しがあるの

ですから、

しかしどんなものにも完全なる善や悪など存在しません」

しかしリユーガの言葉にまた場は沸き立ち、一人の議員が立ち上がる

「貴様！！それは大いなる意思に対する侮辱か！貴様らが悪魔シャイターンだと崇拜しているから

争いが絶えぬのだろうか！！今ここで肅清してくれるわ！！！！

精霊よ、その身を刃へと変え我が敵を撃て！！！」

リユーガに指を差し叫び呪文を唱え

ウィンドカッターのようなものがリユーガへと迫るがリユーガはヒョイツと最小限の動きで避け

溜息をついた

「テュリユーク殿・・・私は争いに来たわけではないので・・・止めていただけると助かるのですが」

リユーガへと迫る風の刃や土の弾丸を避けつつテュリユークに言うも最早場は沸き立ち

リユーガに向かって魔法を放つもの半分とそれを止める者が数人

避け続けるリユーガを見て目を見開く者数人と言ったところでテユリユークは眼を見開く者の一人だった

「……………やめよ」

「……?!?」「」「」

テユリユークが冷たく呟くとリユーガに向かって行った魔法がピタリと止む

そしてテユリユークが腕を振るうとリユーガに向かって魔法を放っている者がそのまま固まる

「貴様らは各集落の代表や政治を担う者だろうか？」

確かに彼らに個人として恨みがあると思うが……

この場には個人を捨て一族、集落の代表として立っているのではないのか……

すまなかつたな度々見苦しいモノを見せて」

テユリユークがそういう言い頭を下げると一同はおとなしく席に着くリユーガは服についた埃をはたき気にしていないような笑顔で向かいなおし問いかける

「お話を続けても？」

「すまない続けてくだされ」

「では、そちらの言い分にも思うところがあります  
ですので一から説明させていただきませす、まず、国が割れると  
言った方」

そう言いリユーガは先ほど言葉を出したエルフに視線を向ける

「それについては絶対とは言えませんが、ほぼありえません」

「やけに自信ありげだが・・・なぜかな？」

「既に我が国の貴族には話をしてあるからです  
しかしその場だけ同意し後で反乱をおこす者を出るやもしれま  
せん

そしてその時に貴方が仰った通り戦争が起きるといった問題が  
出てきますが

それについて我らはそちらに軍を要請する気はありません  
もし近い未来にそちらに軍の要請をしたのならばその時は我ら  
を見捨てて構いません

これでそちらには何の問題はないのでは？」

しかしテュリユークがその言葉に問いかける

「しかし、もしそちらの国が倒ればこちらには迷惑がかかるのでは？」

そのことが発端で我らの土地に攻めてこないとも限らん」

「例え我が国が倒れたとして、そちらに攻め入ったとしましょう  
その時は貴方がたの問題では？」

私は両方にメリットデメリットがある話をしに来たのですが・  
・  
それに私は多少の危険があるからこそ嘘偽りのない取引だと思  
います

仮に何も問題がなければ逆に信用ができないのでは？」

「……………」

「そちらが執拗に確認するのも分かりますが……  
この際ハッキリと聞きましょう  
こちらと国を良くするため  
多少の危険を冒して取引する気はありますか？」

その言葉にその場に静寂が訪れる  
しかしその直後先ほど蛮族と言ったエルフが立ち上がり叫ぼつと  
する

「何様の・・・」「黙れ」・・・「ッ!？」

言葉を続けようとしたエルフにリユーガは低く声を重ねる

すると先ほどのニコニコとした顔がウソのように無表情のリユー

ガの殺気が場を埋め尽くす

その場に居た半分の議員はすぐさま席を飛び去り身構え、残りは席から動けぬように固まってしまった

その様子を眺めつつリユーガは使者の顔ではなくリユーガの顔として飛び退いたテュリユークに問いかける

「今、こいつが言おうとした言葉

そちらの総意として受け取ってよろしいか？

そうならば私は帰らせていただくが、先ほど私に攻撃を加えたエルフ全員の命を手土産に」

「ッ!？せいれ・・・ガッ!」

リユーガが棒立ちになっているエルフに指を指すと

エルフは焦ったように呪文を唱えようとしたが、リユーガに片手で顔を掴まれ足が地面から離れる

「っ！かテメエ、さっきから交渉の場でポンポン魔法唱えやがってホントに議員か？」

「グッ！・・・はな・・・がああああ！！！！！」

「交渉の場にこんながいるっておかしいと思いませんかあ  
テュリユーク殿？」

手に持った叫ぶエルフを見つめ  
不気味な笑みを浮かべリユークはテュリユークに問いかける

「・・・すまなかった、実はここに居る半分は軍の者だ」

「だろっねえ・・・まあ警戒するのは分るが杖や刀置いてきたん  
だからもうちよっと信用しようぜ  
俺じゃなきゃ死んでるぞ」

「返す言葉もない・・・出来ればその者を離してやってくれんか  
の？」

「やられた一発は一発だぜ？  
当たる当たらないは別としてなあ！！！」

そう言いリユーガは掴んだエルフを壁にめり込ませた

「ふう〜スツキリ

さて、本当の議員さんは壁の向こうだろ？

さっさと出てこい、返事聞かなきゃな、テュリユークも偽モン  
だろ？さっさとフェイスチェンジとけや」

リユーガが壁に向かって問いかけると

テュリユークの姿が変わり若者になる

そして壁の変装カモフラージュが解け5人のエルフが現れる  
エルフ達は全員貫禄のある者ばかりであった

「私達が老評議会の決定権を持つ4人と・・・」

「すまなかった、だますような真似をして

私が長のテュリユークだ」

そう言い5人は頭を下げる

しかしリユーガは手を振りながら返事を返す

「そんないいから、取引する気あんなのかねえのかどっちだ？」



先ほどの丁寧なリユーガはどこに行ったかめんどくさそうに言い放つリユーガに  
何人かのエルフが眉をひそめるが、テュリユークは気にすることもなく返事を返す

「受けよう、お主のような者がおるのなら信用できる」

「そりゃどーも、それでこっちの条件どこまで飲んでくれるんだ？」

リユーガが席に腰掛けると出てきたエルフ達も席に着きリユーガと向き合った

「最初の二つは何ら問題ない、技術提供と精霊石の取引は……しかしエルフ総人口半分の移住は流石にの……」

「……だったらインダス一つならどうだ？」

「うーむ……その者が了承すれば良いだろう」

「だったらほれ」

リユーガは懐から書類を取り出しテュリユークの前に放り投げる

「これは？」

「インダスの移住に同意した者の署名

2と3バツがついてるのは拒否した奴だからそっちで受け入れてくれ」

「もう手を回していたのか・・・」

「こっちの条件はこれで終わりだ

それで後はそっちの条件だが・・・俺が提示したもので良いか？」

「一つだけ良いか？」

「此方で出来ることならなんでも」

リユーガはなんでもこいっと両手を広げる

「お主がほしい」

「……は？」

広げた両手を閉じた

「あー…俺性癖はノーマルなので、そう言うのはガチの方に言ってもらえます？」

なんならそう言う奴を何人か……」

「意味を違うな……これは保険だ、人間が我らに向かってきてもお主だけは

こちら側についてもらうと言う意味だ」

「なんでまた……まあいいか  
それだけか？」

「それだけだ、それに当たって此方の治安維持にも協力してほしい」

「あー……毎日は多分無理だ  
一応学生なんでね」

リユーガがそう言うのとテュリユークを含め何人かは目を大きく見

開く

「学生？・・・留年か何かしておるのか？」

「してねえよ、ピッカピカの一年生だぞ」

「偉大な者にとって歳は関係ないと言ったところか・・・ならばお主が認めた者を何人が送ってくれ

それにお主も週に一度は顔を出してくれると助かる」

「うん・・・それぐらいなら良いか・・・こっちも頼んだことがあるしな

もう条件はないか？ないなら俺は帰るが」

「もう一つビダーシャルをお主につけさせてほしい

此方の連絡係としてな、それにそちらの連絡係はお主以外は認めん」

「マジか？・・・その辺は王に聞いてくるから、そんじゃビダーシャル行こうぜ」

「分かった、では行こう」

そう言いリユーガとビダーシャルは部屋を出ると  
変装していた軍所属のエルフが詰め寄る

「良かったのですか？あのようなことを認めて」

「そうです、それにあの者は我々に・・・」

「先に手を出したのはお主らじゃろうが、それにの・・・」

テュリユークは眼をつむり重々しく言葉を発した

「リユーガ殿が本気ならば最初の内に我らを含め全員殺されてお  
る」

「冗談が過ぎますぞ長・・・我らは軍の精鋭ですよ？」

「わしがそう思ったただけじゃ、そう真に受けるでない」

テュリユークがそう言うも議員全員表情は険しい  
そしてテュリユークは思う

「(国よりあの者だけは敵対してはならぬな)」

そう思いテュリユークは無言で自室に戻るのであった

「ってわけ」

「なんともまあ……リユーガやはり外交……」

「だからやらねえってつーか後一週間で学院始まるっての……  
・残念だ……」

それより王手「

「え？……ちょっと、いつの間に……」

「ふむ……7回か……少し手間取ったがもう負けぬな」

「はあ〜・・・まあ6回勝てたからいいか」

そんなこんなでリユーガの交渉は上手く行った

## 二十四話（後書き）

少し長かったですかね？

この後は残りのオリキャラやら魔族やら精霊（まだ決まっていない）をだして

原作破壊編に入りたいと思います

それでは次回更新はいつになるかわかりませんがこの辺で待ってやんよ！っと言う作者にとって神様のようなお方はお待ちください

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます  
この作品への感想、意見、指摘をお待ちしております



二十五話（前書き）

仕事とか書類とかあるけど

でもそんなの関係ねえ！でもそんなの関係ねえ！！

・・・少々テンションのおかしい駄文の作者です

まあ茶番はここまででどうぞ

## 二十五話

5年前

ロマリア大聖堂

ヴィットーリオ執務室

そこには修道服を着た年齢は30代の半ばでカールした金髪が特徴の男が

20代のこれまた金髪の派手な修道服を着た男の前で膝をついている

「聖下、一体私は如何したら・・・ガリアからは見放され・・・もう私達には聖下しか・・・」

「顔を上げなさいクロムウェル・・・策はあります  
(しかし何故いきなりガリアは・・・)」

「おお！！流石聖下・・・して、その策とは？」

「アンドバリの指輪と言う物をラグドリアン湖から持って来なさい、その力を虚無と偽れば

貴方達レコン・キスタの結束をより強固なものとなり、聖戦の足がかりとなるでしょう」

「し、しかし聖下……虚無と偽るのは……」

「クロムウエル……今度の聖戦では全ての担い手がそろつので  
す……」

レコン・キスタにアルビオンを治めてもらわなければ……次の  
聖戦も今まで同様失敗に終わるでしょう

故に多少無理をせねばなりません……」

「……」

「最後には全てを話します……その際貴方は非難されるでしょう  
が……どうか始祖の為

人々のため……お願いできないでしょうか？」

そう言いヴィトリーオは頭を下げる

「顔をお上げ下され……これから非難される者に聖下が頭を下  
げていては示しがつきませぬ」

「では……やってくるのですか？」

「このクロムウエル、始祖のため進んでその汚名を被りましょう  
ですから聖下、どうか聖戦を成功なさってください」

「ありがとうございます・・・貴方に始祖のご加護があらんこと  
を」

クロムウエルは手を合わせ祈りをささげた

しかしヴィトリーオは形だけ祈ってはいたものの先のことを考え  
ていた

「（ガリアがこの件から手を引くとは・・・調査の必要がありま  
すね）」

教皇ヴィトリーオはそう言い小さく眉を吊り上げた

プチ・トロワ食堂

ジョゼフは双王となった後今まで放っておいたイザベラを構う為か  
度々プチ・トロワで食事をする様にしており

その成果か2人は仲が良いとまで言わないが普通の親子程度の接  
点は持つようになった

しかしこの場にイザベラはいない

代わりにリユーガが居てジョゼフと共にそこで食事をとっていた

「あのさあ、いきなり食事するから来いとか言われてもよ、俺忙しいんだよ分かる？」

確かにインダスは無事移住できたから仕事は減ったよ、だからって明日から学院なんだよ!!」

ジョゼフに向かって敬意もへつたくれもないリユーガの言葉に  
周りの従者はビクビクしていたがジョゼフは気にすることなく食事を続けつつ返事を返す

「すまんすまん、余もすっかり忘れていたことがあってな  
それを伝えようと空いている今、呼んだのだ」

「そっかー、なら仕方・・・無いわけあるかああああ!!  
何時だと思ってるんだ!!」

「3時に決まってるではないか、おやつの間だぞ  
まあ昼食にはちと遅いとは余も思うが」

「お前にとって今はおやつの間か？夜中の3時かか？  
あれかお前はおやつ感覚でピーーーーー（自主規制）か？  
冗談じゃねえよ俺だつてここ3日まともに寝てないだぞ、ようやく寝れると思ったら

ほんの2時間程度で起こしやがって」

「なんだ女が食いたいのなら先に言えば良いものを・・・おい  
今すぐ上質の・・・」わーーーーーーー「・・・な  
んだ騒々しい」

「何を言おうとしてんだテメエはＹＯ、どうさっきの言葉を受け  
取れば

そう言つ答えが出てくるんだ!..!」

「そうか・・・すまなかつたな」

「はあー・・・はあー・・・わかりや・・・良いんだよ・・・」

ジヨゼフに突っ込み過ぎて方で呼吸するリユーガ  
これで話を進められるとリユーガは席に深く腰を下ろすが

「・・・そこらの阿婆擦れでは満足しないか・・・いた仕方ある  
まい

娘の寝室に入ること許そう!..!」

「」「何でそうなるだ(のよ)!!..!!」

「おふうー!!」

「彘?」

ジョゼフが高らかにそう宣言すると

ジョゼフの顔に枕がものすごい勢いで飛んでいき

そのままジョゼフは椅子から転げ落ちた

そしてリユーガが枕が飛んできた方に目をやると

そこには………

鬼の形相をしたイザベラが立っていた

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

おれはジョゼフのぶっ飛んだ発言に突っ込みを入れていたら

いつの間にかジョゼフは飛来した弾丸マクラによって倒されていたんだ

そして振り返ると後ろに鬼神が居たんだ

な…何を言っているのか わからねーと思うが

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとか

そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ

もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

「リユーガもなんでこんな時間に家に居るのよ!!」

まさか本当に忍び込もうとしたんじゃないでしょうね!!」

「うぶっ!!」

あ…ありのry

どうも長い長い茶番で申し訳ないリユーガ・F・ド・S・H・ブ  
ラッドリーだ

そんなわけでただ今の時刻3時半、もちろん朝の…・ジョゼ  
フめっ殺す

まあそんなことより近況報告と行こうか

インダスは無事、俺の治めるハーク領に移住してもらった

ここまでスムーズに事を進めたのはあそこが変わり者ばかりっ  
てのと



待ちぼうけくらった2ヶ月のおかげであるう  
だからと言って俺の仕事がなくなつたかと言つとそうではない  
エルフからみれば俺の領地は土台だけの領地  
まあカラーリングされていないガンブラが目の前にあると思つて  
くれ

そんな領地故にエルフ達が好き勝手に弄り回そうとして  
まだ説明もしてないのに領地の探索始めやがったもんだから  
もー領民大パニック、治めるのに寝ずに3日掛かつちまつた  
それでなんとか学院開始までに終わらせてさあー寝るぞーって時に  
呼び出しくらつてこーなつたと、はあゝあの時迎えの奴らシバキ  
倒しとくんだつた  
そんなわけで続きでもどうぞ

「ま、待てイザベラ、何をそんなに怒つておる  
あれか？お前は自分で忍び込むタイプだったのか？」

「そんなわけないでしょうが！！！！  
つて言うかあんたがいつから私の寝室の入出許可出せるように  
なつてるのよ！！！！」

そう言いバシバシと枕でジョゼフを殴るイザベラ

「な、何を言う親が認めずして誰が認めると言つのか！！！！」

「そう言つこと言つてるんじゃない！！！！」

あんたも親なら夜這い促したりするんじゃないわよ！！」

「な、何を言うう！！俺はお前のためを思って

お前がいつまでもウジウジしているから不憫に思ったことであり  
それにお前もリユーガならほん・・・あ、ちょっと！愛しきわ  
が娘よ椅子は

洒落にならな・・・」

「大丈夫よお父様・・・角だから（にっこり）」

イザベラは高らかに椅子を振りかぶり満面の笑みでこめかみに青  
筋を立て

振り上げた椅子を振りおろした

ドガア！バキィ！ゴスツ！グチヨツ！

（ただ今残酷な映像になっております音声のみお楽しみください）

そしてイザベラが父親スキんシップの折檻を続けること10分

内容は殺伐としたもので微笑ましくもなんともない  
なんとという親子の触れ合い

イザベラがスキんシップを終えるとそこには無機物の塊が・・・

「はあー・・・はあー・・・ギロツ」

さすがしんがの驚愕の顔で眠るジヨゼフが横たわっている

きつと仕事の疲れがたまっていたのだろう（棒読み）

こゝこれで良いですか？イザベラ様（必死）

「ふん・・・ねえリユーガ？

どうして貴方はこれの呼出しには応じて私の呼びかけは無視するのかしら？」

実の父親をこれ呼ばわりしゲシゲシと足蹴にするイザベラ

イザベラがリユーガに居た場所に視線を向けるとそこには一切れの紙が

そして紙にはこう書かれていた

『自分探しの旅に出ます、探さないでください』

それを読んだイザベラはこめかみに一際大きな青筋を立て指を鳴らす

パチッンと甲高い音が鳴るといつの間にかイザベラの背後に頭の眩しいギークが膝をついていた

「リユーガをここに」

「既に捕えています」

すると黒フードの集団が縄で縛り芋虫になったようなリユーガを  
運んでくる

「H A N A S E！！お前ら隊長がどうなっても良いのか！！  
鍛えてやった恩を忘れたか！！！！」

（デユナミスツーが異能使えん！！何故だ！！）

「ギャグ補正じゃよ」

（こんなときにだけ出てくるんじゃないやねえクソ爺！！！！）

「ふおふおふお、こっちの神と楽しく見せてもらおうぞーい」

（いつかブツコロス！！！！）

そしてリユーガが床に置かれ縄を解かれると  
イザベラがゆっくり近寄ってくる  
リユーガは刹那の動きで土下座の体制になる

「ねえ？どうして私の呼び出しに感じてくれないのかしら？」

「俺を無理やり連れて行くことするからです！！！」

「最初に向かわせた使いの者が全裸で王宮の前にほかられていたんだけど……」

「誰がやったのかしら？」

「……サー、ダレデシヨウネ、ソナヒドイコトヲスルナンテ」

「確か……2番目は王宮の前に上半身埋められていて

3番目は私はガチホモです

って体中に書かれたまま王宮の池にほかられていたんだけど

……しらなあーい？」

ここで回想

リユウガ呼び出し隊活動記録

ファーストコンタクト

「zzzz」  
「……」

「リユーガ殿、イザベラ様がお呼びです」

ゆさゆさ・・・むくり

(音声のみお楽しみください)

「ラク、こいつら王宮の前ほかっとして」

「人使いが荒いな」

セカンドコンタクト

「リユー」

「くじり」

「何を！・・・」

王宮前

「トラー……イ……！」

「ぐべらッ!」

「よっし!綺麗に犬神家できたな・・・帰ろ」

サードコンタクト

「さあブラッドリー殿、俺にホイホイついてきな」

「トイレに帰れ」

「アーーーーー!」

とまあこんな感じである

「ダラダラダラダラダラ(汗)」

「ねえねえ・・・しらなあーい?」

土下座しつつ滝のように冷や汗をかくリューガ  
そしてイザベラをちらりと見ると顔は笑っている  
しかしこめかみがピクピク動いている

「……救いは……あるんですか？」

「そうねえー……私の言うことなんでも聞いてくれる？」

「いや……その……これ以上面倒が増えると……僕も……」  
聞いてくれる？」「……」

何なりとお申し付けくださいイザベラ様、私はあなたの従僕で  
す」

そう恐怖に屈したりューガがイザベラに言うと  
イザベラは満足そうに無邪気な笑顔になると

「もう私目が覚めちゃったから、時間つぶし付き合いなさい」

「かしこまりましたお嬢様」

「そう じゃあ行きましょー!」



そう言いイザベラはリユーガを起しそうとする

「その格好でか？」

「え？」

「寝巻だろ？それ」

「・・・・・・・・／／／／」

イザベラの攻撃！！

昇竜拳！竜巻旋風脚！昇竜拳！！竜巻旋風脚！！

リユーガは空高く舞い上がった

倒れ伏すジヨゼフへと華麗にのしかかった

イザベラは自室に逃げに行った

「ゴフウ！！！！」

「い、一体なんだ？敵襲か！？」

「あー痛つてえ、はあ、それでジヨゼフ、アホなこと言ってな

いで要件言え

俺はもうすぐじゃじゃ馬に自由を奪われるから奪われる前に逃げねばならん」

「おお、すまんすまん」

そう言い2人は席に座りなおす

そしてジョゼフが真剣な顔つきになり言葉を発する

「リユーガよアルビオンの連中のことは知っているか？」

「レコン・キスタだったと記憶しておりますが」

「そうだ、実はなあれ俺が立ち上げたんだ」

「そうですね、それで？」

「なんだ、驚くと思ったのだが……つまらん……まあ5年ほど前に立ち切ったのだが……」

どうも俺が奴らを見放したところから糞坊主どもが嗅ぎまわっているという情報を得てな」

「……坊主が、か今俺の領地には異端どころの騒ぎじゃない連中が

いるから家の領は厳重に管理させているから問題はないと思うが……どこまで知られたんですか？」

「うむ、我が国が戦争に備えているぐらいしか知られておらぬが、しかしエルフの件も

ハーク領の状態ももう長くはもたんだらうな」

ジョゼフがそう告げるとリユーガは苛立ちが立ち込めその場の空気が死んでいく

「チイツ、なんとか俺の卒業までは落ち着かせておきたかったんだが……そうか

それじゃあアルビオンが落ちるのはまずいな」

「だろうな、いつ坊主どもにばれるやもしれんし

ばれたらばれたで黙ってはおらぬだらう、そうならばアルビオンを抑えられるのは面倒だ」

「……分かりました、手はうつておきます」

「すまんな俺の尻拭いをさせて」

「いつものことでしょう？」

「違ういな、まあ最悪アルビオンを抑えられても負けるとは思わんが・・・」

アルビオンが落ちるまで後1年と見積もっても負ける要素が5%も上がってしまう」

「確かに面倒だ・・・まあこつちも鬼札切つとくよ」

「リユーガ自身が鬼札のような気もするが・・・まあ今さらだな要件はこれだけだ、俺は執務に戻る」

そう言い残しジョゼフは食堂から出て行く

残されたリユーガは問題を解決するべく幾つも案を出し納得する案が出るまで10分もかかってしまった

案を出し終えたリユーガが席を立とうとすると

扉が勢いよく開き動きやすい服装に着替えたイザベラが現れる  
リユーガはすっかりそのことを忘れており逃げ出そうとしたがあっさり捕まってしまう

「さあ、行きましょ」

「ま、マイフリーダム・・・」

その後リユウガはラーク便空の旅2時間コースをイザベラと共に  
楽しんだとさ

## 二十五話（後書き）

どうでしたでしょうか？

なんか原作キャラが崩壊している感が否めないんですが・・・

まあやったことには退かぬ！媚びぬ！省みぬ！でも謝る！がモット

ーな作者は後悔はしません反省もしません

でも謝ります、ごめんなさいm(\_\_\_\_\_)m

次投稿もこんなペースで上げられれば良いですが・・・正直わかりません！！！！

それでも待つてやんよ！！と言う菩薩のごとき後光を放つ読者様はお待ちください

一応アンケートもどきは5月31日までやりますので、投票お願いいたします

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見お待ちしております

二十六話（前書き）

どうも駄文な作者です

死竜様心温まる感想ありがとうございます

まああまり時間をかけて書いていないので違和感を感じるかもしれ  
ませんが  
どうぞ

## 二十六話

ロマリア連合皇国

首都、パラス

服装に差があり過ぎるロマリア皇国

そのロマリアの首都パラスにかなり派手な外装の馬車が聖堂騎士ハラテイ隊によって

警護されつつ街をゆるりと進んでいる

そして民はその場所を見るや、その場で膝をつき手を合わせ祈り始める

しかし、民の信仰など関係なく馬車の中では陰湿な話が進められている

馬車の中には聖エイジス32世ことヴィットーリオ・セレヴァレとその側近であり使い魔であるジュリオ・チェザーレが話をしていた

359

「・・・そうですか・・・5年ほど前からおかしいと思ってはいましたが・・・」

まさかそのような者がいるとは・・・」

「確かではないんですがね、聖下

しかし、ガリアの鬼才が動いているのならば、私達に与するガリア貴族が

潰されたのも納得がいくと言つものです」



「・・・それで、そのガリアの鬼才の情報はどれほど集まりましたか？ジュリオ」

深刻な表情で問いかけるヴィトリーオ

しかしジュリオは困ったように手を振りながら

「奈何せん私達に与する貴族が潰されすぎた所為か

これと言ったことは何も・・・精々この程度です」

そう言いジュリオは書類を取り出し

内容を説明していく

「リユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラッドリー、  
現年齢は10と5

クラスは火のスクウェア、そして最年少シュヴァリエ受賞者並び最年少公爵

ガリア中央騎士団隊長

父親はフラン公爵、母親はレイ公爵夫人

そして何よりガリア双王のジョゼフ陛下から最も信頼されなお  
且つ実力もある

付いた字はガリアの鬼才、二つ名は不明つと、資料だけを見れば  
どれ程人外の化け物かと思いきや

実際はジョゼフ陛下の娘、イザベラ姫の呼び出しを完全無視、  
迎えに来た使者を全裸で放りだすなど

訳の分からないこともしている・・・本当に彼は何なんですか  
よう・・・」

「……その二つ名不明とは？私は『黒炎』と聞き及んでいます  
が」

「それは彼が否定しているんですよ、何度か公式な決闘もして  
いますが」

自身で二つ名を名乗ったことは一度もありませんし、周りが黒  
炎と呼んでいるだけのようです

それと彼と戦って生き残った一人の情報とそれを見ていた者が  
ら話を聞けたのですが……聞きたいですか？」

ジュリオの意味深な言葉にヴィトーリオは眉をひそめる

「おかしなことを聞きますね……何かあるのですか？」

「いや……ちょっとこれは口に出しにくいかと……」

「構いません」

ヴィトーリオの言葉にジュリオは意思を決め、資料を読み上げる

「では……正式な決闘で生き残った者はジャック伯爵

決闘理由は態度が気に入らないと言うもので……まあ他の貴族達も殆ど同じような理由ですが」

「ジャック伯爵殿のクラスは？」

「土のトライアングルの中と言ったところでしょうか……それで内容なんですが」

開始直前リユーガ殿が三分間だけ待ってやるっと言い杖を放り投げると同時に決闘は開始されるのですが……」

「……」

「その態度に憤慨したのかジャック伯爵の放った無数のブレッドがリユーガ殿に直撃」

その際にジャック伯爵は彼の父親と母親を馬鹿にしたらしく……  
一応ジャック伯爵が

叫んだ言葉は分かりますが余りにも下品なので割合します」

「それで……どうなったのですか？」

そしてジュリオは少し黙り、意を決したかのように言葉を続ける

「無数のブレッドが直撃したはずのリユーガ殿が何事も無いよう

に立ち上がり

ジャック伯爵に近寄り・・・このような事に」

そしてジュリオは一枚の紙をヴィトーリオの前に差し出した

紙は魔法紙と呼ばれるもので簡単に説明すると写真のようなものだ  
その魔法紙に映し出されていたものは

両手両足を引きちぎられた一人の中年男性

そしてその男性の頭を鷲掴みにし返り血で顔を真っ赤に染めた無  
表情の青年

ヴィトーリオはその魔法紙を一瞬だけ見てすぐさま目を逸らした  
ジュリオは魔法紙をしまうと言葉を続けた

「それで決闘は終了となり、その後ジャック伯爵は一命を取り留  
めたものの、

一生車椅子の生活となりました」

「何故・・・そのような魔法紙が？」

「一応正式な決闘でしたので記録にあっただけですよ  
最もその後リユーガ殿に決闘を挑む者はいなくなりましたが」

「彼は何人もこのような方法で？」

「いえ、ジャック伯爵だけです」

その他の決闘をした貴族はすべて死んでいますが、どれもこのような残酷なやり方はしてはいません

すべて最初にわざと攻撃を受けていますが、何ごともなかったかのように立ち上がり

魔法か剣で一撃と言ったところです

これについてはどうやら両親を馬鹿にされ怒ったようなんですが……

驚きな事にリユーガ殿はこれを魔法を使わずしてやったようなのです」

その言葉にヴィトーリオはまさかと言った表情になる  
しかしジュリオはさらに言葉を続ける

「この決闘を見ていた立会人に話を聞いたのですが  
今でも夢に出そうだと真剣に言っていましたよ」

「……これは正式に計画の見直しが必要かもしれませんね」

「?…何故ですか?いくら強いと言っても個人ですよ?」

それに政治に疎いかもしれませんし・・・」

ジュリオがそう尋ねるがヴィトーリオは子に分からせるように言葉を発する

「所詮調べたと言っても、本人を見なければ何もわかりません  
それに私達の計画は繊細なのです、常に最悪を想定していなければいけません

分かりますか？彼が私達の脅威にはならないかもしれない、  
だからと言って彼と言う存在を知ってしまった以上、何も対策  
を取らないという選択肢はないのですよ

無駄だったとしても、それで終われば良いことはありません  
か？

実際に何か起こった時に予想していれば計画の内と考えられる  
のですよ

そのくらいの気構えでなければ最初から聖戦など起こそうなど  
考えませんよ」

「・・・流石は聖下、私もまだまだ考えがたらないようですね」

ジュリオはそう言い尊敬の眼差しでヴィトーリオを見つめる  
しかし

「ただ・・・」

「ただ？何でしょうか？」

先ほどまで自身ありげな表情だったヴィトーリオの顔が少し歪み言葉を続けようとするが

すぐさま持ち直しジュリオに笑いかけながら言葉を発した

「いえ、考えすぎも良くないでしょう、何もありませんよ」

「……？」

ジュリオはヴィトーリオの言葉が理解できなかったのか首をかしげるのみ

ただヴィトーリオはあることを考えていた

「（予想できればいいんですが……彼からは……何か嫌なものを感じますね）」

そう言いヴィトーリオはジュリオの持った書類の魔法紙を見つめた

ラグドリアン湖付近上空

「へくちっ!!」

「なんだ？風邪かリユーガよ」

「あー・・・なんか背筋が一瞬ゾクツとしたんだ」

「それはいかな、よし！今すぐ解剖しよう  
さあそこに横になれリユーガよ!!」

「アホか!!」

「お前・・・私の背中で何をしようとする・・・」

スパアンと心地よい音と共にウィルの頭を叩くリユーガ



「つーかよぉー、ビダーシャルは一万歩譲ってまだ分かるわ……でもな？」

お前が何でここに居るんだよウィル！！！！」

「なんでって……リユークの護衛だけど？」

あたり前のように言葉を発するウィルに  
ビダーシャルが呆れたように問いかけた

「ウィルよ……こいつに護衛なんているのか？」

「さあ？でも族長命令だし」

「は？なんでテュリユークの爺がそんなことを？」

「なんでもお前に死なれると困るんだと、それでインダス代表の私が駆り出されたわけだ」

「俺に護衛なんて赤子に対戦車ライフル渡すぐらい意味ないぞ？  
(ボン)」

そんなわけで、どうもリユー ry

めんどくさいんで名前を略すことを許されよ

ラーク便に乗り込み学院へと目下移動中です

久しぶりに自由だーって言いたいところだったんだけど・・・

何がかなしゅーてエルフ2人を従者として引き連れなあかんのや

・とりあえずお前ら

不細工にフェイスチェンジしろよ、話はそれからだ・・・

っと申し訳ない何やらもう一人の私が暴走したようで、見苦しい

所をお見せしてしまった

まあ、あの後イザベラと共に空の旅に付き合っただが・・・

あのじゃじゃ馬あるうことか途中で寝やがった、おまけに王族特

権で向こうの学院まで休みやがるし・・・

仕方がないのでじゃじゃ馬をベットに放り投げてまだ時間が余っ

たからインダスに顔出しに行っ

色々今後の為に根回ししてたらウィルが付いてきたんだよ、めん

どくせ

まあくだらない話はこの辺で・・・どうぞ

「はあゝ・・・まあ良いや、つーかお前ら耳隠せよ

向こうでエルフなんてばれたら大騒ぎだかな」

「それもそうだな・・・ついでに姿も変えた方がいいか？」

「私はそう言うことはあまり得意ではないのだがな……」

「なんだウィルは出来ないのか？」

「私は一応上位の使い手だがそう言うのは、な  
専門はあくまで風だし」

それを聞いたりユーガはニヤリとあくどい笑みを浮かべ  
ラークに話しかけた

「……ラーク、よろしく  
めっちゃ不細工に（ボン）」

「……お前らの基準などどうなのかは知らんが……」

そう言いながらもラークの角に光が集まって行きビダーシャルと  
ウィルに

まばゆい光が当てられる

2人はその光量に目をつむり目をあけると

「プツ・・・ハハハハ！！！」

「G」ラーク

ウィルはビダーシャルの姿を見て腹を抱えて笑う

その姿は全身ぽっちゃりとして顔にニキビが大量発生、おまけに全身が汗だくで見るだけで

暑苦しいと言った感じである

「ふむ・・・まあこんなものか？」

「・・・冗談・・・だよな？この恰好で行けと？」

「え？駄目？」

「いやいや、似合っているぞビダーシャル・・・ププッ」

「ウィルよ！お前は何も思わないのか！？」

「姿などどうでもよかるう、ククク・・・しかしこつも変わるものなのか・・・私も覚えようかな」

「いや・流石にここまで精密には変えられないと思うのだが・  
ッてそうじゃない!!」

「こんな恰好で行けば確実に貴族の令嬢に嫌悪されるだろうが!  
!」

「あー・それもそうか・・だがあえてこれで行く!!」

「冗談ではない・私は自分でやる・・うむ、これで・」

ビダーシャルが呪文を唱えると体が光に包まれるが

「・・・って何故変わらん!!」

「そりゃ、お前自身にかけてるんじゃないんだもん

光の屈折でそう見えているだけ、出てる腹さわってみ」

ビダーシャルは言われるままにたるみきった腹を触ろうとするが  
その手はスツと中に入って行く

「ほう・・良くできているな・・・ってだからそうではないだ  
ろ!!!!」

「ほ〜こりやすごいな・・・どう言う原理だ？」

ビダーシャルがリユーガの肩を掴もうとするも横からウィルがビダーシャルを押しつけ

質問する、そしてリユーガはビダーシャルを無視しウィルの質問に答え、原理を簡単に話していくと

ウィルは自分の世界に入っ行ってしまった

横ではビダーシャルが立ち上がり何か言葉を言っていたような気がするが

気付かれぬようにサイレントをかけたので無言で地団太を踏んでいると言っかなりシニールな光景である

「はいはい、冗談だからそんなに怒んなよ

ラーク、耳だけ通常サイズで」

「まったくかけると言ったり戻せと言ったり・・・」

再度ラークの角から眩しい光が放たれ

耳だけ通常サイズの姿に変わると、ビダーシャルは拗ねたのか、

その場で不貞寝し始めた

ウィルは自分の姿が変わったことなど気づいてもいないが

そのまま3人は無言で学院を目指すと急にネロが四系炉から現れた

「つと……どしたネロ？」

「あー……すまん、今思いだしたんじゃが……」

「実わの我の一部が今湖の水位を徐々に上げておる」

「は？」

「いやー最近すっかり忘れていての、えーっと確か4年ほど前に  
私の守りし秘宝が奪われたのだ」

ネロは申し訳なさそうにリユーガがにそう告げる  
リユーガは口を半開きにしポカンっと固まってしまった

「……おい、俺言ったよな？」

「そのうちそんなことがあるから嚴重に守れって」

「あ……えー……伝えたからな！！あとはよろしく頼む！！」

リユーガがジト目でネロを睨むとネロは早口でそう言い四系炉の  
中へと潜って行った

残ったリユーガは頭を抱え忌々しそうに言葉を小さく

「はあゝ・・・面倒増えた・・・」

リユールガの苦悩はまだまだ続く!!



## 二十六話（後書き）

つとどうでしたでしょうか？

あまり時間をかけていないのでちょっと作者としてはものたりなかつたりもします

もつとビダーシャルをいじりたかった・・・

それと皆様に軽い質問です

題名なんですが、狂わされたryとあれ？学院ry

みたいに明らかに題名が変わり過ぎているんですが、どうでしょうか？

違和感を感じる方はどんなこの駄文な作者に言っっちゃってください  
不評が高ければ題名を似たような感じに統一しますので

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

二十七話(前書き)

・・・燃え尽きたよ・・・

はい、初っ端から訳の分からないことを言っている駄文な作者です  
今日は皆様に嬉しい?お知らせがありマッスル

ノフフ ム、  
ノノ )、>モキュ  
ノ一(、・、)ノ(ム)ノ  
ノノフ、|く、\ノ  
ノノ。ノ、。一ノ  
、、|人、|人、|ノ  
、、|人、|三ノ  
ノ r、十、ノ  
ノ、、|ノ十

何かというと

仕事がひと段落ついたんだよねb  
やっほー自由だぁー!!!!!!

と、そこまではいかないんですが今後の投稿スピードは2 3日に  
一回程度はお約束できるかと思えます  
今まで不定期更新にイライラしていた方もいらっしやるかと思いま  
すが

これからはそんなことはありません（多分）

そんな感じで嬉しさのあまり書きました

とはいっても所詮休憩の20 30分で書いた穴だらけの一話です  
が・・・どうぞ

## 二十七話

『自由』

ある者は身体的に縛られていない事だと

ある者は社会的・政治的に制約されていない事だと

ある者は負債を負っていない事だと

だが俺は違う

俺の定義する自由とは

魂こゝろが縛られていないことだと思っ

しかし……これはあんまりでは？マミー

ぶーー 一二三二二) ^ ^ (二 ー ー ー ん ……すぢぢ

どうも空から失礼しマンモス、リユール

名前を略すことを許されよ

ふふふ…ハハハツハハハ、学院よ私は帰ってきた!!!

思えば長かった…そうあれは風が強いある日のこと…え

?そんなことなかっただろだって?

いいじゃんこう言うのはその場のノリでさ!!

まあ実際に何度か顔出してるんだけど

実際会っていたのは学院での知り合いはギーシュとステイルだけしかも2 3時間程度でエルフの集落にとんぼ返りor

ガリアに直行とかさせられてなお且つ長期休暇で来ていないから、俺的時間間隔で

ここ2年は学院に訪れていなかったと思うから嬉しい訳なのだよ最大の山場は越えたから後は原作開始までのんびり出来るはずさ、

H A H A H A

さてと・・・おーおるわおるわ、主に俺に近寄ってくるのはおなじみステイル&amp;mp・ギーシュだが・・・

花はないんですか？

つと？おお向こうから3人娘が!!良いねえ、エルフの女子達も悪くはなかったがやはり

この3人は落ち着くのう・・・ってあれ？シャルロットさん？なんか駆けてくるスピード早くないですか？何故俺の手前3メイ  
ル付近で

此方に飛びかかってくるのです？あるえ・・・なんか・・・急に視界  
が遅く・・・

「連絡一つよこさないで今までどこ行ってたのよ!!!!!!

ゴルアアアアアア!!!!!!」

「ゴフッ!!!!」

リユーガは頭から突っ込んできたシャルロットタツクルによって

体がくの字に曲がり、10マイルほど吹き飛ばされ壁にめり込んだ  
強烈なタツクルを繰り出したシャルロットはなんなんくその場に  
着地し吹き飛ばされた

リユーガにズンズンと歩み寄る

そしてシャルロットは壁にめり込んだリユーガの襟首を掴み上下  
激しく揺さぶりながら言葉を発する

「リユーガは一応私の護衛でしょ!!!なのにほったらかすなんて  
どつ言つつもりよ!!!」

叔父様に聞いても『あいつは旅に出た・・・そう長い旅にな』つ  
て虚ろ目で返してくるだけだし」

「ちょ・・・待つつんだシャル、そうだKOOOになれKOOOに  
俺はただ・・・」

普通に真実を伝えようとするリユーガなのだが  
しかしリユーガの脳裏にジョゼフとのあるシーンが浮かんできた

それはギーシュとスタイルを連れて行ったとジョゼフに報告した  
ところから始まった

「・・・はあ、お前な一応このことはガリアの極秘事項なのだ  
ぞ？」

それなのに他国人を連れて行くとか・・・」

「え？別に教えたの二人だけだしあいつらトリステインの貴族だぜ？」

坊主どもが探りいれるとは思わんが……」

「アホか、トリステインの貴族なぞ坊主どもが始祖のなんちゃかんちゃら」

とか言ったら極秘事項だろうが国の財政状況だろうがホイホイ答えてしまうのだぞ」

「どんだけだよトリステイン、やっぱ王座が空だからかねえ……」

まあ大丈夫だと思うぞ、一人は伯爵家の4男、もう一人は子爵の3男だし

よほどのことがない限り、坊主どもも気にしないだろ」

そう言い気にしなくても良いとジョゼフに言うが  
ジョゼフの表情はまだ険しい

「はあ……リユーガよお主は自分では気づかないと思うが……」

もし俺がロマリア側ならば真っ先にその2人に聞き込みに行くぞ」

「は？なんでだよ」

「俺だったらまずお前に興味が行き  
お前の周りを調べる、するとよくつるんでいる2人がわかるわ  
けだ

後はもう分かるな？」

「……あの2人に釘どころか破城槌差し込んでくるわ  
絶対に言わないように」

「まあ、どうしようもなくなったらお前のところにも匿ってし  
まえ

こっちもシュヴァリエ位なら用意してやる  
それと姪が何か質問してくるだろうから……」

そう言いジョゼフは解決案を口にする

「本当にそういえば納得するんか？」

「ああするとも」

「……まあ言ってみるぞ、そんじゃ俺は行くぞ」



そう言いリユーガは部屋を早足で出て行く  
ジョゼフ部屋を出て行ったリユーガの後姿を眺めどこか嬉しそう  
に小さく微笑んだ

さて現在に戻ろう

リユーガはジョゼフにこう言えば納得すると言われた言葉を口に  
出す

「俺はただ・・・旅行に行っていたただけだ・・・」

しかしリユーガは気づいていなかった、あのときジョゼフが心の  
中で笑っていたことを

「イザベラと!!!」

そう言葉を出した刹那、場に沈黙が下りる  
ギーシュやステイルは何のこと？と首をかしげているが  
ルイズとキュルケが同時にこう言葉を出した

「最低ねリユーガ」

「は？・・・え、ちよなぜゴミを見るかのような目線で俺を見るんだ？」

ちよ！シャル・・・様？なぜ杖を御だしに？

待った！！その呪文カッタートルネードだよな？シャルツてトライアングルじゃ・・・

だからなぜ杖を俺に向けるうつつつつつつ！！！！」

そついいリユーガは走り出した

後ろからは目から光が消えたシャルロットが放つ真空の刃が迫ってくる

リユーガはどうすることもできずその後シャルロットが精神切れで倒れる

夕暮れまで逃げ回ったとき、余談だがシャルロットはこれが原因でスクウェアになった

そんなこんなで命からがら逃げ切ったリユーガは自室へと戻っていた

ボロボロのリユーガを待っていたのは・・・

「・・・なんぞこれ」

最大の山場は越えたから後は原作開始までのんびり出来るはずさ、  
H A H A H A

そう思っていた時期が俺にもありました

リユーガが自室で見た一番最初のものそれは紙の山脈  
見渡す限り人の身長ほどあるうかという紙の山の数々

それはガリアの火竜山脈にも引けをとらぬだろう、10分ほど口  
をあぐり開け固まるリユーガ

そして我に返ったリユーガは一番手前にある紙の山の上に可愛ら  
しい封筒が目に入り

封筒を破り手紙を読む、そこには

『親愛なる息子へ

お元気でしょるかリユーガさん、長期休暇に一度も顔を出さな  
いので私たちは心配です

そんなわけでプレゼントと共に手紙を送りたいと思います

それでプレゼントなんです、残念なことに父リユーブが諸事  
情により腰を痛めてしまい

雑務に集中できず、書類が溜まる一方なので療養を取ることにな  
りました

そういう訳なので其方に送りたいと思います

決して顔を出さなかったからと言っわけではありません  
私たちは息子に新たななる試練を与えようと、成長していく息子  
に嬉しいのやら悲しいのやらと

複雑な私たちですが・・・その書類頑張って片付けてね  
追伸

貴方も、もう直ぐお兄ちゃんよ・・・母レイより』

「・・・はああああああああああ！！！！」

リユーガは読み終わると同時に肺から空気を全て吐き出すかのよ  
うに叫んだ

その叫びを聞き隣の部屋のステイルがリユーガの部屋を覗く

「どうしたんだい？リユー・・・おわッ！・・・なんだいこれ・・・

「ふつつつつつざっけんなよおおお！！！！

こちらら定期的にハーク領と騎士団からの書類も来るんだぞ！

！！！！

無理だつて何だよこの量！！つーか親父もピーー（自主規制）  
して腰痛めて療養とかどんだだけだ！！！！

まあ・・・弟か妹が欲しくないわけじゃないけど・・・ってちが  
あああああう！！！！

「ハハハ・・・リユーガも・・・大変だね・・・ダッ！！！！」

ステイルは頭を抱えながら絶叫するリユーガに何か嫌なものを感  
じすぐさま自室へと逃げようとしたが

「ガシッ!!……どこに行こうというのかね？」

「いやぁ……ちよつと……提出物が溜まっていてね……」

「それは大変だ、だが俺のほうで溜まっている……所でこいつ  
を見てくれどう思う？」

そういい万力のごとくステイルを掴んでいる手とは逆の手で後ろ  
にある紙の山脈を指差すリユーガ

「すごく……多いです……」

「多いのは分かってるさ、このまま俺一人じゃ終わりっこない……

だからさ……一緒にやら……ない……か？」

「……だがこと……貴様に拒否権などない」……待ってくれ  
!!……そんな……無理だつて!!……

あ、ああ、アーーーーー」

そのままステイルはリユウガの自室へと引きずり込まれた

## 二十七話（後書き）

どうでしたか？

あまり時間をかけていないので、シャルロットのところとかもって書きたかった

（．．．）シヨボーン

まあそんなこんなで不定期更新脱出？したわけです

前のように一ヶ月開くようなことはありません（多分）

これからもこんな駄文でよろしければ見てやってください

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 二十八話（前書き）

・・・仕事が早く終わるって素晴らしい！！！！

あはは、俺nowイケテル！！

・・・

はい、自由な時間がうれし過ぎてバク宙したら足捻った駄文な作者です

初っ端から意味の分からないことをベラベラと申し訳ない

今までの反動でここまで自由な時間があるって素晴らしい！！って気付いてしまった私をどうか責めないでいただきたい・・・

それと次回は5月24日キリッ！とか調子こいてやってしまいました  
たが

早まる分にはいいですよね！・・・いいのかなあ？

まあグダグダな前置きはこの辺で、どうぞ



## 二十八話

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ  
ガリガリガリガリ

ガリガリガリガリガリガリくそんガリガリガリガリガリガリガリガリ  
ガリガリガリガリガリ

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリバー旅行記ガリ  
ガリガリガリガリガリ

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガ  
リガリガリガリくん

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガ  
リガリガリガリガリ

ガリガリガリガリガリガリおっさん召喚の儀式ガリガリガリガリガリガリ  
ガリガリガリガリガリ

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ  
……

「……なあ……もう……ゴールしても……言わせねえー

よ」……

「はあ……3日であらかた片付いたとはいえ……まだこんな

に……」

そう言いリユーガは一つの紙の山に目を向ける

3日前はリユーガの部屋を埋め尽くすほどの山脈が一週間で平山と化していることから

リユーガの事務能力と指揮能力の高さが分かるだろう

無論リユーガはこの山を切り崩す際に一人で立ち向かおうなど考え  
えず

最初に嫌がっていたステイルをなんなく引きずりこみ、後にビダ  
ーシャル、ギーシュと巻き込んだのである

ちなみにどうやって引きずり込んだのかと言うと

ステイル

「無理だつて!!と言うかそもそも僕が君の実家や騎士団の報告書とか見ていいわけがないだろ!!」

「俺が今許可したから、大丈夫だ、問題ない」

「問題だろ!!!・僕は絶対にやらないからな!!!」

そう言いステイルは部屋を出ようとドアノブに手をかける

「そうか・・・残念だ、折角ジャネットがお前のことを聞きたがっていたのだが・・・実に残念だ」

そうリユーガが言葉を出すとステイルの動きがピタリと止まる  
それを見たリユーガはニヤニヤと悪質な笑みを浮かべ、ステイル  
に問いかける

「ん？どうしたステイル、部屋に戻るんじゃないのか？

俺は今からものすごいく不本意だが、この紙の山脈と戦わ  
ねばならない

さあ・・・もう用はないだろ？」

「・・・最初に言っておくが、僕はあまり事務はできないぞ」

「俺の言う通りにやればいい、さあ地獄へようこそ」

「クソッ・・・」

そう言いリユーガの指示で黙々と書類と戦い始めたステイル

ギーシュ

ギーシュは中庭や広場などで自分がスクウェアクラスであること  
をさりげなく自慢していた

そこへ

「ギーシュ！！助けてくれ！！お前にしか勝てない敵がいるんだ！！」

リユーガがハリウッド真っ青な演技でギーシュの前に転がり込む

「ハツハ、ほら見たまえ、あのリユーガですら僕をこつやって頼ってくるんだぞ

僕の言ったことは嘘じゃないってことが分かったかい？」

「そんなことは良いから、早く来てくれ！！」

「分かったって、そう焦らせないでくれたまえ  
何だろつが僕が蹴散らしてやるさ」

しかしリユーガが手を引いて行った先はリユーガの部屋である

「……ここは君の部屋じゃないか、何だってこんなところだ？」

「……ようこそ地獄へ」

「は？……ちよ……」

そのままリユーガはギーシュを部屋へと引きずり込み  
地獄の扉は固く閉ざされた

ビダーシャル

ビダーシャルは一応リユーガの従者として学院に入ってきたため  
既にウイルと共々自室があり  
そこで読書をしていたがそこへ

「手伝え」

「断る」

ビダーシャルは部屋へ音もなく侵入してきたリユーガの申し出に  
内容も聞かず返答する

リユーガは少したじろぎ、再度言葉を発する

「おやおや、ビダーシャルともあるうものが内容も聞かずに・  
大方あの紙の山のことだろう?」・・・

「先ほどのギーシュとのやり取りは見せてもらったからな  
私は絶対に手伝わん」

そう言いリユーガを部屋から追い出すようにシッシッと手を振る  
ビダーシャル

「そうか・・・実に・・・残念だ」とか言っても私には通じん  
ぞ」・・・  
「ならば実力行使!!!」

手をすべて潰されたのかリユーガはビダーシャルの襟首へと手を  
伸ばそうとするが  
見えない壁のようなものに遮られる

「既に契約済みだ」

「・・・上等!!精霊さんそこちょこつと退いてくれませんか?」

見えない壁に遮られたリユーガであるが急にその手の先へそうお  
願いと  
ビダーシャルを包んでいた見えない壁が消え、再度手を伸ばすが  
ひらりとかわされる

「そう言えば貴様は精霊が見れるのだったな!!!  
だが、当たらなければどうということはない・・・何い!!!」

「フツ・・残像だ」

そう言うつとリユウガの手を伸ばしていた方が消え、後ろからビダ  
ーシャルを羽交い絞めになっている  
リユウガが答える

「力技で残像を出すんじゃない!!!」

「試してみたら出来ただけだ、さあ一緒に地獄に行こうぜ」

「は、離せええええええええ!!」

「(。(アアアアきこえない」

ふざけつつもビダーシャルを連行そのまま強制労働となつたわけだ

そして現在

初っ端から3日の無断欠勤を決め込み  
3徹のギーシュとステイルは愉快な格好で床で寝ている  
唯一起きているのはビダーシャルだけだ

「まあ……ここまでやってくれりゃ後は俺だけで大丈夫だろ、もう戻って良いぞ」

「……これは礼だホレ」

そう言いリユーガは懐から拳ほどの大きさの白い水晶のような物をビダーシャルに投げる

「ぬ？……これは？」

「ウイルに頼んで作らせたもんだ、俺もちよいと手を加えてる  
まあ科学と魔法と悪ノリから生まれたもんだ」

「悪ノリと言つところが激しく不安だが……どうやって使うのだ？」

「自分の影にそれ落としてみ」

「？……どうか？」

ビダーシャルは言われるがままに手に持った水晶を自分の影へと落すと

水晶は影に吸い込まれるように消える



「・・・大丈夫なのかこれ？」

「俺で実験済みだ、そんで後はこうやって・・・」

リユーガが自分の足元に魔力を張り巡らせて行く  
と影から、黒い甲冑がよきつと生えてくる

「な!？」

「つとまあ、こんな感じだ」

そして黒い甲冑がガシャンと重そうな足を上げ歩き出す

「な、なんだこいつは!！」

「俺とウィルが悪ノリで作ったもの・・・それがこのアスラマキナー機巧魔神だ!  
」!

「あすら・まきーな?聞いたこともないが・・・」

「まあ名前とかキニスナ、細かいところ気にしすぎると色々危険だから」

「まあ、その辺は置いておこう、それで？このあすら・まきーなとやらは何なのだ？」

そついいビダーシャルは動きもしない黒い甲冑を指差す

「んとな・・・ぶつちやけるとまだよくわかんない」

「は？」

「最初はこうじゃなくてもう一人の自分、まあドツペルゲンガー作ってみよう！」

つてのが事の始まりでな、俺の知ってる知識をウィルにまる投げしたらさつきみたいいな水晶ができて

それを影に放つて影を媒介にもう一人の自分を作ろうとしたんだが・・・

最初は人とは呼べるものじゃなくてな、こう・・・影の棒人間みたいだったのを少しずつイメージしていったら

なぜかこうなったから、とりあえず俺はこれに似たものを知っていたからアスラマキナー機巧魔神

と名付けたわけですよ

まあ自分の意思道理に動く人形とでも思ってくれ」

そうリユーガが言うと黒い甲冑はその場でシャドウボクシングを始めたり

バク宙したり、黒い重力の塊を放って床を陥没させたり……

「っとうおおおおおい、なんだそれは!!!!」

「え?……ああこれは俺の知ってるイメージがかなり前面に押し出された結果だ」

簡単に言うと俺の黒鐵は重力操作ができるわけですよ、はい」

「……まさか今私の影に入ったものもこんなとんでも能力を秘めているのか?」

「俺の記憶を植え付けといたから、なればビダーシャルには白銀ってやつができるはずだ」

ちなみに能力は次元を切り裂くことができるぞb」

そう言いリユーガはビダーシャルに満面の笑みで親指を立てる  
しかしビダーシャルは頬をひきつらせ、どこからか出したハリセンを振りかぶる

「貴様は何と言うものを生み出しとるんだああああ!!!!」

スパアアアンっと良い音が部屋の中で響き、リユーガは頭を抱えた  
そしてビダーシャルはハリセンを方に担ぎリユーガに質問をする

「それで？先ほどの水晶を貴様らは幾つ作った？」

「ちょ・・・おま・・・どこからそんなもんを・・・」うるさい質問に  
答える、もう一発行くか？」

・・・俺とお前を含めた7つだ・・・イテツ！・・・質問に答えた  
のに何で叩くんだYO！！」

再度叩かれたリユーガは抗議するが

ビダーシャルはハリセンを持ったまま呆れ顔でリユーガに言葉を  
出す

「はあ・・・それで？これを何に使うつもりだ？」

私の持った白銀とやらの次元を切り裂くとかそんな能力、下手  
をすれば国が落とせるのではないのか？」

「俺はこれを自衛程度にしか思っていないが・・・やっぱり国に  
落せちやうかね？」

ちなみに本気でやればこれの三倍以上の大きさになるけど」

「……呆れて何も言えんな、ツと言っかリスクとかはないのか？」

「リスクと言っか……実際これ常人なら出すのも無理だと思うわけなのですよ

まず発現させるのに……俺は苦にはならんが、そこらのメイジなら

一瞬で消えちまうから、そう言えばお前出せるか？」

「ふむ……どうか？」

そう言いビダーシャルは足元に魔力を流し込んで行く  
するとビダーシャルの影から手のひらサイズの白い甲冑がよき  
つと現れる

「ほう……この程度の大きさならばあまりに苦にならん……  
どれ……次元を切り裂くと言う奴を……」

そうビダーシャルが呟くと白銀は刀を抜き放ち、振るう  
すると白い甲冑はビダーシャルの手のひらから一瞬でリユーガの  
方の上に乗る

「……ここまでとはな……リユーガ程の大きさならば一体ど  
のような事が出来るのやら」

「フルサイズなら一発で国が割れるな、物理的な意味で」

「最早何も言つまい・・・まあこれはエルフ側への戦力として受取っておくぞ

後、これ以上これを量産させるなよ、もし人の手に渡れば戦争が酷いことになる」

「あー、作りたくても作れないさ、7つ作ったところで  
ウィルが軽く発狂していたから」

「一体あ奴は何をしたんだ・・・まあ、私はそろそろ部屋に戻る、  
流石に3日も起きていては身が持たぬわ」

「おーう寝る寝る」

「言われなくても、な」

そしてビダーシャルは軽くあくびをしながら部屋を出て行く  
リユーガは愉快な格好で床でいびきをかいている2人に毛布をかぶせると

残った書類に取りかかって行った



## 二十八話（後書き）

どうでしたでしょうか？

今回出した機功魔神はなんだかモロわかりますよね？

駄文な作者は出そうか出さないか激しく迷いましたが、最終的に出しちゃいました

当然ステイルとギーシュ、さらに残りのオリキャラも機功魔神を持つこととなります

それでベリアルドールを精霊、ドウターを7魔とするので

結果4大精霊出すことにしました

作者が勝手にどんどん決めて行ってしまいますが、どうかお許しをそんな訳で次回はオリキャラ一名と新たな魔族一体が登場します

お楽しみに！

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております



## 二十九話（前書き）

PV30万突破

ありがとうおおおおおおおおおござああああいまっすん

.....

どうも嬉しさあまりにバク宙して捻った足が

洒落にならない位腫れてきた駄文な作者です

.....病院行った方が良いかなあ.....

まあそんなことは気にせず今日も自由な時間がたっぷりあったおかげで

書けました、この投稿スピードを維持できるよう頑張ります!!

そんな訳で本編へGO!!!.....ちなみに題名は名曲をちょこつと弄りましたが余り意味はないです

## 二十九話

自由を勝ち取った一週間後の虚無の曜日

未だ定期的に書類は送られてくるもののある程度の自由を勝ち取ったリユーガしかし

リユーガ達御一行はアスラマキナ機巧魔神の性能試し+ステイル達の特訓という名目で

ガリア辺境の村付近にあるアーデルト湖入口、無秩序な森へと来ていた

アーデルト湖には多種多様の幻獣、亜人が多く住んでいて度々国軍が追いつくと感じた感じがのだが、今回リユーガの元へと舞い込んできた依頼は

今までアーデルト湖に現れた幻獣、亜人とはレベルが違った鬼が現れたのだ、鬼と言っても、オーク鬼やトルル鬼と言った亜人ではなく妖魔、

そう吸血鬼である、それも1匹や2匹ではない、普通集落を作らぬはずの吸血鬼が

なんとアーデルト湖に居を構えたのである、勿論ガリアは2個中隊、約100人を向かわせた

今まで集落を築いた吸血鬼など存在せず、双王ジョゼフとシャルルは過剰戦力とも思えるほど向かわせたのだが

2個中隊は呆気なく壊滅した

さらに2個中隊の中には何人か血を吸われた者もいるが一人も死亡者が出ていないのが

また不気味なところである

そして中隊長の証言を聞いたところ、

中隊長はアーデルト湖どころか湖がある森に入ることすらできなかったという

気が付き周りを見渡すと、中隊員が全て倒れたと言っ  
そんな訳で2個中隊以上の戦力を出すか、隠し玉リユーガを出すかと悩ん  
だ末、

結局はリユーガが向かうこととなったわけである  
そんなこんなで森林を進んで行くリユーガ御一行、  
しかし一向に湖が見えないのでギーシュはいらいらとしていた

「はあ・・・はあ・・・あーもう！！一体何時になったら着くん  
だー！！！！」

「黙って歩けよ、そのうち着くさ」

「その言葉、一体何回目だい！！  
それに後一体何回言えば気が済むんだ！！」

「23回目だが？ちなみに付くまで永遠に言い続けるぞ」

「だあああああああ！！」

リユーガの言葉に絶叫し、頭を掻き毟る

「全く……五月蠅い奴だ……」

「しかし、もう2時間は歩いているぞ……湖どころか水の精霊のすら感じられんな」

「……あ……リユーガよネロ様に聞けば良いのでは？」

ビダーシャルが思い出したようにリユーガに告げると  
リユーガは手をポンツと合わせ、腕を前に上げる

「そうじゃん……おいネロやーい」

「まったく、此方の住処は探さず、こう言う時にだけ呼びよって……」

リユーガの手首に付いている四系炉から水が溢れ、不満を口に出しつつネロが現れる

「まあまあ、今行くところが住処候補だから」

「そんなのか？そうだな……水脈は……感じられぬ」

「は？・・・それは湖が無いってことか？」

「いや・・・水脈はおろか、我に関する者達が一切感じられぬ・・・  
おそらく我と同等の力を持ったものが

一か所に集めておるのだな」

「水に関する・・・？」

リユーガはネロの言葉に歩を止め考え出し、急に膨大な領の魔力を垂れ流し始めた

「何をやっているんだい？」

「反応・・・なし・・・か」

リユーガの突然の行動にステイルは問いかけるが  
ステイルの問いに気が付いていないのか今度はリユーガの存在感  
が大きくなって行く

しかしリユーガの存在感が大きくなって行くが、周りに変化はな  
い  
するとリユーガから発せられる気を発散させ、溜息をついた

「はあく・・・そんなコツチか・・・ハッ！！」

「リユーガよ・・・一体何をしているのか説明ぐら・・・い？」

「そう言えばステイルとビダーシャルは始めてみるんだっけ？」

ビダーシャルとギーシュは変貌したリユーガの右腕をマジマジと見つめる

「話には聞いていたが・・・禍々しいな」

「それで、魔人化？してどうするつもりなんだい？」

「俺の予想道理なら・・・ネロ、何か感じないか？」

「・・・向こうから微かだが我に関する者の気配が感じられる」

そう言いネロはある方向に指を向ける  
するとリユーガは面倒臭さそうに溜息をつく

「・・・これに反応したってこたー・・・あーやだやだ  
・・・お前から先に近くの村に行くぞ

ネロ、ラーク叩き起こせ、うだうだ言ったら殴れ」

「え？ちよつとリユーガ！！説明ぐらい・・・」

リユーガはネロの差した方向とは逆へと歩き出す  
しかし、ビダーシャルはずつとネロの指差した方を見つめ続ける  
そしてネロがとたんに叫ぶ

「お主ら走れ！！！！ドデカイのが来るぞ！！！！」

「ドデカイ？・・・一体何が来るって言うのさ？」

「はあく・・・藪蛇だったか・・・」

「この・・・膨大な・・・精霊の力は・・・」

「ビダーシャルさんまで・・・スッ」

ステイルがそう呟くも、その場で軽く上に視線を向け状況を把握  
すると

おとなしくリユーガの背に隠れつつ、ギーシュをリユーガの後ろ  
に引っ張る

「お、おいステイルまで一体何だっというのさ」

「……………」

ステイルは無言で少し上へと指を向ける

すると遙か上空に巨大な水の柱がふよふよと浮かんでいる  
そして巨大な水の柱は唸りを上げ此方に迫ってくる

「舐められたもんだな……ビダーシャル、よろしく」

「さっそく使わせていただくとするかな……出る、白銀!!」

「ほー……腕だけとはいえ一週間でフルサイズとは、恐れ入る」

ビダーシャルが腕を前に突き出すとその手の陰から巨大な甲冑の腕が現れる

甲冑の手には一振りの刀、甲冑がその刀を迫る水柱に向かって振るう、するど

「……………消えたな」



「ああ・・・消えたな」

刀を振るった直線上のあらゆる物質、水柱、木々はおろか直線上の空気まで消え

消えた空気が戻ろうとしてその場に突風が吹き荒れる

ビダーシャルの帽子が突風によって宙を舞うが、ビダーシャルは手を伸ばすことなく

死んだ魚のような目で突風に煽られている

「・・・これはできるだけ使わないようにしておこう」

「よかったな、これでお前も化け物の仲間入りだ」

「嬉しくないわ!!!」

ビダーシャルはハリセンをどこから取り出し、リユーガへと振るうが

リユーガはそれを軽く避け、なおも上空に視線を向けている

「ほーれ、まだまだ来るぞ」

そうリユーガが言うと全員が上空へと視線を向ける

すると先程よりはるかに大きな水柱が10本ほどこちらに向かってくる

「何本こようが、すべて落とせるだろう・・・リユーガならば」

「え？俺がやんの？白金でやりやいいじゃん」

「こんな危険なものは非常時以外は使わん、  
ひと振りですれだけの被害を出すか分かったものではないから  
な」

そう言いながら白金はビダーシャルの影へと戻っていく

「つたく、しょーがねえな・・・」

嫌がりつつもリユーガは腰に差した黒翼を抜き放つ

そして右腕だけを魔人化させ、真つ黒な刀身に膨大な量の赤黒い  
魔力が流し込まれ

魔力を纏った黒翼を横に振るう

「とりゃ・・・まじーんけーん」

不抜けた掛け声とは裏腹に高速で刀を振るうと  
水柱がピタツと止まり、絵がずれるように10本の水柱は地に  
落ちる

さらに周りにあつた木々も同様に横にずれ地に落ちたことから、  
リユーガの振るつた刀は直線上にあつたものを  
全て切り裂いたようだ

「「「（。。）ポカーン」「」」

「こんなもんかね・・・っとまだ次が来るのかよ

おいアホs、口開けてる暇があつたらさっさと逃げろぞ、キリ  
がねえや」

それだけ言つとリユーガは走り出す

三人はリユーガの起こした現象を見て

「ビダーシャルさん・・・」

「・・・何も言つな」

三人は呆れつつもリユーガの後を追つていった



## 二十九話（後書き）

どうでしたか？

やっぱり主人公を強くしすぎて、あれ？主人公以外いらなくなっ  
つと思う方もいらっしやるかと思いますが、これからは基本リユ  
ーガはあまり戦闘しない予定です

必要なときだけ颯爽登場！敵を舜殺！バイバイキーンって感じで  
ほとんどオリキャラたちが頑張ります

まあ主人公が無双しすぎてもつまらないと思うので・・・

こんな駄文をここまで見てくださってありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしています

### 三十話（前書き）

どうも、バク宙してひねった足が腫れて、尚且つ青ざめてきた駄文な作者です

でも痛みはないふっしぎ・・・病院行きましたよ・・・医者が

「あゝ・・・思いつきりひねっちゃたのかなこれ？結構ひどいよ」  
って言ってたけど・・・気にしなゝい

はい、駄文の作者のことなどどうでもいいですね  
ちやっちやと読みどばして本編へどうぞ

## 三十話

私は変わった

そうまさに言葉道理に変わったのだ

それは偶然の出会いだった

深夜、何かを感じるように私は部屋のカーテンを開けると

其処には彼がいた

私は彼を見たときに思った

この人は何かが違う、と

そして彼は言った

「お前からは惹かれるものを感じる」

「今自分の状況に納得していないのではないか？」

私は言葉を出すことができずただ彼を見つめるだけ

彼は無言の私に何故か関心したようにまたその低い声で私に問い

かける

「お前は何かを求めている、私はその何かに興味がある・・・それをを見せてくれないか？」

彼の言葉に私は無意識のうちに首を縦に降っていた

「そうか・・・ならば、私はお前にチャンスをやろう  
なに、簡単なことだ、変わるか、否か、・・・ただそれだけだ」

彼の言葉に私の鼓動は早まり、体中の血管が破裂しかねるほど血液が巡るのがわかる

そして彼の顔が私の顔へと近づき・・・私の意識はそこで途絶えた

.....

フハハハッハ栄えある王の凱旋である、我をたたえ.....



あれ？そんな空気じゃない？

初っ端からエア―をデストロイしてしまいました・・・申し訳ない  
そんなわけでどうもリユーガ・F・ド・S・H・ブラッドリーです  
フラン  
シュヴァルエク

久々にルビつけてもらったよ！！・・・ルビってなんだ？  
まあ世界を崩壊しかねる事はそっちのけで現在進行形で説明させ  
てもらいましょうか

俺たちは迫り来る水柱から必死の思いで、なんとか逃げ切り近く  
の村にきています

・・・あれだね、村の第一印象は寂れてるだね、若者どころか人  
っ子一人イナツシング

近くに吸血鬼の集落が出来りやしやーないか  
そんなわけで俺たちはこのサビエラ村に来てまーす・・・何か  
この村の名前聞いたことあるんだよな・・・  
ま！気にしない方向で・・・いいのかなあ？

「なんとというか・・・活気がないなこの村は」

「そんなこと言っちゃダメだろギーシュ、近くに吸血鬼が住みつ  
けばそりゃみんな逃げてくって」

「しかしこれはな・・・」

村についた一同の感想は寂れている、活気がない、荒れている、と家の外には人が誰ひとりいなく、田畑は荒れ

村の至るところに遣りっ放しといった感じで農具がほかられており、カラスが群がっついては

彼らがそう思うのも無理はないだろう

今もリユーガ一向にそこらの家から視線が感じられることから少なからず人がいると判断したリユーガは周りを見渡す

「さて……ここの領主は……と」

「あれじゃないのか？」

ビダーシャルがある方向に指を指す

一同はそこに目を向けると1キロ程先に少し小さめだが立派な屋敷が見える

リユーガはその屋敷へと足を伸ばそうと、歩きだした瞬間

日が暮れると同時に一つの民家の扉が開かれ

中からフードのようなものをスッポリと被った小さな少女が現れリユーガ達に問いかける

「おにーちゃん達は……誰？」

「エルザ!!よすのじゃ……早く家の中にお戻り

すませせぬ貴族様、そのお足を止めてしまい」

少女の後ろから出てきた老人がリユーガ達に頭を下げる  
リユーガは交渉の時のような柔らかな仕草で老人に近寄り声をか  
ける

「いえ、構いませんよ．．それよりこの領主様はいらっしゃる  
のかな？」

「それが．．領主様は王宮に行つたきりで．．

あの屋敷にも今は少しの使用人と領主様の娘様が一人いらつし  
やるだけで．．．」

「．．．娘？」

(この領主逃げやがつたな)

「はい、吸血鬼が湖に居を構えてすぐ、一度領主様のお屋敷に吸  
血鬼の襲撃があり

残念なことにユーリ様の兄上と姉上が命を落とし、今は一人だ  
けとなつてしまいましたか．．．」

「そのユーリ様という方のこと、もう少しお聞かせ願えますか？」

「え、ええ．．では．．．」

老人はユーリと言う領主の娘のことを語っていった  
名前ユーリ・アレクト、年は12歳で水の使い手らしい  
ここサビエラ村以外に後2つ程小さな村を管理している  
王宮から派遣されたヘルツド・アレクト男爵の三女  
アレクト男爵は元々子爵で今は潰えた伝統派の数少ない生き残り、  
その末端の席に付いていたことから王家に潰されはしなかったが  
男爵に降格させられ

このような辺境の村を与えられた、最近来たばかりの管理者だそ  
うで

村のことに何も口を出さぬくせに税金ばかり搾取していたため、  
人気はなかったそうだ

しかしユーリは家から髪の色で疎まれていたらしく、家から度々  
抜け出し

村に来ては、同年代の子供と遊んだり、水の魔法で簡単な治療を  
していたことから

ザビエラ村だけでなく、他の2村でも領主以上の人気があるとい  
った感じで

「しかし・・・先日の吸血鬼の襲撃によって兄上と姉上を無くして  
しまい

領主様に至っては帰ってこないといった有様なので、最近はお  
まりお見かけしておりません」

「・・・そうですね・・・ありがとうございます

後・・・いいのですか？抜け出そうとしていますか」

「は？」

リユーガはお礼を言いつつ家の中へと指を向ける

老人が振り返ると同時に先ほど出てきた少女が家の窓から外へと飛び出そうとしていた

しかし老人が老人とは思えぬほど俊敏な動きで今にも外に出ていきそうな少女を捕まえ怒鳴る

「エルザ！！あれほど日が暮れた後外に出てはいかんといったであろつが！！！」

「だって・・・おうちの中つまらないんだもん」

「せめて日が出ている間にしてくれと・・・」

そのまま老人は少女を諭すように説得をし始める  
リユーガは無言で扉をしめ、三人の元へと帰っていく

「何か聞いたのか？」

「まあまあだな・・・ある程度予想は立ったが・・・おっ？  
やっとな来たか・・・何やっとなるんだあいつは」

リユーガが空を見上げるとはるか上空にラークがいて森林に向か  
って何度か光を放ち

リユーガ達の元へと降りてきた

「先に行っておく・・・あれは私では無理だ」

「は？何言ってるんだラーク」

「あれを破るために私を呼んだのだろうか？」

そう言いラークはその大きな嘴を森林の方へと向けると  
リユーガは何かに気づいたように言葉を放つ

「あれって・・・まさか」

若干焦りつつリユーガは器用に瞳だけを魔人化させ  
ラークの指した方を見る  
するとリユーガは呆れたように愚痴を漏らす

「うわあ・・・馬鹿じゃねの？」

あんなでつかい境界貼りやがって、どつりでたどり着けないわ  
けだ」

「結果？」

「そーそー・・・あーメンドクセエ

残念だがステイル、ギーシュお前ら帰れ」

そう言いリユーガはステイルとギーシュの襟首をつかみ  
ラークの背中に放り投げる

「ちょ・・・リユーガ!？」

「ここまで引っ張り回しておいてそれは酷いんじゃないかい!？」

「うるせえ、ちょっと事情が変わったんだ

まだお前らには早え」

リユーガは手をシッシと二人に向かって振るう

「ビダーシャルさんはいいのに僕らはダメなのか？」

「そうだ！僕らにだって出来ること・・・」ねえよ「・・・ッ！

「？」

二人はリユーガに向かって講義するがリユーガは二人の言葉に冷たく返答する

「今回は桁が違うんだよ、テメエら二人の命なんか簡単に消し飛ばせ？」

「……………」

真剣な表情で二人に言葉を放つリユーガ

「それにビダーシャルは腕だけとは言え、白金をフルサイズで出すことができたから

やばくなつたら自分の身ぐらい自分で守れる

お前らはどうだ？いいところ50セント程の玩具出すぐらいしかできねえじゃねか」

「……………」でももへったくれもねえんだよ……………」

「ちなみに今回はラークも下がらせる、日が暮れた以上こいつの力は半減するし

まだ異能も<sup>デュナミス</sup>発現してないからな、お前だつて来たかないだろ？」



「当たり前だ、あのレベルの相手では今の私では命を捨てるようなものだ」

「分かったか？スクウェアになったからってお前らの想像をはるかに超える化け物がいるんだ

当然俺も全力でやるからな・・・はっきり言ってやろう、

今度の相手はお前らの気をかけているほど甘い相手じゃないんだよ」

その言葉に二人は押し黙る

数秒の沈黙の後、リユーガが二人に声をかける

「お前らが弱いわけじゃない、相手が強すぎるだけだ

分かったなら・・・」「待つてくれ！」「・・・あ？」

「それでも僕は行きたいんだ」

「僕もだ!!」

「・・・」

二人は真剣な表情でリユーガに言葉を続ける

「確かに僕らは君には遠く及ばないかもしれない……だけど……」

「リユーガがそこまで言う相手なら僕らの命なんて紙くず同然かもしれない……だけど……」

「リユーガの本気を見てみたいんだ！！だから頼む！！」

二人は言葉を重ね、頭を下げる

リユーガは困ったような表情になり頭を掻いた  
そしてリユーガの代わりにラークが言葉を発する

「馬鹿かお前は……死にたいのか？」

「馬鹿かもしれないけど、これを見逃したら本当の戦いが見れないような気がするんだ」

「絶対にリユーガの邪魔はしない、僕らが死にそうになっても見捨ててくれて構わない

だから頼む！！」

そう言いながら土下座をする二人  
その姿にラークとビダーシャルは目を見開きその姿を見つめる  
そしてリユーガが諦めたように言葉を発する

「好きにしる馬鹿どもが、俺はもう死んでも知らんからな・・・」

その言葉に二人は顔を上げ、屋敷へと向かうリユーガの後を追っ  
ていった

## 三十話（後書き）

ここで備考

なぜ二人がこんなことを言ったかというところ

ギーシュは原作とは少し変わってしまったかもしれませんが

二人とも軍人家系で強さに飢えている設定で

強者同士の戦いを見て己を高めたい7割

リユーガの規格外の力に憧れ、その本気を見てみたいが3割とそんなわけで

決して面白半分で命捨てに行くような馬鹿ではありません

いやあ〜シリアスっぽく見えましたが？

駄文な作者ではおかしなところが沢山あるかと思いますが

まあシリアスっぽい雰囲気って所はどうか感じて欲しい駄文な作者でした

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、意見、指摘をお待ちしております

三十一話(前書き)

norick様心温まるご感想ありがとうございます  
駄文な作者はどんどん突っ走ります、

さあ本編へどうぞ

## 三十一話

目を覚ますと、彼はいなかった

だが、私には彼がどこにいるか感覚で理解することができた

目には見えない、だが太く、そして強く彼と私はつながっている

集中すれば彼の視界にあるものも見えるようになっていた

さらに私の体はまるで羽のように軽く

少し足に力を入れれば天井に手をつけるぐらいに

腕の太さもまるで変わっていない

しかし少し腕に力を入れれば壁は簡単に崩れ落ちる

そして私は突き破った壁の向こう側から私を見つめる兄に気づいた

兄は恐れたかのように言葉を浴びせ、こちらに近寄ってくる

私は兄と姉が嫌いだ

父と母も嫌いだ、いつも私の姿を見て何かしら言葉を浴びせてくる

だが、私はそんな彼らを見て、理解した

彼らが私に浴びせてきた言葉、苛立つような視線

止まない暴力の全て何もかも

ちっばけなものだと

気がつくど私は集まってきた彼らにある口を開くこと

いままで、ありがとう

そして

さよなら

しかし、彼らに私の言葉は届いていなかった様だ

私はもう一度口を開こうと意識を集中し言葉を投げかけた

だけど私はまったく違うある言葉を口にしていた

私がある言葉を投げかけた瞬間私の視界は赤い液体で埋めつくされ

そこでまた私の意識は途絶えた

・・・

フツフツ・・・



何度もエアアをデストロイすると思うなよ？

どうもリユリ

・・・名前ぐらい真面目に書けよ・・・ツハ俺は一体何を・・・  
茶番はこの辺でいいですかね、現在俺たちはアレクト男爵の屋敷  
にきてるんだが・・・

一体いつまで待たせりゃ気が済むんだろっね(#^ ^)ピキピ

キ

いやさ、急に来た俺らも悪いっちゃ悪いよ？

でもさ、聞こえてくるんだよね・・・

「お嬢様！お願いします！！せめて顔ぐらいお出しせねば！！！！」

「・・・」

約一時間ほどメイドの叫び、無言の返答、扉を叩く音  
イラッと来るでしょ？

「はあく・・・行って来る」

「は？ちよつとリユリガ？」

リユリガは鬱陶しそうに頭を掻きつつ立ち上がり  
声が聞こえるほうへと歩き出す

「お嬢様! ! . . . ツハ . . . 申し訳ありません、今準備が滞っております . . . 」

「あー . . . もういいよ」

「え? . . . それは . . . どう言う . . . キヤア! ! 」

リユーガが扉に向かってこぶしを放つとバキィ! と扉が壊れる音が響き

そのままリユーガはドアノブに手をかけるが . . .

「 . . . . . あ? 」

扉はビクともせず開かない

リユーガは何度も扉に拳をぶつけるが凹みこそするものの扉の向こうまで拳は達せず、なおも扉は開かない

「 . . . . . 」

リユーガは無言で腰に差した黒翼を抜き  
扉に振り下ろすが

「・・・なんだと？」

勢いよく振り下ろされた黒翼は扉の数センチ前で止まり

リユーガが力をこめてもピクリとも動かない

もう片方の手で扉を触れようとすると難なく触れることができるのに

黒翼はまるで扉が拒むかのように扉に触れることができない

リユーガは黒翼を鞘に収め横で啞然とするメイドに声をかける

「・・・なあメイドさんや」

「は、はい!!」

「本当にここは吸血鬼に襲われたのか？」

「ッ!？」

リユーガの問いかけにメイドは目を見開き  
取り繕うように、リユーガに返事を返す

「え、ええ・・・襲撃のせいで、ユーリ様の兄上と姉上は・・・」

「キヤア!!」

しかしリユーガはメイドの顔を鷲掴みにし再度同じ問いを投げかけた

「本当に・・・襲われたんだな？嘘偽りがないと誓えるか？」

リユーガが低い声でメイドに尋ねると、メイドは瞳に涙を浮かべ必死で首を横に降り始めた  
その姿を見たリユーガはメイドを掴んでいた手を離したため息をついた

「・・・はあ・・・もう行っていいぞ」

「え・・・あ・・・その・・・」

「俺は行けっていったんだ」

「ッ!？」

困惑の表情であたりを見渡すメイド

しかしリユーガの殺気のコもった言葉ですぐさま立ち上がり  
屋敷の奥のほうへと駆けていった

走り去るメイドを少しの間見つめた後  
リユーガは扉に視線を向け口を開いたその刹那  
扉が跡形もなく消し飛びリユーガの視界に椅子に腰掛け  
長くさらさらと輝いて見えるような銀髪を弄くる少女の姿が目  
に入った

「嬢ちゃんがユーリ・アレクトかい？」

「……………」

リユーガの問いかけに、無言で視線を返すユーリ  
数秒の沈黙の後ユーリはリユーガに言葉を投げかけた

「あなたは……ダアレ？」

その場に響く透き通る声にリユーガは自分の意思を捻じ曲げられ

「俺は相馬……龍牙……あ？」

「へ〜龍牙って言うんだ……私にナにかよう？」

ユーリの問いかけにまたも口が勝手に動きそうになるが

リユーガは気力で踏みとどまり、言おうとした言葉とは違う別の言葉を返す

「領地で暴れるから許可が欲しくてな」

「……あれ? ……おかしいな……」

リユーガの言葉に納得がいかないのか首をかしげるユーリ

「それで? 許可してくれんのか?」

「……」

「無言は許可って受け取るぜ……じゃあな」

そう言いリユーガが部屋を出ようとすると  
後ろから透き通る声ははっきりと聞こえた

「アァァ」

ユーリがそう呟くとリユーガは止まり

くるりと振り返った

「ッ!？」

「無駄無駄、もう種は理解したからな・・・こつやんだっけ?・・・  
動くな」

「え?・・・なッ!？」

リユーガが力を込め低く呟くと、ユーリの体は弄くっついていて手に  
持った髪までも

静止し、瞳と口だけが動いている

ユーリはそのままリユーガを睨みつけ、言葉を発する

「なぜ・・・この力を・・・」

「こんなもんある程度力を得た7魔なら効率はよくないが力技で  
できるさ・・・」

人の身でこの力を使ったのは嬢ちゃん以外見たことがないがな

「・・・」

「大方、契約を結ぶ際に相性抜群でなおかつ結構なもん渡しちまったからだろ？」

何を渡したかは知らんが・・・歪んだ変化だな、可愛そうに・・・」

「可愛そう？・・・私が？・・・私は・・・何を渡したって言うの？」

「そんなもん知るかつの、じゃあな嬢ちゃん  
明日には、元に戻ってるはずさ」

「まッ・・・」

リユーガはそのままユーリの言葉を聞かず  
部屋を去り、ステイルたちの下へと帰っていった

「何をしてきたんだい？」

「今から暴れるヨーって言ってきただけだ・・・行くぞ」

「お、おい！待ってくれリユーガ！！」



「まったく騒々しいな・・・それよりリユーガ」

「あ？」

屋敷の扉付近に立っていたビダーシャルがリユーガにそのまま言葉が続ける

「先ほど言いそびれたが、あの老人の家から精霊の力を感じたのだが・・・」

「老人の家から？・・・あ！」

そこでリユーガは何か気づいたかのように声を上げる

「何かわかったのか？」

「分かったちゃー、分かったけど・・・関係ないな・・・」

「どう言う意味だ？・・・っておい！！」

リユーガはそのまま3人を置いていき屋敷の外へと出て行った

(そうか・・・ここって吸血鬼騒動の村じゃねえか・・・あれって原作始まってからだよね？)

うーん・・・ま・・・いつか)

そんなことを考えつつリユーガは歩いていく

時は進み30分後

ユーリは、リユーガにかけられた口呪を解こうともがいていた

「ツク!!!・・・はあ・・・はあ・・・」

しかし思いのほか口呪が強くなっているためユーリはなかなか動き出せない

半ば諦めつつ、ユーリが目を閉じるながらユーリは思う

先ほど来た人は何なのだろう・・・

相馬龍牙

彼とどこか似た雰囲気だっけど、あの人は私には理解できないことを呟っていた

可愛そう、私の中であの人の言葉が今も響いている

理解ができない・・・

なぜ・・・理解できないのか

私は変わったはずなのに・・・

変わったはずなのに・・・

私が渡したものは・・・いったい・・・何なのだろう

ユーリがそう考えていると、不意に閉じていたはずの目から外の風景が映し出される

「彼の・・・見ているもの？」

ユーリは今自分の目に映る風景に呟くと

彼の視界の端に異形の何かが映る

異形の何かを見てユーリは彼が危険だと感じ、リユーガの放った

口呪を解こうともがくと

口呪はあっさり解け、ユーリの体に自由が戻る

そのままユーリは窓のふちに足をかけ、真っ暗な世界へと飛び込んだ



### 三十一話（後書き）

ユーリの心境を書くのが難しすぎる!!!  
だめだあ・・・こんなんじゃ・・・何も伝わらないよ・・・

つとまあ、結構悩みに悩んで書いた33話目、ちょっと短かったで  
しょうか？

ちなみに今回出てきたユーリと学院編で出てきたオリキャラクター原  
作と性格が変わったキャラクターは後4話で学院編が終わらせるの  
で、その時にでも上げます

次回、魔族の頂点交わる時、をお楽しみに！

あとちょこつと題名変えますので・・・ご了承ください

ここまで駄文を見ていただいております  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

三十二話（前書き）

ククク・・・この展開は・・・誰にも予想できない!!!

はい、初っ端から意味不な言葉を呟く駄文な作者です

今回は結構皆様を出しぬけるかと思えます（出し抜いてどうすんだ）  
どうぞお楽しみに

## 三十二話

どうもリユーガです

さて今週の対戦相手わあああああ……

ジャン 魔水鬼ガデー又さんでっという

前世で2 3人戦ったことあるんだが、その中でえれー強いのが  
居たから若干

俺にとつては面倒な相手、てな訳だから、ステイル達が来るの渋  
ったわけだけど……

まあどう安く見積もっても俺が戦ったやつぐらいの力もってそう  
だから、安全な場所なんて無いんだけどね

それで此方がガデー又さんのプロフィールです

魔水鬼ガデー又

特徴、強い、チート、初見殺し

弱点、特になし

ね？見たとおりどれだけやばいかわかるでしょ？……なんだっ  
て？端折り過ぎ？

しょうがねえな、ここはプロ野球真っ青な解説してやんよー！

四番くバツタく・・・ガデーヌ・・・背番号く・・・

・・・ごめんなさい、真面目にやります

### 魔水鬼ガデーヌ

特徴、種族内で一定とした大きさはない

魔族の中で唯一の不老である

魔鬼は土鬼、火鬼、風鬼、水鬼の四種類で

修羅族、吸血族のどちらかに区分される

魔鬼そのものの戦闘能力は低い

しかし魔鬼の中で魔水鬼だけが7魔入りとなったのは

人と契約を交わすことができ、契約を交わした水鬼は

他の魔族をはるかに上回る身体能力や異能デュナミスとは違う固有能

力を得ることができ

契約者との相性次第では魔力を得ることもできる

契約者によって魔力を得た水鬼は人間の使う魔法を使用す

ることが可能

そして水鬼たる所以は液体を操ることができるからである

通常契約者のいない水鬼を幼生、契約者を得た水鬼を成体

とする



・・・とまあこんな感じだが  
ぶつちやけ俺はやり合いたくない・・・なぜかって？

それは魔水鬼が契約時に得る固有能力にある

これは完全に予想ができない、同一の能力を得ることがまずないからだ

デュナミス

異能は決まった範囲の能力に収まるからある程度対策はできる

しかし魔水鬼の得る固有能力はハッキリ言って予測不可能

前世で戦った魔水鬼共も体を分裂させるとか説明しようもない  
能力使って来るもんだから

結構手こずったよ

・・・とまああんまりダラダラと喋っても仕方がないから本  
編へどうぞ

「お前ら・・・ラークの背中に乗れ」

「・・・どこまで来て帰ってことかい？」

「私は帰りたいのだが・・・」

ステイルがリユールガに問いかけるが

リユーガは手を振りながら返事に答える

「そうじゃねえさ・・・ただな予想以上の強者っポインだよ  
だから地上で見るのは無し、おとなしく上で見てんしゃい  
まあ一瞬で終わっちまうかもしれねえがな」

「・・・勝つんだろ？」

「モチ」

リユーガの言葉に大人しくラークの背に乗り込む3人  
そしてラークが空高く飛び上がるのを見つめリユーガはネロに話  
しかける

(ジヨゼフに繋いでくれ)

(少し待っておれ・・・繋がったぞ)

待つこと数秒ネロの言葉と同時に渋みのある声が聞こえる

(珍しいなリユーガよ・・・急用か?)

(ザビエラ村への街道を全面封鎖してくれ  
半径10リーグ程、ついでに出せるだけ兵を待機させておけ)

(・・・分かった直ぐ手配しよう)

ジョゼフがリユーガの真剣さを感じ取り短く返事を返す

「準備は・・・よしっと

ネロ、向こうに着いたら湖にお前を放り投げるから  
奥の方に隠れてろ」

(・・・分かった、気にいれば住みつく準備でもして置こう)

それだけ言うとネロは四系炉の奥の方へと下がって行った

「話し合いで何とかかなりやいいが・・・まあ無理か」

そう言いながら自重気味ほほ笑むと

リユーガはマントを放り投げ、上着を脱ぐ  
そしてリユーガの姿が徐々に変わっていく

腕は龍の鱗のように、黒く

瞳は爬虫類のように細く、赤く輝き

背には二対の漆黒の翼  
そして体全体に赤黒い雷が帯電している

「ふー……さて……行くか」

リユーガは腰に差していた黒翼を鞘から抜き放ち  
黒翼を森の方へと力いっぱい投擲した  
黒翼は一直線に森の方へと飛んでいき  
見えない結界に黒翼が突き刺さる

「おじやま……しまー……す……!」

リユーガは二対の翼をはためかせ  
投擲し結界に刺さった黒翼の柄を殴りつけると  
結界は音を立て崩れ去った

「ノックぐらいしてはどうだ？」

リユーガが結界の中アーデルト湖の中央にリユーガが浮かぶと  
低く世界に響くような声がリユーガへと発せられた

「ノックしたら扉が壊れたんだ、もっと頑丈な扉にしておけや」

リユーガは四系炉を取り外し湖に投げ入れ声のする方へと視線を向けつつ返事を返す

視線を向けた先には湖の畔に腰掛ける青年がリユーガをジッと見つめている

「すまんな・・・聊か弱く作りすぎたようだ」

少年は立ち上がり腕をリユーガへと向け無数の水柱を飛ばす  
リユーガは拳で水柱を相殺し、青年へと言葉を発した

「いきなりだな・・・少しは平和に事を進めようとは思わないのか？」

「私の張った結界を破った者が、この程度どうということもあるまい」

そう言い青年は湖の上を歩きだす

「して、何用か？」

「あゝ、ここに住み着かないでほしい」

「何故だ？私がどこに住もうが私の勝手ではないか？」

何を言っているみたいでリユーガを見つめ青年は口を開く

「まあ・・・ここに吸血鬼が集落なんて作っちゃったから  
こっちとしても人々が怯えちゃうわけですよ」

「は？集落だと？何だそれは」

「いや何って・・・あれ？」

リユーガが周りを見渡すとそこには小さな小屋が一つあるだけで  
他には何も無い

「・・・一つ聞きたいんだが・・・あの小屋に住んでいるのは？」

「あそこに住んでいるのは私と旅の途中で着いてきた一人の子供  
だが？」

「・・・その子供って吸血鬼？」

「・・・何を言っている？私は修羅族だし  
着いてきた子供は魔鬼どころか魔族ですらないぞ  
まあ、人間には見えなかったが」

話が噛み合わない2人  
そしてリユーガはあることを青年に尋ねた

「お前契約はしたか？」

「あ、ああ、近く村にかなり適合率が高い者が居たから  
訪ねに行き話を聞けば向こうも変わりたいと望んでいたから  
普通に契約したが？」

「その時契約者から貰った代価はなんだ？」

「代価？そんなもの貰ってはいない  
適合率が高過ぎて代価何ぞ要らなかったからな  
私は彼女とリンクを繋ぎ、力を貰っただけだ  
その拍子に彼女は言葉の力を得ていたが・・・それが何か？」

「・・・」

青年の言葉にリユーガは黙り思考を巡らせる  
吸血鬼の集落があると思つた場所にはただ魔水鬼とその連れが居ただけ

しかし村には吸血鬼と思われるエルザが潜り込んでおり  
村には確かに吸血鬼の被害があつたし

ガリアの派遣した軍も吸血鬼と思われる者に壊滅させられている  
そしてこの領主の娘は明らかに何か代価を失っている

しかしこの魔水鬼は代価を貰っていないと言う

そこまで思考が廻つたりユーガは二つの答えにたどり着いた

一つ、目の前の魔水鬼が嘘をついている

そしてもう一つは……

そこまで考えたリユーガは突如出現した、気配に気が付き

周りに目をやると、森の方から、一人見覚えのある者がこちらに

歩み寄ってくる

「貴方達が戦つてくれれば……事は上手く運んだんですけどね・  
……やはり上手くないかないものですか」

「テメエ……屋敷に居た」

「先ほどぶりですわね……リユーガ殿……いや、第21混合部  
隊、通称悪魔部隊

元隊長、相馬龍牙さんかしら？」

そう言いクスクスと笑う女性

それは先ほど屋敷にてリユーガに頭を掴まれ、涙を浮かべていた



メイドであった

## 三十二話（後書き）

どうでしたか？

題名がすでに詐欺です、戦闘を期待した方もいらっしやるかと思いますが

戦闘のせの字もない

駄文な作者としては結構頑張った方だと思つてですが・・・  
意味が分からない方もいらっしやるかと思ひます

そこは駄文な作者の乏しい表現力、クオリティが低すぎるせいです、  
ごめんなさい

次話で全てを分かりやすいように書くつもりですが・・・  
所詮駄文な作者の書く文、皆様に分かりやすくお伝えできるか全く  
わかりません

それでも試行錯誤を重ね、話の筋ぐらい分かるよう頑張るつもりです  
これからもどうかこの駄文な作者をよろしくお願いいたします

465

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

### 三十三話（前書き）

トウツトウルー！！・・・・・・・・・・

シユタインズゲートを一気見した駄文な作者です

どうしても言いたかった！！

ただそれだけです

はい、そんな訳で今回はバリバリ戦闘させようと思いましたが・・・

作者の友人K・Y氏（決して空気読めないの意味ではない）の助言

「全く意味わかんねえよこれ、流石に説明足らなさすぎだろ」

と言う作者の心にダイレクトアタックな感想により少し説明的なものを含みました

まあ、この話しのおかげで多少起こったことが理解できるかと思いますが・・・

ぶっちゃけこれでも理解できるかどうか分かりません

なんせ駄文な作者の表現力ですから・・・今、願いが、叶うのなら、表現力をくださいorz

つとまあそんな感じですが・・・どうぞ

## 三十三話

約3ヶ月前

まばゆい光が晴れると女性は湖の近くに立ちつくしていた

「は？・・・ここは・・・」

女性は周りを見渡す

目の前には大きな湖、後ろには木々、それだけであった

「私は・・・契約者を殺して・・・それから・・・あれ？」

女性は今の状況を理解しようと思死に思考を巡らせる

そんなことを考えていると、森の方から女性の嫌いな臭いが漂ってくる

「なんでここに人が居るんだ？」

「あ？人間？」

森の方から腰に剣を差した数人の男が現れ、女性へと近づいてくる

「ここは危険な幻獣や亜人がよく現れるから近づいちゃいかんぞ  
ほら、はやく村に帰りな・・・は？」

そう言いながら一人の男が女性の肩に手をかけようとするが  
男の腕は女性の肩に手をかけることなく肩から水の刃にバツサリ  
と切り落とされる

男はそのまま何が起こったか分らないと言った表情になり、上が  
ってきた痛みによって  
絶叫しつつ、地面を転がる

「人間如きが私に触れないでくれる？」

「き、貴様！！一体何を・・・」

後ろに居た男性達は腰に差した剣を抜こうと手をかけた瞬間  
全員綺麗に首が胴体と切り離され、体がどさりとその場に倒れる

肩から切断された男はその光景を目の当たりにし、その場から逃げようと走り出すが

他の者同様、首が吹き飛び、体がそのまま倒れる

「まったく馬鹿なのかしら、魔法を使うそぶりすら見せなかったけど・・・」

そう呟き女性は何かに気づいたように周りを見渡す

「なんなの・・・ここ・・・同族の気配が全くない・・・それに・・・やけに人間臭いわね」

鼻を押さえながら女性は湖の水を操り、自分の体を空高く登らせ周りを見渡すと啞然とした

「荒れていない？・・・それにビル一つ建っていないし・・・」

女性が元々いた場所はさびれたビルが至る所に建っており

なお且つここまで空気が綺麗ではないのだ、その美しさに女性は見惚れ

ボーツとすること数十分女性の目の前を風竜の親子が横切る

「・・・魔族じゃない・・・ってことはこの原生生物？

嘘でしょ？あんなの見たことがない・・・」

そこでまた女性は思考を巡らせる

ここは一体どこなのか

魔法を使おうともしなかったあの人間達は？

なぜ同族の気配が感じられない

何より、今の地球にこんな綺麗な場所はない

頭の中で何回も自問自答を繰り返す女性

そして女性のはにある答えにたどり着く

「ま、まさか・・・異世界？」

女性がこの世界を訪れ、約10分、誰に聞くことなくその結論に至り

それを受け入れた女性は悲しくもあり、そして何よりある野望がその胸に宿った

.....

約1ヶ月前

女性はこの世界の事を調べるため

一番近くにあった屋敷の三女の侍女つまりレディースメイドと呼ばれる

仕事についていた

そしてこの世界の事を調べていくとまず文化レベルは中世、貴族と平民と言った

立場が分かれ過ぎており、女性はここの屋敷の主しか知らないがかなり統治はいい加減

そして何よりこの世界の人間は魔法を使うが、

女性の知っている魔法に比べれば笑えるほどちんけなものだった

「.....虚無つてのがちょっと分からないけど、問題ないわね」

女性は自室で集めた情報を思い起こし薄く笑みを浮かべ

すぐさま行動を起こそうと自室を出ようとすると、女性にとって懐かしいような気配を感じ取り

動きを止めた

「.....私以外の魔族?.....いや、魔族にしては希薄な気配ね・

.....」



そう呟き、女性は感じた気配を目指し歩いて行くと  
村の外れにたどり着き、そこで一人の旅人のような格好をした男  
性と目が合う

「貴様・・・人間か？」

「そう言う貴方だって人間じゃあないでしょ？  
話に聞くエルフかしら？」

「耳長と一緒にするでないわ、私は吸血鬼だ」

男性は口をあけると犬歯とは呼べない長くのびた牙が2本

「へえ・・・私に似たものかしら？」

女性も男に習つように口をあけ牙を見せる

「・・・ここは貴様のテリトリーか、すまなかったな荒らすよう  
なことをして

すぐにここを去ろう」

男はそのまま今来た道に戻る様に振り返り歩を進めようとする  
しかし女性が男に待ったをかける

「ねえ・・・貴方、他の吸血鬼に知り合いわない？」

「居る場所程度なら分かるが？」

「そう・・・提案があるのだけどいいかしら？」

女性はそのまま自分の考えを話すと男は低く笑った

「貴様は馬鹿か？人間を滅ぼす？」

そんな現実味のないことを信じると言うのか？」

「私はただ確立を上げたいだけ、別に私だけでも可能性はあるわ  
何なら見せてあげましょうか？魔族と言うものを」

「私はこれでも500年以上生きている  
あまり・・・」

男性は言葉を続けようとしたが

頭上から降り注ぐ水の槍に言葉を止めた

「一回死んだわね」

「……大地よ……我が前の……」

「はい2回目、3回……」

女性は男に回避させることなく何度も寸止めを繰り返す

何度か男も先住魔法を放つが水の壁にどんな攻撃も遮られ女性に届くことはなかった

そんなやり取りが10分ほど続くと、男は膝をつき女性に頭を下げた

「……貴方に従おう」

「最初からそう言ってくれれば助かるわ、それじゃあまず出来るだけ吸血鬼集めて頂戴

私はここに居るから」

「……了解した」

男はそう言うと村の外に向けて先住魔法を放って行った  
そして女性は嬉しそうに呟く

「いい駒かもしれないわね・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

### 1週間前

「はあ？全滅した？ちよ、ちよっと20人しかいないじゃないの  
！！」

メイドは水球に映る傷だらけの集団を見つめ声を荒げた

「どうしてくれるの・・・侵略もまだ村一つだったのに・・・  
誰にやられたの？」

「急に前が光ったと思ったら・・・男が現れてそのまま」

「前が光った？・・・ツ！？」

メイドはこの屋敷に近づく同族の気配を感じ映像を切り  
自分の気配を極限まで希薄にさせ、他の部屋の水から音声を拾い  
上げると

男の声が聞こえてくる

「魔水鬼？・・・何で私以外の魔族が・・・」

男は問いかけをし、何かが倒れる音が響くと同時に  
男の力が跳ね上がるのを感じ、男はそのまま屋敷から離れて行った

「なんなのよ・・・今の・・・契約しただけ？

あの男が居た部屋は・・・小娘の部屋かしら・・・」

メイドは早足である部屋の前に立ち、扉を開くと  
髪が薄く発光しているユーリが倒れている

「・・・契約したことで体の構造が変わったのかしら？

それにしても・・・適合率が高いわね・・・気付かないなんて  
失敗だったわ」

メイドはそのままユーリの首に牙を立て

血を吸うと、メイドの体に力が駆け巡る

「凄いけど・・・」

リンクのつながりが弱いわ・・・代価で補って・・・」

そう言いメイドはユーリの額から適当に代価を選ぶと肩に発言している紋章へと近づける

「・・・いまいちね・・・」

まあいざとなったらまた代価を頂けばいいでしょう」

手に入れた力がお気に召さないのか、そのままユーリをベットに放ると

メイドは部屋を立ち去りつつ愚痴をこぼした

「また面倒が増えたわね」

.....

そして今日

メイドは屋敷を駆けまわり  
使用人達の住まう区画の一室に飛び込み  
溜息をついた

「はあく・・・なんで湖に居るやつ以外に魔族が混じってるのよ・・・  
計画が台無しじゃない」

そう言いメイドは部屋に置いてある花瓶に手を向けると  
花瓶から水が浮き上がりメイドの目の前まで来ると、水は振動し  
2人の会話が聞こえる

「相馬・・・龍牙？・・・どこかで聞いたことが・・・」

メイドは額に手をあて、目を閉じ記憶を掘り起こすと  
ある人物の名前が浮かび上がってくる

「まさか・・・二次大戦の最強？・・・いやいやそんな・・・」

浮かび上がった名前を否定するように手を振るが  
聞こえてくる音声で、メイドは一瞬固まった

「……………口呪を使ったてことは……本物？……何でそんな化け物が居るのよ……！」

メイドは苛立ちながら、机を蹴飛ばすと  
机は粉々になる

「は……………どうしましょ、湖に居るやつでさえ厄介だつていうのに……………  
つて言うかこのままだと私達の契約者殺されるわよね？」

メイドは再度流れてくる会話に耳を傾けると、リユーガが出て行った事が分かる

「……………殺してない？……………それじゃあ、まだ使えるわね……………」

そしてメイドはまた考えを巡らせると、ある答えが浮き上がってきた

「……………いや……………でも相手は最強に私より高位の同族……………  
やっぱりここは契約者を失つてもやるしか……………」



一人でぶつぶつと錯乱したかのように言葉を続けるメイド  
そして決意を決めたかのように立ち上がると、浮いている水に男  
性の

顔が映り、男性は問いかけてくる

「何か？此方は指定された場所にいるのだが……」

「侵略行動は停止、すぐに戻ってきなさい、全員で」

「全員？、それは同族全員か？まだ生まれて100年と経っていない者もいるのでそれは……」

「関係ないわ、今すぐ全員で……女子供問わず、今は一人でも戦力が欲しいの」

冷たく言い放つメイド、しかし男はメイドに食い下がる

「だが……まだ経験も知識も足りない者達が半数だぞ？」

「くどいわね……私は今すぐ、全員で、戻ってきなさい、つと  
言ったのよ？」

「聞こえなかったかしら？」

所々アクセントを付け強く言うと男は渋りつつも分かったと短く返す

映像が途切れる

「人間の上位種風情が・・・黙って動けないのかしら?・・・私達魔族に近いからって調子に乗らないでほしいわね」

苛立ち交じりに愚痴をこぼすと

メイドは再度音声を流し耳を傾ける

メイドが耳を傾ける事数十分、部屋の外に複数の気配を感じると同時に

部屋の扉が開かれ、先ほどの男性が現れた

「戻ってきたが・・・何をさせるつもりだ?」

「ちゃんと全員連れて来たでしょうね?」

「・・・ああ」

「そう・・・じゃあ行くわよ」

メイドは椅子から立ち上がり、男の横をすり抜け部屋の外にでよ

うとする

「まで……説明ぐらいしても良いだろう?」

「ホント……黙って動けないのかしら……今から例の湖の奴の所に行くわよ」

「ッ!? 私達は一度あの者に敗北しているのだぞ!!」

男は信じられないと言った表情でメイドの肩を掴む

「それはあんた達が弱いからでしょ?今度は私も行くわ」

「貴方は知らないかもしれないが、ここに貴族も来ている前と違って少数だったことからかなりの使い手だろう、不確定要素が多すぎる

我々はもう目の前で同族を失いたくはない!!」

「劣等種が幾ら減ろうが、所詮使い捨てよ、それと……いつまで掴んでいるのかしら?」

「ガッ!?!」

メイドが肩を掴んでいた男に水の柱を飛ばすと男は壁にめり込み床に膝をつく、メイドは男に近寄り髪を掴み男の顔を無理やり上げさせると

女性とは思えない低い声で言葉を発する

「放浪する貴様らに住処を与えてやったのは誰だ？」

派遣された軍を追い払ったのは誰だ？

・・・調子に乗るなよ劣等種」

メイドは男を放り捨て、部屋の外で恐怖によって顔を歪めている歳のばらけた集団に  
手を向けた

「別に従わなくてもいいのよ？また前のように放浪すればいいじゃない

毎日人間の顔色窺って生きればいいじゃない

私は言ったわよね？人間を駆逐しないかって、それに賛同したのはあなた達よ

それでも私の言うことに従えないって言うのなら、この場から失せなさい」

「「「・・・」」」

メイドの言葉に集団は沈黙を貫く、数秒の沈黙の後メイドが先ほどの威圧感はどこへ？

と言いたくなるような軽い口調で歳のばらけた集団に声を発した

「何も死ねて言ってるわけじゃないのよ？」

今回は私が片方と戦っている間にもう片方を足止めしてくれればそれでいいわ」

「あのような者がもう一人いると？」

「ええ、だから私もその2人に手を組まれると厄介なのよ

まあ、上手く言ってくればその2人が戦って疲弊したところを突くこともできるはずよ

じゃあまずは私の契約者を迎えに行きましょうか」

そう言い女性はユーリの部屋へと歩いて行くが

「……………どこに行ったのよ……………初っ端からやっってくれるわね  
すぐに探しなさい!!」

メイドはこめかみに青筋を浮かべながらそう叫ぶと

何人かが窓から飛び出し、各方向へ走りだす

メイドと他の者も続き、屋敷の外へと飛び降り、森に向かって足を進める

そして森の入口にさしかかったあたりで、先ほど窓から飛び出した男が固まっている

「何をやっているのよ・・・使えないわね」

メイドは固まっている男の背中を力強く叩くと  
男は動き出す

「全く・・・ホント使えないわね・・・いいわ

貴方達、森の中にばらけて湖を目指しなさい、その途中で私の契約者を見つけたら確保しなさい

いい？まず口を押さえるのよ、そうすれば少し身体能力の高い程度の小娘だから、

貴方達でも抑え込めるでしょ・・・分かったら散りなさい」

集団はばらけ、中心にある湖を取り囲むようにそれぞれ森に入っていく

メイドは来た道から真っ直ぐ森を少し進むと、  
きよるきよると森の中で右往左往しているユーリを見つけ、溜息をついた

「はあく・・・結局私が見つけたんじゃないの・・・お嬢様？  
このよう時間に外に出られては危険です・・・屋敷にお戻りください」

メイドは軽く微笑みながらユーリに声をかけると  
ユーリが小走りにメイドへと近寄り、響く声をメイド発した

「ねえ・・・湖はドレ？」

「・・・無駄ですよ、お嬢さま・・・」

「ッ!？」

ユーリは口呪が聞かなかったことと急に口をふさがれたこと両方に驚き

じたばたと暴れるが、すぐさま眠りについてしまう

「まったく、本当に強力な口呪ですね、一瞬かかりそうでしたわ・・・

では・・・また一つ代価をいただきますわ・・・今度はもう少しましな能力でお願いしますよ」

メイドがユーリの額に手を置き、ゆっくりと離すと  
手のひらには野球ボールくらいの大きさの光を放つ物が握られている

「ふ〜・・・感情そのものを取り出すって難しいわね・・・  
どうして高位の同族はこんなものを取り出せるのかしら・・・」

メイドの手に握られている光は赤く光ったり、青く光ったりと  
様々な色に輝きを放つ、それはユーリの感情全てであった

「代価を二度も取り出して、まだ生きていられるなんて・・・本  
当にこいつは私達と相性がいいのね」

感心するようにメイドが呟くと、メイドはその光を自分の肩に現  
れている紋章へと近づける

すると紋章の中に光が入って行き、紋章が少し大きくなる  
それと同時にメイドの体に力が駆け巡る

メイドは最初その力の流れに体がついて行かず、体全体が震え、  
膝をつくが

すぐさま立ち上がり、メイドは自分の体を見つめ、凶悪な笑みを  
浮かべると小さく呟いた

「これなら・・・」



### 三十三話（後書き）

以上メイドさん黒幕劇場でした

うーん駄文な作者にとって珍しく4時間かけて書いたんですが・・・  
分かりませんか？・・・友人も「まあ筋ぐらい分かったけど都合  
よ過ぎじゃね？」

と言われましたシヨボーン（´・`・´）

・・・はあ〜早く原作に入りたい・・・でもここを頑張らないと・・・

そんなこんなで少しおかしな35話目、いかがでしたか？

おかしな部分はほとんど指摘して下さい

それと感想でこの展開おかしいぞ！！つとつと感想など作者にと  
つてもものすごく嬉しいのですが・・・上級者ぶって伏線張った場所  
を指摘されると作者としてはネタばれになってしまうような気がし  
てどう返していいか分かりません

感想には逐一お答えする予定ですが、詳しく説明することができな  
い事もあります

こんな駆け出しの素人の作品に指摘をしていただいた神様のような  
御方

本当にありがとうございます、何分納得できないところもあるでし  
ょうが・・・

どうぞこれからもよろしくお願いいたしますm（´）（´）m

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への指摘、感想、意見をお待ちしております

### 三十四話（前書き）

メイドは報われる・・・ここ重要

はい、結構物語に関わる重要な事を初っ端から呟く  
私こと駄文な作者です  
これにて吸血鬼騒動、魔水鬼事件終了です

そしてこの文をお読みになってください

この話には、今まで以上のご都合主義、グダグダな戦闘描写、厨二  
的発言

が多大に含まれます、ここから先は各々の判断に従い進んでください  
つとまあいまさらかよ!!!と思う方もいらっしやるかと思いますが  
今回はいつも以上のご都合主義になってしまいましたので一応注意  
を・・・

さあ注意文は読んでくれましたかな？それでは本編へ・・・どうぞ

## 三十四話

ラークの背に乗りながら彼らは破壊音をBGMに  
繰り返される戦闘を見続けた

「何なのだ・・・あやつらわ・・・」

「あ・・・山が消えた？」

「もう何がなんだが・・・光ったと思ったら2人以外倒れている  
し・・・」

ラークは分かったかい？」

「分かるわけがないだろ・・・」

「動き出した・・・何にも見えないや」

3人が約30分程度の戦いに感想を述べていくと  
一際大きな音と共にクレーターが出来上がる

「どうやら決着のようだな・・・立っているのは・・・」

「まあ見なくても分かるけどね」

ビダーシャルが呪文を唱え鏡のような物に  
立っている者の顔が映し出される

「やはり・・・か」

「でも結構疲れてるみたいだよ」

「では、迎えに行くとするか・・・」

「私も早くあのレベルまで達したいものだ・・・」

ラークはそう呟き地に腰掛けている者を目指し降下していった  
しかし、その人外の戦闘を眺めていたのは彼らだけではなかった  
彼らがいた少し上空

小型の風竜に跨る月目の少年はありえないモノを見たかのように  
呟く

「何かあると思ってきてみたら・・・大きな収穫だ  
国に帰って早速知らせなければ・・・」

そのまま風竜に命令を出す

風竜はそのまま闇の中に消えていく  
こつ呟きを残して

「信じてくれるかなあ・・・僕の主は」

.....

「テメエ・・・」

「殺気飛ばさないでくれる？怖いじゃない」

「私以外にも魔水鬼が居たのはなあー」

3人は三角形を作る様に互いに視線を送り合う  
そしてメイドが手を上げると、彼ら3人を取り囲むように歳のば  
らけた集団が

森の中から現れ、場に一瞬の沈黙が訪れた後  
リユーガの緊張感に欠ける声が響く

「・・・ひいゝふゝみゝ・・・24人か  
で？こいつら呼んで何しようってんだ？」

「いえいえ、ただ御二方に私の話を聞いてほしいんですよ」

「話とな？・・・私は何が何だが全く分からんのだが？」

「そうだそうだー、俺だって脳みそついて行っていないんだぞおー  
・・・何か言いたいならさっさと見えや、こら」

リユーガはチンピラのように凄むが  
メイドは気にしせず話を続ける

「では、もう起きず気かと思いますが、ここは異世界、  
私達に似た亜人と呼ばれる者や言葉を理解する幻獣、そして彼  
ら妖魔など

多く存在します、しかし私は異議を唱えたい彼らは何故人間風

情に住処を追いやられたり

迫害されているのか、私が集めた吸血鬼達もそうです、住処を転々としていた彼らに

住処を与えようとしたら、人間は数にモノを言わせ彼らを駆逐しようとした

確かに人を捕食する彼らは恐怖の対象かもしれませんが、だからと言って頑なに排除していいものですか？

違いますよね、私達が元いた世界では少なからず魔族と人は共存できていた

なのにこの世界の人間ときたら彼らの存在を認めようともせず、自分達の不利益と言った理由だけで

私達に似た亜人や幻獣、妖魔を排除するのみ、彼らだって生きていると言っているのに・・・

故に私はこの世界の人間に分からせてやりたいのです  
劣等種が調子に乗るなど、

それに至って私は吸血鬼達と共に人間達を駆逐する準備をしています

しかしそれには貴方達のような強力な力を持った魔族の協力が  
必要です・・・

私に・・・いや、私達に協力してくれませんか？」

そう言いメイドは手をさしのばす

しかし、その話を聞いた2人は震えだす

「……………？どうかさない……………ダーハツハハハハ！！！！」……………  
「……………」

「いやあ、面白いこと言うねえおばさん  
久しぶりに笑わせてもらったよ」

「おば・・・」

リユーガの発言に顔を引きつらせリユーガを睨む

「こらこら、女性にそのような事を言っではいかんぞ  
せめて脳みそまで老いたか？ぐらいに留めねば失礼であるっ」

「お前も案外ひどくね？」

「.....の若造どもが.....」

メイドは怒りで顔をゆがませそのまま異形の姿に変わっていく

「ほら、唯でさえ醜い顔がもっと醜くなってんぞ、スマイルスマイル」

「ふむ、確かに汚らしいな」



「ふざけるなよ!!!」

魔族化したメイドは両手を地面に叩きつけると

地面に衝撃が伝わり2人に向かうが

リユーガは避ける事もせず衝撃を受け止め

男も魔族化し六つに増えた腕で衝撃を弾く

そしてリユーガは怒気の籠った声でメイドに言葉を放つ

「大体よお・・・お前欠片もそんなこと考えてねえよな？」

劣等種だの何だの言ってる時点でお前都市に居なかつたろ？

もしかしたら戦争にも出てないとか？」

「・・・・・・・・」

「凶星か？」

分かせてやりたいのです？マジ笑えたぜ

お前唯人間が嫌いな古い魔族だろ、大戦の中にも一人二人いたぜ

勝手に突っ走って勝手に死んでいくアホが、下等種風情が!!!

とかいって見事散っていったよ

・・・・・・・・まずはその古くせえ脳みそ全部とっ変えてから交渉っ

てもん身につけてこい

それにお前ら・・・」

リユーガはが取り囲む集団に指を向け言葉を続ける

「このババあに理不尽なこと言われなかったか？劣等種だのなんの適当な理由つけられてよお」

リユーガがそう言葉を発すると集団がざわめく  
そして男も続く様に感想を述べていく

「私は別にそんなこと勝手にやってくれと思うのだが・・・私の住処にズガスガ入り込み

なお且つ人の契約者をここまでされてはな」

男の魔水鬼は手を上げると湖から水が浮かび上がり  
森の中からユーリが運ばれ、男は優しくユーリを抱き上げた後その綺麗な髪をなでる

「可哀そうに、感情を全て抜き取られたか・・・」

別に貴様が私の契約者と契約しようが構わんが限度と言つものがあるっつ？」

「グツ……住処に入り込んだのはその男も同じだろ!!」

メイドは苦し紛れにそう叫ぶと

男は手をあわせ、リユーガに視線を向ける

「は？……何、俺も悪いの？」

「人の結界ブツ壊して入ってきたのはどこのどいつだ？」

「……大体テメエも紛らわしいんだよ！」

何であんな馬鹿でかい結界張ってたんだよ！そりゃ勘違いもするわ！」

「住処に幻獣やらが入ってくるからな」

リユーガがやけくそ気味に叫ぶが

男は呆気からんに言葉を返す

「あ……もう限ないわこんなん

よし!!俺は今からお前ら全員ぶっ飛ばす

「それで負けた奴は片っ端から俺に従え、異論は認めん」

「おお・・確かにそれは分かりやすいな  
気にいらぬ奴は片っ端から倒してしまえばいい  
実に私好みなシンプルな解決法だ」

「好き放題言ってくれるわね・・・貴方達・・・」

メイドは額に青筋を浮かべながら湖に手を向けると水が浮き上がり  
吸血鬼の集団を包み込む  
すると水に包みこまれた吸血鬼達は発狂したかのように叫び声を  
上げ始める

「なんだこりゃ・・魔水鬼ってこんな悪趣味な事も出来んのか？」

「この女と私を同列にするでないわ、大方その女の固有能力だろ  
」？」

「その通りよ！でもこれだけじゃないわよ・・・」

メイドが自信たっぷりにそう言葉を出す

一人の吸血鬼が地面に拳を振る

拳が地面に当たると同時、轟音が響き、地面がぱっくりと割れる

「どう？この威力

吸血鬼の身体能力を限界まで引き上げる事が出来るの」

「腕折れてんじゃん」

地面に拳を振るった吸血鬼の腕はあらぬ方向に曲がっているが  
逆再生の様に腕が元に戻る

「もちろん抜かりはないわ」

「こんなことすりゃ寿命が・・・吸血鬼に寿命もくそもないわな」

「幾ら不老と言っても・・・そのうち限界が来るだろう」

2人はそれぞれ感想を呟くと構え

メイドも習うように構えをとる、場に沈黙が訪れる

そして、リユーガが黒翼を抜いた瞬間

3人は一斉に動き出した

「まずは小手調べと行かせてもらいましょうか・・・」

外見の合わない高い声でメイドが呟くと

湖の水が勢いよく噴き出、水で出来た刀身が多く空中に浮き2人  
目がけて

射出される

男はメイドの放った水の刀を唯の水に変え

そこからまた水の槍を作り出し、放たれる刀身を相殺していった  
のだが

しかしリユーガは片腕を肩まで地面に突き刺し

リユーガの叫びと共に地面が揺れる

「おらっああああ!?!」

ちやぶ台返しのように地面をめぐりあがらせ、迫る水の刀身を跳  
ね返す

めぐりあがった地面は勢いを止めることなく2人を押しつぶそう  
とするが

発狂した吸血鬼達が先ほどのような怪力を振るい迫る地面を破壊  
していく

「じっぜ……」

そのまま飛びかかってきた吸血鬼達をリユーガは拳を振るい弾き飛ばしながら

水の奪い合いを繰り広げる2人に歩み寄って行くが

「吸血鬼って言うよりゾンビだな・・・」

リユーガは群がる吸血鬼達を殴って行くが

何度飛ばそうが、吸血鬼達はダメージが無いかのように立ち上がりリユーガに飛びかかる、腕が折れようが足が折れようがすぐさま治ってしまうので動きを止めることすらできず、

一向に弾幕戦を繰り広げる2人の元へとたどりつけない

「怨むなよ？・・・瞬雷・・・」

リユーガは魔力を指先から放ち

見えない雷が3人の吸血鬼の胸が拳程の穴が開き、血が溢れだすが逆再生のように穴が塞がって行く

「心臓潰しても駄目か・・・思った以上にやっかいだなこいつら」

リユーガは諦めることなく自分の持つ破壊の魔法を一つづ放って行った

一方水の奪い合いを繰り広げる魔水鬼二名は

「フツ！！・・・埒が明かな」

何度も水の槍や刀が相手を貫こうと飛来するが

お互いの干渉領域テリトリーに近づくと向きを変えているものだから

2人は一歩もその場を動くことがない

男はどうしたものかと冷静に手を考える一方

メイドには若干の焦りが生まれていた

「（っク・・・この男領域が広すぎる・・・少し安く見すぎたかしら？」

かといって吸血鬼を此方に回そうものなら奪われる可能性が出てきてしまうし・・・

それに数を減らしてしまえばあの男が此方に・・・」

メイドが必死に手を考えるも一向にいい案が浮かんでこない

戦闘開始10分、水の奪い合い、不死身の足止めと言った拮抗状態の中

状況が一変するような事が起きる

水の奪い合いを繰り返していた2人に間に炎のように揺らぐ黒い槍が数本振ってきたのだ

「これは・・・」

その槍は向こう側で繰り返されるリューガのフレイムランス



ばら撒く様にリユーガが何本も放っていたものだから、何本か2人の間にも落ちてきたのだ  
当然のごとくその黒炎槍は遠くからでも肌が焼けるような熱をまき散らし炎柱を天高く伸ばす  
すると一瞬の間だけ2人の魔水鬼は互いの姿が見えなくなり、次の瞬間メイドが魔水鬼の居た場所に視線を戻すが  
魔水鬼はおらず、急に横から衝撃を感じる

「ガッ!!」

「やはり吸血族、か・・・」

男の魔水鬼が呟くと  
そこから男の怒涛ののラッシュが始まり、常人の目に映らぬ速さで拳を振るう

メイドもなんとか水を操作し拳を相殺しようとするが

男の干涉領域テリトリーと自分の干涉領域テリトリーが重なってしまったため

上手く扱うことができず、一発、二発と体の芯まで響くような威力の拳をまともに受け始めると

メイドから集中力が消えていき、操作していた水が地に落ちると同時に

六本の腕が同時にメイドの体に深く突き刺さり、メイドは殴り飛ばされ、木に強烈な勢いで叩きつけられる

地面に力なく横たわる、メイドの首が真横に折れ、目や耳から血が流れだし始めると

男は興味がなくなったのか、すぐさま背を向ける

「どれだけ自信があったかは知らんが・・・吸血族が修羅族の視界に入って水を向けることが

自殺行為だと言うことも知らんとは・・・少し残念だ・・・  
まあこの不燃焼はあの男で晴らさせてもらうとしよう」

そう呟き男が視線を変えた直後

まばゆい光と共ドサドサッと倒れる音が聞こえ  
一人だけその中で立ちつくす男と目が合う

「何だ・・・もうおわちまったのか・・・」

「まあな・・・そちらも随分派手にやったようだな」

「使わまいと思っていたブレスを・・・結局使っちゃった

それでも死んでいないこいつらが凄いのか、ババあの加護が強  
かったのかは知らんが

結構シヨックだぜ」

気だるそうに呟くりューガ

「<sup>ブレス</sup>魔天の咆哮・・・私も一度くらいお目にかかりたいものだな」

「やめとけ、こいつらに使ったのは余波で纏う水を吹き飛ばす程度・威力なんて1/10程度だし

直撃させていねえ、それに俺のブレスはちと特別でな  
生き残ったのはこいつらが初めてだよ・・・」

「1/10でこれか・・・」

魔水鬼は青く不気味に光る目で惨劇を見渡す

リユーガを中心に地面が抉られた様な足場、周りの転がる集団

そして何よりリユーガの向く正面の木から山まで視界に映る風景  
がぼつかりと消えている

最初から何もなかったかのように

リユーガは現実から目をそむけるように体中の関節を鳴らし

男と向き合う

「さて・・・やるか・・・」

「そうだな・・・私もお前にブレスを使わせるよう気張るとしよう」

真剣な表情で魔水鬼が六本全ての腕の二の腕のあたりを器用に切り裂き

六本の腕から真っ赤な血が垂れる

「……鬼ツルギの金棒……か」

「よく知っているな、お前の言う通り、これは私……いや、魔水鬼最後にして最強の武器だ」

男が感心したように言葉を放つと垂れていた血が生きているかのように蠢き

六本全ての腕に真つ赤な刀が生み出される

男はその赤い刀身を軽く振るうと大地に罅一つない綺麗な溝ができ、男は微笑を浮かべ

六本の腕の前にき出すと、腕から伸びた血の刀が円を描くように回転し始める

「私の全力だ……お前も全力の魔天プレスの咆哮を使い」

「……はあ……やなことだ、疲れるんだよ、プレス出すの」

「そうか……ならばその体塵に変えてくれよう」

男が言葉を言い終えると同時に男は大地を力強く蹴り

リユーガに回転する鬼ツルギの金棒を突き出す

リユーガは刀の柄を取り出し真つ黒なブレイドと魔力を流した黒

翼で男の刀を一瞬だけ受け止める

しかし男の鬼の金棒はリユーガのブレイドをあっさり切り裂き  
二本の鬼の金棒を携えた腕がリユーガに迫る

リユーガはなんとか迫る刀身を強化した黒翼で受け流し距離をと  
るが

男の突進は止まらない

「そんな刀で私の鬼の金棒をいつまでも止められると思うなよ！」

「チィ!!!」

2人は眼にもとまらぬ速さで動き何度もその体を交差させる

男の鬼の金棒には傷一つついていないが

リユーガの黒翼は交差するたびに刃が欠けていき、今にも折れて  
しまいそうだ

そして8度目の交差にて、遂にリユーガの黒翼が真っ二つに折れる

男はリユーガの黒翼が折れたのを見た瞬間回転を止め、

六本の腕で挟むようにリユーガに鬼の金棒を振りぬく

「とつた!!!」

男は力強く鬼の金棒を振りぬく、だが

ザシュツ!っと言う肉が切れる音と共に鮮血が噴き出るが

男は目を見開く

「なッ!！」

「腕切られる覚悟でやったんだが・・・さっすが最硬は伊達じゃないねえ」

「私の鬼の金棒ツルキを受け止めただと!！」

男が振るった腕は首と体を狙った腕はあっさり振りぬけたのだが足を狙った鬼の金棒ツルキだけは振りぬくことができなかった

そこにはリユーガの腕があり、鬼の金棒ツルキはリユーガの腕に少しくいこんでいるが

リユーガの体には届かなかった

男は振りぬいた腕を再度リユーガに向けて振るうが

それより一步早くリユーガの体が飛び上がり

男は顎に強烈な衝撃を受け宙高く舞い上がり目を見開く

視線の先には拳を振りかぶるリユーガの姿

男は諦めたかのように軽く笑みを浮かべ薄れゆく意識の中残念そうに呟こうとした

「お前の・・・」

しかし男の呟きが最後まで言われることはなく

顔に受けた衝撃と共に地面に叩きつけられ巨大なクレータができ

ると同時に

男の意識は闇の中に消えて行った

「後10年経てば、俺の鱗も簡単に切り裂けるだろうよ・・・それまで

ブレス 魔天の咆哮はお預けだな」

着地と同時にリユーガは誰に聞こえるでなく眩くとドツと疲れを感じ地に腰を下ろした  
そして暫くすると上空から声が聞こえる

「おーい!!」

リユーガは叫ばれる声を鬱陶しくも思い  
また何とも言えない安堵感を抱くと、リユーガも目を閉じ眠りに  
ついた





### 三十四話（後書き）

・・・戦闘って難しい

まずはこれを見てください

7:12:44

何だと思えます？

この話しを書くのにかかった時間ですよ・・・駄文の作者なりに試行錯誤を重ねた結果がこれだよ！！

そんな訳で一日一更新が・・・

決して書く時間がなかったとかそういうわけではないんです

時間はたっぷりあったんですが・・・何でが出来た物が納得いかず没になること10ほにやら・・・もう・・・ゴールしても・・・いいよね

そんな訳で作者は燃え尽きました

それでも正直納得がいきませんでした・・・流石投稿スピード元に戻すぜ！！

とかいきがって初っ端から二日間投稿なしとかはしたくなかったんで渋々及第点のこれを上げる事にしました、そんな訳でいつかこの話しは大幅に改編されるかもしれませんがご了承を

これで学院編は終わります・・・学院じゃねえ！！とか言わないでください

もっと学院の話しも作者は書きたかったんです、唯これ以上原作入りが遅れると

かなり長くなってしまうような気がするんです・・・作者としては夏の終わりくらいには完結を目指していますのでどうかご了承を

次回！大幅にキンクリし、一気に召喚の儀式まで飛びます

そんな訳で次回から原作破壊編、原破編・・・始まります

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への意見、指摘、感想をお待ちしております

### 三十五話（前書き）

どうも駄文な作者です

やっとのことで原作突入！！長かったのか短かったのかよくわからなかった

二ヶ月・・・約一ヶ月間は更新してないけど・・・

ちよつと無理やりすぎたかもしれないが

そんなこんなでグダグダ転生物語inゼ口魔新章原作破壊編・・・  
始まります

## 三十五話

「やつべー！馬鹿やつてたらこんな時間に・・・  
おらー！もっと早く飛べやラークー！」

ラークはそこらの風竜とは段違いのスピードで空を進んでいるの  
だが

リユーガはかなり焦っており、何度もラークに催促をする

「何回目だその言葉・・・自分が飛んだほうが早いだろうに）  
ボソ・・・ほら見えてきたぞ」

「ここまでくりゃいいか・・・んじゃお前はいつものとっさに  
いるよ」

リユーガはラークの背を力強く蹴り  
空中に身を乗り出す

「オフッ！・・・人の背中を蹴るんじゃない！！！」

「わりいわりい……まあ許せや」

そのままリユーガは空中から目的地を見ると

広場に多種多様の幻獣と学生の集団が視界に入る

リユーガは広場の隅に飛び込み音を立てず着地を決めると  
その姿を見たステイルが寄ってくる

「まったく……何もこんな日にまでギリギリに来なくても」

「まあそう言つなよ……それで？もう終わっちまったか？」

リユーガは服についた埃を払いステイルに問いかける  
するとステイルは集団に指を向け答える

「まだ半分つてところだよ、あっちが終わってない組」

「お前は？」

「いや、僕は下から3番目、確かそろそろ君の番の筈だったん  
だけど……」

ステイルが顎に手を乗せそう眩くと、集団の中心から声が聞こえる

「ミスタ・リユーガ？・・・ミスタ・リユーガはいませんか？」

「ほら君の番だよ、せいぜい馬鹿でかいのでも召喚してみんなを驚かせてやれ」

「なんか変なのきそつで怖いわ・・・」

リユーガとステイルは話しながら集団の中へと足を運んでいった

.....

話をしよう、あれは今から36万・・・いや？一万二千年前のことだったか？

まあいい俺にとっては今日の出来事だ・・・

はい、茶番のネタがなくなってきた

俺ことリユーガ・F・ド・S・H・ブラッドリーです  
フラン シュヴァルム土ク

いやー長かった、実に長かった、だが私はついに

今、今日、この刹那、この瞬間、トゥデイ、に迎えたのだ！！

原作開始の日、これすなわち使い魔召喚試験の日に！！！！

任務に借り出される日々、ウィルと馬鹿やらかしビダーシャルに  
ぼっここにされた思い出

下僕2人を訓練と言う名の拷問にかけ笑った日もあった、そして  
実家に顔出し笑顔のママ上に折檻されたりもした・・・ついでに  
なんか精霊とかついてきたけど・・・

え？そんな大事な話聞いてないって？・・・まあそこらの話はそ  
のうち神（作者）が上げるだろ

っとそんなことより数々の困難を乗り越え、今この瞬間、私はト  
リステイン魔法学院の大地を・・・

踏めたらよかったね・・・

プチ・トロワ食堂

「何を百面相しながらぶつぶつと言っておる」

「あー？・・・ぬっ殺すぞ

朝っぱらに学院に使い寄越しやがって  
俺の安眠を返しやがれ」

「そう言うな、まあ飯でも食うがいい」

ジョゼフが指を鳴らすと次々と料理が運ばれてくる  
その姿を見つつリユーガは顔を変え、ジョゼフに問いかけた

「それで？今日は一体どんな面倒ごとだ？」

「先にそう決め付けるのはよくないぞリユーガよ  
今日は報告みたいなものだ」

「報告？・・・そんなことで・・・」



鷹便か水電で済むことだろーに……」

「ついでに騎士団でも覗いていけば良いだろ？」

リユウランに10人ほど新隊員が入って、今日活動開始のはずだったぞ

それなのに隊長不在では示しがかんたろ？」

運ばれてきた料理に口をつけながら

ジョゼフは言葉を発する

リユウガも続くように料理を食べ始めたため息ひとつ漏らし言葉を続ける

「今日は進級試験なんだがな……」

まあそつちには後で顔出すさ」

「なんだ使い魔を召喚するのか

リユウガは一体どんなものを召喚するのか、非常に興味深いな・

……

呼び出した暁にはこちらに見せに來い……しかし……使い

魔か……」

何か思うことがあるのかジョゼフはいったん料理の手を止め考え出す

リユウガは食べることに夢中で気づいておらず

一通り食べ終わった後リユウガはジョゼフに問いかける

「そんで？一体何があったんだ？  
また糞坊主共が茶茶入れにでも来たか？」

リユーガはそう言い  
部屋にいる使用人に視線を送ると  
使用人達は意図に気づき全員静かに部屋を退出していく

「それはもういつもの事だ  
良いことと悪いことがある、どちらから聞きたい？」

「どつちも悪いことってパターンじゃねえだらうな・・・とりま  
悪い方から」

「では・・・ほれ」

バサツとリユーガの前に紙の束を放るジヨゼフ  
リユーガは紅茶を啜りつつその紙束を受け取り目を通していくと

「へっ・・・もう地下鉄できたんか  
上はまだちょっと手間取ってるみたいだな・・・まあコルベール  
さん帰っちゃったからな」

「いきなり見本だけ見して作れというほうが無理に決まっておる  
あの禿が帰ったあたりから上の作業が停滞しておるが  
地下は明日にでも運行可能と向こうの者が言っておったぞ」

リユーガに渡された書類にはでかかど蒸気機関車及び地下鉄進  
行報告書と書かれており

そこには上の作業は停滞しているものの、下の作業は予定の3ヶ  
月以上早く出来たと遠まわしに書いてあった

「まさか地下の方が早くできるなんてな、上は・・・  
またコルベールさんに来てもらうよう言っておくとするぞ」

「あの禿はなかなか優秀なようだな  
一人欠けただけでここまで停滞するとは思わなんだ・・・  
そんな訳であの禿をこちらに引き込んで来い  
あのままでは開発主任が倒れる  
何ならこちらの子爵程度はくれてやってもいいと伝えて構わん」

「・・・まあその辺は適当にやっておくさ  
それで？悪いことっての停滞したってこととして、  
良い方は地下鉄完成ってことか？  
そう言う事にしろ、そんな訳で俺は詰め所に・・・」

何かに怯えるように早口でシヨゼフに告げると

リユーガは立ち上がるうとする  
しかし、突如扉が開く音が聞こえると  
リユーガは扉を見ずに諦めたように席に座りなおす  
扉を開いた者はトテトテとリユーガに駆け寄りその膝の上に腰掛  
満足そうな表情でリユーガを見つめる

「はあゝ・・・なんだユーリか、焦ったぜ」

「・・・？・・・やつほージジイ？」

「相も変わらずお前によく懐いているな・・・それと・・・ジジイ  
はやめてくれ」

リユーガの膝の上に腰掛け首をかしげつつジョゼフに挨拶する銀  
髪の少女

それは吸血鬼事件で身寄りがなくなったユーリであった  
なぜここプチ・トロワに居るかと言うと

リユーガはあの事件の直後目が覚めるやいなや、  
ユーリを何とかして欲しいと魔水鬼セツタ（リユーガ命名）  
に泣きつかれ、疑問を抱きつつ屋敷の庭へと視線を向けるとそこ  
には

初めてリユーガに会った少女はどこへ？と言うほど庭を奔放と駆  
け回る少女ユーリを目撃

一夜にして豹変した少女に若干引きつつリユーガはユーリに会話を  
持ちかけるも

抜き取られた感情がうまく治っていないのか奇抜な言動となって

おり

会話が成立しない

なおかつリユーガとセツタ、ラーク以外には懐きもせずと手がつけられぬものだから

仕方がなくリユーガの領地、ハーク領の屋敷へと連れ帰ると

狙ったかのようにジョゼフの娘イザベラが何故かリユーガの屋敷に滞在しており

これまたユーリを気に入り、事情を話すと自分の所で引き取ると言い出し

満足そうに（ユーリは嫌々）イザベラの住むこのプチ・トロワの侍女（名前だけ）となったのだ

「じゃじゃ馬は？」

「……ぐっすり？」

「ぐっつともさもさは？」

「セツタは多分俺の領地に居る、ラークは外に居んぞ

それにしてもよく俺が居るってわかったな」

「うーん？……おい？」

「マジで！？俺そんな臭いすんの！？」

そんな感じで会話を続ける2人  
ジヨゼフはそんな2人を眺め

「相変わらず訳の分からん会話だな  
どうしてユーリの言葉が分かるのやら……ん？」

「ッ!？」

扉の向こう側からズカズカ2人の足音が聞こえると  
リユーガは焦ったようにユーリを抱え飛び上がる  
それと同時に扉が勢いよく開かれ  
シャルルが肩で息をしながらジヨゼフに紙を突きつける

「に……兄さん……これどう言うことだい!!!」

「ああ……もうバレてしまったか  
まだリユーガに告げていなかったのだが……」

そう呟きジヨゼフが天井を見つめるとシャルルもつられる様に天  
井を見つめる  
するとそこには

「おー・・・たかい？」

「シッ！俺達は今壁なんだ

We are the wall」

「・・・？」

片手をめり込ませ天井にへばり付くりューガの姿がある

「そのアホ、早く降りて来い」

「うるせー・・・俺は今壁だ、壁に話しかけてんじゃねえよ痛いオッサン

略してイタオ」

「痛いのは貴様だ、来たのはイザベラではないシャルルだ」

「・・・脅かさないでいただきたいなシャルル殿

私を狙った暗殺者かと思っってしまったではないですか」

天井から音もなく着地し取り繕うりューガだがシャルルは軽く苦

笑を浮かべる

そして我に返ると再びジョゼフに紙を突き出す

「そ、そんなことより兄さん!!これはどう言うことだい!!」

「あん?・・・あれ?おかしいな俺の目腐ったかな?」

「じよわじよわしたの?」

リユーガはシャルルの持っている紙に目を向けると  
目の間を強く抑えうな垂れる

「現実を見る、それはもう正式に決まったことだ」

「・・・いかな、耳まで腐ったようだ

イタオの声で幻聴が聞こえるな・・・」

「だから・・・」( ) ( ) ( )  
「何も見えなーい」

駄目だコイツ早く何とかしないと・・・」

「俺の目と耳は腐ったんだああ嗚呼あああああ!!!!」



「おわっ!?!」

リユーガはシャルルの持っていた紙を四分にして  
そのまま壁を破壊して外に飛び出し叫ぶ

「ラーク!!!!!!」

「そう殺気をださんでくれ・・・正直体が動かんくなる」

リユーガはそのままラークの背に飛び乗り大空に乗り出した

その一部主従を見たシャルルはポカンと口を開け放心し

ジョゼフはやれやれと肩を窄め、綺麗に四分割された紙を眺め眩  
いた

「俺の娘の何が不満だというのだ・・・」

「俺の自由は俺のもんだああ嗚呼ああ!!!!!!」

ジョゼフの呟きに答えるかのようにリユーガの山彦が聞こえる

「なぜ聞こえたし・・・はあく・・・まあどっちにしろ逃げられんさ」

ジョゼフは紙を繋げ

薄く笑いを浮かべた

ジョゼフの持つ紙にはハルケギニア語でこう書かれていた  
イザベラ姫、ハーク公爵の婚約につきその段取りについて、と

「俺は自由に生きたいんだ——————」

「バツバ—————?」

リユーガの心の叫びに答えたのはユーリだけだった

### 三十五話（後書き）

そんな訳でリユーガ結婚します・・・  
まあそれなりにフラグ話上げてから挙式の話を上げると思います・・・  
・多分

ついでにユーリ言葉辞典をここに書いておきます

ジジイ ジョゼフ

ぐっすり 寝てる

ごっつ セツタ

もさもさ ラーク

におい（１） スーツとするミントのような香り

たかい 5メートルぐらいの高さ

じょわじょわ 腐ってる

バツバー 今度はこっちから行くよー

そしてこれから出てくると思われる言葉

ビューン リユーガ

ジャジャ イザベラ

ヤッサー シャルル

ポーポー ステイル

ナンカー ギーシュ

つとこんな感じですよ

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への指摘、意見、感想をお待ちしております

## 三十六話（前書き）

どうも駄文な作者です

皆さんが感じたであろう感想をいただいたので  
ここで皆様に分かりやすいように説明いたします

感想 アレ、吸血鬼達どうなったの？

とまあ 予想はしていたんですがやっぱりきました  
駄文な作者はエピソード的なものを書いたんですが  
もう伏線ばればれ、グダグダ、超展開  
なにこれ性格変わってる！！とひどい文になってしまったので  
あえて書かず、あのことのことに遭遇したらユーリ登場時のように逐  
一報告の方が

良いのでは？と作者のネタ庫K・U氏に提案され、それを採用した  
と言うわけです

決して唯出して後は放置なんてことはコンマーミクロンも考えてい  
ませんのであしからず・・・

納得行かない方もいらっしゃるかと思いますが全ては表現力or文  
構成が下手糞な駄文な作者のせいです、申し訳ないm(´`´´)m  
完結後または纏まった時間ができれば幼少編共々一気に改正します  
ので

前書きからグダグダと申し訳ありませんでした・・・それでは本編  
へどうぞ

## 三十六話

ロマリア大聖堂

ヴィトリーオ執務室

ジュリオとヴィトリーオが向かい合うように座り

「ヴィトリーオは書類に目を通しつつ顔をしかめ

ジュリオは重々しくその口を開く

「日に日にこちらに流れてくるものが悪いものになっています

今となつては我々と通じている者からしかこちらに送ってきて  
いなようで

あちらの王はなんと？」

「双王ジヨゼフはこのように・・・」

ヴィトリーオは額を押さえつつ書類をジュリオに向ける

「・・・遠まわしにすり合っていないと言っている様なものです  
ね

「はあ・・・これは由々しき事態です、下手をするところの国そ

のものが潰れかねません

何とかならないものでしょうか……」

「やはり、僕がガリアの……」

「その体で行くと言つのですか？

まだ傷も癒えていないというのに……」

ヴィトーリオはジュリオにそう言葉を投げかけると

ジュリオは時が止まったように固まる

ジュリオの体をよくみると袖から白い包帯がチラついている

「貴方が何度も彼の領地を調べようとしていたことは知っています  
そのたびに傷ついて帰ってくることも」

「……申し訳ありません」

「今貴方を失うわけには行かないのです……分かってください  
予言では来年までに担い手が全て揃うはず……」

貴方の様な信頼でき、尚且つ動ける者が現れるとは限らないの  
ですから

ガリアからの物資が少なくなった以上、

ゲルマニア、トリスティンから援助を求めればいいだけの話です

あまり思いつめないようにしてください」

「・・・分かりました、では・・・」

ジュリオは渋々と言った表情で執務室を後にする  
ヴィトーリオは再度ため息をつき、手を叩くと

最初からいたようにヴィトーリオの後ろに3人の影が現れる

「ジュリオから目を離さないよう、お願いできますか？」

「・・・」

現れた影の一人が無言で頷き

3人は執務室から消える

ヴィトーリオは気配が無くなったことを感じると億劫そうに呟く

「彼らをどこまで信用して良いものか・・・」

つと、いけませんね、このような発言は・・・」

自分を律するかのよう<sup>に</sup>頬をピシヤリと叩くと  
ヴィトーリオは二通の手紙を書き始めた

・・・・・・・・・・・・・・・・

グラント・トロワ  
ジョゼフ執務室

シャルルとジョゼフは書類に目を通しながら将棋をすると言う傍から見ればかなりシユールな作業をしているのだが  
2人の表情から真剣さがひしひしと伝わってくる

「ロマリアからそんなものが・・・兄さんはなんて答えたんだい？・・・飛車取り」

「このようにな・・・角と交換だたわけ」

ジョゼフは右手で駒を動かし、左手で横で盛り上がる書類の山に手をつ込み

一枚の紙をシャルルに突き出す、シャルルは突き出された紙を受け取り

目を通していくとため息を漏らした

「・・・はあ・・・これじゃ

お前の国なんぞと貿易する価値が無いって言ってるようなもんじゃないか

「どう言つのは僕に任せて欲しいよ・・・あー・・・どうしよ・・・



手が詰まった」

「本当はお前の言った通りに書きたかったのだが、ギークに口を挟まれて致し方なく、な・・・早く指せ」

「それにしだってこれじゃ向こうが文句言ってこないかい？・・・  
桂馬成り」

「どんな文句を言えるというのだ？

向こうから入ってくるものはあやつらが作った時代遅れのものばかり

始祖と言う名がついたガラクタではないか・・・そう来るか・・・」

「確かにそうだけど・・・ってもうやってしまったことだしこれ以上言う意味も無い、か

それより兄さん今の話をしようか」

「ん？今とは？待ったは無しだぞシャルルよ」

ジョゼフがそう真剣に言うものだからシャルルは何度目かのため息を漏らし

言葉を放つ

「いい加減説明して欲しいよ  
どうしていきなりイザベラとリユーガの結婚なんか・・・」

「ん？なに簡単なことだ

どう転んでも後数年後には俺達は寝る時間も無くなるほどの問題と向き合わねばならんだろ？

そうなれば当然娘に気など回らん、

ならば今のうちに娘の思い人と番にさせておいた方がいいと思  
ったので、な」

「そう言うのは当人同士の問題なんじゃ・・・」

「王族ともあろう者がそれを口にするか？

それに俺は娘に確認したぞ、婿を取れと

そしてリユーガは放っておけば女を蔓延らせると言ったら

好きにすればいいじゃない！と言ったからな

好きにさせてもらったただけだ、その何が悪い

それより素直に言えばいいだろ？

姪もリユーガのことを好いているから、と」

ジョゼフの言葉にシャルルは数秒目を瞑り

そして諦めたように口を開く

「まあ・・・本当のことを言えばそれ以外異議なんて無いんだけ

どね

当然今からシャルロットも・「もちろん駄目だ」・「だよな  
それじゃあ精々足？かせてもらつよ、後はよろしくね」

ジョゼフにそう告げるとシャルルは自分の分の書類をジョゼフに  
押し付け

席を立つ

「どこに行く気だ？」

「親子の会話してくるだけ、それぐらいいいでしょ？」

シャルルはジョゼフの答えを聞かず執務室から早足で立ち去ると  
ジョゼフは2山に増えた書類に取り掛かっていった

.....

どうも大変長らくお待たせ？いたしました

主人公のリユーガ・F・ド・S・H・ブラッドリーこと

俺です、プチ・トロワから勢いよく飛び出したわいいが

飯を食ってしまったので試験開始直前にでも行けばいいやと考え  
現在俺の持つ騎士団含め全ての騎士団が集まったここグラント・  
トロワ第一訓練所に居るわけですけど・・・  
さつきからおめでとうおめでとうって・・・

こいつ等殺っちゃっていいかな？いいよね？誰も止めない（止められない）よね？

よし！そうと決まれば・・・NOW KILL!!!

っとそんな馬鹿なことはしませんよ？唯こいつ等には正式に地獄  
を見てもらうだけですよ

全騎士団を統べる俺を怒らせた罪・・・万死に値する・・・と言う  
わけで逝ってみよう

リユーガは50人ほど新入隊員とその横で綺麗に並ぶ200人ほ  
どの5つの騎士団員が全員そろった事を

それぞれの隊長から報告を受けると、壇上にかかる  
すると新入隊員達からざわめきが聞こえ始める

「アレがリユウランの団長？」

「どうみても子供じゃないか」

「公爵の七光りだろ？」

「本当に大丈夫なのかこの騎士団・・・」

など新人隊員達のざわめきと、横の隊員達の昔は俺もこうだったなあ・・・と言う表情が二分する中

リユーガが言葉を発する

「えー、俺が中央騎士団の団長リユーガだ

つとあんまり長々と前置きがあるとダルイだろうから

ひとつだけ言わせてもらう

自分の命を守りぬけ

名誉やら何やらは生き抜いた後についてくるもんだ

俺からはそれだけ

んじゃ、まず総分けから始めようか

ギーク、バツソ、カインル、モリエール、ダルトー

前でてこーい」

リユーガが気の抜けた声で呼びかけると

綺麗に並んでいた騎士団の中から呼ばれた名前の者たちが前に

出てきて

軽くリユーガに挨拶を交わすと円を作り話を始める

新隊員達はリユーガの言葉に拍子抜けし呆れる者からリユーガ

の言葉を考え始める者まで多種多様

しかしそれぞれの団所属の隊員たちの何人かは手を合わせ一心

に祈り始める

そして話が終わったのかりユーガが再度壇上に上り言葉を発する

「今回の分け方は戦闘だ・・・」

リユーガの言葉に祈りを捧げていた隊員たちはギクツとなり真剣な表情でリユーガの言葉に耳を傾ける

「それで今回の相手だが・・・隊員共喜べ、南百合・・・」

リユーガの言葉に隊員たちはホッと胸を撫で下ろすが

「・・・花壇騎士団、団長タルトー含め隊長陣監査の下で  
時間に余りがある、俺vs新旧隊員達だ、やったね お前ら」

リユーガが言葉を言い終わると同時に並んでいた者達全員の動きが固まり

次の瞬間、新隊員達と比較的所属期間の短い隊員たちが、はあ？と情けない声をあげ、

祈りを捧げていた約半数の隊員たちは一斉にこの世の終わりのような表情に変わる

中には奇声を上げる隊員や、狂ったかのように頭をかきむしる隊員までいる

すると新隊員の中から手がひとつあがる

「ん？なんだ・・・質問か？」

「あの・・・どう言うことでしょうか？」

新隊員達とひとつの騎士団が試しに戦うのは聞いたことがあるのですが・・・

今の言い方だと総団長とここにいる全員ってことに・・・

「何か問題があるか？」

呆気からんと返事を返すリユーガに質問をした新隊員は目を見開き黙ってしまふ

すると、その手を上げたもの続くかのように団所属の隊員からも手がちらほら挙がり始める

「今度は何だ？」

「はい！！自分は東薔薇のクードと申します！！」

総団長に無礼とは思いますが、お願いがございます

横のものが死にたくないと呼びかけております、私も同じです！！

どうかお考え直しを！！！！

「「「「「お願いします！！！！」」」」」

一斉に頭を下げる半数の隊員たち、しかしリユーガは彼らを見つめ優しい声で言葉を発する

「大丈夫だ、前は俺もちよつとやりすぎたから今度は手加減はする  
それにお前から最近弛んでると団長陣から報告もあつたし  
おまけに今日は少しばかり時間がある  
ちなみにこの総分け、初めての奴もいるだろうから一応説明し  
ておく

ルールは簡単、まず何人まででもいいからグループを作れ  
sondeできたグループから俺にかかつて来い、  
もちろん個人で向かつてきても構わん

これだけだ、どうだ？簡単だろ？  
ちなみに俺に一撃当てたら旧隊員は昇格、新隊員は・・・そつだ  
な好きな地位に立たせてやろう  
これならお前らもやる気が上がるだろ？」

どこまでも飄々と言葉を放つリユーガを見て  
何人かの新隊員が前に出てくる

そして一人の新隊員がリユーガに杖を向けニヤニヤと言葉を発する

「そんじゃ俺が一撃当てたらあんたの座を・・・ゴフウ！！！！」

しかしその隊員は最後まで言葉を言うことなくリユーガの拳が顔  
に突き刺さり

何回転もしながら壁に激突し気を失う  
するとざわついていた空間が一瞬にして無言となり  
リユーガが満面の笑みで言葉を発する



「はい、次……ちなみに杖を向けた時点で開始だから」

指をポキポキと鳴らしながらリユーガが告げると

何人かの新隊員達が挑み、一撃で沈む

少し学習した新隊員はグループを作って挑んだが、秒殺

そんなことを繰り返していくといつの間にか新隊員達の中で立っていたものはただ一人

フードで顔を隠した少年だけとなった

「今年是不作だなあ……そこのお前……来ないの？」

「……」

「ま、いいか、好きなときにかかって来い……そんで……お前はいつ来るの？」

リユーガはぐりんと残っている団所属の団員に顔を向けると  
一人の男が冷や汗を流しつつリユーガに敬礼し、言葉を発する

「自分達は20〜30人では勝てる気がしません！！

しかし、いつまでも総団長にふがない姿を見せるわけにもいけない、

そう思い自分達が一斉にかかることをお許してください！！！！」

「かつこよく情けないこといってんじゃねえよ……まあいいや  
いつでも来い」

「総員構え!!」

リユーガの前で宣言した男が叫び腕を上げると  
残った者たちが一斉に杖を取り出す

「放て!!!!」

そして男の掛け声とともにリユーガにさまざま魔法が迫って  
いった

.....

20分後

リユーガはあちこちに倒れている人々を見つめ  
感想を漏らした

「まあ、俺に魔法を使わせただけでも成長したのかな？」

「相変わらず化け物やっているな」

「団長に向かってその言い方は無いだろギーク……それで、お前はいつになったら来るのかな？」

ギークに突っ込みつつリユーガは集団の中唯一立っているフードの少年に視線を向けると

フードの少年はゆらりと体を揺らし、片手にナイフを構えリユーガに突撃をする

ギークは少年の突撃を眺め、その場を飛びのき感想を漏らす

「速い……が」

キーン！と金属同士のぶつかる音が響き

リユーガとフードの少年はナイフと刀で鏝競り合いを繰り広げる

「……どっか怪我でもしてんのか？」

「……フッ……！」

少年はリユーガの問いに答えず  
ただ無言でナイフでリユーガの刀を抑えつつ拳を走らせる

「つと・・・鋭いけどなあ・・・これ喧嘩の拳だな、粗すぎる」

「・・・」

「筋も悪くないけど、どうもな・・・喧嘩の域を出てない・・・」

リユーガは逐一感想を漏らしていくが  
少年は一向に言葉を喋る様子が無く、ただ無言でリユーガにナイフと拳の乱打を繰り返すのみ

「あー・・・もう良いや」

「ッ！？・・・グッ！！」

リユーガは刀を器用に扱い少年からナイフを絡め取り  
腹にけりを放つと、少年は腹を押さえ蹲る

「まあ・・・出直して来い、お前軍人って言うより唯のゴロツキ  
だわ」

「……………」

リユーガが少年にそう告げるが

少年は諦めていないのか、再度立ち上がり拳を構える  
その姿を見つめリユーガは呆れたように言葉を漏らす

「根性があんのは認めるが……………っと!?!?」

言葉を続けようとしたリユーガに少年は懐から取り出したナイフ  
を投擲する

リユーガはそれを居合いで弾き飛ばし、少年に視線を向けると  
少年はリユーガにある物を向け、指を軽く曲げると  
パンツ!と乾いた音が響きリユーガが膝をつく

「団長!?!?」

「てめえ……………まさか……………」

リユーガは腹を抑えながら少年に殺気を飛ばしにらみ付けると  
少年は手に持ったものをリユーガに向けながらリユーガの傍によ  
り小声でささやく

「君は・・・邪魔なんだよ・・・」

「このっ!!」

リユーガが勢いよく拳をふるい少年の顔に直撃すると同時に  
またも乾いた音が3度響き少年は殴り飛ばされ  
リユーガはそのまま倒れる

「貴様!!何を・・・」

隊長達がリユーガに駆け寄りつつ殴り飛ばされた少年に目を向けると

そこには少年を担いだ、これまた黒フードで顔を隠した人物が立っており

空より降りてきた風竜に乗り空に飛び立っていった

「あれは一体・・・ってウオ!!」

ギークが飛び去る風竜を眺めていると

急にリユーガが飛び起き、不機嫌そうな顔で呟いた

「あの糞餓鬼が・・・服ボロボロにしゃがって」

「っておい！撃たれてるじゃない・・・か？」

ギークがリユーガの腹部を見るとそこには4つの穴が開いていてポロツと鉛球が4つ落ちるが

リユーガからは血が一滴も流れていない

「・・・はあく・・・まさか直接来るなんてな・・・油断してたぜ」

「お、おいさっきの一体何なんだ？」

それに何をぶつぶつ・・・」

「あー？・・・気にスンナ？」

何でもねえからよ・・・ってもうこんな時間かよ！！やっべ！

ラーク！！！！」

リユーガは時計を見た後焦り始め、空から降りてきたラークに飛び乗ると先ほどの風竜同様すぐさま視界から消えていく  
残された隊長たちはその光景に啞然としつつ一斉に同じ言葉を呟いた

「「「「「なんだっただ」」」」」

彼らの言葉は誰に聞こえる出なく響き、消えていった



## 三十六話（後書き）

ここまで駄文を見ていただきありがとうございました  
この作品への感想、意見、指摘をお待ちしております

### 三十七話（前書き）

ザ・ワールド!!!

オラオラオラオラオラオラオラオラオラ

オラオラオラオラオラオラオラオラオラ・・・

どうも初っ端からプラチナってる駄文な作者です

今この瞬間だけ時を止めたい・・・

と、そんなことを考えつつキーボードをオラオラ叩いていたらでき

ますた

どうぞ・・・

## 三十七話

ロマリア大聖堂

ヴィトリーオ執務室

ヴィトリーオが淡々と雑務をしている最中、ヴィトリーオはふと扉のほうに気配を感じ

扉のほうに目を向けると、ジュリオを肩に担ぎ立ち尽くすフードの男が視界に入る

「ッ！？・・・ジュリオ！」

「・・・・・・・・」

ヴィトリーオは勢いよく椅子から立ち上がりジュリオに駆け寄ろうとすると

黒フードが手を前に突き出しヴィトリーオを止め

ジュリオをソファアに横に寝かせる

ヴィトリーオはジュリオが規則正しい呼吸をしている事を確認すると

安心したのかその場に座り込みため息を漏らした

「はあ〜・・・何があったのですか？」

「……」

「すみません……そう言う約束でしたね……この度はありがとうございました」

ヴィトリーオが頭を下げると黒フードはヴィトリーオの肩に手を置き

顔を上げさせるとヴィトリーオの前にはいつの間にか5人の黒フードが立っており

異様な気を放ちヴィトリーオに視線を向けている  
そして黒フードの中の一人がフードを取り去ると  
燃えるような赤い髪が外に飛び出、ヴィトリーオを見つめる

「これはシュペル殿……珍しいですね貴方がここに来るなんて」

「……我らからの新たな要望がある」

「貴方達には良くして貰っています、私に出来ることならば何でもいたしますよ」

「……次の予言には我らの誰かを立ち合わせていただきたい」

シュペルがそうヴィットーリオに言葉を放つと  
ヴィットーリオは目を閉じ少しの間考え  
意を決したかのように口を開く

「それは出来ません、予言は私達の切り札、それを見せるという  
ことは

全てを晒すということになります・・・今だ貴方以外の顔も  
見たこともなく

話したこともない、そんな貴方達を信用することが出来ないの  
です」

「・・・すまないが顔を晒すことはできぬのだ  
代わりとっては何だが・・・これで如何かな？」

シュペルは懐から紙を一枚取り出しヴィットーリオに渡す  
ヴィットーリオ渡された紙に書いてある文字を読んでいくと段々と  
顔が険しくなっていく

「・・・これを・・・どこで？」

「出所は聞かないでいただきたい・・・それで？如何かな？」

「・・・2つほど条件があります」

「なんだ？」

「予言で見たものは口外しないこと  
そして私達の聖戦に協力していただきたい」

「……今も協力していると思うが？」

「今は唯雇った者と雇われた者の関係  
そんなあなた方を私が許しても、他の者たちが許さない、  
しかし同じ聖地を目指す同士として私が強く推せば仕事は増え  
るでしょうが

他の者たちも納得するでしょう

この二つの条件、飲んでくれますか？」

シユペルは 少しの間考えた後ヴィトーリオに問いかけた

「……仕事とは？」

「今までとあまり変わりませんが……  
聖戦の際には聖地に蔓延る異端者エルブと戦ってもらつことになりま  
す」

「……いいだろう……その条件飲もう  
それで？予言の日程と場所は？」

「一カ月後、場所はロマリア大聖堂、地下の右から三つ目の部屋  
の中に居るものに

『始祖は舞い降りた』と言えば案内してくれます」

「分かった……では我らはこの辺りで……」

シュペルはそう言葉を残すと

後ろに居た4人の黒フードと共に音もなく消え去った

グイトーリオは消えた彼らの居た場所を見つめ重くため息を呟い  
た後

シュペルから渡された紙を眺め呟く

「こんなものを……一体どこで……」

……

どうも大変長らく？お待たせ？いたしました  
リユーガです  
いやあ、いい天気ですねえ・・・太陽が燦燦と輝いているぜ  
こんな日は昼寝に限るな・・・  
まあ・・・寝る前に・・・  
目の前のコイツ何とかしようか・・・

「ほう・・・見たこともない幻獣ですね・・・これは一体・・・」

コルベールはリユーガのサモン・サーヴァントによって呼び出さ  
れたものを眺め

感想を呟く

呼び出した本人リユーガは自分の使い魔となるものを眺め、目を  
逸らし

横でコルベール同様興味ぶかそうに眺める二人に声をかけた

「あー・・・僕<sup>スタイル</sup>一号、二号<sup>ギンユ</sup>、ちよつと来い」

「今なんと書いて僕の名前を呼んだ！！！！」

「どーでもいいだろそんなのよ・・・いいからさっさと来い」



2人は渋々とリユーガの元に近寄ると

リユーガは急に二人の体を手繰り寄せ小さく呟くと

2人は若干戸惑いつつ杖を取り出し呪文を唱える

すると円を囲むように群がっていた学生達の足元から土が盛り上がり

3人の姿をすっぱり覆い隠す、それを見計らってステイルが大量の魔力を込めて

サイレントをかけて回ると、外の音が聞こえなくなり

包まれた3人と一匹の間に沈黙が生まれる

「いきなりどうしたんだい？こんなことまでして」

「そくだよ、毎度のことながら君は説明が・・・っておい!!」

「起・き・ろ、ごらあ!!!!」

リユーガは二人の言葉を無視し目の前の巨体に拳を振るう

スドンツ！と鈍い音が包まれた空間に響くと巨体はのっそりとその身を起こし

リユーガを睨むと、口を開いた

「痛いじゃないの・・・ふあゝ・・・それにしても良く寝たわね・・・

アレ?・・・」

「喋った！？……っていつものことか」

「お前らも慣れてきたな」

ステイルとギーシュは喋り辺りをきよろきよろと見渡す、目の前の巨体に声を上げるも

一瞬で冷静になり、手を同時に叩く

そんな2人の姿を眺めつつリユーガは関心したような言葉を呟き目の前の大きな蛇を指差し言葉を放つ

「何で俺の使い魔がお前かねえ……根暗蛇」

「あらあら……言ってくるわねえ……空でふんぞり返ってる爬虫類が」

「おめえも爬虫類だろうが蛇野郎……いや、蛇女か？」

リユーガがサモン・サーヴァントによって呼び出したのは4メートルほどの

黒い大蛇、魔闇蛇クリラツサである

「この蛇も君やラーク、セツタと同じ魔族って奴なのかい？」

「そーだよ・・・なんで使い魔に魔族・・・しかも7魔って・・・」

「って言うかここどこなのよ？私に何か用？」

うな垂れるリユーガに問いかける大蛇  
リユーガは暗い表情で、大蛇の問いかけに答える

「用って言うか・・・お前俺の使い魔らしいんで・・・」

「使い魔？使い魔って何よ？」

「使い魔って何よ？」

リユーガは大蛇の問いかけをそのままステイルに流すと  
ステイルがため息をつく

「だって使い魔って良くしらねえんだもん  
授業とかでてねえし、つーかそもそも何で呼ぶんだっけ？」

「はあ・・・えつとね・・・」

キングクリムゾン!!!!

「……………って訳…………アレ?なんか喋ってないような……………」

「説明乙(、…………?)」

「その顔やめれ…………正直うざい」

「………ってことは…………私はこの爬虫類の下僕になるのか?」

大蛇は指?をリユーガに向けステイルに問いかける

「悪い言い方をすればね、でもリユーガはそんなことは考えないと……………」

「ごめん、ラークのこと考えるとなんとも言えないや」

ステイルはリユーガから目を逸らし、気まずそうに答える

「おいおい、僕ならもつと俺の良いところを言えよ」

「なんか違和感を感じるんだけど・・・」

「キノセイダヨ、キニスナ・・・それで？俺の使い魔になる？」

片言でステイルをあしらうとリユーガは大蛇に視線を向け問いかける

「激しく断りたいのだけど・・・貴方の影住みやすそうなのよね・・・」

「うげッ！そんなんだから根暗って言われるんだぞお前ら」

「どう言っことだい？」

若干顔を青ざめるリユーガに疑問を持ったギーシュが問いかけるとリユーガは淡々と説明していった

「こいつら魔闇蛇は何かの影に住み着くんだよ

尚且つじめじめとしたところをより好むから尚たちが悪い

僕達苛められっ子です！ってオーラ出しながら俯いてる団体が  
戦場に出てきたときは俺もかなり引いた」

「ん？・・・戦場って？」

「あー・・・なんでもないから、っーか何で俺の影が住みやすそう  
なんだよネクラー」

「えつと・・・ぐちゃっ、と？・・・ドロツ？・・・とにかく私  
好みなんだって！！」

「んだそれ・・・意味わかんね・・・ってごらあ！！勝手に入る  
うとすんじゃねえよ！！！」

「なんの！！」

リユーガは自分の影に飛び込もうとする大蛇に蹴りを放つが難な  
くかわされ

大蛇はするりとリユーガの影に入り込んで行く

『おお！・・・良いわねえ・・・』

「キシヨ!!!人の影で動き回るなや!!!」

リユーガはうねうねと動き回る自分の影に手を突っ込むとそのまま中で動き回る大蛇を引つ張り出す

「ちよつと!せつかくリフォームしてたのに!!!」

「住み着く気満々じゃねえか・・・だったら俺の使い魔になれや」

「いいわよ・・・その代わり貴方の影に住まわせなさいよ」

「ツたく、しょうがねえな・・・えーと・・・」

我が名はリユーガ・フラン・ド・シュヴァリエ・ハーク・ブラ  
ツドリー

五つの力を司る・・・ペンタゴン?この者に祝福を与え・・・我が使い魔となせ・・・だっけ?」

リユーガは引きずり出した大蛇の顔を近寄せ、その口に自分の唇を当てると

大蛇の頭が光を放ち、文字が刻まれていく

「痛あゝ・・・何なのよこれ・・・これでいいかしら?」

それじゃ私は中で寝させてもらっわね」

「ちよーまで、名前は？」

「ないわよそんな物、勝手に決めといて頂戴・・・それじゃあね」

大蛇はそう言葉を残しリユীগの影に入っていくと  
リユীগはため息を漏らした

「はあゝ・・・何で7魔が俺の使い魔なんだよ・・・」

そうリユীগが呟くと同時に

リユীগ以外のすべての時が止まり、リユীগの視界にキラキラ  
と光りながらポーズをとる・・・

『ここでワシ、颯爽とうじょ・・・』黙れ』・・・どんどん扱い  
ひどくなってるない？』

『つつさいわポケー！！どうせこれもテメエがやったことだろ？う  
すずす分つとたわ！！！』



『だって……まあ、本当ならここでつまらないと言いつもりだったんじゃないけど……』

お主が本来呼び出すものがちと危険そうじゃったから変えさせてもらったんじゃない？』

『はあ？俺が何呼ぼうとしてたんだよ？』

『神様じゃよ、それもワシなんかよりもっと高位の……お主の呼び出すリスト読んでやるうか？』

えーと……お主らの呼び名では確か……アンラ・マンユドウルジ最高悪、ドウルジ虚偽  
サルウ無秩序……って何で邪神、悪神ばつか呼び出すんじゃない？

お主は……

いくらなんでもあの方々をここに呼んでしまったら世界そのものが壊れかねんと思ってるの

変えさせてもらったわけじゃ』

『だからって何で？魔、よりによって根暗蛇なんだよ……もつとなんかあるだろ？』

火竜やら風竜やら……』

『そうは言うがの……この召喚の儀式は呼び出すものに相應しいものが現れる仕組みになっておつての

お主に相應しい者を選択していった結果あれじゃ』

『元々俺に相応しいのは邪神なのかよ……』

そのままリューガがorzポーズをとりうな垂れると

ゴツチャンこと神様が慈愛に満ちた笑顔でリューガの肩に手を置く

『神に選ばれて何を落ち込むことがあるのじゃ？』

『だからって邪神はねえわ……ま、根暗蛇でもマシな方ってこととして受け取っとく』

『……っか、今回は何でこんな大げさに出てきたんだ？……大方予想はつくが……』

リューガはジト目で後光を放つ神を見ると  
神は残念そうに呟く

『これが最後じゃからな、最後くらいは大げさに登場したかったんじゃ』

『大げさって……彘？』

『今まで何度かお主に語りかけたことやこの世界を弄くつた事は

あるが

この世界そのものが不安定になっての、正直言えばワシらにも先のこととは分らん』

『てーことは・・・原作道理に行かないって事か？』

『大体の道筋は原作道理じゃが・・・色々と変わっている

無理に直そうとすればお主ごと世界が消えるぞ、

送り出しておいて世界ぶっ壊すとかワシもしたくはないんじや

一応の原因はワシが自分世界を放っておいたことにあるからの』

『・・・そうか・・・んじやさっさと消えろや』

『最後まで冷たいのう・・・まあお主らしいと言えらしいんじやがの』

神はそう言葉を残すと足から徐々に光の粒子となって消えていく  
そして最後に神は思い出したかのようにあわててリユールガに言葉を放つ

『そうそう、お主の連れの使用魔じゃがワシは何もしておらんか』

『は？・・・それってどーゆう・・・』じゃあの、精々天寿を全うせ  
いよ』・・・っておい!!!

消えやがった・・・』

神はリユーガに手を振りながら光となり姿を消す

神が姿を消すと同時に時が動き出すと、リユーガは2人に向けて  
鬱陶しそつに言葉を放つ

「お前ら・・・ここで使い魔呼べ」

「え？・・・なんでだい？」

「そうだよ！こんなギャラリーの居ない所では僕はやる気が・・・  
」さつさとやれ」・・・

わ、分かった！！分かったから魔人化しないでくれ！！！」

2人はリユーガの体の変化しそつになると慌てて呪文を唱え杖を  
振るつと

ステイルの前には炎が立ち上り、ギーシュの前には土が盛り上が  
つてきて

炎と土が同時に晴れると、中からそれぞれの使い魔が現れる

「これが僕の使い魔!？」

「あの・・・なんか・・・この巨体に見覚えが・・・」

ギーシュは啞然と、ステイルは冷や汗流しつつそれぞれが出した  
使い魔を眺め

感想を呟いた、そしてリユーガも現れた二匹の使い魔を眺め  
忌々しそうに言葉を呟く

「変えとけよ・・・クソジジイ・・・」

リユーガの呟きは誰に聞こえる出なく、その場に四散した



## 三十七話（後書き）

どうでしたでしょうか？

ごっちゃんまさかの離脱、また一人作者のお気に入りキャラが・・・

やってみただけ  
次回予告

ロマリアに不穏な影が登場、予言とは一体何なのか？

・・・そんなことより

やっとの思いで原作開始？ルイズが呼び出す使い魔は皆様ご存知あの少年

リユーガはどのような対応をするのか？

ついでにギーシュとステイルの呼び出した使い魔達とは一体？

次回、ゼロの使い魔／魔人の転生者／

原破編／集い始める担い手達／

お楽しみに

皆さんが不快に思えば次回予告やめます

・・・うーん・・・次回予告って・・・難しいな・・・

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 三十八話

ドチューーンー！っぎゃああああ！ボゴォー！もうやめろー！！  
グチョー！お、俺の使い魔があああー！！

「おいおい、なんだこりゃ、地獄か？」

「今ので・・・えっと・・・50回目かな？」

「それにしてもよく精神力が持つものだね、ルイズ」

「お主ら・・・何故ここにおるのかのう・・・」

リユーガ達はオスマン学院長が鏡に映し出した映像に目を向け  
外から聞こえる叫び声に耳を傾けながら学院長室で外の様子を見  
ていた



「あー？堅いこと言うなや爺、あそこに居たら俺らまでこれの餌食だぜ？」

「じゃったらあのでかいカラスの背にでも乗っておればよからう。」

リユーガは鏡に映し出される惨劇に指をさすと、オスマンは溜息をついた

そして外の惨劇が始まった数十分後、  
一際大きな爆発が起こるとピタリと大気を震わせていた爆発が止まる

「おっ？・・・やっと成功したか？どれどれ・・・」

「えっとあれは・・・」

「・・・どう見たって」

「人間だな、それも平民」

「なんじゃと！？ええい！お主らどかんか！！」

オスマンは席から立ち上がり、鏡の前を陣取る3人を払いのけると煙の中からちらちらと見える黒髪の少年を見つけ目を見開く

「使い魔に人を呼びだすじゃと？」

生まれてこの方聞いたこともないぞいそんなこと」

「でもどう見たってルイズが呼んだ風にしか見えませんか？」

「うゝむ・・・お？・・・あの小僧なんとうらやま・・・ゲフンゲフン・・・どうやらルーンも刻まれたようじゃし、本物の」

オスマンは地面を転がりながら左腕を抑える少年を見ると席に戻り書類を片付け始めた

「爺の癖にまだ枯れてねえのかよ・・・ん？」

「ぬ？・・・お主らもういいじゃろ、さっさと下に降りなさい」

リユーガとオスマンは外に一瞬だけ目を送るとオスマンが唐突にそう告げる

リユーガ達はやる気のない返事を返しそのまま部屋を出ていこうとすると

オスマンが声をかける

「ちよいとリユーガ君は残りなさい」

「・・・先に行つてろ、すぐに追いつくからよ」

「分かった、とりあえずコルベール先生には遅れるって言うておくよ」

ステイルがそうリユーガに言葉を返すとギーシュと共に学院長室から出ていく

残された2人は少しの間、口を開かず部屋に沈黙が訪れるとオスマンが杖を振るい

鏡の映像を着ると同時にオスマンが口を開く

「なんじゃ、今度は何をやらかしおつた？」

「はて・・・何を言っているのかな？この爺は・・・ボケたか（ボソソ）」

「惚けるでないわ、お主らがここに来たのはさっきのあれのせいじゃろ？ついでにボケるには後100年はあるの」

オスマンは真剣な表情で窓の外を指さすと  
リューガは溜息をつき言葉を放つ

「別に・・・ただ見られちゃまずいってだけだ」

「何でじゃ？」

「何で詳しいことまでテメエに言わにゃならんのだ」

「お主が誰かに見られてここに戦いが持ち込まれるようなら、わしはそれを止めねばならん

喋らぬと言つのなら、お主をここから追い出すこともあるかもしれんぞ？」

オスマンはリューガの動作を見つめ動きからリューガの心情を探ろうとする

しかしリューガは微動だにせず、唯オスマンに視線を返すのみ  
しばらく沈黙が続くと、リューガが諦めたように口を開く

「はあ・・・俺は今腹に何発も銃弾喰らってることになってるから  
ぴんぴんしてるとこ見られたくないんだよ

まあ、見られたとしてもここに俺を殺して来る様な輩なんざこねえから安心しろ

見られたくないってのも自由に動きたいだけだから」

「ふむ・・・では、さっきの見ていた者が誰かお主知っておるのじやな？」

「まあ、そうだけど・・・それが？」

「先ほどのような魔法で覗いている者がおる事は知っておったのじゃが・・・」

奈何せん未だ誰か分からぬのじゃ、距離が遠すぎるからかのう？  
どのような者がどのような理由でわしの学院を覗いているか知っておかねばなるまい

故に、教えい」

「頼み方がなつてえねぞ爺」

「なんじゃこんな爺の甘い声が聞きたいと？変わった趣味の持ち主じゃのうお主」

リユーガの皮肉めいた言葉を呆気からんと返すオスマン

リユーガは不覚にも自分に懇願するオスマンの姿を想像してしまい胸をおさえ苦しみ出すと床を転げ回る

「何もそこまで嫌がらんでも・・・」

「オエエ！気色悪！！・・・俺を想像で殺そうとするとは・・・恐ろしい爺だな」

「勝手に思い浮かべたのはお主じゃろうが・・・」

「OK、OK今回は俺の負けだ、それで覗いてるやつだっけ？  
そりゃ覗き見大好き教皇様（笑）だよ、理由は・・・伝説でも探してんじゃねえの？」

「・・・伝説・・・とな・・・」

リユーガの言葉に思考を巡らせていくオスマン  
そして何か思いついたのか勢いよく顔を上げると、リユーガに問いかける

「ま、まさか・・・おっと俺が言えるのはここまでだ・・・  
またんか！！！」

「後は勝手に想像してな、その一杯知識の詰まったしわくちやな  
脳みそでな」

リユーガはそう言葉を残すと学院長室から出ていく  
オスマンはその後ろ姿を眺めつつ言葉を漏らした

「失われたペンタゴンの一角？．．しかし．．いや、公爵の三女  
ならあるいわ．．」

虚空に向かって問いかけるも、オスマンの問いに答える者はおらず  
オスマンの言葉はむなしく響くのみであった

．．．．．

どうもリユーガです

いやあ〜無事に来ましたねサイト君、左腕にルーン刻んで  
それで今俺が何をしているかと言うと、キャスターを通して授業  
を外から見えています

あ、キャスターってのは俺の使い魔ね

いやあ〜最初は嫌だったけど、あいつに刻まれた．．．なつった  
け同視？のルーンのおかげで

キャスターの見るもんが見れるから超便利、ついでに自由に俺  
の影と覚えた影を行き来できるから

今はメッセンジャーとしてかなり役立ってもらってます．．．俺  
の影に居る方が多いけどな

え？2人の呼び出した使い魔だって？．．．そこに居るよほら

「コノ！チヨコマカト！！！」

「ガールル！！！」

リユーガは学院の外から聞こえる音を出す二匹ををちらりと見るとそこには少し体に合っていない水たまりから火を噴き続けるステイルの使い魔、

魔炎魚ドループことホープと

負けじと地面をひっくり返し応戦する魔地狼カラカッサことエコーの姿が見える

「また始まったか・・・めんどくせえな」

「ホント毎日毎日よくやるわねえ・・・」

「何戻ってきてんだよキャスター」

「いいじゃない、どうせ見てないんでしょ  
それよりお腹が減ったわ、右腕食べても良いかしら？」

「良い訳あるかっての！！！」



リユーガは自分の影から顔だけ出して、いるキャスターを叩き  
懐から干し肉の詰まった袋を取り出し、キャスターの目の前に置く  
キャスターは紐で縛ってある袋を器用に解き、それを食べながら  
リユーガに愚痴る

「まったく、毎日毎日干し肉ばっかで……たまには活きのいい  
カエルやネズミ持って来なさいよ」

「テメエで勝手に捕まえて勝手に食べ、鼠なら学院中にうじゃう  
じゃいるわ」

「やーよ、私働いたら負けだと思っているから」

「どこのニートだテメエは……っと今日の授業は終わりか  
ってことわ……」

授業終了の鐘が聞こえてくるとリユーガは再度学院の外に目を向  
けると

二匹が戦闘を行っている場所へものすごい勢いで走る二人の姿が  
見える

そして二人は急停止し同時に腕を前に突き出すと、魔力を影に送  
り込み叫ぶ

「ハイライト黄銅鉞！！！！」

「ヒビロカネ火廣金！！！！」

そう叫んだ後2人の影から2メートルほどの赤と黄の甲冑が現れ二匹の元に駆けだし、それぞれが出した甲冑が二匹を捕まえ、大人しくさせる

そんな光景を眺めつつリユーガは膝の上に肘を置き、頬杖をつく  
と呟く

「うーん、やっぱりあいつらじゃあれが限界か？」

俺は普通にフルサイズで出せるんだがなあ・・・」

「マスターと2人を同列に考えていいのかしら？」

「ビダーシャルやウィルにできてあいつ等が出来ないわけが・・・あるか

でもなあ・・・出来そうっちゃ出来そうなんだよね」

「あら、何か方法があるのかしら？」

「まだ憶測の域は出ないがな、今度ウィルと一緒に実験だな」

リユーガはそう結論付け寝転がると目を閉じた  
そして暫くするとリユーガの居る屋根の上に向かってくる一つの  
足音が聞こえ

リユーガはのっそりと起き上がり声をかけた

「なんだステイル、もうペットの躰はいいのか？」

「いくら言っても聞かないし、もう諦めたよ僕は、それより今日  
はどうするんだい？」

「今日は・・・そうだなあ・・・とりあえずなんか食いにいくか」

「またかい？最近やけに顔を出すね」

「そう言う時もある、ギーシユは？」

「ギーシユは先に行ってると思うよ？また自慢話でもしてるんじゃないかな」

そう話しながら2人は火の塔の屋上から飛び降り

リユーガはそのまま着地、ステイルはフライでスピードを落とし  
ながら着地すると

2人はそのまま他愛もない話をしながらテラスへと向かうとそこにはギーシュと

何人かの生徒が話をしている、ギーシュは2人に気付くと2人に向けて手を振る

それにつられ、ギーシュと共に座っていた者達がリユーガの顔を見るとギーシュに

何か言葉を言い、席から立ち去っていく

リユーガは気にせず空いた席にドガツと座り、ステイルもその横の席に腰掛けると

ステイルがギーシュに問いかける

「今日はなんて？」

「いつもの様に用事だったさ」

「メイドさんお茶くださいなあ」

「相変わらずみんなリユーガを怖がっているんだね」

「あ、こいつ等は泥水でいいから」

「まあ、色々やらかしたしてるからねえ」

「初日から教師と生徒一人半殺し、その後も何人がゴロゴロと・・・」

「で、ですが・・・」

「中身はこんなチャランポランなのにね」

「いーんだって、こいつら泥水啜るのが好きなんだから」

「「そんな訳ないだろ！！！」」

さりげなくメイドと話を進めるリユーガの頭を同時に叩こうとする2人

しかし2人の攻撃はあっさりとかわされ、空を切る  
それと同時に2人の頭を掴みギリギリと力を込める

「千年早いわたわけ」

「ぎゃあああああ！！！！」

「ちょ、飛び出る！！出てはいけない何か飛び出る！！！！！！」

叫びつつリユーガの腕をバンバンと叩く2人  
リユーガは数秒ほど2人の体を持ち上げた後ゆっくりと下ろすと  
2人はこめかみを押さえ、同時に口を開く

「すみませんでした僕がチャランポランです」「」

2人して同時に土下座をするがりユーガは見ておらずに楽しそう  
にメイドと会話している

「ああ・・・もういいのね」

「ツッ！・・・最近どんどん強くなっているような気がするんだけ  
ど・・・」

2人はそう呟き席に座ると、向こうが騒がしいことに気が付き  
未だメイドと話を続けるリユーガに声をかける

「なあ、またなんかやってるみたいだよ」

「あー？ほつとけ、それでねえ」

「駄目だこいつ早くなんとかしないと・・・」

「おいおい、ルイズの使い魔とヴェリエがなんか言い合ってるぞ」

ギーシュが騒ぎの中心に目をやるとリユーガはピタリとメイドとの会話を止め

メイドを放置すると、騒ぎ中心に目を向けた

「5日遅れか・・・まあ許容範囲だな」

「ん？・・・どうかしたのかい？」

「あーいや、なんでも

それで栽培君とルイズの使い魔が如何したって？」

「そんなマントが汚れたからって女の子の顔殴ってんじゃねえよ  
！……！」

リユーガの問いかけに絶妙のタイミングでサイトの言葉が響く

「・・・だってさ、どうする？なんなら行こうか？ギーシュが」

「なんで僕なのさ!！」

「ここでカッコよく場を治めたらカッコいいぞ」

「逝ってくる(キリッ)」

ステイルの言葉にホイホイのせられ、ギーシュは後ろに自分だけが見える光を放ちながら

言い争う2人の元へ優雅に歩き出す

「相変わらず乗せやすいなギーシュは・・・字、間違ってるし」

「・・・キヤスター」

「はいはい？」

リユーガは唐突にキヤスターを呼ぶと影からによきつとキヤスターの顔が現れる

「お前って確か自分の見たものを影に移せたよな？」



「できるけど？何を移すの？」

「今から起こること、おいギーシュ戻ってこい！！」

「さあ！僕の華麗なる姿を見るがいい！！」

リユーガはギーシュを呼ぶが既に自分の世界に入っているため声が聞こえない

仕方がなくリユーガは黒金の腕だけを出現させ重力の応用でギーシュを引き寄せる

「オワツ！！な、何するんだいリユーガ！！」

「今から起こること黙ってみてろ」

「？・・・君は何を言ってるんだい？」

2人はリユーガに問いかけるがリユーガは聞かず

2人の体を抱え飛び上がると、学院の屋上に着地する

「ここならよく見えるな・・・よし、キャスター、サイトの動きを

移す準備」

「はい・・・準備完了っ」と

リユーガの影からモニターのような物が現れ風景が映し出される  
そこには言い争うサイトとヴェリエの姿がドアップで映し出される  
それを見たリユーガは自分の腰に差した刀を鞘ごと抜き放ち構える

「お、おいおい、まさか当てる気じゃあ無いだろうな」

「黙ってみてる・・・」

そしてヴェリエがサイトに向けて魔法を放つ

ヴェリエの魔法はサイトの横に居たメイド諸共吹き飛ばすとギー  
シュが

すぐさま動こうとしたのでリユーガはそれを制する

そしてサイトが何度も体を揺らし、その後地面にうなだれると  
リユーガはヴェリエから漏れた殺気を感じとり、刀をサイトの目  
がけで思いっきり投擲した

「（さあ・・・見せてもらおうか・・・ガンダールヴの性能とやらを・  
）」

.....

グランド・トロワ  
ジョゼフ執務室

ジョゼフは淡々と2人分の書類を整理して行き、一区切りついたところで

手を打ちなると、扉から2人の兵士が入ってくる

「何かご用でしょうか？」

「今から1時間ほど誰がこようと部屋に入れるな」

「それは、シャルル様でもですか？」

「ああ・・・誰も入れるな」

「ハッ！！」

ジョゼフがそう告げると、兵士は部屋の外に出ていく  
そしてジョゼフは立ち上がり、机の引き出しを開け、埃をかぶった杖を取り出すと

一つの本棚の前に立ち、一冊の赤い本を逆向きに差し込む  
すると本棚は音もなくスーッと横にづれ、通路が出来上がると  
ジョゼフは躊躇いもせずその通路に足を運ぶ

「さて・・・もうリユーガは使い魔を呼び出したのか？

あやつの使い魔か・・・非常に興味深いな・・・」

ジョゼフは光の無い通路を眩きながら進んでいくと  
薄暗い開けた空間にでる

そこいは幾つもの不気味な魔法陣が描かれており、ジョゼフはそれを眺め薄く笑う

「さて・・・ここを俺が使おうと思うとはな・・・俺も変わったものだな」

そしてジョゼフが杖を構え前に突き出すと

中央の魔法陣が青く発光し、その空間にジョゼフしか聞こえぬ声が響く

「ふむ・・・どうやらいけるようだな・・・俺は一体どんな者を召喚するのやら」

ジョゼフはそう言いつつ呪文を唱える

「我が名は・・ジョゼフ・ド・ガリア、さだめ運命などとは言わぬ  
唯今の俺に相応しき'使い魔'を召喚せよ」

低く歌うように呪文を口ずさむジョゼフ

そして言葉を言い終わると同時に、地面に書かれた魔法陣が高速  
で周り

ジョゼフの目の前に光る鏡の様なゲートが現れる

そしてゲートの向こうからコツ、コツ、と歩く音が聞こえ

ゲートが強く光を放つと、ゲートから黒髪、長髪の女性が現れる

「・・・ここは・・・一体」

「ククク・ハツハハハハ！！よもや人間を召喚するとはな！

これはリユーガの喜ぶ顔が目に見えかわわ！！！！

おい、女」

「は、はい！！」

現れた女性は目の前で狂ったように笑い出す男に若干恐怖し  
声をかけられた瞬間背筋を伸ばし力のある返事をする

「お前の意思など知らん、俺の使い魔ものになれ」

「え？・・・どう言う・・・ムゲツ！！」

困惑する女性が口を開こうとしたがジョゼフはそのまま女性の口に自分の口を押しあて黙らせ

口を離すと、女性の額にルーンが刻まれる

本来ルーンが刻まれる際にはどんな使い魔であろうと顔をゆがませるものだが

この女性はそんな痛みなど感じる余裕がないのか、放心している

「女、名は？」

「・・・は・・・」

「おい！名は何と言う！！」

「ハッ！・・・えっと・・・シェフィールドで、す」

「そうか、これからよろしく頼むぞ、シェフィールド」

「は、はい!」

ジョゼフはそう言葉を残すと、その部屋にある幾つものマジックアイテムをあさり始める

その後ジョゼフは自分の使い魔がマジックアイテムを自在に操ることができる事を知り

約1時間程2人でマジックアイテムをあさっていった

### 三十八話（後書き）

どうでしたでしょうか？

やっとの思いでシェフィールドさん登場ですよ・・・なかなか原作すすまなあ〜い

まあなるべくサクサク進ませたいんですよ

そうはいきませんが・・・

それと8、9、10と作者のプライベート的問題で上げられません  
作者の勝手な都合ですがご了承を

次回予告は考えたんですけどネタばれっぽくなってしまったので没  
になりますた

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております



三十九話（前書き）

4日間更新できず申し訳ないm（　　）m

どうも、駄文な作者です

4日間PCを触ることもできずイライラしていた作者ですがそのイライラ感が一瞬で吹き飛びましたよ！！

PV50万、ユニーク5万

本当にありがとうございます！！！！

どうかこれからもこんな駄文でよろしければ見てやってください  
それでは・・・どうぞ

### 三十九話

「お、おいおい・・・アレ・・・やばくないかい？」

ステイルは屋上から広場に指を向け、焦ったようにリユーガの方を向くが

そこにリユーガはおらず、リユーガの影だけが残ると言うおかしな光景しかない

「リユーガならもう行ったよ・・・ほら」

「・・・暴れるねえ彼・・・えーと・・・ポテトだっけ？」

ステイルはリユーガに腕を掴まれ暴れるサイトを眺めそう呟く

「まあ、あのポテト君、完全な素人だったし、そんな問題は・・・って、嘘だろ！！」

「うん？どうかしたの・・・」

ステイルとギーシュは真っ直ぐに飛来し、2人のいる校舎に勢い

よく突っ込むリユーガを見て

茫然と口をあぐりさせ、リユーガを飛ばしたサイトを見る  
するとそこには……

「\*\*\*\*\*!!!」

「……何あれ……ポテト君？」

「うわッ！こっち来た!!」

とても人語とは思えない、叫び声だか笑い声だか分からない奇声  
を上げ

リユーガの突っ込んだ校舎へと信じられない早さで突撃するサイ  
トの姿がある

「ちよ！一体何が……ッ!？」

「や、やばい!……ギ、ギーシュ!!飛べ!!!」

ステイルの言葉と同時に2人が屋上から勢いよく跳躍すると  
それと同時に校舎に亀裂が入りある位置まで綺麗に真っ二つに切  
れる

ズウン!と言う建物が綺麗に横に倒れると、その間には刀を両手

で握り振りおろそうとするサイトと

それを両手で受け止めるリユーガが居た

リユーガはサイトの腹に蹴りを入れサイトを離すと服についたほこりを払いつつ

蹴り飛ばされたサイトの方に視線を向ける

サイトは蹴り飛ばされながらも空中で受け身をとって、刀を構え再度リユーガに突撃を放つ

「つと！・・・おーおー随分な威力だねえ」

「\*\*\*\*\*!!\*\*\*\*\*!!」

リユーガは真っ黒なブレイドでサイトの刀の威力を横にずらすと刀の先から衝撃波のような物が放たれ、横にあった瓦礫が建物のように綺麗に切断される

「\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*!!!!」

「はあ〜・・・何でこうなっちゃったかねえ・・・」

サイトの叫びと共に振り回される刀を捌きつつ  
リユーガは溜息をついた

.....

sideサイト

初めまして.....意味不明な世界に着てしまった平賀才人です・

周りを見ればダサイマントを付けた同い年くらいの外人さん

杖を振るえば空を飛ぶし、明りはつくし.....もう何が何だかどう言う原理なのかさっぱり

まあ、飯はちゃんと貰ってるし、寝どころも堅いがホームレスに比べればまだましな方

はあく.....これからどうなるのやら.....

「ちよつと！話聞いている？」

「あ、ごめん」

「はあく.....ちゃんと聞きなさいよ.....

なんでこんなのが私の使い魔なのかしら.....

今度はちゃんと聞きなさいよ、今日から授業があるの、当然あんたも教室に入るから

その時に絶対怒らせちゃいけない人が居るから失礼のない様にして頂戴

まあ教室に居ない方が多いんだけどね」

「誰だよそれ」

「見ればなんとなく分かるわ、何と云うか・・・雰囲気で」

「?・・・お、おいちょっと待ってくれよ!」

ルイズはそれだけ言うと、サイトを置いて部屋を出ていく  
サイトは脱いでいたパーカーを羽織り、ルイズの後を追って行く  
そのまま歩くこと十分程で2人は女子寮から少し離れた食堂に着  
く

「それじゃ、あんたはまた厨房に行つて来なさい」

「へーい」

扉の前で2人は分れると

ルイズは扉の中に入っていき、サイトは裏へと周り  
厨房の扉を開き中に声をかけた

「すいませーん」

「あ、サイトさん  
もうちょっと待っていてくださいね」

厨房の中では一種の戦場と化しており、料理を作る男達と出来上がった料理をすぐさま運ぶメイドの姿があった  
サイトは厨房の中にある少し汚れたテーブルに腰掛けその様子を眺める

暫くすると、一同は仕事を終えたと言う表情に変わり  
次々とサイトと同じテーブルに腰掛けサイトに話しかけてくる

「あんたも大変だねえ・・・いや、貴族様の使い魔になったからラッキーなのか？」

「ラッキーじゃないですよ、そんなペットみたいな・・・」

そのままサイトは男達と話をしていると  
テーブルに料理が置かれ、サイトと男達は料理を口にしながらも話を続ける

全員が大体食べ終わった頃にコンコンと厨房の窓が叩かれ、サイトが窓に視線を向けると

そこには大きなカラスのような真っ黒な鳥、ラークが居た

「で、でけえ！なんだこいつ！！」

「ん？．．．おおラークじゃねえか、今日はご主人様と一緒にじゃないのかい？」

体が大きくちよつと小太りなマルトーが窓を開け  
ラークに話しかけるが

「．．．．」

ラークは無言で首を横に振り  
一瞬だけサイトを見て、厨房の奥の方に口ばしを向ける

「分かってるって、ちよいと待ってる．．．．」

マルトーは厨房の奥に消え、暫くすると、大きな箱を持ち出し  
窓のそばに置くとラークは器用に口ばしで箱を持ち上げると  
そのままどこかに飛び立って行った

「はー．．．あんなでっかい鳥までいるんだな．．．あれも誰かの使  
い魔なんですか？マルトーさん」



「いんや、あれは・・・っと、今度は誰だ？」

マルトーが話を続けようとしたが今度は扉からノックが聞こえ一人のメイドが扉を開けると、そこには2人の男が居た

「すまない、また食料を分けてくれないか？  
こいつがまた実験バカなことに使ってしまったな」

「バカなこととは失礼な、私は新たな分野にだね・・・」

「はいはい、あんたも良くやるねえ・・・」

マルトーはまた奥の方に引っ込んで行き  
先ほどのように箱を持ち出し、帽子をかぶった男に手渡す  
男はサイトを一瞬だけ睨み、そのまま厨房を去っていく

「感じ悪いなあいつ・・・あの2人は？」

「さっきの鳥の飼い主の従者だよ  
度々ここに食料を取りに来る、結構気さくな2人なんだが・・・  
お前さん何かしたか？」

「初対面のはずですけど・・・っと、そろそろ向こうも終わった頃ですし」

俺は行きますね、料理美味しかったですよ」

サイトはそう言い残し厨房を出ようと扉に手を伸ばすと先に扉が開かれ、サイトの顔に直撃する

「イダッ!!」

「ん?・・・ああ悪い」

「ノックぐらいしろよ!!・・・うわっ!鼻血出てる」

サイトは鼻を抑えつつ扉から少し離れると扉から現れた男はそのままサイトを素通りし、マルチーに袋を手渡す

「親父、これ今月の分な足りなかったらいつてくれ」

「っと、今月は10エキューなんだが・・・見るまでもなく多いよな?」

「余つたんなら適当に配ってやれ  
それでこつちが新作、後で感想聞かせてくれ、んじゃ」

男はマルトーに黒い液体の入った小瓶を渡すと  
サイトに一瞬だけ視線を向け、厨房から出て行く  
去り際に杖を取り出し、魔法を放つと  
サイトの鼻血が止まり、赤くなつた顔も戻っていく

「やっぱり魔法つてすげえーな  
今のは誰なんですか？」

「さつき2人の主にして、鳥の飼い主  
月の始まりぐらいにこうやって餌代と奇妙な食料、調味料を持  
ってくるんだ」

他の貴族達はこんなことしないんだがな・・・」

そう呟きつつマルトーは小瓶のふたを開け臭いを嗅ぎ  
指につけ味見をする

「しよっぺえなこれ  
お前さんも舐めてみるかい？」

そう言いマルトーは小瓶をサイトに差し出す

「あれ？・・・これって醤油？」

「お前さんこれが何なのか分かるのか？」

「まあ、俺の国の調味料なんですけど・・・」

「ほー・・・じゃあれとかもそうなのか？」

マルトーは棚に置いてある幾つかの小瓶や箱を取り出し机に置く、サイトはその一つ一つを味見していくと顔をしかめる

「ソースにマヨネーズ、こっちは・・・タバスコ・・・かな？  
全部俺の国にあった調味料ですよ、これ」

「そうか！じゃあどう言う料理に使えばいいか分かるか？  
どうにもこれとか使い方が分からなくてな」

マルトーは嬉しそうに棚からさらに小瓶や箱を取り出し机に置い

て行く

サイトは一つ一つ自分の知る範囲で解説して行くとマルトーは真剣な表情でサイトの話を聞いて行く

そんな話をしていると、横から困り顔のメイドに声をかけられる

「あの・・・ミス・ヴァリエールが・・・」

「ヤバッ！！ごめんマルトーさん、また昼にでも来ますから！！」

サイトはそのまま厨房から飛び出し、走っていく

サイトが渡り廊下に出ると、顔をしかめたルイズが立っており怒声を浴びせてくる

「遅い！！ご主人様を待たせるんじゃないわよ！！」

「う、うめん」

「さっさと行くわよ、このままじゃ遅刻しちゃう」

ルイズはすたすたと早足で校舎の中に入っていく

サイトもそれに続き、ルイズの横に並ぶとルイズに声をかけた

「なあ、さつき言ってた怒らせちゃいけない人って  
馬鹿デカイ鳥の飼い主のこと？」

サイトの言葉にルイズは立ち止りサイトに驚愕の視線を向け言葉を  
を呟いた

「……あなた、会ったの？」

「あ、ああ、さつき厨房で」

「……そう、良い？ゼッツタイリユガを怒らせないでね！  
これは忠告じゃなくて主としての命令よ、分かった？」

「そんなに危ないやつには見えなかったんだけどなあ……それ  
より

そのリユガが俺の国の物を持っていたんだけど何か知らない？  
い？」

「あなたの言う二ホンって国？」

知らないわよそんなの、彼の領地でその国と貿易でもしている  
んじゃないの？」

「……」

ルイズの言葉にサイトはあごに手を当て考えを巡らせる  
しかしこれと言った答えなど見つかるわけもなく、サイトは諦め  
たように呟いた

「まあ、直接聞けばいいか、教室に居るんだよね？」

「さあ？」

「さあつて……クラスメイトじゃないのかよ」

「リユーガを教室で見る事なんて滅多にないことだから  
ギーシュやステイルに聞けば？あの2人リユーガと仲が良いみ  
たいだから

後は……シャルかしら、リユーガの妹だし」

「シャルつてあのちっちゃい子！？」

マジか……あの2人兄弟だったんだ……似てなさすぎる」

「そんなもんじゃないの？兄弟つて」

「そうか……じゃあシャルに聞けばいいか……それよりルイズ」

サイトは思い出したようにルイズに言葉を出す

「なによ」

「時間・・・良いの？」

「・・・」

「・・・」

2人が沈黙すると同時に始業を告げる鐘が虚しく2人の耳に響く  
ルイズは無言で駆けだし、サイトもルイズに続く様に校舎の中へ  
と駆けていった





### 三十九話（後書き）

こんな感じですかね

うーん・・・なかなかどうして難しい・・・

そんなことより学院編のエピローグを懲りずに書いたんですが・・・  
どうにも詰め込み過ぎて文がおかしいです、それでも・・・良いです  
かね？

まあ、みなさんの意見を聞いてからどうするか決めたいと思います

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、意見、指摘をお待ちしております

## 四十話（前書き）

【ネタ箱】 ム（コ） ヲ（シ） ゴソゴソ・・・何も無い・・・

どうも、遂にギャグの方がネタ切れになってしまった駄文な作者です  
ギブミー・・・ネタ・・・

塵のような作者の心情はさて置き、本編へどうぞ

## 四十話

ステイルとギーシュはフライの魔法で空中にとどまり  
下で繰り広げられる戦いを見下ろしていた

「僕らも行つた方がいいかな？」

「冗談言つなよ、巻き込まれたいのか？」

「しかしだね・・・これ以上は校舎が・・・ッ!？」

2人の会話を遮る様に、2人のとどまる上空に戦いの余波が飛来  
する

じりじりと肌が焼けるような黒い炎柱が幾つも立ち上がり

彼らのいる場所にも向かってきたのだ、ステイルは咄嗟に魔法を

唱え

立ち上がる炎柱を防ぎ下をのぞく、すると黒い炎の槍を幾つも放  
り投げるリユーガの姿と

それを素早い動きでかわすサイトの姿が見える

「なあ・・・君はあれを避ける自信があるかい？」

「無いに決まってるだろ、防いでこっちの精神切れで炭になるのが落ちさ」

「全く・・・あの小僧の魔法の威力には参ったものじゃのこのままじゃ学院が灰になってしまう」

「「ッ!?!」」

「ほれ、もう一本来たぞい」

「ッ!?!・・・フレイムフォール!!」

轟ッ!と真紅と漆黒の炎がぶつかると

黒炎に少し押されつつも、立ち上がる炎柱を

ステイルのフレイムフォールが打ち消す

するとその様子を眺め、いつの間にか2人の横に居た学院長が感心したように声を上げる

「ほう・・・見事なもんじゃな、小僧の魔法もじゃが

それを打ち消したステイル君も十分な威力じゃの、その若さで大したものじゃ」

「いつの間に来たんですか？今日は王宮に行っているのでは？」

「モートソグニルを通してこんなものを見せられれば嫌でも来るわい

しかし……どうやらもう終わりかの」

「それはどう言う……」

ステイルはオスマンの言った意味が分からず訪ねようとしたが背筋に寒気を感じ、口を止め下を見渡すと、校舎のがれきの裏から異様な赤黒い雷が立ち上がっている

「あれって……あれだよなギーシュ」

「見間違えるもんか……絶対あれだよ」

赤黒い雷を見つめ、2人は声を絞り出す  
オスマンは立ち上がる雷を長年の勘で危険なものと察し、先ほどのような言葉を言ったが

2人はあの立ち上がる禍々しい雷が何なのかを知っている

「こんなところで使うなんて・・・僕らまで殺す気が!!!」

「なんじゃ？あれとは一体、ジジ抜きせんでほしいわい」

「冗談言ってる場合じゃないですよ学院長！あれは本当にヤバいんですから!!」

ああ・・・もう駄目だ・・・父上・・・母上・・・兄上達・・・先立つ不孝を・・・」

「短い人生だったな・・・これで・・・終わりか・・・」

「お、お主ら!!!なんて目をしておる!!!あれとは一体何じゃ！答えよ!!!」

2人の目から光がなくなり、ギーシュは遺言を永遠と語り、ステイルはそのまま何も言わなくなってしまった

オスマンは必死で2人を揺さぶるが、反応はなく、オスマンの顔も青ざめて行く

すると立ち上がる禍々しい雷が一つに集まり大きな球体となって、ゆっくりと天に昇っていく

2人はその様子を眺め、プルプルと震えだす

オスマンもその球体を眺め、体中から冷や汗が流れ始める

「な、なんじゃ・・・あれは・・・」

オスマンが弱弱しく言葉を絞り出すが、その言葉に返答したのは一つの爆発だった

.....

sideサイト

どうも、平賀才人です

あの後シャルや他の生徒にリユーガの事を聞いたんですが・・・

「リユーガ？うーん・・・強いて言うなら・・・自由な人かな？  
叔父様に縛られてるけど」

だったり

「彼は・・・何と云うか・・・言葉じゃ表せないな」



だったり

「リユーガ君ですか？そうですね・・・少し暴力的ですが・・・立派な思想を持っていますよ」

だったり

「そうじゃの〜・・・あの小僧は・・・何なのか分らん」

だったりと聞いた人それぞれが違う回答をするものだから困ってしまいます

中には震えだしたりするもんだから、肝心の元いた世界の物の事が全く分からない・・・

あれから何日も経ったんだけど・・・教室には現れないし

軽く見かけても次の瞬間は消えているからどうすればいいのか・・・

はあ〜・・・味噌汁飲みてえ

「あんたまたボーっとして・・・いい加減諦めたら？」

「そうは言うけどよ・・・もうあいつしか元の世界に戻る手掛かりがないんだよ」

「……まあ好きにすればいいわ  
私の使い魔である限り、面倒は見てあげるから」

「悪い……あ！居た！！」

サイトが空気を入れ替えようと窓に手を駆けると

長い髪を揺らしながら校舎の中に入るリユーガを見つける

サイトはルイズに行つてくると軽く言葉をかわすと

勢いよく部屋から飛び出た

サイトはそのまま駆けだしリユーガの入っていった校舎を目指へと入っていくと

「はあ……はあ……どこだ……」

サイトは渡り廊下でキョロキョロとあたりを見渡すが  
リユーガの姿は見えない、

サイトはとりあえず校舎の中に入ろうと足を進めた瞬間

サイトは後ろに人の気配を感じ振り返ると、そこには少女が居た

「……」

「……」

サイトは急に現れた少女を無言で見つめると  
少女もサイトを見つめ、片手を上げ、口を開いた

「やっほー？」

「え？・・・あ・・・や、やっほー？」

サイトが少女に言葉を返すと

少女は嬉しそうに顔を輝かせ、サイトの太ももに手を置く

「・・・な、何？」

「うーん？・・・ううーん？・・・えーと・・・鬼！」

「は？お、鬼？・・・あ、ちょっと!！」

「びゅーーーーーーん」

少女はそのまま広場の方に駆けだして行く  
サイトは状況が理解できず、その場に立ちつくしていると  
少女が振り向きサイトに声をかける

「来ないのー？」

「あ、鬼って・・・鬼ごつこの鬼？・・・悪いけど今そんなことしてる場合じゃ・・・あー！」

サイトは頭を掻きつつ断ろうと口を開いたが

少女の向こう側の広場にある厨房からリユーガが出てくるのが見え  
一目散に駆けだす、少女は追いかけられたと勘違いし  
振り返り駆けだすが、サイトの目にはリユーガしか映っていない

「ま、待ってくれー!!」

サイトはリユーガに向かって駆けだしながら、叫ぶが  
リユーガには届かず、リユーガはすたすたと歩いて行ってしまっ

「クソッ、どうしてあいつの方が速いんだよ!!こっちは走ってるんだぞ・・・」

「アハハハハ・・・こっこまでおいでー？」

「君を追いかけてるんじゃないって!?!?!」

サイトはリユーガを追いかけているのだが  
少女は鬼ごっこかと思っっているらしく、何度も振り返っては手をた  
たく

何故かリユーガとの直線上には少女が居るので、

先ほどから少女の体でリユーガが見え隠れしていることから、サ  
イトは焦り始め

全力で足を回し続ける

「お・・・可笑しいだろ・・・女の子にも追いつけないなんて・・・  
体なまってるのかな？」

約十分ほど全力で走り続けたサイトは等々息が切れてしまいその  
場で膝に手を置きかかんでしまう

サイトの視界には高速で足を進めながらも余裕と言った感じのり  
ユーガの後ろ姿と

サイトを呼ぶように手をたたき続ける少女の姿があることからサ  
イトは段々ライラし始め

温まった体を冷ますように叫び声を上げ、疲れた体をさらに動かす

「こっぴごなつたらとことんやったらあああああああ！！！」

そう叫び少女の直線上に居るリユーガ目がけて足を動かすが

三步程足を進めたところですぐさま立ち止まる

なぜなら見えていたリユーガがありえない跳躍をし、火の塔に飛  
び乗ったからである

「魔法使いつて何でもアリか!!!!」

やけくそ気味にそう叫ぶが、火の塔に飛び乗ったリユーガには届いておらず

とうとうサイトはリユーガを見失ってしまふ

しかしそんなサイトに救いとも思える光景が映る

先ほどまで振り返っていた少女が杖を取り出し、どこからともなく現れた水を道の用に

火の塔の屋上まで伸ばし走っている光景が見えたのだ

「もう終わりー?」

「あれを使えば・・・ってヤバツ!!」

サイトは水の道に向かって駆けだすが

水の道は少女が火の塔に上った途端にただの水に変わり地面のシミとなっていく

地上から約2メートル程の高さまで崩れた頃ようやくサイトは下までたどり着き

その勢いに任せて思いっきり地面を蹴りその身を宙に投げだす

「届ええええええええええ!!!!」

サイトは飛び上がりつつ必死の思いで足を延ばすと  
その思いが届いたのか徐々に崩れている水の道の先端に足が掛かり  
飛んだ勢いに任せ水の道を走りだす  
しかしサイトが火の塔の屋上にたどり着いた時にはリユーガの姿  
はなく、

先ほどの少女が屋上ギリギリのところまでサイトを見ているだけで  
あつた

「はあ……どこ……行った……んだよ……」

「おお！……でも残念……ここで……終わり？」

「そんなことより……リユーガは……どこ……っておい！！」

少女はサイトにそう告げると、火の塔の屋上から仰向けに倒れる  
ように落ちて行った

サイトは屋上から飛び降りた少女をみて焦って手を伸ばすが、届  
かず、真つ逆さまに

落下する少女を見つめていると、黒い影のような物がサイトの視  
界の端に映ると同時に  
少女の姿が消える

サイトは何事かと周りを見渡すと遙か向こうに厨房で見かけたラ  
ークを見つけ

ホッとしたように息を漏らした

「なんだよ・・・自殺したかと思ったじゃねえか・・・って違う!!  
戻ってきてくれええええええええええええええええ!!!!!!」

サイトの叫びは届かず、虚しく響くのみ

そしてサイトは先ほどまで走っていたツケを感じ

その疲労に身を任せ、その場で眠ってしまった

2時間後、目を覚ましたサイトは、どうやって降りようか悩むの  
であつた



## 四十話（後書き）

ちなみにリユウガはサイトの存在に気づいていません

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見、をお待ちしております

## 四十一話（前書き）

いろはすって・・・おいしいよね

どうも遂に前書きが思いつかなくなった駄文な作者です  
気分転換に脱線した物を制作しつつも本編書きました

それではごっご

## 四十一話

sideサイト

うつす・・・なんだかブルーな気分な俺こと平賀才人です・・・  
なぜこんなにブルーかって？

筋肉痛事件（俺命名）から五日後なわけなんですけど・・・

一向に話すことが出来ない！！！！

毎日教室に通うも、来る気配なし

それでも度々視界にわ映るんですよ？でも・・・なぜか追いつけな  
い・・・何故だ

何故なんだあああああああ！！！！

「うつさいわよ！！！！」

「イダッ!？」

「毎日毎日・・・いい加減にきなさいよ！ちょっとは待つことを覚えなさい！！」

そのうち会えるって言うてるでしょ！！！！」

「そのうちってそのうちって・・・もう俺がこっちに来て一週間経つんだぞ!!」

「大体なんでリユーガは教室にこないんだよ!一応学生だろ!!」

「それこそ私に分かるわけないでしょ!!」  
それにリユーガがあんたの国と関係あるって言うけど  
そんなのあんたの妄想じゃないの?」

「あいつが持つてるもんは明らかに俺の国の物なんだぞ  
関係あるに決まってるじゃねえか」

「・・・はあく・・・もういい、分かったわ、  
私からリユーガに会えるように取り合ってみるから」

ルイズが諦めたようにサイトにそう告げると、サイトは顔を輝かせ  
ルイズの手をとる

「ホントか?それでいつ会えるん・・・」

「だからシャルなり、ギーシュなりに今日聞きに行くから待って  
なさいっての・・・」

「っていつまで私の手を握ってるのよ!」

「ゲベラッ！」

「ふん！ほらさっさと立ちなさい、あんたいつも遅いだから今日は早めに行くわよ」

「ちょ・・・股間蹴り上げてそれは・・・ハイ、ナンデモナイデスマイキマス」

ルイズがサイトを睨むとサイトは股間を抑え委縮する

ルイズはその姿ちらつと見た後、どう話を付けようかと少し考えなんとかなるだろうと勝手に自己解釈をすると、勇ましく部屋を出て行く

サイトは芋虫のように床を這いまわりながらルイズの後を必死に追うのであった

.....

サイトはいつものように厨房に賄いを貰うべく  
厨房に備え付けられている机に座り、必死に動き回る人たちを眺め  
呟く

「うーん・・・やっぱり・・・まずいよなあ」

「どづかなさいましたか？ サイトさん」

うんうんと唸るサイトに通りかかったシエスタが尋ねるが  
サイトは気付いていないのか、尚も言葉を続ける

「やっぱりニートはまずいよな・・・うん・・・」

「にーと？ にーとってなんですか？」

「うおー！ シエスタ・・・居るなら言ってくれよ、びっくりした  
じゃんか」

「さつきから居たんですけどね・・・それでにーとってなんです  
かサイトさん？」

「ええつと・・・簡単に言つと・・・働いてない人の事かな  
前までは学生って肩書があったけど・・・ここじゃそんなもんな  
いし・・・」

サイトがそうシエスタに言葉を呟くと  
シエスタは眼を見開き、サイトに尋ねる

「学生って……サイトさん貴族だったんですか？」

「え？……ああ、そうかこつちじゃ学校なんて貴族しか通えないのか」

「サイトさんの居た国では違うんですか？」

「ええつと……俺の居た国じゃ……」

サイトはそのままシエスタに日本の事を話して行く  
最初は魔法がない、月が一つ、などありえないと言っていたのだが  
サイトの言葉がやけに筋が通っているものだからシエスタは仕事を  
忘れ

そのままサイトの話しを聞き続ける、すると次第に一人二人と仕事を  
終えたメイドやコックも

加わる様になり、最後には厨房に居た者全員がサイトの言葉を聞き  
きいていた

「はー……お前さんの居た国はすげえんだな……」

「でも悪いところだってあるんですよ、空気汚染みたいに」

「それでもオラあ断然そつちの国に行きたいね、ここで貴族様の顔窺いながら仕事するよりや

何倍もマシだぜ」

マルトーの言葉に周りに居たコックたちもちげえねエと笑いだす  
サイトはそんな様子を眺めていると、ハッと自分の目的を思い出し  
マルトーに声を駆ける

「あの・・・俺もこの仕事手伝っていいですか？

いっつも食事だけもらってるのってなんか悪いし・・・」

「良いですね！サイトさんも私達と一緒に働きましょうよ、良い  
でしょ？マルトーさん」

サイトの言葉にシエスタが賛同するも  
マルトーはうーんと返事を渋る

「その考えおれあ好きなんだが・・・だがお前さんは使い魔だ、  
勝手にうちで働かせたら何言われるか分からねえし・・・」

「それならルイズに許可を取ればここで働かせてくれますか？」

「お前さんの主が良いっていやあ俺が反対する理由なんてないさ



さっきのお前さんの国の話から、それなりに礼儀とかも習ってるって分かるし」

マルトーがそう言うのとサイトはだったら今か言ってきましたと勢い良く立ち上がり

そのまま厨房から出て行ってしまった

マルトーはそんなサイトの姿を眺めポツリと呟く

「昼まで仕事なんてんねえんだが・・・」

しかしそんな呟きサイトに聞こえるわけもなく

サイトは数分後に出て行った勢いを保ちつつ、帰ってきたが

マルトーに昼までは自由にして良いと言われしょんぼりと他の使い魔が大勢居る

広場に向かうのであった

.....

そして時は進み昼

サイトはいつもより少し早めの昼食を終えると

早速仕事に取りかかるうとしていた

サイトの記念すべき初仕事は主に肉体労働

よつするに薪割である

ここハルケギニアでは当然のようにガスが通ってるわけもなく

かといって火をおこすマジックアイテム魔具や火石は高すぎる

よって火を起こす際には薪が必要であり

それも約二百人程いるトリステイン魔法学院のほぼ全生徒の料理  
を作ることから

それなりの量が必要になるため、いくらあっても余ることはない  
のだ

そんな訳でサイトは太陽がさんと輝く中

斧を片手に汗を流しているかと思えば・・・そうではなかった

「おら！おら！！おら！！おら！！おら！！！！！！」

「……………」

「ふう……………こんなもんか……………ってマルトーさん居たんで  
すか」

「いや……………おめえ……………これ……………すげーな」

マルトーは目の前の物を指差し

驚愕の表情で声を絞り出す

なぜならサイトの横には

約5メートルほどの山が築かれていたからである

「お前さん意外と力あるんだな、正直侮ってたぜ

その斧結構重いんだがな・・・」

「いや、俺にも良く分からないですよ

最初はこんなデツケエ斧振れるわけねえって思ったら意外と軽いし

豆腐でも切ってるみたいにすんなり下ろせるんですもん」

「このペースだと全部やれちまいそうだな・・・よし！

薪割はもう良いぞ、次は広場の方で配膳してきてくんねえか？  
今は暇だろうけど、どうせすぐ忙しくなる」

「分かりました、じゃあこれ運んだら行きますね」

サイトは自分で切った薪をせつせとロープで縛っていくと  
次々と薪小屋に納めて行く、そして最後の一つを入れ  
斧をしまつと、広場に向かって歩き出したが  
どこからともなく聞こえてきた声によってサイトは足を止める

『今回・・・は・・・に・・・使って・・・だな』

「ん？」

サイトは聞こえてきた声に振り返るが

そこには小屋と積み上げられた木しかない  
だが声はなおも続く、どうやら複数いるようだ

『全く……をなんだと……のだ』

『しかし……ラッキー……デル……いない』

『それに……過ぎて……と……弱く……』

「おい！誰がいるのか！！」

サイトは声を張り上げたが、サイトの言葉はただ響くのみ

しかしサイトが声を出すと同時に声は聞こえなくなり

サイトは若干疑問を抱きつつも、広場へと向かうのであった

そしてサイトが広場へとつくと、備え付けられているテーブルに  
ちらほらと人が集まり始め、メイド達が忙しなく動いているので

サイトはメイドの一人にどうすればいいか訪ね、概ね理解したと  
ころで

淡々とテーブルに配膳を始めた、するとどうだろうか

メイド達はサイトの動きを見ると、それぞれがポカンと口を開ける

サイトとしてはメイド達がポカンと口を開けている意味が分から  
なかったが

それもいたしかたないと言えよう

サイトからすれば自分の動きなど人並み程度にしか思っていない  
のだが

ハルケギニアでは軽く口で説明したからと言ってサイトのように動ける者は数が少ない

日本とハルケギニアでの『人並み』は違うのだから

「サイトさん・・サイトさんの国の人はみんなそうなんですか？」

「え？俺、なんかおかしい？」

「いや・・そうじゃないんですけど・・なんと言うか、出来すぎみたいな・・（ボン）」

「？」

シエスタの最後の方の言葉が聞こえなかったのか

サイトは首をひねるのみ、そしてサイトはシエスタの言葉を間違った方で受け取り

自分は全く駄目だと軽く気を落とすと、すごすごと厨房に戻ろうとした

しかしそこでパリン！とカップが地面に落ちる音がサイトの耳に響き

サイトは音の聞こえた方を振りかえると、メイドが必死にヴィリ工に頭を下げている姿が見える

そしてもう一つ、テーブルの足元に割れたコップがサイトの視界に入りると

サイトは素早い動きでそばにあった台車にぶら下がっているタオルを掴み

そのテーブルに駆け寄るとタオルをメイドの手に握らせ、コップを回収し始めた

メイドはサイトにタオルを握らされるが意味が分からずただおろおろしているのだ

サイトは小声でメイドに声をかけた

「ほら！早く汚れたとこ拭いて（ボソ・・すみません、今片付けるんで」

「え、あ・・す、すみません！！」

「・・・」

メイドはサイトの声かけに我に帰り、すぐさま紅茶がかかり少し黒ずんでいる

シャツやマントを拭き始める、しかしヴェリエは無言で立ち上がりかがんで一生懸命に拭いているメイドの肩にポンと手を置くするとメイドが軽く顔を上げるとメイドの目の前にヴェリエの拳が勢いよく迫り

ゴツ！つと骨と骨がぶつかり合う鈍い音と共にメイドは声を上げる事も出来ず殴り飛ばされた

するとヴェリエは殴った方の手をぶらぶらと揺らしながら

殴り飛ばしたメイドを塵でも見るかのように見下ろし、言葉を放つ

「いけないな・・怒りで手が出てしまった・・・」

「お、おい！大丈夫か！？・・・テメエ！！何してやがる！！！」

サイトは地面にへたれこみ片手で顔を抑えるメイドに声をかけた後殴り飛ばした少年を睨み叫ぶが

少年は何を言っていると言った表情で淡々とサイトに言葉を返した

「君の方こそ何を言っている？」

ほら早くそこを退きたまえ、そのメイドは僕のマントを汚したんだ

分かるか？貴族の象徴であるマントを平民如きが汚したんだぞ、それとも君から殺されたいのか？」

「なッ！？」

サイトは当然のように言い放ったヴェリエの言葉にありえないと言った表情になり

そしてサイトはそのまま思った言葉を目の前のヴェリエにぶつける

「そんなマントが汚れたからって女の子の顔殴ってんじゃねえよ

！……！」

サイトがそう叫び声をヴェリエに浴びせると

周りの貴族達はポカンと、メイド達は一気に顔が青ざめた

そして今にも飛びかかろうとするサイトの腕を駆け寄ったシエスタが掴み

シエスタがサイトに言葉を放つ

「サ、サイトさん！いいいい、今すぐ謝ってください！！！！  
今ならまだ・・・キャアツ！！！！」

「おわっ！！」

サイトの腕を掴みサイトに謝るよう促したシエスタであったがシエスタとサイトは目の前から感じた衝撃によつて吹き飛ばされるおよそ５メートルほど吹き飛ばされたサイトはその勢いのまま背中から地面に叩きつけられ、肺から強制的に空気が飛び出る痛みにもだえながらもなんとか体を起こしたサイトだが横でぐったりと倒れるシエスタを見て、顔が青ざめる  
すぐさまシエスタの肩を揺さぶるがシエスタからは返事がない頭から軽く血を流していることからどうやら頭を打つたらしいのだが

しかし、そんなことを気にかける余裕もないのか、サイトは何度もシエスタに呼びかける

「おい！！シエスタ！返事しろ！！！！  
やべえ、誰か！シエスタを運ぶの手伝ってくれ！シエスタが返事しねえ！！！！」



「……」

サイトがそう声を張り上げるも周りからはただざわつくのみ

返事が返ってこないことからサイトは周りを見渡すが

サイトは視界に入ってきたものを見て絶句した

周りのメイド達はサイトに目を向けられるとただ気まずそうに目をそらすのみ

生徒に至っては、状況を理解していない者は、何でヴァリエ切れてるの？など面白半分だと問いかけ

初めからいた者は、先生呼んでくる？など直接手を貸そうともしていない

サイトはそんな光景に啞然とし、言葉を漏らす

「なんだよ……こいつら……なんでお前ら誰も手を貸そうとしないんだよ！！」

どう考えたってこいつの方が……」

「黙れよ、平民」

サイトは周りにそう投げかけるも、誰もが目をもむけるか聞き流すのみ

そしてヴァリエがサイトに杖を突きつけそう言い放つとサイトも、うっ！と言葉を詰まらせる

「君は馬鹿かね？君は僕を・・・いや、貴族全員を侮辱したんだ、そんな君に手を貸す奴が居ると思ってるのかい？」

「ウグッ！」

「大体平民の分際で貴族である僕になんて口のきき方だ・・・生まれ直してくるといいさ、その愚かさを」

ヴイリエはそうサイトに言葉を投げかけつつ、何度も杖を振るうサイトに見えない風の槌によって腕や足など体の至る所がどんどん青く変色し

目が腫れあがり、鼓膜が破れたりと血を垂れ流し始める  
ヴイリエは十分ほどエアハンマーでサイトをいたぶった後  
トドメと言わんばかりにある呪文を唱える

周りの生徒は呪文を聞きくと一斉に焦り出し、その場から離れようと席を立ちあがった瞬間

全員の動きが止まる、なぜならサイトの目の前に誰もが見覚えのある刀が突き刺さったからである

それに驚きヴイリエも詠唱を止め焦ったように周りを見渡す  
しかしサイトは上手く目を開ける事も出来ずさらに鼓膜も破れて  
いる事から

周りの様子が全く分からない  
そしてサイトが無造作に手を伸ばすと目の前に突き刺さった刀に  
触れる、

その瞬間、様々な声がサイトの頭に響く

『情けない・・・』

『全くだな、見られたものではない』

「(さっきの・・・こえ?)」

『なんだ私たちの声が聞こえるのか・・・ならば話が早い早く心を震わせろ』

「(なに・・・いつてんだ?)」

『こらこら、言葉を選びなさいよ』

私がやるからあんた達引っこんでいて・・・

ねえ、8代目、貴方悔しくないの？

こんなにズタボロにされて』

「(・・・)」

サイトは問いかけに沈黙し、心の隅で沸々と湧き上がるものを感じつつも

耳傾ける

『そうよね、悔しいでしょ？』

貴方はなーんにも間違っちゃいないわ  
なのに何で貴方がこんな目にあうと思うっ？』

「（・・・）」

『貴方が弱いからよ、だからあんな餓鬼に良い様にされるの』

「（どうすりゃいいんだよ）」

俺はただの高校生なんだぜ」

サイトが声の問いかけに答えると、幾つもの笑い声がサイトの頭に響き

声はサイトにさらに言葉を投げかける

『何もなくていいわ』

幸い今はリミッターもいなければ主もない

貴方はただ心を震わせるだけでいいの』

「（どうやって？）」

『たふろびいかり 憤、かなしみいとしみ 哀、いとこしみ 憎、にくしみ 憎（にくしみ）』

それ以外でもなんだっていい、今。貴方が抱く感情を高ぶらせればいいの

そうすれば後は私達がやってあげる  
今のあなたなら簡単なことでしょ？

ほら、周りをごらんなさい』

サイトは声の言葉で無理やり目を見開く

真っ先に目に入ったのは仰向けに倒れるシエスタ、

サイトはそれを見ただけでどんだん頭に血が上っていく

何故シエスタが怪我をしている・・・

彼女が何をしたって言うんだ・・・・・・・・

そしてサイトが視線を移動させると

慌てながらもサイトに杖を突きつける男

俺が・・・そんなに・・・お前を怒らせる事を言っただか？

ここまでするようなことを言っただか？

最後にサイトは先ほど殴られたメイドと目が合う

しかしメイドは気まずそうにサイトから目をそらした

どうして・・・俺は君を助けようとして・・・

どづして目をそむける？・・・どづして・・・どづして・・・ドウシテ

そしてサイトはまともに思考が回らなくなり、心の片隅で湧き上がっていたモノが

サイトの中でどんと膨れ上がっていく

『良いわあ』

今期の担い手は当たりね

震え方が半端じゃないわ』

サイトはもう頭に響く声など聞こえてはいなかった  
ただ、サイトの中にある感情が芽生え  
サイトの全てを埋め尽くして行く  
そしてサイトが最後に至った考えは

「（ソウダ・・・ゼンブ・）」

そして、サイトは無言で立ち上がり

掴んでいた刀を鞘から抜き放ち、ヴィリエに向ける

「コワレレバイイ」



## 四十一話（後書き）

心理描写が・・・難し過ぎるーーーー！！！！

後ちよこつと41話を改変しておきました

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への、感想、指摘、意見をお待ちしております



## 四十二話（前書き）

見るがいい、私が生み出した奥義を！

トランザム！！

どうもツインドライブを真っ赤に染めながら書いている駄文な作者です

いやー何故かのこの話だけはすらすら書ける・・・

ちよいと外道が混じっています・・・お許しを

執筆時間約30分・・・自分でもびっくりですよ  
それでは、どうぞ



男なら避けはしない

ならば進化した僕の敵じゃないさ！手数で押し切ってやるよ！

！」

「オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`オ`！！  
！」

ヴィリエは雄叫びを上げながら突っ込んでくるサイトに拳程の大きさのエアハンマーを放つ

サイトは先ほど同様刀を振るい見えないはずの風の槌を相殺するが一瞬だけヴィリエから目を離れたのがいけなかった

ヴィリエはさらにサイトとの距離を取り、尚もエアハンマーを放ち続ける

その数はざつと100を超え、唸りを上げてサイトに迫る

いくら拳ほどの大きさと叫んでもこれだけの数のエアハンマーを放てば以前のヴィリエでは

すぐに精神切れになってしまう、しかし、リユーガに敗北して無様な姿をさらして以来

ヴィリエはこそこそと一年間鍛錬に励み、リユーガへの復讐と言う理由だけで今では

トライアングルの上にまで急成長し、さらにはあの一件を思い出すだけで

沸々と怒りが蘇り、皮肉にもその時だけはヴィリエのランクはスクウエアとなるのだ

そんな今のヴィリエにとっては拳ほどの大きさのエアハンマーを放つことは

造作もない、サイトは放たれたエアハンマーを一つ一つかき消して行くが奈何せん数が多すぎる

ガガガガガ！と空気の破裂する音が響くが一つ二つとサイトの体にエアハンマーが当たるたびに

サイトの動きはどんどん鈍くなっていく

しかしそれでもサイトは歩みを止めず、一歩二歩とヴィリエに足を進めるが

ヴィリエは魔法を放ちつつ後退しているので距離がなかなか縮まらない

「ほらほら！！まだまだ行くぞ！！」

エアハンマーは数を減らすことなく幾つも放たれサイトの体力を削って行く

しかしサイトは咄嗟にそばにあった台車を蹴り上げ一瞬だけエアハンマーの嵐を遮る

するとサイトは今まで以上に素早い動きでヴィリエに急接近し大きく刀を振り上げ

ヴィリエに向かって振り下ろすが

「そんな大ぶりが当たるわけがないだろうが！！」

「ッ！？」

サイトの攻撃は到底、人の目に見えぬほどの速さではあったが

距離がありすぎたことと、サイトの予備動作大きさをタイミングをはかったヴィリエは

地面を転がることで一閃を回避し

すぐさま再度、マシンガンのようにエアハンマーを放ち後退して行く

サイトもこれ以上体力を減らさぬようまた撃ち落とすことに専念するが

その動きでさえも既にボロボロのサイトの体力を奪うのは十分すぎたため

サイトは右足に力を入れる事が出来なくなり肩膝をついてしまう  
そしてヴェリエはサイトが肩膝をつくと同時に、より一層風の弾幕を濃く強く放つ

肩膝立ちのサイトは上手く刀を振るうことができず、まともにエアハンマーをその体で受けると

吹き飛ばされ、そのまま宙を舞い地面に叩きつけられると、倒れたまま動かなくなってしまうた

「動きの速い素人なんか怖くもなんともないんだよ」

「.....」

「つてもう聞こえやしないか」

ヴェリエはサイトに言葉を放つがサイトから返事がないことで杖を懐に収めようとし動きを止めた

なぜならサイトがいつの間にか立っており、手に持った刀を眺めているからである

「なんだまだ立てるのか、そのまま寝てればいいものを・・・」

「\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?」

『あれ？私が一番乗り？他のみんなわ？』

「おやおや遂には頭までイカれてしまったか」

サイトの人の言葉とは思えない眩きを聞きとったヴェリエは鬱陶しそうに

そう呟くと、呪文を唱え始める

そして呪文が完成すると同時にヴェリエは先ほど同様にエアハンマーを幾つも自分の周りに展開させる

「\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?\*\*\*?」

『な〜に？こんなの・・・』

「君は学習しないのかな？まあこの数じゃ、避けようもない、か」

ヴェリエはエアハンマーを展開させるが此方に歩み寄るサイトを  
見て、

呆れたようにそう呟く

そしてヴェリエが留まらせておいた空気の塊に命令を下す

すると空気の塊は一斉に唸りを上げ目標に向かって放たれ  
ゴゴゴッ！と鈍い音がその場に響いたが、周りに居た者、そし  
てヴェリエさえも声を上げる事が出来なかった  
そしてヴェリエはサイトの手に持っているモノを指差しサイトに  
怒鳴り散らした

「なっ！？何をしている貴様！！！！！」

「\*\*\*\*\*」

『何をつて・・・やったのは貴方でしょ？』

サイトは薄く笑いを浮かべながら手に持ったモノを無造作に投げ  
捨てる

するとどうだろうか、広場がシンッと静寂に包まれる

サイトが投げ捨てたのは人

サイトはあるうことが一番近くに居た生徒を盾として使ったのだ  
ヴェリエの放った幾つものエアハンマーを

生徒はまともに受け、鼻は潰れ、目玉は飛び出し、腕や足があら  
ぬ方向に曲がっている

するとサイトは人ごみの戦闘に居た生徒の髪をわしづかみにし  
ヴェリエとの直線上に構え

一歩一歩ヴェリエに接近する

「わ、私は貴族なのよ！！！！あんだこんなことしてタダで済むと

・・・」

髪を掴まれた女生徒は杖をサイトに突きつけそう言葉を発するが途中、ポタリと地面に何かが落ちる

それは小さく手のひらに収まる程度の大きさでその女性との肌の色に酷似している何か、

そして女生徒は自分の顔から生暖かい水のような物が流れていることに気付く

それが何なのかを理解する

地面に落ちたのは自分の耳であると

「ぎゃあああああああああ！！！！」

「\*\*\*\*\*  
『うっさいわねえ・・・盾が喋ってんじゃないわよ』

「あ、ああ、あああああ！！！！」

助けて！誰か助けて！！！！」

「貴様・・・いい加減に・・・うッ！？」

ヴィリエはそんな行動をとるサイトに魔法を放とうと杖をつきつけるが

サイトは女生徒の影に隠れてしまった

直線上にその女生徒が居るため魔法を放てば、女生徒に当たってしまう



そんな訳でヴィリエは魔法を放つことができず  
ただサイトに言葉を放つことしか出来ない

「貴様！汚いぞ！！正々堂々と戦え！！！」

そんなヴィリエの言葉にサイトは立ち止る

ヴィリエは上手く言ったのか？とお気楽なことを考えるが

サイトはただ無言でヴィリエに冷ややかな視線を送るだけだった  
そしてサイトは呟く、低く、響くような声で

「……ガキね」

『……餓鬼ね、私アーキタ、ねえもう要るんでしょ？  
誰か変わりなさいよ』

『ケツ、俺だってそんな餓鬼相手にしたかねえよ、もっと活きの  
良いの連れてこいや』

『そうじゃの、お主が最初に入ったんじゃ、最後まで責任を持って  
今ここで体を放置すれば確実に殺されるぞい』

『そうだけどおゝ……あ！コッジーは？  
久しぶりに人、切りたいでしょ？』

『私を何だとおもっているのだ・・・まあ、変わってやっても良  
いが・・・』

サイトの頭の中で響く声がそんな話をしていると

サイトの体に強烈な衝撃が走る

あまりにも早すぎるため、サイトは反応することができず、無抵  
抗で殴り飛ばされ  
壁にめり込む

「\*\*\*\*\*」

『いつつたあく・・・もう・・・誰よ』

サイトは体を起こし、自分を殴り飛ばした人物を見ると  
頭の中の声の一人が異常なまでに興奮し声を張り上げた

『ヒヤッハー！！良いねこいつ、俺好みの目だ！！』

おい、そのクソビ　チ・・・変われ、いや、退け』

『ちよ！この・・・んな強引に・・・』

2人がその言葉をかわすと、サイトの左腕のルーンが一瞬だけ赤  
い光を放ち

サイトの人格が変わる

そんな様子を眺めた老人喋りの男の声は呟く

『やれやれ、3代目は元気な奴じゃのう・・・それにしてもコッジー』

6代目にちと甘くないかの?』

『コッジー言うな』

ここだけ温度が違うようなのんきな会話をしているが  
2人の視界には刀を振るうサイトの姿が見える  
すると、先ほどまでサイトを動かしていた声が怒りの声を上げ2  
人の会話に入る

『もう最つつつ悪!!!あのジャンキーいきなり』座』から私を  
追い出すんだから!!!』

『大丈夫か?』

『大丈夫じゃないわよ!!はあく・・・あのジャンキーが返ってきたら殺してやる』

『ハッハッハッ・・・わしら同士で殺す殺されるなど言った所で無意味と言うものじゃよ』

『そ、そうだけどお〜』

『わしは・・・いや、わしらは主の理想を見るまではずっとここに  
おる

それがわしの主の望んだこと・・・

まあ、のんびり行こうじゃないか、まだまだ時間はある  
楽しまねば損と言つものじゃ』

声達は一瞬だけしんみりとした空気になるがその後老人喋りの声  
の笑い声に

考える事がバカバカしくなつて、外の様子を眺める

『あーあー、あの馬鹿、やられやがつたよ

どうする？このままじゃ8代目死んじゃうよ』

『ふむ、3代目を負かすほどの強さか・・・次は私が・・・』では  
わしが行こうかの』・・・は、はあ！？』

『どしたのジツチャン、つて言うか大丈夫なの？

もう私が一回も見たことないから・・・2000年は出てない  
んじゃないの？』

『だからじゃよ、たまには体を動かさねば、の』

老人喋りの声はそう言葉を残すと、座に向かって行った

『あーあー・・・行っちゃった

って言うかジツチャン強いの？あいつ結構強いよ』

女性の声視界に映る男を差してそう問いかけると

4代目ことコッジーは女性の声に答えることなく視界に集中し  
女性に一言つぶやく

『見れば・・・分かるさ』

4代目の眩きと共に、サイトの左腕が一瞬だけ金色に輝き  
サイトは、鞘を杖代わりに立ちあがった

## 四十二話（後書き）

感想で、もっと分かりやすく説明した方が良いと言われたので頑張ってみましたが・・・どうでしたか？

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

四十三話(前書き)

いやあ・・・既に原作って何？って状態になってしまった・・・

だが駄文な作者はやったことに退かぬ！媚びぬ！省みぬ！でも謝る

m ( | | ) mごめんなさい

それではぶっぞ

## 四十三話

ロマリア連合皇国  
とある領土

ジュリオは風竜に跨り、教会へと向かっていた  
ロマリア首都より風竜で約30分  
そしてジュリオは目的の建物を視界に収めると、風竜に命令を下し  
一気に下降し、地に足を付けると同時に何人も男達が現れ  
ジュリオに杖をつきつける

「おっと、僕だよ僕」

「ジュリオ殿でしたか、今日は何用で？」

「何か新しいモノが出来ていないか  
見に来たんですよ、それと例のモノはどれくらい進みましたか  
?」

「それは見てもらった方が早いですよ、ささ、中へ」

男の一人がジュリオを中に促すと



ジュリオはその嚴重に守られた建物に足を踏み入れる

中には長い椅子がいくつも並べてられており

上にはまばゆい光が差し込む窓

ジュリオはどんどん中へと進んで行き

一つの長い椅子を押すと、地下への階段が現れさらに足を進める

そしてジュリオが奥まで足を進めると、そこには人より少し大き

い鏡が一つ

ポツンと置かれていた

そしてジュリオの前を歩いていた男が鏡に手を振れ魔力を流し込むと

鏡は光を放ち、ジュリオの姿が映っていた鏡は別のモノを映し出す

「おや？また大きくなったのですか？」

「今やスクウェア10人がかりで空間を広げているんですよ

なんせ次から次々と新たな物が作られていますし、例の物もかなり場所を取っています

そのせいか、10人がかりでも狭く感じられるほどなんですよ」

「そうですね・・・まあ、楽しみですよ

新しいモノがどんなモノなのか、って言うてもどうせ僕らじゃまともに使えないだろうけどね」

ジュリオはそう呟くと鏡の中に足を入れ進んで行った

.....

はあく……めんどくさい

どうも、久しぶりに俺 登場！リユーガです

はあく……やっぱ止めるべきだったかなあ……

でもサイト君のデビュー戦は原作道理にしたかったし（すでに原作ではない、まず相手が違うことに気付け）

うん……保険で刀ぶん投げたのが仇となったか、重症2名出たしいや、サイト君含めりゃ3人か、まあ後で治しておきますかな

……気が向いたらだけど

そんなことより……こいつをどうしようか

リユーガは瓦礫と化した校舎の中で

刀を支えに肩膝をつくサイトの首にブレイドを突きつけていた

「それで？お前誰だよ」

「\*\*\*\*\*」

「またそれか……悪いが俺にはお前が何言ってるのか理解できねえんだわ」

「\*\*\*\*\*?.....\*\*\*\*\*!\*\*\*\*\*!」

リユーガの言葉にサイトはブンブンと手を振り回し

言葉を叫ぶ、どうやらボディランゲージで何かを伝えようとしているらしい

だが、リユーガはそんなサイトに冷ややかな視線を送り呟く

「ラリツた奴にしか見えねえ.....っか.....字、書けねえの?」

「.....\*」

リユーガの言葉にサイトはポントと手を合わせ

せつせと地面に字を刻んで行く

サイトの刻んだ字はハルケギニアの文字ではなく、ひらがなであった

【おまえつよいな】

「何でひらがな?.....まあいいか.....んなのどうでもいいから

それよりお前誰だよ」

【おれはおれだが】

「名前なり何なりあるだろうが！そう言うの聞いてんだよ！！」

【しらん、わすれた、なんねんまえだとおもってるんだ  
ほかのやつらは、おれのことさんだいめってよぶけど】

「3代目？・・・なんの？」

リユーガは床にほられていく文字を読み  
サイトに話しかけるが、サイトはピタリと手を止めてしまった

「おい、なんの3代目かって聞いてんだろ？」

リユーガはサイトの肩を揺さぶりそう話しかけるが  
サイトは一向に答えず、ブツブツと先ほどの言葉で何かを呟いて  
いる

そしてサイトの呟きが止まると、先ほどまで赤く光っていたルー  
ンが金色に輝き

サイトは膝に手を置き、年寄りのようによっこらせと呟き  
そばに落ちていた鞘を杖のように扱い立ち上がる

「・・・今度は誰だよ・・・」

「そう覗むでないわ、わしは・・・ほれ、この通りきちんと言葉を話せるぞ?」

「・・・・・・通じておるかの?」

急に爺臭い喋りに変わったサイトはリユーガの顔の前でブンブンと手を振る

「あー、鬱陶しい、通じてるから手を振るのやめろ」

「じゃたら最初からそう言うわんか」

まあ・・・いいじゃろう、さてお主は何を聞きたいんじゃ?」

「・・・・・・それじゃあ・・・・・・お前はサイトじゃないよな?」

「サイト?・・・ああ、8代目のことか」

そうじゃよ、わしは体こそサイトじゃが中は違つぞい」

「じゃあ、今サイトはどこだ?」

「精神の中で寝ておるよ」

わしらはそこを『部屋』、体を動かす場所を『座』と呼んでい

るがの」

サイト？は手を開いたり閉じたりしながらリユーガの質問に的確に答えていく

リユーガは少しの間黙り、思考がまとまったのか、再度サイト？へと口を開く

「さっきの奴も言ってたが、3代目、8代目ってなんだ？」

「・・・お主はこのルーンが何なのか分かるかの？」

そついいサイト？はリユーガに手の甲を見せる

「ガンダールヴだろ？」

「知っておるか・・・ならばいいじゃろ、もう分かるとは思って  
わしは・・・いや、わしらは過去のガンダールヴ達じゃ」

「ほー・・・ちなみにお前さんは何代目？」

「わしは2代目じゃ、先ほどまでこの体を動かしておったのが3  
代目」

それと後この中におけるのは4代目と6代目だけじゃ

5代目と7代目は『部屋』の中に入った切り、もう何年と見ておらん

それで最後はこの体8代目となるわけじゃ」

「ふむふむ・・・大体分かった

要点だけ言うと、お前らは過去のガンダールヴでサイトの体を使って暴れていると」

リユーガの言葉にサイト？はピクリと眉を動かし  
リユーガに向けて淡々と言葉を続ける

「何故そうなる？わしらは8代目が殺されそうになったので守ろうとしただけじゃが？

大体元はと言えば、お主ら貴族が先に仕掛けてきたことじゃろ？  
全く嘆かわしいわ、ほんの2 3000年前までは誇りを持った貴族ばかりじゃったと言うのに

今は最早貴族と言う名の屑ばかりではないか・・・」

「その意見には激しく同意したいが、いきなり俺に切りかかってきた3代目君についてどう思われまとう？」

「お主が先に殴り飛ばしたようにしか見えんかったのじゃが？

それにお主、最初から最後までズット見ておった癖に何も言わんかったではないか

それについてどう思われまとう?」

「こっちにはそれなりの考えがあったし、いざとなったら止めてたさ

しっかし、周りの生徒盾にするたあ思わなかったがな」

「あまり褒められてことではないが、別に戦場ならば普通の事じゃ・・・

っと長話が過ぎたかの?そろそろえらくなってきたわい」

サイト?は急に言葉を区切、刀を鞘に納め、リユীগに向き合い言葉を放つ

「最初は過去のガンダールヴなどと言ったが所詮精神しかないわしらが表だって出てきたのにはの

訳があるんじゃ、なんじゃと思う?」

「さあな、唯でさえ俺の知っている知識と大きくかけ離れてんだ流石に予想できねえよ」

「なに、至極簡単なことじゃ

ガンダールヴは心の震えを糧とし、その力を振るうが

それが一定のラインを超えると、わしらと対話できるようになる



まあ、8代目は元々震えの幅が大きいのか、

ガンダールヴに適応しているのか最初からわしらの存在には気付いとったようじゃがの

そしての・・・その上にももう1つラインがあるのじゃ

残念なことについて先ほど8代目はそのラインを飛び越えてしまった  
った」

「そのラインとやらを超えたらどうなるんだ？」

「言っただじゃろ？ガンダールヴは心の震えを糧としその力を振るうと

怒りだろつが愛だろつが何でもいいから心を震わせ、武器を手  
に取れば

たちまち体は羽のように軽く動けるが、リスクもある

それはガンダールヴでいられる時間の限界が近くなることなん  
じゃが・・・

二つ目のラインを越えてしまうとそれがなくなってしまい

わしら過去のガンダールヴが『座』に入ろうとも、8代目の体  
はその震わせた動機を完遂しよう

勝手に動き出すのじゃ」

サイト？の言葉の意図を理解したリユーガは直球でサイト？に問  
いかける

「・・・サイトは何を思って心を震わせた？」

「感情で言うのならば怒り、言葉で表すのであれば・・・今も眩いておるよ」

全部壊れてしまえばいいと、な

この体はそれを完遂するまで止まりはしないじゃろう

故にの・・・わしが中に入っけていられる間に

終わらせようと思う

ここに居る者には申し訳ないが・・・

サイト？はゆっくりと刀を上には振り上げ  
低く、呟く

全員死んでくれい」

「ッ!？」

サイト？は殺気の籠った言葉を放つと同時に  
刀を振り下ろす

リユーガは咄嗟に刀の軌道上から転がる様にその場を離れると

サイト？の振るった刀から金色の光が放たれその軌道上にあった  
ものを全て飲み込んで行く

「・・・マジかよ」

「ほう、避けるか」

わしの光剣を避けた者など数えるほどじゃと言つのに」「

刀から放たれた光が収まると

そこにあつたものは最初から何もなかったかのように綺麗に消滅している

「奈何せん実戦から離れすぎたようじゃの・・・加減が効かんわい・・・まあ、殲滅戦じゃそれでも十分じゃろ」

「こりゃ・・・ヤベエな・・・」

リユーガはその惨状を目撃し

危険を察知したか体に魔力を巡らせ、異形の者に姿を変え

サイト？に向けて真っ黒なブレイドを力任せに思いっきり振り下ろす

「ほッ・・・大した威力じゃのう」

「ハッ！ご老体にはきつかったか？

そりゃ悪いことしたな！！！！」

「なぐに体は若々しく、活気に満ちとるわ!!」

サイト？はそのままリユーガを弾き飛ばし  
再度先ほどのように構えを取る

「二度目はないぞ？小僧」

「避けやしねえよ・・・それごとテメエを吹き飛ばしてやらあ」

リユーガはサイト？とは逆に下にブレイドを構え  
ブレイドに膨大な魔力を流し込む

そして2人は同時に動き出し、互いの武器を相手目がけて

思いつきり振り、黒と金色の閃光がぶつかると、その場に光が満  
ちた

## 四十三話（後書き）

うーん、相変わらず戦闘って難しいな……これだけの分を書くのに2日かかってしまった……

っとそんなことより

この作品主人公リユーガの相馬龍牙時代の話しもあるんですが……

・  
上げようかどうか迷っています

見たいと言ってくれる人が居れば、上げようと思うんですが……

正直駄文過ぎてあげる気が起こらない……どうしたものか……

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

四十四話（前書き）

るるるるる……どうも駄文な作者です

前書きに書くネタが……ネタが本当に無い……だが本編は書ける

……あれ？何も問題ないような……

まあ、そのうち空からネタが降ってくるだろう

それではどうぞ

## 四十四話

ロマリア連合皇国

とある領土、その中の小さな教会

ジュリオは鏡の中に足を踏み入れると

視界がぐにやりと曲がり、まるで浮いているような感覚に襲われるが

ジュリオはもう慣れたと言った感じで、早足で奥へと進んで行く

「はあ・・・はあ・・・いつ来てもなれませんか」

「そうですね？僕はもう慣れたんですけど・・・あ、もつつきま  
すよ」

「おお・・・助かった」

そしてジュリオが歩みを止め周りを見渡すと

そこは先ほどの鏡に映っていた場所で、何人もの作業員が忙しなく動きまわっていると

その中で指示を飛ばしていた者がジュリオに気付き

挨拶をしてくる

「これはこれは、ジュリオ殿、今日も新しいモノを？」

「ええ、それと例のモノの進み具合の確認を、ね」

「そうですね、申し上げにくいんですが・・・何分未知なものですし  
まだ、なんとも」

「まあ、仕方がないことですよ・・・新しいモノの方は？」

「そちらは次々と開発されていますよ・・・まあ本来のアレが進  
んでおらず

そちらばかり進んでいるので喜んでいいものか分かりませんが  
ね」

男がハハハと辛く笑うとジュリオも軽く微笑み返事を返す

「そうですね・・・また幾つか貰って行きますがよろしいですか？」

「ええ、構いませんよ、ここでは危なくて使えませんし・・・  
そう言えば以前お渡しした物はどうでしたか？」



「少し身に余るモノでしたが・・・中々のモノでしたよ」

「そうでしたか・・・では、此方の物などいかかでしょう？」

男は近くにあったテーブルに駆け寄り

机に乗っていたある物を持ち上げジュリオに渡す

ジュリオはそれを受け取ると興味ぶかそうに眺め言葉を漏らす

「これは・・・」

.....

「な・・・何とも・・・未恐ろしい小僧じゃ・・・その若さで・・・これ程とはの」

サイト？刀を地面に突き刺しそれを支えに肩膝をつきながら

目の前でうつ伏せに倒れるリユーガを見つめ言葉を漏らす

「歴代最強の威力を誇るわしの光剣を・・・5回も受け切るとは・・・」

「じゃ、じゃがもう立てまい」

サイト？はふらふらになりながらも倒れるリユーガへと足を進ませその横を通り過ぎようとしたのだが

「ッ！？・・・なんと・・・まだ動けたのか」

「どこ行く気だコラ、まだ終わってねえぞ」

リユーガは横まで来たサイト？の足を掴み、目だけをサイト？へと向けるが

「どうやらそれ以上体が動かないらしく足を掴む力も弱く、掴んだ腕は呆気なく払われる」

「はぁ・・・はぁ・・・全く、しぶといにも程があるわい」

「あー・・・クソツタレが体がうごかねえや・・・」

「あたりまえじゃ、わしの光剣を何度受けたと思うとるもう時間がない、わしはいくぞ」

サイト？はリユーガを尻目に再度足を進めるが

すぐに立ち止り、振り返るとリユーガの傍にゆっくりと近寄り  
刀を振り上げる

「やはりお主にはトドメを差しておこう、万が一ッと言つことも  
あるかもしれんしの」

「……止めとけ、後悔すんぞ」

「すまんが先に逝っておれ、なぐに、わしもいつかそこに行くじ  
やろつ

何年先になるか分らんが、の」

「止めるっていつてんだろつが!!」

いつになく焦るリユーガだが、サイト?はフンツと鼻を鳴らし  
リユーガの言葉を切り捨てる

「今さら見苦しいぞい

戦士の最後は潔くあれ」

「……馬鹿が」

サイト？はそれだけ言うと刀を真下に下ろし

リユーガに刀を突き立てる

ザシュツ！と言う音と共にリユーガの体から血が噴き出し

サイト？の顔が真っ赤を染める、

そしてサイト？は突き立てた刀を乱暴に抜き放ち、そのままリユ

ーガに背を向け

ふらふらと体を揺らしながらその場所を後にしようとしたが

背後に気配を感じ振り返ると、そこには子供が居た

「何？俺、死んじまったの？なっさけねエな」

「な、なんじゃお主は！！」

サイト？は背後に飛び上がり子供から距離を取り刀を突きつけ

子供に問いかけるが、子供はサイト？を見もせず、

体から血を流し続けるリユーガにトテトテ近寄ると、その体を蹴り飛ばす

「だから言ったんだよ、馬鹿なことしやがって

俺にそんなことが出来るわきゃあねえだろうが」

「な・・・何を・・・」

サイト？は何度もリユウガの体えおボールのように蹴り飛ばす子供を見つめ

声を絞り出すと、そこでようやく気付いたのか子供はぐるんと振り返りサイト？を見つめる

「あん？お前か？俺を殺したの？

褒めてやんよ、良く出来ました」

お前のおかげで俺が出る事が出来ました、そんなじゃもうお役御免ってことで・・・死ね」

「ッ！？ハア！！！」

子供はそうサイト？に言葉を発すると、不意に片手を上に上げるサイト？は子供の行動に背筋に悪寒が走り

刀を思いつき振り金色の光が子供に迫るが、それは子供に届くことなく

ピタリと止まり、パンツと呆気なく弾け、消えてしまうサイト？は自分の技が呆気なく破れたことに驚愕するも子供は手をばちばちとならし楽しそうに言葉を発する

「へえ、やるじゃない、流石俺を殺しただけあるわ

そ・れ・じゃ・あこう言うのはどうだい？」

「なッ！？」

子供が指をパチインと打ち鳴らすと背後に万を超える剣が姿を現し  
一斉にサイト？へと降り注ぐ  
サイト？は降り注がれる剣軍を金色の光を何度も放ち  
消滅させるが、疲労が限界に達したのか、肩で息をし始める  
しかし、子供はさらに楽しそうに無邪気に笑い、手をぱちぱちと  
叩きサイト？を称賛する

「凄い凄い・・・でも、まだまだいけるよね？」

はい、次行ってみよう、今度は2方向からだよ？頑張ってるね」

「じよ、冗談ではないわ・・・」

子供がまたも指を打ち鳴らすと

今度はサイト？の前方と後方に剣軍が現れ先ほど同様サイト？目  
かけて飛来する

サイト？は金色の光を放ち、これを相殺するが

3方向、4方向と数を増え、最終的には右左前後ろ上空の5方向  
から来る様になり

遂に耐え得きれなくなったか、サイト？の体が大きく揺らぎ  
両腕に剣が刺さり壁に縫いつけられる

「ガアッ!？」

「え〜・・もう終わり？  
つまんねエなあ〜、もっと頑張れよ」

「化け物が・・・」

「はあ？化け物？  
・・・いやあ〜それ程でも／＼」

「褒めておらんわ・・・はあ〜・・・このわしが手も足も出ないと  
はの・・・

もうええ、疲れたわ、後は知らん  
化け物同士勝手にやっておれ・・・すまんのおブリエル、約束  
は・・・守れんかった」

「なんだって？・・・ん？」

サイト？が諦めたように眩き目を閉じると  
金色に光っていたルーンが輝きを失い、完全に光がおさまると  
サイト？の右腕に真っ黒なルーンが現れ怪しく光を放つ  
するとサイト？は眼を赤く光らせ、体を縫い付けていた剣を乱暴  
に引き抜き、

人の声では到底出せぬような、叫び声を上げる





「だあくかあくらあく、聞こえねえって・・・言ってるだろうが！  
！」

サイト？の眩きを聞きとれない子供はいらつたのか、腕を振りかぶり

サイト？目がけて腕を振り下ろすと、サイトに向けて、数多の剣が投擲される

しかし、剣はサイト？の体を貫くことなく、ピタリとサイト？の目の前で静止し

サイト？が一步踏み出し、剣の先っちょに触れると、剣は塵となつて消える

「お？お？なんだそりゃあ、破壊の魔法の類か？

良いねえ・・・もっと見せてくれよ！！」

「・・・ワレロ」

自分が放った剣が塵に帰られる様を子供は楽しそうに笑いながらまた、サイト？に向け、剣の雨を降らす、サイト？の体に触れるたびに粒子となり

消えさる

「埒があかねえな・・・そんじゃあ・・・これでどうだい？」

子供は両手を重ね、地面を力強く叩くと  
大地が音もなく割れ、その間から巨大な剣が現れ  
サイト？に向かうが、その巨剣でさえも先ほどの剣となんら変わ  
らず粒子に変えられていく

「チツ！クソ鳥みてえな魔法壁張<sup>コトインゲ</sup>ってんのか？  
そんなじゃ・・・次は・・・」

「コワレロ」

「あ？」

子供が次に放つ魔法を思考していた時に、サイト？から無感情な  
咳きが聞こえ

子供はサイト？に視線を向ける、しかしその時には子供の右腕が  
剣同様粒子と変わり

サラサラと消えさる

そして次の瞬間、なくなった右腕から血がドバツ！と噴き出し  
子供の足元に血溜まりが出来るが、子供はそれに見向きもせず

「は、ハハハ・・・」



「始まりは一つの声」

導かれし我等は数多の戦場へ

我等は命を燃やし、勝利した

力に満ちた声で歌うように言葉をつづける子供  
天に突き上げた左腕に真っ黒な球体が現れ、空高く飛び上がる

しかし、我等は気付く

それに何の意味があるのか

真理に近づいた我等は一人、また一人と

気付けば一人、戦場を飛び交う

右目から血を流すも子供は尚も言葉を続ける  
子供の左腕から赤黒い雷が放たれ、天に昇った球体がみるみる大  
きさを増す

我は悲劇の体現者

我が身に刻まれた業

背負う覚悟はあるか？

左腕から放たれる雷を球体に収めながら子供はサイトを見つめ、  
言葉を続ける

そして

サイト？は歌っている子供に向けて肩に担いだ大剣を振り下ろそ  
うと

振りかぶる

子供の言葉と共に天で激しく蠢く球体が、徐々にその内にため込んだエネルギーを放とうと

大気を震わせる

そして子供が最後の言葉を呟こうと口を開く

しかし、子供とサイト？の丁度中心に真っ白な球体が姿を現す

いなく……」

「コワレ……」

『上級の上、カームエンド』

2人は言葉と共に、サイト？は大剣を、子供は左腕を振り下ろそうとした瞬間

優しいな声と共に、現れた真っ白な球体が光を増し

耳に響くような轟音を轟かせ

2人を包み込むと、最後に立っていたのはピンク色の髪を爆風でためかせたルイズだけであった



## 四十四話（後書き）

どうでしたでしょうか？

ちよっぴシリアス混ぜたつもりなんですが・・・

ハイ、全然シリアスじゃないですね、所詮駄文な作者が書くシリ  
アスなどシリアルですね・・・

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、感想をお待ちしております



## 四十五話（前書き）

どうも、最近バトルバトルと、

戦闘描写ばかり書き続けてちょいと疲れた駄文な作者です

今回はちょっと過去に戻ります、いい加減

戦闘描写ばかりなのもつまらないと思うので

それではどうぞ

## 四十五話

side ステイル

ああ・・・思いだすな・・・あれを初めて見た時のことを・・・

赤黒い雷で出来た大きな球体

あれを初めて見たのは・・・そう、確か新年一日目のことだった  
いつものようにダラダラと過ごす中

僕等はリユーガの屋敷で騒がしく年を越し

新年を迎えたのだが

ふとギーシュが屋敷の中に何かいると言いだし

僕等はリユーガの屋敷を手分けして探すと、ギーシュがあるモノ  
を見つけたことから始まった

「おい、こっちだこっち！僕が感じたのはこいつだよ！！」

「一体何を・・・って・・・なんだい？それは」

通路のど真ん中にある土の塊

しかし、それにはただの土とは思えぬ異様な雰囲気を漂わせており  
ステイルはその土を調べるように触っていく

「んー？・・・なんだこれ・・・土・・・だよな？」

「でもさ、何か変じゃないか？」

「確かに魔力みたいなものは感じるけど・・・あ、リユーガこっ  
ちだ」

「探し物は見つか・・・何ぞそれ？」

「土・・・だと思っただけど」

ステイルは土の塊から一掬いその土を摘み上げ  
リユーガにつきつけると、リユーガはステイルが手に持った土を  
マジマジと見つめ

息を大きく吸い、声を張り上げる

「・・・ユーリ！ユウーーーーーリィーーーーー！！」

「！！」

「つるさッ!?!」

「耳があ!?!耳がああああ!?!」

屋敷が震える程の音量で叫ぶリユーガ

咄嗟に耳を塞いだステイルはなんとかその轟音を防ぐが

ギーシュはダイレクトに鼓膜に響き、耳を押さえながら

床をのたうち回る

そしてその余韻だけを残し、リユーガがキョロキョロとあたりを

警戒し始めると

上からバコッ!と言う音が聞こえ、銀色の髪をなびかせながら  
リユーガの目の前に着地する

「ビューン、呼んだ?」

「おう、今日は結構早かったな

どこに居たんだ?」

「うーん?・・・あっち?」

「そうか、それより今お守り持ってるか?」

「持つてるよー」

ユーリは首にかけた青色の球を取り外すと

リユーガの手のひらに置く

リユーガは紐のついた青い球を受け取るや、その球を指で突きながら声をかける

「ネロ？・・・おいネーロー？」

ネロさんやーい、出てこいよー」

しかしリユーガの問いかけも虚しく、青い球はうんともすんとも  
言わない

段々といらつき始めらのか、リユーガのこめかみに一本の青筋が  
現れ

青い球を思いっきり床に叩きつける

そして何度も何度もその青い球を踏みつけて行くと、次第に青い  
球から水がドバツと溢れだし

形を変えていく

「な、何じゃ一体！！地震か？雷か？家事か？親父か！？」

「おー、うねうねだあ、おひゃー」

「おお、久しいなユーリよ」

「色々突っ込みたいが後だ、とりあえずこれ見ろ」

現れたネロにリユーガは通路にある土の塊を指差し、声をかけるとネロは両目（目玉はない）で土の塊を値踏みするようにじっくり眺め  
眩く

「ん？・・・これはこれは、随分しおらしい姿になり果てたのお、土の」

「やっぱりか、道理で周りにうじゃうじゃ土の精霊が見えるわけだ」

リユーガはネロの眩きを聞くと納得したように土の塊に視線を送る

「なあ、一人で納得していないで僕らにも説明してくれないか？」

「あ？見た方が早いだろ、ネロ、やれそうか？」

「根本の力が違うが・・・まあ、最低限喋らせることくらいは出

来よう

「なんせ我は新しき住処から無限に力が送られてきておるからの」

「そう言いネ口は、水で出来た腕で土の塊に触れる

すると、先ほどまでただの土だったものが動き出し、人の形に姿を変え

言葉を発する

「手間をかけたな、水の、この恩いつか返そうぞ」

「良い良い、同じ精霊、時には助け合いも必要じゃ

時に、何ようかの？地下奥深くに居るはずのお主が何故地上に出てきた？

「それにあの姿は一体なんじゃ、情けない」

「ああ、色々あってな、私は今大地とのリンクを切っている

そのせいであのような姿になってしまったのだ

問題を解決するべく、お主と火を探しているのだ」

「我を？それにお主が大地とのリンクを切ったじゃと？

「一体何が……」

「な、なあ、リユールガ」

「ん？」

人型に変わった土とネロが会話する中

ポカンとだらしなく口を開けていたギーシュはリユーガの脇腹をつつき

リユーガが視線を向けると、ギーシュはリユーガに問いかけた

「あれってもしかして土の精霊？」

「見りゃわかんだろ？」

「君ねえ・・・簡単に言うけど

土の精霊なんて今まで聞いたことすらなかったんだよ？」

ギーシュとの会話にステイルが突っ込む

「なんでよ、ネロが居るんだったら他の大精霊が居たっておかしかねえだろ」

「「大精霊？」」



「おろ？知らなかったか？」

そもそもそこらじゅうに精霊はいるんだぞ・・・ってお前ら見えねえか

まあ、そんな感じで、ネロを的確に現わすんだったら、水の精霊じゃなくて

水の大精霊になるわけ、おわかり？

第一俺らが使う四系統はそこらに居る精霊を従わせて使うんだからな

まあ、その辺はこのビダーシャル大先生にお聞きなすってください  
「

リユーガはポンといつの間にか横に居たビダーシャルの肩に手を置くと

ヴィダーシャルは土の精霊をポカンと眺め、どこか放心している

「つ、土の・・・大精霊？・・・いやいやまてまて・・・そんなの聞いたことが・・・しかし

では目の前にいるこの強力な精霊は一体・・・」

「ああ、無理無理、ヴィダーシャルはこう見えて、意外といきなりのことについて行けないから

僕が説明しようか」

「んじゃウイルよろすく」

第一回、エルフのゼロ魔、設定講座  
ドンドンパー

「はい、そんな訳で始まりました、第一回エルフのゼロ魔、設定講座

略してエルフ講座で良いでしょう、このコーナーでは作者のこの作品の元である

ゼロ魔についての独自解釈を説明するコーナーです」

「なぐをいっとるんだね・・・君は」

「はいはい、ちょっとことメタあな発言が含まれましたが先に進みましょう」

今回はこれ魔法と精霊の関係についてです」

「はい、ウィル先生！」

「はい、その原作と大いに変わってしまったギーシュ君」

「さっきリユーガが言っていた精霊を従わせるってのはどう言うことですか？」

「うむ、的確な良い質問だ  
では答えよう」

本来私達が使う・・・君達でいうところの先住魔法と君達人間の  
使う四系統

これの根本はあまり変わらないのだよ」

「つまり？」

「どちらも精霊の力と言うことさ」

私達が使う魔法は、周りに居る精霊と契約し

その力の一端を貸してもらっているにすぎない

そして契約する時に精神力を使うわけだ、ここまでは分かった  
かな？」

「頭が段々と熱を帯びてきましたが問題ありません」

「私達は、これを使役すると言う、故に私達はこの魔法を精霊の  
力と言うのだよ」

そして次は君達の使う、四系統

これは、私達のやり方とかなり違う」

「どう違うんでしょうか？」

「詳しく説明するとややこしくなってしまうから簡単に説明する

けど

つまり君達はそこらに居る精霊を、精神力で無理やり従わせ無理やり精霊に力を使わせるんだ

それゆえ私達は君達で言うところの系統、これがないんだ」

「何故ですか？」

「使う魔法、つまり使役する精霊との相性、私達の魔法がこれかすべてだ

例えば、私は土の精霊と相性が良い、しかしだ、

だからと言って他の魔法が使えないわけじゃあないんだよ

君達は魔法を幾つ足せるかによってランクが決まるが

私達の場合は、精霊と契約してその力を貸してもらう、その速さによってランクが決まるんだよ」

「と言うことは、ウィルさんもやろうと思えば土の魔法以外でも僕達で言うスクウェアクラスの魔法を使えるってことですか？」

「ああ、使える、しかしだ、先ほど言ったように精霊との相性というものがある

例えば私が風のスクウェア相当の魔法、カッタートルネードの様な現象を起こそうと

あたりに居る風の精霊と契約しようとする、しかしだ、精霊との相性が良くないため

お前とはそりが合わないと大概の風の精霊は私と契約してくれ

ない

それでも無理にやろうと思えば私達には2つの選択肢がある

1つは時間を掛け私でもいいと言ってくれる風の精霊を集めること

もう1つは君たちのやっているように無理やり従わせることだが、1つ目は時間がかかり過ぎるし

2つ目は誰も選択しない、それ故に私達の中にも系統魔法の様な区切があるわけなのだよ

土の行使手、風の行使手みたいにね」

「そうなんですか・・・でも何で2つ目は誰も選択しないんですか？」

「それは私達が常に大いなる意思によって動いているからだ

まあ、簡単に言えば宗教上の理由なんだよ

宗教上豚肉を食べないとか、そんな感じ」

「は、なるほど・・・ってことは僕らにも精霊との相性があるわけですね」

「相性と言うか・・・従わせやすい相手と言った方が良いでしょう

例えばステイルなら火の精霊、ギーシュなら土の精霊

リユーガは・・・火？だとは思っただけど・・・とまあ大体説明はこんな感じかな

そして最後に1つ大事なことがある」

「え？まだ何かあるんですか？」

「それは・・・この設定はあくまで作者が原作ゼロの使い魔に抱いている偏見であり

決して公式設定ではありません、あくまで、この作品がこの設定で行くと言っただけです

そこのところあしからず」

「・・・誰に行っているんですか？ゼロの使い魔？」

「あーはいはい、そこは突っ込まない、世界が壊れる」

「」「？」

「さてこれにて第一回エルフ講座終了です、それでは皆様さようなら」

・・・・・・・・・・・・・・・・

あれ？おかしいな、少し脱線しちゃったか、話を戻そう

僕らは何故土の精霊が来たのかを聞くと

なんでも、何か不思議な力に1つの森林が包み込まれ

その森自体がもうだめらしい

そう言うのは本来土の精霊が治すはずらしいんだけど

何をやっても意味がなかったの、仕方がなく侵されぬよう大地とリンクを切って

他の大精霊の力を借りに来た所、途中力が尽きてあの土の塊になった訳らしい

その後、なんやかんやうすかこんすかあつて現在僕等はラークの背に乗り

その森林へと向かっています

ちなみに僕等と言うのは僕とリユーガ、ギーシュ、ウィルさん、

ビダーシャルさん

あとセツタとユーリちゃんな訳なんですけど・・・セツタさん・

貴方どこから湧いてきたんですか・・・しかもついてくる理由が

暇だからって・・・

「何だか嫌な感じだな、精霊が嘆いている」

「そうだね・・・何だか気分が・・・ツ！？・・・うげええええええええ  
え！！」

「うお！？ウィルさんが吐いた！？」

ビダーシャルも顔色が悪いが、ウィルはそれ以上に悪く

先ほどまでピンピンとしていたのだが、ラークが目的地に向かって飛ぶに伴い

顔色が悪くなり、遙か上空から嘔吐物の雨を降らせた

「おいおい、きつたねエな．．ん？どうしたギーシュ」

「．．．．．ダッ！！．．．．．うげええええええええええ！！」

「お前もか！？」

ギーシュは終始無言だったか、ウィルが下に向かって吐く姿を見ると

それにつられ、ウィルの横で仲良く嘔吐物を吐き出す

「あーあー、見るよ、ゲロで虹が出来てるぜ」

「何と云うか．．．凄くシュールだな．．．って云うか何故あの2人は吐いたのかな？」

ステイルは吐く2人の背中をさすりながら、誰に問うでなく声を出す

もう一人顔色の悪いビダーシャルが返事を返す

「先ほどから聞こえるのだよ、土の精霊の嘆きがな．．

私はそこまで土の精霊に好かれておらんからこの程度だが．．



ウィルは私以上につらいだろうな  
ギーシュも同じ理由だろう」

「まったく、情けねえ」

「リユーガ・・・お前は何故平気な顔をしているのだ？確かにリユーガは精霊が見えたはずでは？

ならば私たち以上に辛いはず・・・」

「あ？この声の事か？これが何だったの？」

「・・・お前に問うた私が馬鹿だった・・・」

「見えて来たぞ、あそこだ」

そんな感じで会話をしていると、クウェイク（リユーガ命名）が下に向かって指をさす

すると、皆が下をのぞき、絶句する

そこにあるのは半径5キロメートル程の森林、しかし、その森林を見た皆は一同にあることを思った

この森は死んでいる



「・・・何か分かるのか？単なる者よ」

クウエイクは一番近くにある木に手を置くリユーガに問いかけると  
リユーガはやれやれと肩をすぼめ口を開く

「これは、俺達の使う魔法、腐敗の魔法だ

それもかなりのやり手のな

ひでえ事するもんだ、こんなちっせえ森に拡散+汚染の腐敗の  
魔法使うなんて

森が死ぬまで10分も掛からなかっただろうな」

「どうにかできぬのか？土地は我が体の一部の様なものだ  
出来れば救いたい」

「・・・無理だ、腐敗の魔法は術者が解くか、再生の魔法で治す  
この2つしか方法はねえ

しかもこの森に掛けられたのはAランク以上の魔法だ、

俺の再生の魔法じゃ治すのに1000年かからあ」

「ふむ、単なる者の時間の単位は知らぬが、治せぬことはないの  
だろ？やってくれ」

リユーガの発言に呆気からんと言葉を返すクウェイク  
リユーガは木から手を滑らせ、珍しくずっこけると、立ち上がり  
呆れたように言葉を返す

「あのなあ・・・不死のお前らと一緒にせんでくれ、治す前に寿命でばつくり逝っちまう

それに、今はお前さんが隔離してるせいかこの程度で済んでるが  
隔離してなかったらもっと被害出てんだぞ」

「ならばどうしろと言うのだ？」

「そんなもん・・・消すしかねえな」

「・・・」

リユーガの発言に沈黙するクウェイク  
クウェイクはふらふらとおぼつかない足取りで、木に触れ  
何やらぶつぶつと言葉を言い始める  
それを見かねたギーシュとウィルがリユーガに詰め寄る

「どうにかならないのかい？」

「そうだよ、リユーガなら他の方法の一つや二つ・・・」

「無・理、俺は壊すことはできても直すことはできねえ  
第一、死んだもんを蘇らせるのは俺の趣味じゃないんでね」

「……………だつたら私が…精霊よ、我が意思をくみ取れ!!」

ウィルが手を振りかざすと、足元から木の根っこの様なものが伸び一本の木に当たる、すると木は息を吹き返したかのように黒い澱みを取り払う

「なんだ、出来るじゃないか」

「何が出来たんだ？よく見るアホ」

リユーガがウィルの直した木を指差すと、隣の木から黒い澱みが  
移り

木は力なく枯れる

「言っただろうが、拡散と汚染だつて、今はクウエイクが隔離しているからこの場所は大丈夫だが」

中は今も汚染を進めようと、その澱みが蠢いてんだよ」

「本当に・・・もう、駄目なのか？」

「駄目だな、そもそも来るのが遅すぎた、例え直せたとしてもおそらく表面上が限界」

数年でこの場所は枯れる」

「・・・でも・・・」もういい、この地との話はずいた「・・・」

ギーシュの言葉を遮る様にクウェイトが言葉をかぶり  
此方に歩み寄る

「もう自分達は駄目だと言っておったよ、ひと思いにやってくれんか？」

あいにく私にそれをするだけの力はもう無い」

「・・・そうか、んじゃ行ってくるかな」

お前らちよつと離れてるよ」

そう言いリユーガは軽い足取りで、飛び上がる

皆はその姿をただジッと眺めていたが

不意にセツタの腕の中で眠っていたユーリが飛び起き  
ラークに飛びつく

「お、おい！何をする！」

「早く飛んで！！早く！！！」

「ユーリ？何をしている」

セツタがユーリに問いかけるもユーリは聞かず、ただラークの羽をむしり

早く飛べと催促するのみ、その場に居た者はなんだ？と

必死に催促するユーリを見つめ、そして後ろから何かを感じ

バラバラと、全員がラークの背に乗ると、空高く飛び上がり

森を見つめる一同啞然と固まる

森の中央上空には豆粒ほどの大きさのリユーガ

しかし、リユーガの頭上には赤黒い雷を発する大きな球体がある

「な、なんだあれは・・・」

「待って！何か聞こえる」

「う、歌？」

ステイル達が耳を傾けると微かだがリユーガの声が聞こえる  
しかし距離が遠すぎるのか、何を言っているのかは分からない

だが、ステイル達の背中から嫌な汗を噴き出し、ユーリはセツタの後ろで縮こまっている

そして、次の瞬間、リユーガの声が彼らの耳に響く

『ソシテ、ダレモ、イナクナツタ』

それは、感情が無いようで、感情に溢れており

彼らはただリユーガの声が耳に響きが離れず、何度も繰り返しリユーガの声が繰り返されながら

目の前の光景を眺める

リユーガの声と共に球体は、広く薄く伸びて行き、半径5キロ程ある森の上空まで来ると

ピタリと止まり、その薄い膜から次々と赤黒い雷が放たれる

真っ直ぐと森に降り注がれる雷は木にぶつかると同時にそこにあつたもの全てを消し

地面に突き刺さる、そして次に空に広がる膜が、徐々に狭まり突き刺さつた雷を軸に森全体を包み込みふわりと浮き上がるとそこには何もなくなつた

「消えるとは・・・このことを言うのだな」

「何なんだよ・・・あれ

森を飲み込んだぞ」

「あ、どんどん小さくなってく」



森を包み込んだ球体はぐんぐんと小さくなっていき、

最終的には先ほどのリユーガと同じ程度の大きさに変わる

そして球体が消えた後、森だった場所にポツンと立ちつくすリユ

ーガの姿

どうやら手でこっちに来いと言っているようだ

ラークはそれを感じリユーガの元へ急降下すると

まず最初に目に入ったのは、リユーガの顔だった

「ちよ、ちよっとリユーガ、目！目から血が・・・」

「ああ、きにすんな、これやるといつもこうだからよ

それよりこれ見る一つだけ生き残ってたぜ」

「そうか、私が思っていたよりこの地は強かったのだな・・・私の力が戻り次第

またここに、森林を生やしておこう

すまなかつたな単なる者、手間をかけさせた、いずれこの恩は返そう」

「楽しみにしてるよっと、んじやなクウェイク」

「また会おう」

リユーガはラークの背に飛び乗り、クウエイクに手を振ると、クウエイクの体はそのまま地に埋まって行く

その後リユーガは森を消した容疑者としてジョゼフの呼び出しを喰らうが、その次の日に

元道理の森林に戻っていることから処罰なしとされた

.....

お分かりいただけただけでしょうか.....

あの半径約5キロの森林をも一瞬で消滅させた球体が今僕等の頭上にあるんですよ？

それもあの時よりはるかに大きな.....あえて言わせて頂きたい

オワタ＼(^o^)/

このスタイルは少し壊れています



## 四十五話（後書き）

ステイル君ブツ壊れ

さらつと土の精霊も出せて一石二鳥？そんなお話でした、

ちなみにリユーガの魔法の中ではこれが最大射程 + 最強の威力です  
ので

ここまで駄文をみていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

四十六話（前書き）

なんかタイトルがどんどんありきたりなものに・・・  
ま、良いか

そんな訳でこんにちは駄文な作者です

よくよく考えたら原作始まるとか言っただけど、

まだ一巻すら終わっていない・・・

どう言っことなの・・・仕方がない・・・やるか

トランズ・・・このネタ以前にやったやつだorz

仕方がねえ

ここからハイピッチで行くぜ！！

まあ更新スピードは変わらないんですけどね（・・・）

## 四十六話

ロマリア大聖堂

ヴィトリーオ執務室

「……なんでしょうか……この嫌な空気は……」

ヴィトリーオは子供達に勉強を教えていた手を止め  
窓の外を見る

「どーしたの？ 教皇様」

「……皆さん、申し訳ありませんが今日はここまでです」

ジェローム、この子たちに何か甘いものでも食べさせてあげな  
さい」

「かしこまりました、皆様此方へどうぞ」

パンパンと手を打ち鳴らし子供達にそう告げるヴィトリーオ  
すると子供達は目を輝かせ、ジェロームの開いた扉に向かって走  
り出す

子供達が部屋から出て行ったのを確認すると、ヴィトリーオは深

く椅子に腰かけ  
小さく呟く

「誰か……いませんか？」

「……」

ヴィトーリオが呟くと部屋の中に風が吹き、ヴィトーリオの背後に一人の黒フードが立っている

ヴィトーリオは自分の背後に気配を感じると、さらに言葉を続ける

「すみませんが、大至急ジュリオを呼んできてはくれませんか？」

「……」

ヴィトーリオの言葉を聞くと黒フードは音もなく消える

背後の気配がなくなると同時にヴィトーリオは息を漏らし

引き出しから豪華な杖を取り出すと、鏡に向かって杖を振るうが  
何も起こらない

「おや？……おかしいですね、何故映らないんでしょうか……」



ヴィトリオは立ち上がり、鏡に向かって歩き出し  
その鏡に触れた瞬間、鏡が薄く発光し、一人の女性が映し出される

「こ、これは？」

『……コホン』

鏡の中の女性はぺたぺたと鏡を触り、小さく咳払いすると  
口を開いた

『あー……あー……えつと……聞こえますか？  
……ねえ、アルト！聞こえてると思う？』

『俺に聞かんでくれ、お前さんの使う魔法なんて分かりはしない  
のだから』

『なんかつーめーたいーい、まあいいや  
聞こえてるってこと前提で話すわよ、これ見てるあんた  
今すぐそこらにある秘室にもう一度触んなさい  
じゃないと取り返しのつかないことになるわよ』

「……え、あ……私、ですか？」

『言つとくけど、無の力持つてる人じゃなきゃ意味ないからね  
ま、どっちにしても、無の力を持った人じゃなきゃこの映像は  
見えないんだけど』

ほら触れ、すぐ触れ

きや  
つて言うかさあゝ、これ意味あるのかなあ、余程の馬鹿じゃな  
きや

パパの言うことまともに信じないと思うんだよね』

『これは保険だ、やって損はない』

これより数百年は大丈夫だろうが・・・何千、何万年後の事は  
分からん』

「なんのことを言っているでしょう・・・それにこの青年の左腕  
は・・・」

ヴィトリオは鏡に映る髪の毛の長い女生と、金髪の青年の内  
青年の左腕を凝視し、小さく呟く

「ガンダールヴ・・・ですよ・・・少し変わっていますが・・・」

『ねえ、反応ないよ、やっぱりいきなり言ったのがまずかったか  
なあ？』

『まあな、いきなり触れだの何だの言っ  
てホイホイ触る奴もおらん  
だろ』

媒介が鏡だから此方の姿も見えて  
いるだろうしな』

『ぶうー、まあ、まだ3つあるし、こ  
っちには聞いた瞬間強制発  
動させることにしましょ』

『それが良いだろう、それではな、  
これを見ている者よ』

『バイ、顔も知らない私の家族』

女性は此方に向かって投げキッスを  
すると、そのまま映像が途切れ  
その鏡にはただ、ヴィトーリオの  
姿が映っているだけとなった

「一体なんだったのでしょ  
うか……」

.....

光が一切ない真っ暗な空間

リユーガはそんな場所を漂っており、  
ふと感じる浮遊感によって  
目を覚ますと

うんざりした表情になり言葉を漏らす

「あー・・・またここか・・・  
居るんだろ？今回は誰なんだ？」

リユーガはそう言葉を暗闇に向かって問いかけるが返事はない  
周りを見渡そうにも自分の姿すら見えないので、結局いつものよ  
うに待つことしかできず

暗闇の中で何分、何時間、ただひたすらに前を見続けると  
不意に目の前に誰かが居るような気配を感じリユーガが手を伸ばし  
誰かの肩を掴む

「・・・今回こそ寝かせてくれるのか？」

「・・・」

「だろうな・・・それじゃあ次は・・・ウグツ!？」

リユーガは目の前の人物が首を振ったことを感じ  
諦めたように掴んでいた誰かの肩を手放すと

体中に熱が走り、最後に胸に大きな衝撃を受け、胃が持ち上がる  
ような浮遊感に襲われ

ただ暗闇の中を落下して行く

その時一瞬だけ光が走り、リユーガが掴んでいたと思われる人物  
の顔がちらりと見えると

リユーガの顔が歪み、左目から液体が流れるのを感じる

「……やっぱ……分かんねえか……」

リユーガはそう呟くと、唯落下して行き

痛みと共に意識が遠のいていく、そんな中

リユーガの耳に暗闇の中から呟きが聞こえる

「さよ……です、相・さ・、来世・また会いま……う」

リユーガはそんな嬉しそうであり悲しそうな声を聞きながら  
体を包み込む温かいようで冷やかなような光に身を任せ  
眠りに落ち、目覚める

……

ナマステ……どうも、リユーガです

ああ、時が見え……はい冗談はこの辺で良いでしょう

現在ベットの上でシコシコと……冗談です

すやすやと寝た振りをしています……何で寝た振りしてるって？

……目の前に愉快に笑うおっさんが居るからですよ

ハッキリ言って今日を覚ますと非常にめんどくさい

ああ、めんどくさい、大事なことなので二回も三回も言いますとも

めんどくさー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！  
今眠ってるからな

寝てるんだぞ！だから髪を引っ張るのはやめなさいユーリ！！！！

「ビューン・・・起きない？」

「これこれ、髪を引っ張っちゃいかんぞユーリ」

「(G)セッタ！！！」

「うゝ・・・あゝそゝべゝ？」

セッタに抱きあげられるも、ゲシゲシとリユーガの顔を蹴り続けるユーリ

「だから止めなさいと言っているだろう、この傷だ

いくらこいつと言っても、治るのにはまだ掛かるだろう」

「(良いから早くユーリを遠のけるセッタ！！！！)」

「・・・つまんない？」

ユーリはセツタの顔を踏み、飛び上がると部屋から出て行ってしまふ

セツタはやれやれとユーリの後を追いかけてようとするが途中で振り返り、足を高らかに振り上げ、リユーガの腹にかかと落としを決める

「（グツ！？・・・洒落にならん・・・）」

「ふむ・・・起きていると思ったのだが・・・まあ良いか後は頼むぞ、ジヨゼフ殿」

「ハツハハハツハハ・・・は？何か言ったかセツタ？」

「いや、良いさ、シエフィールド、頼んだぞ」

「え、ええ・・・死んでないのかしら・・・この子（ボン）」

セツタはシエフィールドにそう言い残すと部屋から出て行くそして部屋に残っているのはジヨゼフ、シエフィールド、ビダーシャル

後隅で縮こまっている2人だけとなった

「して、もう一度言ってくれぬかビダーシャルよ  
奈何せん信じられんことが何度も俺の耳に聞こえてくるのでな」

「だから・・何度も言っているだろう、リユーガは、

横で寝ている少年に胸を刺され・・「クツクク・・ハッハッハ  
ハ!!!」

・・もう誰か代わってくれ・・」

「ハハハハ・・おっとすまんすまん

この人の範疇を軽々と越えた人間兵器リユーガがこの餓鬼に負けたと？」

「私も後からキャスターに聞いたことだ、だがリユーガの使い魔  
が言うのだから真実なのであろう」

「そうか・・お前ら少し部屋から退出せよ

そこの奥で縮こまっている2人もだ」

ギロリとジョゼフが奥に居る2人、ステイルとギーシュに視線を  
送ると

2人はすぐさま立ち上がり我先にと部屋から転がる様に出て行く  
それに続きヴィダーシャルも立ち去り、最後にはジョゼフとシエ  
フィールドだけとなった



「ミヨズ、お前もだ」

「し、しかしジョゼフ様・・・「良い」・・・分かりました」

パタンと扉が閉まる音をジョゼフが聞くと

ジョゼフは懐から短剣を取り出し、逆手に持ちかえ、リユーガの頭に向かって思いっきり振り下ろす

しかし、短剣はリユーガに突き刺さることなく、布団の下から伸びた日本の指に挟まれ動きを止める

「おい、目覚ましにしちやあ過激すぎねえか？」

「どうせ俺の力じゃあ刺さるんだろ？」

「痛てえもんは痛てえんだよアホ、たくッ

大げさにこんなもん巻きやがって」

リユーガは身を起こし、短剣をジョゼフに返すと

体に巻きついている包帯を無理やり引きちぎり、座り直す

「で？人払いして俺になんか言うことでもあんのか？」

「狸寝入り決め込んでおったやつがふてぶてしいな・・・まあ、とりあえず」

リユーガよ、負けたのか？こんな小僧に」

ジョゼフはニヤニヤしながら横で寝ているミイラ男を指差す

「あー、まあ、そうなんじゃね

ほれ見ろ、まだ跡あんよ、これ」

リユーガは今少し血で赤くにじんでいる傷口を指差すと

ジョゼフがまた楽しそうに顔をゆがませる

「ククク、どうだ？体に穴をあけられた気分は？」

「最悪だね、体の芯がカッピカピになっちまう」

ジョゼフの問いに冗談交じりで返答するリユーガ

そしてリユーガは横にかけてある自分の服を見つけるとそれを着ながら

ジョゼフに問いかける

「それで？まさかそんなこと聞いただけに他国の魔術学校に来たのか？」

「そんな訳があるか、元々城を抜け出してこっちまで来ておったのだよ」

まあ、着いたら、最早学院とは呼べぬ物に変わり果てているわ  
お前は倒れておるわで中々楽しめたが・本題はこっちだ  
そちらもなかなか面白いものが書かれている」

「ん？なんだこれ？」

ジョゼフはリユーガに一冊の本の様なものを投げ渡され  
中身をパラパラとめくり読んで行く

「おい、これのどこが面白いもんなんだよ、唯の歴史書じゃねえか」

「なに？最後のページをよく見ろ」

「あん？こうして始祖はこの地ハルケギニアに舞い降りしましたって……」

「これが何？」

「はあ……その次だ」

「この次にや、なんも書かれていないんですがねえ」

そう言いづらふらとジョゼフに次の白紙のページを見せつけるリユーガ

しかしジョゼフは、リユーガから本を引っ手繰るとその白紙のページを見つめ口を開く

「偽りの記録の中に真実を示す

我が名はブリエル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ……

ちゃんと書かれているではないか」

「……お前らにしか見えねえよその文は

あいにく俺はあんな様な伝説じゃないんでね」

「伝説？俺が伝説？……ああ、そう言えばそうだったな

つと言うか何故お前が知っている、まだシェフィールドの事は話していないだろう？」

ジョゼフが驚いたような表情でリユーガを見るが

リユーガが無言で額に指をさすと、ジョゼフは察し溜息をつく

「はあゝ・・・何とも面倒な・・・仕方がない読んでやるっ・・・」

・・・

「・・・と言う訳だ、どうだ？面白いだろう？」

「・・・笑えねえよ、っーかそれどこにあつたんだ？」

「これか？宝物庫で埃をかぶつておつたのだ」

「何でまたそんなもん見つけてきたんだよ」

「それが、息抜きにフラフラしておつたら丁度宝物庫が目に入つてな

その中で異様な存在感を放つこれを見つけ中を読んだ、と言つ感じだな」

そついいジヨゼフは手に持った本を指差す

リユーガはその姿を見つめ、呆れた表情になり

溜息を漏らし、言葉を発する

「とりあえず、それ、誰にも言つなよ」

「お前にしか言えぬさ、シェフィールドにも中は見せておらん」

「ならいい・・・そう言えば地下鉄完成していたよな？」

「何だ急に、もう試運転もしたし、後はお前待ちの状態だ」

「明日動かすぞ」

リユーガの急な発言にジョゼフは驚き声を上げる

「何を突然・・・ああ、そう言うことか

リユーガよ、やはりお前は頭が回るな、

記念の日でもなければ俺が向こうに行けぬから、そうであろう

「？」

「その通り

俺もこっちの仕事終わらせたら王宮に行くから先に帰っという

くれ

「ククク・・・楽しいことになりそうだな」

ジョゼフは笑いながらそう呟くと立ち上がり  
ドアノブを握る

「お前なあ……ちったあ危機感持てよ」

「感じているさ、それ以上に好奇心が刺激されているだけだ」

「さいですか」

「ではな、ラークを借りるぞ  
急過ぎるので一刻も早く戻らねばなるまい」

「好きにしな」

ジョゼフは片腕を上げ、部屋から立ち去ると  
リユーガはベットに横になり、天井を見上げる

「さて……面倒なことになってきたな……キャスター」

「あれ？あんた起きたの？」

心臓貫かれた割には早くない？」

リユーガが名前を呼ぶと、影からキャスターが顔だけだしリユーガに問いかける

「ちゃんと死んださ、三途の川の前で叩き返されたけどな  
それより、俺の領地の誰かの影覚えていないか？」

「適当に幾つか当たれば着くとは思うけど・・・なんで？」

「いや、流石にここまでブツ壊れたらギーシュー人じゃ直せんからな  
どうせ暇してるあいつ等ここに呼ぶ」

「酷い領主さまね、私が民なら暴動起こすわ」

「こいつ言つ時の為にあいつ等置いたんだから良いだよ」

「ここまでどうやって来させるつもり？」

「あいつらなら走れば2、3時間だろ？」



リユーガがキャスターの問いに平然と答えると  
キャスターは苦笑いし、リユーガに言葉を発する

「悪魔ねあんた」

「半分な」

「良い性格してるわね、ホント」

キャスターはそれだけ言い残すと影に潜って行く  
リユーガはキャスターが言ったことを確認すると  
横で包帯ぐるぐる巻きのサイトに一瞬だけ視線を向け  
立ち上がり、部屋を後にする

.....

アルビオン

忘却の森

森の奥深く、小さな家の周りを子供達が走り回っており  
それを優しげな視線で見つめる、帽子をかぶった女性がふと顔を

しかめる

「どうしたのお姉ちゃん？」

「え？ううん、何でもないので、そろそろご飯の準備するね  
何が食べたい？」

「えーっと・・・おいしいもの！！！」

「ふふ、分かったわ

あんまり遠くに行っちゃだめよ」

「うん！」

帽子をかぶった女性はそう言い家の中に入って行き  
扉を閉め、家の中に誰もいないことを確認すると  
小さく呟く

「・・・なんだったんだろ・・・今の歌・・・  
あの歌に似ていたけど・・・」



## 四十六話（後書き）

どうでしたか？

謎は深まるばかり

しかし次回一気に進展する予定

超展開・・になるのかな？

これも全て表現力の無い作者のせいです、どうもすみませんm)

— — ) m

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 四十七話（前書き）

・・・どうも駄文な作者です  
今回少し遅れたのにはわけがあります、言い訳がましいですが聞いてください  
実際この話は2日前には出来ていました、なのに2日も遅れた理由・  
・・・それは・・・

題名が思いつかなかった・・・orz  
ガチです、実話です、ノンフィクションです  
こんな情けない作者をお許してください  
では、どうぞ

## 四十七話

トリスティン魔法学院  
学院長室

先ほどまでの破壊音が嘘のように静まり返った学院

日も傾き始めた頃

オスマンは長い髭をいじりながら今回の被害報告の書類を見つめ  
百面相をしていた

「ふう・・・全く、どうしろと言っんじゃ・・・」

水、風塔半壊、土塔全壊、火塔消滅・・・

ここ本塔も半壊、それに風塔がこれでは授業は出来る状態では  
ない、と

辛うじて無事なのは生達の住む男子寮と女子寮のみ、か」

オスマンは山の様な書類を机に放り投げ机にゴンと額をぶつけ  
しばらく固まる、するとコンコンと扉をノックする音がオスマン  
の耳に入る

「おびおび」

「失礼します……元氣ないですね学院長」

「今壊れた場所をどうするか悩んでおる所よ……  
全く、壊すだけ壊して自分はさっさと眠りよって……まあ、  
死人が出てないだけましかの

それより何か用かの？ステイル君」

「そんな学院長にいいお知らせがあります」

「はよう言わんか、わしはこれから王宮まで飛ばねばならん……  
はあ」

クビかのお？クビになるじゃろうなあ……ブツブツ」

机に何度も頭をぶつけ、諦めたようにリピートし続けるオスマン  
そんなオスマンの肩にステイルは手を置き、言葉を発する

「外をご覧ください」

「なんじゃ、この年寄りに今一度壊れた学院を見せよう？」

「きつと外を見れば元氣が出ますから」

ステイルはオスマンの背後にある窓を開け、オスマンに窓の外を見るよう促す

「なんじゃ一体……どうせ見えるのは……綺麗な水の塔？」

オスマンが窓の外にちらりと視線を向けると、そこには先ほどまでポロポロであった

水の塔が、綺麗に直っている

オスマンは驚愕し、勢いよく立ちあがると窓から身を乗り出す

「……一体どういふことか？」

「それは……俺が説明してやるわ……だからリユーガ、何の前触れもなく現れるの止めようよ

正直心臓に悪い」

「こ、小僧！？お主何故起きていられる

お主重傷のはずじゃろ」

「あ？たかが胸に風穴開いたぐらいで寝てられるかっての」

「……お主に問うたわしが馬鹿じゃった……それで？あれはお



主がやったのか？」

オスマンは呆れつつも、窓の外を指さし  
リユーガに問いかける

「俺じゃねえ、俺んとこのボランティア精神の強い領民がやった  
のよ」

まあ、明日には綺麗さっぱり元道理に直るだろうから・・・  
お金の話をしようか、オスマン学院長」

「ぐぬう・・・じゃ、じゃが、そもそも、お主が学院をほぼ全壊さ  
せたんじゃないが!!」

「はあく？俺はどっかのアホがくだらねえ事で、怒らせ、キレた  
ルイズの使い魔を止めただけだぜ？」

あのまま放っておいたら、生徒達皆殺しになってたんだ  
逆に褒めてほしいな

それによお、こうなったそもその原因はお前ら教師の教育が  
悪いからだろ？

いい加減教えてやれよ、貴族は平民あつてのものだってことを」

リユーガの発言にオスマンは唸り、ふっと力を抜くと  
諦めたように言葉を返す

「わしらの教育が悪いと言われれば最早何も言葉は返せん、の  
幾らじゃ?」

「ざつとこんなもん」

リユーガは懐から一枚の紙を取り出しオスマンに手渡す  
オスマンはその紙に目を通して行き、目頭を押さえた

「むむ?・・・一・・・十・・・百・・・千・・・万?」

お主・・・ハーク公爵殿?桁をお間違えではないかの?」

「妥当な額だと思うが?」

「じゃ、じゃが、お主も多少は壊したじゃろ?  
少しぐらい・・・せめて半分にならんかの?」

「ならんな」

リユーガの言葉にガクツと肩を落とす、机に額をぶつけるオスマン  
するとオスマンの手からひらひらと紙が宙を舞い  
それをステイルが掴み取ると、ステイルは紙に書かれている額を

目にし

呆れたようにリユーガに言葉を発する

「リユーガ・・・幾らなんでも・・・多すぎじゃないか？」

「何でだ？妥当だろ、この学院無駄に広いんだから」

「だからって・・・4万エキュ・・・そこらの貴族が聞いたら卒倒する額だよ」

「そうか？俺んところなら一括払いできる額なんだが・・・」

「どこもリユーガの領地みたいに肥ちやあいないんだからさ・・・大体リユーガの領地は・・・」おつとそこまでだ、それ以上は禁則事項だぜ」

あ・・・す、すまない」

「まあ、別に金に困っちゃいないから・・・あ、良いこと思いついた、

おい爺、代案を用意してやるつか？」

「金以外ならば何でもやるうぞ！なんならわしを差しだしても良い！・・・！」

「死にかけの爺なんざいるか、代案つっても金は金だ」

リユーガの言葉に再度机に額をぶつけるオスマン

「こんな爺で遊んで面白いか？・・・いつそ殺すがよいわ・・・」

「安心しろ、別にお前から取るうってわけじゃない  
額も4万飛んでそうだな・・・5000エキユーぐらいでいい」

「なぬ！？ほ、本当によいのか？・・・しかし誰から取ると言う  
のじゃ？」

ミス・ヴァリエールからか？」

オスマンの問いかけにリユーガは口を吊り上げ、悪魔のように笑い  
そして口を開く

.....

どーも、今をときめく若き風、リユーガです

.....自分でいってなんだが・・・気持ち悪いな・・・

まあ、冗談はこの辺で良いだろう

そうだな、とりあえずお前らにもこいつらを紹介しなきゃならんな  
まあ見て分かると思うが・・・なに？文章だから見えん？気合い  
だ気合い、自分を信じる

それで今俺の目の前に居るこの老若男女の集団ざつと五十人、イ  
ケメン揃いで腹が立つ集団だ

・・・とまあ、そんなことはさて置き、こいつ等が何なのか分か  
るかな？

正解した人には飴ちゃんを上げよう・・・もう良いかな？・・・  
よし、良いね

それでは答え合わせと行きまっしょい！！！！

「さて、私の領土に居座り、畑ばかり耕しているお前ら

今日来てもらったのは他にもない・・・殺し合いをs・・・ブベ  
!?!」

「お前は何を命じようとするのだ

まったく、すまんこのような場所に呼びつけて

「主の命ならば何処までも行きますよ」

「お前らの主になった覚えはないが・・・まあ、良いか

すまんがこの場所を直してくれないか？この馬鹿がここまで破  
壊してしまっただからな」

「我等が貴方から受けた恩に比べればこの程度・・・皆、ただちに取りかかれ!!」

セツタの前で膝をつく男がそう指示を飛ばすと、集団は学院の中に散らばって行く

「では、私も・・・明日には全て元道理にして見せますよ」

「無理はするなよ・・・で？お前はいつまで埋まっているのだ？」

セツタは自分の足元で生首状態になるリユーガに声をかけるとリユーガはセツタを睨み言葉を発する

「テメエ・・・なんで俺がこんな愉快な格好で埋まってるんだよ・・・」

「さながら落武者だな、どれ、頭のとっぺんを剃ってやるっ」

「上等だコラ、死にたいって言うまで殴ってやんよ」

ドンツとリユーガは勢いよく地面から飛び出すと、セツタに向けて拳を放ち

拳は唸りを上げ、セツタの腹へとめり込む

「・・・はっ、なんだそれは」

「・・・チィ！止めだ止め、今じゃどう足掻いても勝てねえわ」

「手負いの虎を狩ったところで何の自慢にもならんな・・・それよりリユーガ

何故ここにラーク以外の7魔がいるのだ？」

「ああ、紹介すんの忘れてたわ、おい、キャスター」

「なぐにぐ、私もう寝たいんだけ・・・ど？」

「何だ闇蛇まで居たのか、向こうで喧嘩しておった地狼と炎魚だけかと思っただが・・・」

「あの子たちまた喧嘩してたの？仲悪いわね」

それよりマスター、お腹が減ったわ、右足食べていい？」

「自分の体食ってタコみたいに循環してるボケ」

物欲しそうな表情で舌を出すキャスターに袋を投げつけるとキャスターは袋をつまみ

影の中に帰って行ってしまふ

「とまあ、ご覧の通り住み着かれたわけですよ」

「難儀だな、それよりマスターとは？」

闇蛇も私達のように契約するようになったのか？」

「いんや、こいつはおれの使い魔だ

地狼と炎魚も同様にな」

767

「ん？使い魔？・・ああ、この世界の制度みたいなものだったか？  
しかしお前の周りにこつても7魔が集うとは、な！」

「勘弁してくれ、実際見たくもなかったんだから、よ！」

2人は何故か飛来してきた瓦礫を打ち砕き、瓦礫の飛んできた方向を見もせず

尚も会話を進める

「それにしても、なんでお前主なんて、呼ばれてん、だ！」



「あー、あの後エルフ達が住まうお前の領地に行つただろ？  
その時は夜だったからよかつたんだが・・・おつと!？  
彼奴ら太陽の光が当たると死ぬようだから、不憫に思えてな  
体の水を弄って直したら、いつの間にか主と呼ばれるようにな  
つて、な!」

「へへ、あの後全くあそこに行つてねえからしらんかつたわ  
まあ、上手く人間やらエルフやら他の亜人とき合ってるって  
聞いたから

あんま心配してねえけど・・・ふん!  
あー、鬱陶しいな・・・いい加減にしないと怒るぞユーリ!」

リユーガは飛来した一際大きい瓦礫を刀で真つ二つに切り裂くと  
瓦礫の飛んでくる方向へ叫ぶ  
すると先ほどまで絶え間なく投げつけられていた瓦礫がピタリと  
止まる

「流石、一年親をしていただけはあるな、こつも見事に我が主を  
御するとは」

「何が悲しくて、この年で・・・精神的には問題ないが・・・  
つーかお前が親になるべきだろ？  
それを放つたらかしにしてたから、仕方がなく俺やイザベラが  
ユーリの教育してたつてのに・・・」

まあ、イザベラは喜んでいたが・・・  
「つーか何でプチ・トロワに住むこと断ったんだ？」

「私はあのようならびやかな場所は好かん、もっとひっそりとした場所が良いのだ」

まあ、そう言う意味ではお前がくれた住処は気に行っているが  
な」

「いや、あんな場所に住めるのお前だけだから・・・  
つと、そろそろ爺ん所行くか、今頃頭抱えてるだろうし」

「そうか、では私は帰るとしよう」

セツタはそのまま足を軽く曲げ飛び上がるうとしたのだが  
ガシツとリユーガに肩を掴まる

「待てや、ユーリ連れて帰れ」

「うん？今日はお前のところで寝ると言っておったから別に連れ  
帰らなくても良いだろ？」

「冗談言つな、明日俺は早いだから子守りなんてしてられん」

「そう言いつつも、なんだかんだでいつも面倒見ているではないか  
今回もその調子で頼む、ではな」

「あ、ちょ、待てや!」

セツタはリユーガの手を振りほどくと思いつきり跳躍し  
あつという間に豆粒ほどの大きさになってしまふ  
リユーガはセツタの後ろ姿を睨みつけ、呟く

「・・・たく・・・俺は知らんからな・・・」

リユーガはそう呟くと、本塔に進んで行った  
この後リユーガがユーリの面倒を見たのは言うまでもないが

.....

トリスティン王国

王都トリスタリア、王宮宝物庫

数々の煌びやかな宝石、マジックアイテム魔道具が納められている

ここ、トリスティン王宮宝物庫

しかし、そんな目を覆いたくなるような光を放つ財宝の中に

一冊の古ぼけた書物が、宝物庫の中央に派手な装飾によって飾られている

それは始祖の祈祷書、始祖ブリミルが記述したと言う古書なのだが常人には白紙を束ねた冊子にしか見えない、しかし

宝物庫の中央で鎮座していた始祖の祈祷書は風もないのにペラペラと捲れ

後ろから数えて5つ目のページで止まると

始祖の祈祷書から幾つもの光輝く文字が飛び出し、1つの文になる

『真なる虚無の一端は目覚めた』

—— 我が末裔よ、始祖の愚行を繰り返してはならぬ ——

文字はそう繋がりその場で尚も光り輝く

まるでこの文を読めと言わんばかりに

だが、ここは普段誰も立ち入らないような王宮の奥

文字は次第に光を失っていく

しかし文字は1つの文字に光を集める、すると1つ、2つと文字

達は力なく始祖の祈祷書の中に戻って行き

始祖の祈祷書は静かに閉じられた

残った1つの文字は徐々にその輝きを失いつつも

宝物庫の頑丈な扉をすり抜け、飛び去って行く

トリステイン魔法学院へと

## 四十七話（後書き）

どうして本文以外は駄目なんだ・・・

まあ本文もグダグダの駄文なんですがね

さて、今回如何でしたでしょうか？

正直伏線ばら撒き過ぎて回収できるか不安でしょうがない駄文な作者です

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 四十八話（前書き）

どうも1週間申し訳ありませんでした

そしてお久しぶりです、駄文な作者です

一応活動報告は書いておいたんですが・・・誰も見てないようなので消しました

これから、日にちがあくようなことがあれば後書きに書いておきます

それで、今回少し書き方を変えてみました

こっちの方が見やすい、や、前の方が良かったなど、どうかご指摘をください

それでは・・・どうぞ

## 四十八話

sideステイル

AM4:00

まだ日も出ていなく、少々薄暗い中  
ステイルは目を覚まし、ベットから身を起こす

「ふあゝ・・・んー・・・」

真つ赤なストレートの髪を揺らしながら  
手首、肘、首など寝起きで固まった関節を鳴らすと  
ステイルは立ち上がり寝巻から動きやすい服装へと着替え  
部屋を出る、すると真つ先に良く知った顔の2人を見つけステイ  
ルは声をかけた

「・・・あれ？リユーガ、珍しいねこんな朝早くに君が起きてい  
るなんて」

「ん？ああ、ユーリを便所に連れってったところだ

っておい、立ちながら寝るな」

「うー?・・・くー・・・」

「・・・てな訳で俺はもうひと眠りだ・・・」

リユーガは眠そうな目をしながら、頭をガクガクと揺らすユーリを抱きかかえると

ステイルの部屋の中に入って行く、ステイルはそんな姿を見つめ  
つつ

小さく言葉を漏らす

「昨日とは大違いだね・・・そうやって親やってればいいものを・・・」

ステイルは軽く微笑みながらそう呟くと  
頭掻きつつ、外へと足を進めた

・・・



ステイルは寮塔から外に出ると火塔と風塔の間にあるヴェストリの広場へと行き

入念にストレッチをしていると

風塔の方から身長2メートル程の大男が辺りをキョロキョロと見渡しながら

歩いているのを見つけ、ステイルはストレッチをしつつ挨拶をする

「あ、おはようございますコアさん」

ステイルが大男に声をかけると

大男は今気付いたのか、ステイルへと目を向け返事を返す

「ん？・・・おお、久しいな赤毛の小僧

元気でやっておったか？」

の・・・このがたいの良いと言うか、最早人間を辞めているような体つき

まあ、人間じゃなくて吸血鬼なんだけども

この人はコアさん、吸血鬼のリーダーの様な人で

優れた魔法使い・・・いや、優れた行使手って言うのかな？

そんな人です

「ええ・・・随分眠たそうですね」

「まあ、な、主の加護を得てから人間と同じ時を生きれるようになったものの

・  
「奈何せん、今までが闇に生きておった故、朝は未だになれぬ・  
」

「徐々に馴らしていけばいいと思いますよ、それで皆さんわ？  
姿が見えんませんが・」

「ああ、他の者達は先に帰ったよ  
私は最後の点検中だ・・おっと、あそこ欠けておるな」

コアは風塔の一部が欠けているのを見つけ  
手をかざすと、欠けている部分が逆再生の様に直って行く

うわっ・・・この距離で・・しかも新品の様に綺麗になってる

「元々ボロかったんですからあまり気を回さなくとも・」

「いや、主が我等に命じたことだ、出来る限りのことをするのが  
従者の務め・」

ま、お前も主を持てば分かるようになるさ・・・ではな、私は  
もう一度全体を見直したら帰るよ」

コアはステイルに背を向けつつ手を振り  
土の塔へと足を進めていく

真面目・・・いや、律儀って言うべきなのかな？

「まあ、僕には真似できないな・・・  
さて、と、今日は山の方まで行ってみようかな・・・」

ステイルはコアの大きな後ろ姿を眺めつつ逆方向に走りだした

・・・・・・・・・・・・・・・・

sideギースユ

AM5:00

男子寮、一室

ベットが1つと、本棚、机、小さなテーブル、椅子の順に並んだ  
質素な部屋で、1人黙々と腕を動かし続けるギースユの姿が

「1930・・・1931・・・1932・・・」

一定のリズムで数を数えながら両手に持ったバーベルを交互に動かす続ける

そしてその数が2000に到達すると、ギーシュは立ち上がりフLOORリングの床に寝転がると  
今度は足を固定し、腹筋を鍛え始める

最初に比べれば僕も随分できるようになってきたな・・・  
しかし、ステイルとメニューが違うみたいだけどこれでいいのかな？

「189・・・190・・・191・・・あれ？今何回だった・・・  
まあいいや  
1・・・2・・・」

若干数を間違えつつも、ギーシュは淡々と体を曲げては伸ばしを繰り返す

ペースが落ちることなくギーシュは一定の数に達すると立ち上がり、自分の腹筋を眺める

「・・・ふんッ!」

おおー、ようやく6つに割れるようになった・・・  
腕も・・・結構太くなったな・・・

ギーシュは自分の体に力を入れて行き

盛り上がる筋肉を眺めニヤニヤし始める

1人筋肉観賞会を楽しむこと数十分、ギーシュは不意に動きを止め立ちつくすと

ポツリと言葉を漏らす

「……………汗流してこよ」

何をやっているんだろうな…僕は…

重い足取りでギーシュは部屋の扉を開き

上半身裸のまま通路を歩き

男子寮のすぐ横にあるアウストリの広場に出て左側に付けられている

ライオンの口から絶え間なく水が流れる、水汲み場を目指し足を進めた

いつも思うけど、どうしてあそこは水が溢れないんだろっか・  
あんなに小さな受け皿に絶え間なく水が流れていると言うのに

ギーシュはそんなことを考えつつ

タオル片手に水汲み場へとたどり着くとそこには先客が居た

タオルで頭をガシガシと拭いているので顔は見えないが

ギーシュにとっては見慣れた光景なので何もためらわずギーシュ

は声をかける

「今日は早いじゃないかステイル」

「ん？そう言うつギーシュはちょっと遅めじゃないか？」

「途中数を数え間違えてね

今日はどこまで行ったんだい？」

はー・・・水が冷たくて気持ちいい・・・

ギーシュはステイルにそう問いかけると

横に備え付けられている桶に水を汲み、熱を持った体を冷まして行く

「ギーシュの言ってた湖までね

思ったより早く帰ってこられたよ」

「え？あそこまで行ったのかい？」

・・・日に日に距離が延びていやしないかステイル  
初めの頃は林で折り返してたくせに」

「まあ、一年もやってればこれぐらいわね・・・  
そう言うギーシュだって初めの頃は腹割れてなかったじゃない  
か」

「そうだったけ？」

もう昔の体なんて覚えていないな

見よ！この6つに割れた腹筋を！！」

ギーシュはそう言い自分の体をステイルに見せつけると  
ステイルは酷く冷めた目で返事を返す

「男の体なんて見たって嬉しくないよ・・・

第一僕は最初からそれぐらいだったし」

「だったら僕は最初から湖まで行ってこれたぜ」

「それを言うならry・・・」

「君なんかry・・・」

あーだこーだとくだらない言い争いを始めた2人は  
過去の自分の不甲斐なさに軽くダメージを負いつつも  
徐々にヒートアップして行き

2人は同じタイミングで立ちあがり  
言葉を放つ

「どうだ？ここらでどっちが強いか確かめてみるか？貧弱<sup>モヤシ</sup>」

「上等だ、結果はもう見えているようなものだがね、この鈍足<sup>カメ</sup>が」

2人は睨み合いながら互いに貶すと

何処からか杖を取り出し、呪文を唱えようと口を開こうとした瞬間  
手をたたく音が聞こえ、音のする方を見ると

呆れ顔で2人の居る場所へと手を叩きつつ歩いてくる大男コアが  
2人に向かって口を開く

「小僧ども、折角直した場所をまた壊す気が  
やるんなら・・・」

コアはその図太い腕で2人の手を掴み  
思いっきり学院の外へと2人をぶん投げる

「外でやってこい！！」

「うわっ！？」



「おわッ!？」

ピューと2人は空中で何回転もしながら

学院の塀の外へと軽々と放られるも

フライで体を浮かせ空中で体勢を整えると、辺りに遮蔽物の無い原っぱへと着地する

「ツと!・・・無茶するなあコアさんは・・・さてやろうかギーシュ  
幾ら何もないからって機功魔神アスラマキナは使うなよ、地形が変わる  
まあ、ギーシュが使いたいわって言うなら使っても良いけどね」

「冗談、ステイルこそ使いたいわなら使えば？」

君の鈍のろ間な魔法なんか僕にはあたりやしないんだから

大きさをカーバーしなよ」

「言うじゃないか、大した威力もないくせに・・・」

ステイルはポケットからエルフ特性の指のあいたグローブを取り  
付けると

右腕に真つ赤な炎で構築された剣を出現させる

ギーシュも負けじと、杖を振るい

地面に手を付けると、奇妙な形をした一振りの剣を生み出し、そ  
れを構える

互いに武器を構えると、2人は喋るのを止め

辺りに風の音だけが虚しく2人の耳に聞こえ  
風がやむとドンツ！と力強く大地を蹴ると音が響くと同時に  
2人はその場から消えるように前へと飛び出す

「ギーシューうっうっうっうっうっうっ！！」

「ステイルうっうっうっうっうっうっ！！」

ガツガツガツ！！

2人の手の先が消え

鈍い音を何度も響かせながら互いの武器が重なり合うと

先に身を引いたのはギーシュの方だった

ギーシュはステイルの剣に押され気味になるとすぐさま後方に飛  
び上がり

奇妙うな形の剣を下段で構える

クソツ！やっぱ剣術じゃ勝てないな・・・だったら知恵で勝てば  
いいじゃない！

見せてあげよう、僕の新兵器・・・アースソードの力を！！

「これでも食らえ！！」

ギーシュは地面を抉りながら、剣を打ち上げるように振るうと  
剣が抉った土を吸収し、枝の様に何本も分かれ、のびると、不規則な軌道を描きながらステイルへと迫る

フハハハ！！幾らなんでもこの軌道は読めまい！

「……この……」

ステイルは針の様に細長くのびつつ様々な方向から迫る剣を見て  
一瞬驚くも

炎剣を脇に構え、振るう

「同じことを考えるな！！！！」

「なッ！？」

ステイルが苛立ち交じりに叫びながら炎剣を振るうと  
ギーシュの剣から伸びた土の枝の様に、炎剣からも、炎の枝が何本も放たれ

ドドドドッ！と音を立て、土の枝を相殺して行く

「す、ステイル！技をパクルんじゃない！！」

「冗談ぬかせ！これは僕が先に考えたんだよ！！ファイヤーボール！」

「この・・・アースバレット！」

ステイルが火球を放つとギーシュはそれを土の弾丸で相殺

一瞬だけ互いに互いの姿を見失ったかと思うと

すぐさま火の柱が放たれ、ギーシュが土の壁で防ぐ

お返しと言わんばかりにギーシュが簡易なゴーレム三体ほど突っ込ませるが

炎の鞭に縛られゴーレムは動きを止める

「焼き切れる！！・・・ハッ、ゴーレムなんて無駄無駄！」

「ならば・・・ワルキューレ！！！」

「速い！？・・・チィ、ファイヤーウォール！！！」

「ほらほら、まだまだ何体でも出せるさー！」

ステイルはギーシユの放ったワルキューレの素早い動きに着いて行けず

周りに炎の壁を張り巡らせるが

ワルキューレは軽々と炎の壁を飛び越え、ステイルへと迫る

「相変わらずねちっこい……男なら！テメエで！かかってこい！」

馬鹿言つんじゃないよ、僕はステイルほど接近戦向けじゃないんだからさ

「接近戦が得意な奴に接近背を挑むわけないだろうが！！」

「クソが！遠距離だと部が悪いな……」

ステイルはワルキューレを纏めて倒そうにも

炎の鞭では避けられてしまうので、仕方がなく一体ずつ炎剣で焼き払って行くのだが

一向に数が減らないため

ワルキューレを倒すのを止め、攻撃を避けつつ呪文を唱える

「AshToAsh灰は灰に……塵は塵に《DustToDust》……」

「撃たせてたまるか!!」

ステイルはワルキューレの突撃を避けつつ両手に小さな火を灯らせる

ギーシュはステイルの呪文が聞こえると焦ったように土の弾丸をステイルに放つ

「危なッ!・・・吸血殺suquammishの・・・」

「何で詠唱中だけ避けるのうまいんだよ! ってヤバい!アースウォール!」

「Bloodkyood紅十字!ファイヤークロス!!!!」

「来るなあああああ!!」

ステイルの放った炎の十字架は周りに居たワルキューレを全て燃やしつくし

ギーシュの張ったアースウォールへとぶつかる

ファイヤークロスは、易々と土の壁を突き破るのだが

ギーシュが何重にもアースウォールを張ったせいか、ギーシュに届く頃には

もう勢いがなく、軽くギーシュの前で弾ける程度の威力となって

しまった

「ふう〜・・・危ない危ない・・・っっておわッ!？」

「このまま畳み掛けてやらあ!！」

ギーシュはファイヤークロスを辛うじて止め  
次に目の前まで迫ってきたステイルの拳を転がるように回避し距離を取るうとしたが  
ステイルはそれを許さず、ギーシュにへばりつき、何度もこぶしを振るう

「おらおらおらおらおらおらおらおら!！」

「冗談、じゃ・・・ないよ! ホントに!！」

「ちょこまかと・・・」

ステイルの怒涛のラッシュを紙一重で避けつつ  
ギーシュはなんとか距離を取ろうとするも一定の距離からステイルから離れられず  
徐々に体力だけが奪われていく

やばいな……このままじゃ、ジリ貧だ……  
だが……あえて言おう、当たらなければどう言っことは……

「オブツ!?!」

「っしやおらぁ!?!」

「ちょ、ま……」のっ!?!」

「ガッ!?!」

ステイルのショートアッパーが腹に突き刺さり、ギーシュの体  
がよろけると

ステイルはすかさず2撃目を入れようとしたところで  
ギーシュのカウンター気味の右ストレートがステイルの頬を捉える  
そのまま2人の殴り合いに発展しそうだったが  
ギーシュは膝に来たのか数歩後ずさり  
ステイルも顎にかすり脳が揺れたか同様に数歩下がる

「お?つとと……」



「あらっ・・・ちよ・・・つとと」

よろけつつもなんとか体制を立て直した2人は一瞬だけ視線を合  
わせ

互いに右腕に魔法を纏わせると、右腕を振りかぶる

「ゴツト・・・」

「サンド・・・」

ステイルは手のひらを真っ赤な炎で輝かせ、ギーシュは手のひら  
に小さな砂塵を纏わせ

腕を振るうと、互いの右腕がゴツつと鈍い音を響かせ

最初に振るった軌道からズレ、互いの額へと吸い込まれる様に見  
えた

しかし

「よつとっ？」

「「はっ？」」

「・・・おぼせてっ？」

2人は振るつた右腕をピタリと止める  
突如現れたユーリが2人の肩に乗っかり  
満面の笑みで2人を見ているからだ

「どーん！」

ユーリはふわつと2人の肩を踏み台に浮かび上がると  
メキヨツと2人の顔に同時に足が突き刺さり  
2人はそのまま仰向けに倒れる

「うごおおおおお！！鼻があああああ！！！！」

「ちよ、歯がかけた！！！！」

「うゆ？もう終わり？」

2人は顔押さえながらゴロゴロと地面を転がり  
そう叫ぶと、ユーリはつまらなそうな表情で2人に問いかける  
すると3人が大きな影に包まれ上空を見ると  
そこにはゆつくりと地面に降りてくるラークの姿が  
そして、そんなラークの背中から1人の影が飛び降り  
フライを使うことなく地面に着地すると

ユーリに歩み寄り、右腕を高く振り上げる

「いきなり飛び降りるんじゃない!!」

「にゃ!?!?・・・うう・・・痛い?」

「全く・・・あ?お前ら何やってんの?  
んなところで寝てると風邪ひくぞ」

飛び降りユーリに拳骨を落としたリユーガは  
地面をのたうち回る2人に問いかけると  
2人は勢いよく立ちあがり、リユーガに向かって言葉を発する

「「ふあみふんふあよ!!!ふえつふあくいいふおころふあふあ  
のに」」

「・・・人語でOK、何言ってるのかさっぱり分からん  
・・・ほれ行くぞ、ちよつと寝過ぎた」

「・・・痛い?遊びたい?」

「痛くなるように殴ったんだから当たり前、駄々こねないの」

そう言いリユーガはユーリを猫の様に摘み上げ  
肩に担ぐと、ラークの元へと歩いて行く  
2人はそんなリユーガを見つめ互いに視線を合わせると  
魔法を纏った右腕を振り上げる

「ちよつと待てこらあああああああ！！」

ブオツと2人の右腕から炎と砂塵がリユーガに向けて放たれ  
リユーガの姿は炎柱と砂嵐に包まれる

「……邪魔するだけで帰ろうなんてそうは問屋がおろさんわ！  
！」

「折角僕が勝つところだったのに！良いところで邪魔して！！」

「ちよつと待てや、ギーシュのへなちよこ魔法で僕が倒れるとで  
も？」

「逆だろ？今の僕の魔法の威力見たのか？」

「ハッ！ステイルこそ僕の魔法の威力見てないのかい？」

大体あんなしょぼくれた火柱じゃ傷一つつかないさ！」

「あー？それを言うならギーシュの魔法なんか虫も殺せないじゃいか！」

2人はまたも、口論を始めギャーギャーと騒ぎたてるが

リユーガのいた場所から2人の放った魔法をかき消すように

ドンツと轟音をと轟かせ黒い炎柱が立ち上がると

2人はピタツと固まり、顔がみるみる青ざめて行くと

炎柱の中からユーリを肩に担いだ無傷のリユーガが現れる

「全く、感情を処理できん人類は、ゴミだと教えたはずだがな

一時の感情に身を任せ

俺に魔法を放つとは、貴様等、余程命がいらんと見える」

2人の前に魔王リユーガが現れた

ステイルは生贄ギーシュを差し出し逃げ出した

「・・・ダツ！！」

「あ！汚いぞステイル！！僕を犠牲にするつもりか！！

って速！？ステイル足速！？」

ステイルはギーシュを蹴飛ばすや、一目散に駆けだして行き  
ギーシュが振り返る頃にはもう豆粒ほどの大きさとなっていた

「ふむ、咄嗟に生贄を置いて逃げ出すとはなかなかいい判断だ  
しかし、俺にそれは通じん」

「おー・・・ボワボワ速ーい？」

あ、あれ、リユーガは？・・・って嘘お！？

リユーガはそう呟くと、その場から消える

ギーシュは突如消えたリユーガを探そうとキョロキョロと辺りを  
見渡すと

今だ走り続けていたステイルの前にリユーガが現れ  
ステイルを持ち上げて居る

・・・ステイル、君の犠牲は忘れないよ

さて僕は今の内に・・・

「・・・なあにこれえ」

ギーシュは遠くでステイルに教育しているリユーガを眺めステイ

ルに敬礼し

こつそり逃げ出そうと前を向くと、ギーシュは気づく  
自分が黒炎の槍に囲まれていることを

待て・・・僕よ冷静クールになれ、所詮地に突き刺さっている爆弾だ  
刺激しなければ・・・

「・・・ふつ、僕を舐めないでいただきたいな  
こんなもの穴を掘れば・・・」

そう考えていた時期が僕にもありました

ギーシュは穴を掘ろうと、呪文を唱え  
腕を振るうが何も起きない

「・・・杖が・・・ない・・・だと」

「ギーシュ、杖はいつも気にかけていると言ったはずなのだが・・・

どうやら貴様も教育が必要の様だな

この火の玉小僧の様に」

リユーガはゆっくりとギーシュの居る方まで歩み寄ると

ずるずる引きづつていたステイルをギーシュの目の前に投げ捨てる  
ステイルは頭に大きなこぶを作り  
白目をむいていることから、どうやら気絶しているだけの様だ

「・・・救いは・・・無いのでしょうかリユーガ様」

「救いならあるさ

命を賭ける。あるいはこの身に届くかも知れん」

「・・・ふっ・・・だらっしゃああああああ!!」

ギーシュの渾身の右ストレート!

しかしリユーガには効果がないようだ

リユーガはそのまま反撃してきた

普通のデコピン!

ギーシュは衝撃により地面をバウンドしながら意識が途絶える  
パーティが全滅した

リユーガは倒れ伏せる2人を見下ろし  
頭を掻きつつ言葉を漏らす

「全く、一体なんだッてんだ

いきなり攻撃してきやがって・・・」



「・・・ビューン・・・大丈夫？」

「んー？・・・アバラが何本か逝っただけだ

ステイルと言いギーシュと言い

せいぜい筋トレ程度しか真面目に教えていないんだが・・・

こりゃ・・・そろそろかねえ」

リユーガはそう言つと懐から文字の書かれた紙を取り出し

2文ほど文字を書き加えると

横たわるステイルに紙を握らせ、そのまま2人を置き去りに

リユーガはユーリを抱えつつラークの背に乗り、飛び去って行った

・・・

ロマリア国土

上空

ジュリオは竜に跨り

首都へと空を進んでいたのだが、ジュリオの顔は何故か険しい

「あ……」

「……」

「いや、だから……急に現れて僕を……何処に連れて行くのかな？」

「……」

「……あの……」……「……はい、ナンデモナイデス」

はあく……相変わらずこの人達はシュペル殿以外喋ろうともしない……

しかしこの鮮やかな色の竜……こんな色をした竜を僕は見たことがない。

それにどうしてヴァインダールヴの能力が……

「貴方、動物と話せるって本当？」

「ッ!？」

「喋るな」

「・・・良いじゃない少しくらい、大体あんた等、私達を存外に扱  
い過ぎよ」

「いい加減にしないと喰い殺すわよ？」

「・・・」

ジュリオは黒フードが口を開いた事にも驚いたが  
何より、自分の乗っている竜が喋ったことに驚きポカンと口を開  
ける

「お、驚いた・・・まさか韻竜？・・・どこかで生き残って居る  
とは思っていたけど・・・」

「はあ？なによ韻竜って、私は・・・って痛い痛い！  
あんた何してんのよ！！」

「いい加減にしろ」

「へーへー分かりましたよ」

黒フードが殺気を込めながら竜の背中に魔法を放つと  
それつきり竜は口を開かなくなってしまうた  
ジュリオはそんな竜を興味深そうに見つめ思いふけていると  
不意にジュリオの目の前に影が現れる

「…………おわッ!？」

「…………」

「…………」

「い、一体何処から……」

突如、空高くを飛んでいたはずの竜へ  
小柄な黒フードが現れると、最初に居た黒フードと軽く視線を合  
わせ

黒フードは手を前に突き出すと、高い声がジュリオの耳に響く

「…………腐れ」

「…………何を?」

ジュリオは呟いた黒フードに問いかけるが、黒フードは問いかけに応じず

竜の背中をトントンと軽くたたくと竜は空高くからものすごい勢いで急降下する

「うわっ!?!」

「……」

「……」

急降下し、ジュリオは強烈な風を感じると目をつむってしまふ

普段竜に乗り慣れている彼が目をつむるほどの強風にもかかわらず

黒フードは依然と前を向き続ける

やがて、竜は降下を止め風がおさまると、ジュリオは眼を開く

「ここは……パラス?…しかし、これは一体……」

何をやっただんですか?」

「……」

「……」

ジュリオが周りに見える光景について黒フードに問いかけるも  
黒フードは答えない

パラス・・・に違いわない・・・しかし

何故誰も僕達を見ない？それに・・・直ぐ近くをこれだけの大きさ  
の竜が横切れば風圧で

人なんか飛んでいくと言うのに・・・

「・・・あ、もしかして教皇様が呼んでいるのかい？」

「・・・」

ジュリオは思ったことを黒フードに問いかけると  
黒フードはほんの少しだけ首を上下に動かす

「はあ・・・それならそうと言ってくれれば・・・行き成り手  
を引いて行くんだから

これ、置き忘れちゃったじゃないか・・・って・・・え？」

「・・・」

ジュリオが手に持ったモノを眺めていると  
黒フードに軽々と持ち上げられ、そのまま黒フードは投球フォー  
ムをとる

「ちょ……ま、ま……」

「……ぬん!」

「おわあああああ!」

ジュリオはそのまま黒フードに思いっきり投げられ  
そのまま執務室の窓から部屋へと飛び込むと  
壁にぶつかることもなく、部屋に居シユペルに受け止められる

「はあ……はあ……」

「申し訳ない、ここにあの竜を近づけさせる事が出来ない故」

「こ、これからは……もう少し優しくお願いいたしますよ……  
シユペル殿

それより、僕は今日非番のはずでは？ 教皇様」

「・・・ジュリオ・・・貴方右腕に異変を感じませんでしたか？」

「え？・・・特に何もなかったかと」

「・・・そう・・・ですか」

実は先ほど、始祖の円鏡におかしなものが映りましてね  
結局それが何なのか分かりませんでした・・・

その後私は嫌なものを感じまして・・・兄弟を覗いてみたら

「

そう呟きヴィトリーオはジュリオに1枚の魔法紙を手渡す

「これは・・・ガンダールヴ？」

えっと・・・僕の目が悪くなっていないのなら・・・

彼がこの校舎を切断した様に見えるのですけど・・・」

魔法紙に映っているのは、刀を振りぬいた、血だらけの少年と  
真つ二つに切断された校舎

「そうです、私も見たときには・・・正直自分の目を疑いましたよ

手に持った剣から光る斬撃を放つ・・・まるで・・・2代目、ガ  
ンダールヴそのものだ」



「2代目？・・・2代目、ガンダールヴとは？」

「・・・2代目、ガンダールヴ

始祖ブリミルの娘、ブリエルの使い魔、数々の武功を立てたガンダールヴの中で

最強と言われたガンダールヴです

名は印されていますでしたが、光剣の異名を持ち

彼の一振りには山を消し、大地を2つに切り裂いた、と

今期8代目が振るったこの光は伝承に記されていた光剣そのものです

威力は・・・伝承どおりではないようですがね」

山を消す？・・・大地を割く・・・って、そんな馬鹿なことが・・・

「そんな・・・では、8代目は光剣の再来だとでも？」

「・・・そうならば、8代目は何としても此方が抑えなければなりません

そしてもう一つ・・・私は信じられないものを見ました

その光剣を振るう8代目と互角に渡り合う亜人を」

そう言いヴィトリーオはもう1枚、魔法紙をジュリオに手渡す  
そこには、赤黒い鱗におおわれ、2対の羽根をもつ、一匹の亜人

「・・・亜人・・・ですか？」

「僕はこんな亜人を見たことがないのですが」

「しかし、そのような人間が居るとでも？」

「私が兄弟を覗いた時にはもうその亜人が居て

8代目と戦いを繰り広げていました・・・そして8代目は亜人に打ち勝ち

「亜人に剣を突き刺したところで・・・」

「円鏡に黒い霧の様な物がかかり何も見えなくなってしまうました」

「・・・もう、調査隊は向かわせましたか？」

「ええ、彼等の1人に頼みました」

「明日には帰ってこれるとのことです」

「ヴィトリーオはそう言葉を言い終えると

「椅子に深く座り直すと溜息をつく」

「今期は・・・波乱の年となりそうですね」

「担い手が揃うのは確定していますし、他にもガリアの急激な成長光剣の再来と思わしき8代目、そして・・・あの予言・・・」

「あれは間違いなく、聖地・・・しかし、今だわからない」

「あの黒い影が・・・」

「……教皇様、今は……」

「どうやって今期のガンダールヴを抑えるかだけをお考えになつては？」

「……そうですね、予言はあくまで後の数年を差しています  
今は出来る事をしっかりとこなして行きましょうか……  
まずは、ガリアのハーク領から……」

「ヴィトリーオはジュリオの言葉で立ち上がると  
机の上に無造作に置かれた書類をかき集めて行く  
ジュリオはそんなヴィトリーオを見ると  
無言でゆっくりと部屋を後にする」

「さて……僕も色々動けるうちに動いておこうかな……  
まずは……」

「すみません、シユペル殿、一つお聞きしたいことが」

「む？なんだ？」

「僕が乗ってきた竜なのですが……」



## 四十八話（後書き）

とりあえず、ここから原作の話がずいずい進んで行きます  
少し無理やり気味になるやもしれませんが・・・どうかご了承を  
それと書き方どうでしたか？適度なところで視点人物の心理描写的  
なものを書いてみたんですが・・・見にくいでしょうか？

どうかそこのところ少しでもご指摘を

ここまで駄文を見てくださってありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 四十九話（前書き）

最近家にある漫画を一気に読み返した駄文な作者です  
エレメンタルジエレイドって面白いよね！

・・・はい関係ないですね  
それではどうぞ

ホントに前書き思いつかねえ・・・orz

## 四十九話

爽やかな風を顔に受け

今、俺はユーリと共にラークの背に乗り  
ガリアへと向かっているのだが・・・

「どうしてこうなった・・・つーかお宅らどちらさん？」

なんかものツすごい数の火竜、風竜に囲まれとるんですけど・・・  
具体的に言つと・・・1000匹ほど、

この光景を上から眺めれば1つの絵になるんじゃないかね？  
と思うぐらい、赤と青の鱗をした爬虫類共に囲まれとります  
なんなのこいつ等、戦争でもしに行くんですか？

「一緒に来ていただこうか、ハーク公爵  
我等、レコンキスタに」

ほー、ってことはこいつ等アルビオンの竜騎士共か・・・  
随分とまあ、間抜けな奴らだな  
竜達が怯えてるのに気付かないのかねえ

「・・・こんな餓鬼一人の出迎えにしちゃ、ちょっと派手すぎ  
やしないか？」

第一、俺なんか連れっつてっつてどうするつもりよ？」

「本来の目的ではないが、貴殿の確保は優先事項の上位にある故  
それに貴殿の話はよく聞き及んでいる

それこそ裏の部分まで・・・一緒にこないと言つのであれば・・・

どうなるか、お分かりでしょう？」

・・・今俺の目の前に4つの選択肢が浮かんでいる  
さて・・・どれを選ぶか・・・

- 1、 落す
- 2、 限りなく残虐に落す
- 3、 遊びながら落す
- 4、 なんとなくラークを落とす

「・・・ユーリ、ゲームをしよう」

「ゲーム？・・・遊び？」

「そうそう、ルールは簡単、こいつ等を多く落した奴の勝ち  
どうだ？ラークもやるか？」



「お前らが私の上から退くのなら私もやろう・・・して、何を賭ける？」

ゲームと言うからには何か互いに賭けねばつまらぬと言うものである。」

「それもそうだな・・・んじゃお前らどっちかが勝ったら俺が出来る範囲なら何でもやってやろう  
ただし俺が勝ったら・・・そうだなラーク、お前の角よこせ」

「むむう？・・・まあ、良いだろう  
どうせまた生えてくる・・・  
してユーリは何を賭ける？」

「うん・・・ビューン！」

「こらこら、俺はお前の物じゃねえぞ  
ユーリが勝ったら双方リスクなしってことで、OK？」

「了解した、では・・・やろうか  
開幕の一光で倒れた分はなしで構わんぞ・・・」

ラークはそう言うと翼を大きく広げ  
体が薄く発光し始めると、その光が羽根へと集まり  
極太のレーザーとなり、前方へと放たれる

「「「ぎゃあああああああ！」「」」

「な、なんだあれは！……ええい！皆散開しろ！  
固まっついてはあれの餌食になるぞ！！」

ラークの放った光によつて先ほどリユーガに話しかけてきた者と  
その後ろに居た竜騎士が何名か消滅すると  
他の竜騎士たちはばらばれと分かれ始める  
それと同時にリユーガとユーリはラークの背中から思いっきり飛  
び上がる

「おいおい、竜は殺すなよ……あーあー、見る生き物がゴミの様だ  
……つと……そうは思いません？」

竜騎士のお兄さん？」

「なあ！？……どうや……ぶべえ！？」

「こつやつて……乗り手だけ殺れば……あら不思議  
竜も此方の味方に……なつたとさ」

リユーガはラークの背から飛び立つと、手ごろな竜に乗り移り  
乗っていた騎士を蹴落とす、そしてヴィンダールヴの能力で

竜を従える、これを永遠と繰り返す  
一方ユーリと言えば

「アハハハハ！」

「グオツ!？」

「何だあの女は！何故空を走っている!?!」

「キーーーーー……ドッカーーーーーン」

「りゅ……竜を蹴飛ばした……」

ユーリは縦横無尽に空に視認できないほどの透明の水の道を作り  
その道を走り回りながら  
人だろつが竜だろつが関係なく、視界に入った者全てを蹴り飛ば  
して行く  
そしてラークは

「魔法が消えた!？」

「どう言うことだ!魔法が通じないぞ!?!」

「無駄だ、私のコーティングは此方の世界で言う・・・ヘクサゴン？

その威力でなければ打ち消せぬ・・・とウィルが言っておった」

スバババババ、と羽根の形をした光を無数に放ち  
器用に乗り手だけを撃ち落としていく

そんな3人が戦うこと数分、1000騎は居たと思われる

竜はあつという間に半分にまで減ってしまい

最後には、それぞれ自分の判断で交戦区域から離脱して行ってしまった

辺りに人の乗っていない竜だけになるとユーリはラークの背中に  
戻り

遅れてリユーガもそれに続く

「・・・私は・・・1000騎程だが・・・」

「うん？んじゃ俺の勝ちだな、300は落したと思うぞ」

「1000？・・・ぶー？」

「はっはっは・・・まだまだ俺には勝てんさひよっこ共・・・  
それより一体あれだけの人数で何処に行こうとしてたのやら」

「どこかの国にでも襲撃しようとしていたのでは？  
後ろの方に兵糧部隊と思われる連中もいたからな」

「・・・ふむ・・・こんなことなら1人ぐらい引つ張ってこりゃよ  
かったな・・・」

まあ、過ぎたことだ、つーかつさつさと飛べ  
いらん邪魔が入った、このままじゃ遅刻する」

リユーガがラークにそう告げると  
ラークは翼をはためかせ、空を飛んでいく

・・・そろそろ・・・戦争かね・・・  
原作どおりに動いてくれりゃこっちも楽でいいんだけど・・・  
まあ、そう上手くいかんわな

.....

sideギーシユ

リンゴーンカーンコーン

授業終了の鐘が響き、教師との挨拶が終わると  
ギーシュはステイルに一瞬だけ視線を向け  
教室から早足で出て行き  
屋上へと足を進める

全く、いきなり僕等の戦いを邪魔したかと思えば  
急にいなくなつて・・・何を考えているんだが・・・

「すまん、遅れた、サイト君は？」

「変わりなし、しかしリユーガもどう言つつもりだろうね  
胸に刀突き刺した張本人の護衛を僕等に頼むなんて  
第一リユーガ相手に勝てるんだから僕等の護衛なんているのか  
な？」

「さあね、とりあえずもう一つのコルベール先生の方はきちつと  
伝えておいたから

後はリユーガが帰ってくるまでサイト君を見張ればいいだけさ」

ステイルはそう言うつと屋上の端に腰かけ下を見下ろす  
ギーシュもそれに続き、腰を下ろすと  
視線を下に向ける  
2人の視線の先には、ベットで横たわるサイトと  
それを看病していると思われるルイズの姿が

「なんだか・・・ストーカーみたいだな・・・」

「言うな・・・しかしルイズの奴も大丈夫かね

かれこれ3日も授業休んで付きつきり・・・ルイズが倒れるんじゃない？」

「かもね、でも僕等が頼まれたのはサイト君の護衛だけ

それもなるべく干渉するなって・・・良く考えれば結構鬼畜だよね？これ」

仮にサイト君が襲われたらどうしろと？

遠くから魔法放てばいいのかな・・・

「まあ、3日も見続けて、今さらって感じだけどね」

「言えてる」

2人はそう言葉をかわすと黙ってルイズの部屋を眺め続ける

そして暫く立つと、ギーシュが立ち上がり  
ステイルに声をかける

「そろそろピースにご飯あげてくるよ、ホープもいつも通りでい

いかい？」

「ああ、全くホープの奴大喰らいで困ったもんだよ  
リユーガが餌代出してくれなきゃ今頃実家に殺されてるね、僕  
は」

「ピースも似たようなもんだけどね・・・それじゃ、言うてく  
るよ」

ギーシュはそのまま足を一步前に踏み出し  
火塔から飛び降りると、フライで勢いを殺し  
厨房に向けて歩き出す  
その途中、テーブルの置いてある広場を通ると  
広場に居た生徒が一斉にギーシュの元へと駆け寄ってくる

はあく・・・またか

3日前からいつもこうなんだよね・・・  
面倒だし・・・さっさと行こ

「あ、あのギーシュ様、3日前のことを・・・」

「なあギーシュいい加減話してくれたって・・・」



「・・・前も言ったけど僕は何も知らない  
それに僕は急いでるんだ・・・それじゃ」

ギーシュは立ちふさがる生徒達を器用に避けつつ  
厨房に向かう

生徒達は学院が一日で破壊され、その翌日には何事もなかったか  
のように

なっていた事について聞きたいようなのだが

ギーシュはそれに答える事をせず

ただ無心で広場を通り過ぎていく

しかし、内心では・・・

クソツ！皆に話してあげたい！！

・・・でも、余計なこと言うと・・・リユーガに・・・

いかんいかん・・・無心だ・・・心を無にするんだ・・・彼等は

石だ・・・そう石なんだ！・・・道端に転がる石・・・

そうギーシュは心の中で永遠と呟きつつ、裏口から厨房に入り  
近くに居たマルトーに声をかける

「今日も貰いに来たのだが・・・」

「・・・あ、すいやせん

ちよっと考えごととしていたもんで」

マルトーは心ここにあらずと言った感じだが  
ギーシュに気づくとすぐさま奥に引っ込み  
大きな荷物をギーシュの目の前に置く

ギーシュは目の前に置かれた荷物をレヴィテーションで浮かし早  
足で

厨房を後にする

全く・・・相変わらずあそこは空気が重いな  
土の使い手の僕でも分かるくらいだ・・・風の使い手なら吐き気  
でも起こるんじゃないかな？

ギーシュはそんなことを考えつつ足を進め  
学院の外にある大きな水たまりにたどり着くと口を開く

「おい、ご飯持って来たよ  
出ておいでー」

ギーシュがその場に荷物を下ろすと、水がせり上がり火を纏った  
魚が現れる

「ウム、イツモゴクロウ・・・」

「あれ？ピースは？」

「ワレガ、ソノヨウナコトシルカ  
サツサトヨコセ」

「まさか食べたんじゃないだろうね」

「アレヲ？ワレガカ？バカライウテナイワ  
アンナモノクチニスレバ、ハラヲコワス」

ハハハとホープは笑うと

ホープは体から火を噴き出し、宙に浮くと

ギーシュの持ってきた荷物を銜え、水たまりの中へと戻って行っ  
てしまう

ギーシュはホープが中に戻って行くのを見つめると  
辺りを見渡し声をあげる

「うーん・・・おい、出ておいで・・・寝てるのかな？  
っと来た来た」

ギーシュの声に感じたか、地面が盛り上がり  
道の様な物が出来ると、そこから真っ黒な毛質の狼が現れる

「グルウ？」

「ピース、何処に言ってたんだい？  
それにその口に啞えているモノは？  
僕にくれるのかい？」

「ガル！」

ピースは口に啞えた大きな石をギーシュの前に置くと  
荷物に向かつて走って行く

ギーシュはピースの置いた石を手に取りそれを興味ぶかそうに眺める

「これは・・・見たこともない石だな・・・後でウィルさんに調べてもらおうと」

ギーシュは石を懐にしまうと、振り返り

ガサガサとギーシュの持ってきた荷物に顔を突っ込むピースを眺める

「・・・なんだか、日に日に大きくなっていないか？君  
成長期なのかな・・・」

「ガル？」

「ああ、ごめんね、食べていいよ」

「・・・ガル？」

ピースはギーシュが自分の食べているモノが欲しいと勘違いしたか荷物の中身の肉（出所不明）を差し出してくる

「いや、欲しいわけじゃないから・・・それより、この肉ってなんの肉なんだろう・・・」

リユーガがピースはこれしか食べないって言ったけど・・・  
まあ、良いか」

ギーシュは再度頭を荷物の中につつませ  
嬉しそうに肉を頬張るピースの頭を撫でていると  
学院からパンツ！と響く音が聞こえ、ギーシュは立ち上がる

あれは・・・ステイルか・・・何かあったってことかな？

ギーシュはピースから頭を離すと、学院へと駆けだした

・・・

sideステイル

あー・・・誰かを護衛するって結構暇だな  
何もすることがない・・・

ステイルは屋上でゴロンと寝転がりながら  
ルイズの部屋を見続け  
ふと、懐から一枚の紙を取り出す

『親愛なる下僕どもへ

お前らの主は1、2週間ほど仕事で各地を回るのでこの2つを  
守る様に

1、今日の事をむやみやたらと口外すんな  
2、サイトの護衛、お前らが危ないと思ったら最悪相手を殺し  
てもかまわん

一応生け取りが好ましい

以上の2つ命をかけて守れ

ついでに俺が返ってきたらお前ら2人に大事な話があるので  
覚悟しておく様に』

「・・・大事な話って・・・何だろう・・・  
どうせまたしょーもない事なんだろうけどさ・・・  
しっかしこつも進展がないと詰まらな・・・ん？」

ステイルは何か嫌なものを感じ取り  
懐から手のひらに収まる大きさの水晶を取り出し魔力を込めると  
水晶に風景が映し出される

「……………思いすごしかな……………何か来たような気がしたんだだけ  
れど……………」

ステイルはそのまま水晶を視界の中に置き、ルイズの部屋に視線  
を送る

「……………おや？起きたんだサイト君」

ステイルが部屋を覗くとそこにはベットから身を起こすサイトの  
姿が

しかし、サイトはベットから飛ぶように立ち上がり、ルイズを抱  
きかかえ

窓を開け、そこから飛び降りる

そしてステイルの耳に響くのはルイズの叫び声

「きゃあああああ！！！！」

はあ！？……………おいおい、そこ3階だぞ……………何やってんの、サイ  
ト君……………」

「レヴィテーション！」

ステイルは杖を取り出し落下する2人に魔法をかけると

2人はゆっくりと地面に降り立つ

ステイルはサイトの開け放った窓を見つめると、窓からサイト同様  
黒フードで身を包んだ人間が飛び降り、地面に着地するや  
サイトに向けて足を進める

「……あー……友達……って訳じゃあ、ないんだろうね……」

ステイルは杖を上空に向け、ファイヤーボールを放つと、火塔か  
ら飛び降り

サイトと黒フードの間に着地する

「さて、貴方どちら様ですか？」

教師に見えなければ、生徒ってわけでもないでしょうっ？」

「……赤毛の小僧……すまんがここは任せるぞい」

「ちょ、ステイル？……ってあんた下ろしなさいよ……！」



サイトはステイルの姿を確認するや、一目散に駆けだしていく  
黒フードはそんなサイトを見つめ、追いかけてようと足を動かした  
瞬間

黒フードの周りに炎柱が立ち上る

「動くなよ？炭になりたくなかったら大人しく質問に答えろ」

「・・・」

ステイルがドスを利かせた声で黒フードに声をかけるも  
黒フードは何も答えず自分を囲う炎柱を眺め小さく呟く

「・・・れ」

「なんだって？もっとハッキリ・・・ッ!？」

黒フードが小さく何かを呟くと

一瞬で黒フードはその場から消える

消えた？・・・一体何処へ・・・  
ッ!？後ろか!

「おっと!!ファイヤーボール!」

「.....」

ステイルは突如横から伸びてきたナイフを転がるように回避すると  
ナイフを振るった黒フードに炎球を放つが  
またも黒フードは一瞬の内にステイルの後ろへと移動する

「また.....このツ!炎剣!!」

「.....あ」

ステイルは手のひらに炎剣を生み出し  
回転するように振るうと、黒フードに微かに炎剣が触れ  
顔を覆っていた部分が焼け一瞬だけ顔が見える

「お、女の子!?!」

「.....」

「あ!待て!!!」

黒フードは顔を抑えながら  
壁を蹴り空高く舞い上がると、黒い何かが高速で黒フードを抱え  
飛び去って行く

「・・・逃げた・・・かな？」

ステイルは一応警戒しつつ  
飛び去って行った黒い影を見つめ続けた  
視界に残るのは、顔に刻まれた刺青の様な紋章  
ステイルはその紋章に見覚えがあった

「リユーガの？・・・いや、形は違った・・・あれは一体・・・」

ステイルは頭を書きつつ、黒フードの飛び去って行った方を見つ  
めながら

小さく呟くと

サイトの走って行った方に足を進めた





## 四十九話（後書き）

めっちゃ中途半端！

でも許して下さい、これ以上は分が長くなってしまつので・・・  
50話越えて今だフーケまで行ってないって・・・一体何話まで続くのやら

駄文な作者にも分かりません！！（おい）

しかし、ラストだけは鮮明に思い浮かぶ・・・

どうやって繋げたものか・・・

ここまで駄文を見ていただいておりますがとうとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 五十話（前書き）

どうも、駄文な作者です・・・

とりあえず一言

サブタイ付けるの面倒だ・・・

発想力のない作者ではサブタイつけるのも一苦勞なんですよ  
表現力もない、発想力もない、ただあるのは思いつきのみ  
・・・これでいいのだろうか・・・

まあ、そんなこと、どーでもいいですね

それでは・・・どうぞ

## 五十話

グラント・トロワ  
ジョゼフ執務室

リユーガはいつも通りジョゼフの執務室のチェス盤の置いてある机に向かい合うように座り、紅茶を啜るとジョゼフが書類に目を通しながら口を開く

「すまん、出発は先延ばしだ

昨日俺が抜け出したのと

シャルルが風邪を拗らせてしまっただけで俺の方に雑務が回ってきてしまったのだよ

おかげでこの有様だ」

「・・・どんだけため込んでんだよ・・・」

まあ、御愁傷さまと言っておこう、先に言っておくが俺は手伝わんからな」

「どうせ、王族<sup>おごう</sup>にしか処理できん物ばかりだ

それより、ロマリアからこんなものが来ておるぞ」



ジョゼフは右手に持った何枚もの書類を同時に目を通しつつ  
左手で書類の山に手を突っ込むと

一枚の書類を掴み取り、リユーガに手渡す

「ふむふむ・・・えらく直線的に俺の領地を査察させる、か」

「おまけに此方の確認も取らず  
もう査察団が出立したようだ、

此方が断らんとでも思っているのだろうか・・・」

「まあ、こんだけ始祖始祖って書いてありや  
向こうさんも断るなんて思っていないだろ・・・  
で？到着は？」

「未だに馬車なんてものを使っているからな

3日後との事だ・・・まあ、この書類の量を見て分かると思うが

一週間は俺は動けん、サハラに行くのはその問題を解決してか

らとしようか」

「だりー・・・」

まあ、俺の領地は常人が見れば唯の更地だから  
ダイレクトマジック程度じゃ、何も分からんさ

精々長めの休暇とでも受け取っておくよ、学院には一ヶ月は帰  
らんと

爺に伝えてあるからな」

リユーガはそうジョゼフに告げると書類を投げ捨て  
足の踏み場もないような書類の山を蹴り倒しながら扉へと足を進  
める

「ああ、そう言えば、ロマリア・・・いや、レコンキスタか  
あいつ等なんか動き出したみたいだぞ？」

ここに来る途中、1000騎近くの竜騎士見たから」

「うん？・・・向かった先は？」

「知らん、喧嘩売ってきたんで、半分ほど落したら、逃げて行き  
やがった

・・・ただ、長期戦をするためか、兵糧部隊まで引き連れてた  
から

どっかにカチコミ入れようとしたんじゃないかね？」

「・・・ふむ、アルビオンの竜騎士が、か・・・」

ジョゼフはリユーガの言葉に思うところがあるのか  
書類から目を離し、チェスのナイトを手で弄ぶ

「……まあ、どうせ俺は暇になるから坊主相手にしつつ調べといてやるよ

それと……シエフィールドが死にかけてるから寝かせてやれ  
「よ

「……はっ!?……わ、私は寝ていません!」

「船を漕いどいて言うことか?」

「……ジヨ、ジヨゼフ様!私寝ていませんからね!」

「……ミヨズよ……まずは涎を拭いてから、な?」

「……//」

「はいはい、そんじゃ俺は屋敷帰っから

なんかあつたら呼んでくれ……んじゃ

リユーガはそれだけ言うと、部屋から出て行った

……

sideギーシュ

一体・・・何処から・・・

ギーシュは校舎を背に、身を屈ませ

何時も持つている手鏡で向こうの様子を探るが何も見えない  
しかし、ギーシュの手に持っていた手鏡が急に破裂する

クソッ！・・・全く、見えないってやつかいだな・・・

「おい小僧！いい加減これを外さぬか！  
死んでも知らぬぞ」

「うるっさいな！少し黙っていてくれよ  
第一君は僕の中での危険人物ランキング2位に入ってるんだから  
拘束は解かないよ！！」

壁に身をひそめるギーシュに

両手両足を拘束されたサイトが声をかけるが

ギーシュはそれを一蹴すると、曲がり角の向こうへと魔法を放ち  
暫くすると、壁から顔をのぞかせる

「やったかな・・・」

「無駄じゃよ・・・まだ微かに殺気を感じる」

「あれだけ弾幕張ったんだ、一発ぐらいは・・・えっ？」

ピュンッとギーシュの耳に不吉な音が聞こえ  
ギーシュの顔を何かがかすめ  
ドバツッと真つ赤な血が噴き出す

「痛つてえく・・・あーあー、血がこんなに・・・つてあれ？  
耳欠けてね？」

「大丈夫じゃ、辛うじてまだ繋がっておる」

「ちょ、ギーシュ！あんた耳が・・・」

「繋がってるから後でどうとでもなるさ・・・多分  
それよりどうしようか・・・あっちの姿はおろかどんな魔法な  
のかも見えないし

こっちの攻撃は通じてないようだし・・・あれ？詰んでね？

この状況」

「じゃから言ったじゃろうが！

まだ遅くはない、この拘束を解け、そして武器を出せ！

そうすればわしが・・・ッ！？

殺気が近づいてきたぞい！走れ！！」

サイトは両手両足を拘束されているにもかかわらず

芋虫のように這いながら、その場を離れようとする

「ちよ・・・って早！そしてキモ！

・・・ああ・・・もう！ルイズ、サイトと一緒に逃げて、僕は  
ここで足止めするから

ワルキューレ！！」

「え？・・・ちよつとギーシュ？・・・ってまた私担がれてる！！」

ギーシュは杖を振るい、鉄で出来たワルキューレを出現させ

ワルキューレは、ルイズを担ぎ、高速で這うサイトを追いかける

「さて・・・と、アースウォール・・・錬金・・・

そして、サンドストーム」

ギーシュは自分の後ろに巨大な鉄の壁を立ち上がらせ道を塞ぐと、前方に向けてサンドストームを放つ。たちまちギーシュの目の前に砂嵐が吹き荒れ、一步も先が見えない状況となる。

これで動けば、居場所が分かるけど……動かないよなあ……  
やっぱやるしか……っつてうお！

「見えないのは怖かったけど……  
逆に見えても怖いもんだねえ」

ギーシュの目の前に張り巡らせた砂で形どられた剣が飛来すると、ギーシュはそれを鉄に錬金した腕でつかみ取る。

へ……えらく薄いな……  
ガラスの剣……かな？道理で見えないわけだよ  
さて、居場所は……あの辺りかな？

「アースバレット」

ギーシュは周りで巻き上がる砂を土の塊へと変え、剣が飛んできた方向に向かって無数に放つと遠くからうめき声の様な物が聞こえる。

お？当たったかな・・・って、そりゃこっちの居場所もばれるわな！

「やばいやばい・・・あちらさん見境なしだよ・・・」

ギーシュは足音を立てず速やかにその場を移動すると先ほどまでいた場所に無数のガラスの剣が突き刺さり冷や汗を流しつつも、移動、魔法、と繰り返して行く。どうやら向こうはギーシュの居場所を把握していないのか。視界に映るだけで、かなりの量の透明な剣があちこちに突き刺さっている。

うーん・・・どうやらこっちの居場所はばれていないみたいけどどうにもなあ・・・  
いい加減終わらせないと人が集まってきそうだし・・・

「あー・・・誰かわ知りませんが降参しませんか？  
もう無理ってわかるでしょ？  
此方も出来れば殺しはしたくないんで・・・」

ギーシュはこのままでは埒が明かないと判断したが声を張り上げるが、帰ってきた答えは、ガラスの剣であった。ギーシュは迫る剣を、同等の数の土の弾丸で相殺し



溜息をつくど、手をあげる

「どうなっても知らないからな・・・バイライト黄銅鉞！！」

ギーシュは自分の影にある球体に魔力を流し込み  
約2メートル程の黄色の甲冑がギーシュの影から現れると  
甲冑は右腕を前に突き出す

「範囲は・・・半径100メートルで良いかな  
ついでに壁も建てて・・・と、よし！」

ギーシュは吹き荒れる砂嵐を鉄の壁で囲み  
一切の逃げ場をなくすと、バイライト黄銅鉞の右腕に  
頭ほどの大きさの黄色の輝きを放つ球体が現れ  
それがゆつくりと上に上がって行く

よしよし・・・それじゃあ、ちょっと気が引けるけど・・・

「降参しない君が悪いんだからね？  
それじゃあ」

ギーシュはそれだけ小さく呟くと、自分で建てた鉄の壁の外に出て  
杖を高らかに振り上げる

「広域錬金・・・」

.....

side???

「・・・」

全く、これでは私からも相手が見えぬではないか・・・  
だが、それは相手も同じこと・・・  
数で圧倒するか・・・

「構築・・・」

何も無い空間に無数の見えない剣が現れる  
しかし、吹き荒れる砂嵐によって、微かにだがその刀身が見えて  
しまっている

「固定・・・」

現れた剣は、数多の方向に向きを変え  
吹き荒れる風をもとせせずその場で停止する

「射出」

男の眩きと共に、空中で停止していた剣が  
向いている方向に放たれると  
ズガガガガ、と何かに突き刺さる音が聞こえるものの  
手応えはない

うぬ・・・外れ、か・・・まあ、いずれは・・・ッ!?

「ゲウ!?

何故・・・此方の居場所が・・・」

砂嵐吹き荒れる視界から突如、男の目の前に  
土の弾丸が降り注ぎ、男は避ける事が出来ず  
直撃してしまう

「・・・そうか、ここは相手の手中・・・と言う訳か・・・」

・・・学生の割に中々えげつないことをする・・・

「だが、所詮学生は学生だ・・・」

男はそう呟くと、足を一歩進めようとしたところで動きを止める

・・・無暗に動き回って不意を突かれたらかなわんな仕方がない、ここは弾幕戦と行こうか

男は再度、自分の周りに無数の剣を展開させ、数多の方向へと放つが

一向に手ごたえはなく、剣を放つたびに

お返しと言わんばかりに放たれる土の弾丸にイライラし始める

普段自分がやっていることを返されるとは・・・

やる分には楽しいが、やられるのはちとキツイものがある

男はそう思いつつも、剣を放つことを止めず

ただ、ひたすらに、剣を放ち続ける

そして、暫くの間、土の弾丸と透明な剣の弾幕戦が続きピタリと土の弾丸がやむと

声が男の耳に聞こえる

「誰かわ知りませんが降参しませんか？  
もう無理ってわかるでしょ？  
此方も出来れば殺しはしたくないんで・・・」

ふっ・・・馬鹿なことを・・・声をあげれば幾ら私と云えど・・・  
居場所ぐらい分かるわ！！

「これで・・・終わりだ」

男は片腕を突き出し、一際大きな剣軍を出現させると  
声の聞こえた方へと放つ  
しかし、男の耳に響いたのは、肉に剣が突き刺さる音ではなく  
パキンつと自分の放った剣が打ち砕かれる音であり  
そして、何も見えないはずの空間に、光が灯る

「なんだ？あの光は・・・ぬう！？」

男は徐々に上へと登る光を眺めると  
光は一際強く輝き、男は耐えきれず目をつむり  
視力が戻る頃には、もう、遅かった  
男の視界に映るのは一歩先が見えぬ程吹き荒れていた砂嵐ではなく  
ただ、上空から力なく、地面に落ちる

独特の匂いを放つ、黒い粉

この匂い……まさか!?

「……これ程の量を一挙に錬金するとは……」

男は周りで降りてくる黒い粉を見るや火薬と断定し、後ろに向けて飛び上がるが

ドンツ、と何かにぶつかり、それに視線を送る

何時の間に壁を……しかも鉄の壁だと?

こんなもの私の火力で破れるわけが……ハッ!?

「……しまッ

」

男が後方に聳え立つ、壁に手を置くが時すでに遅く  
上空でポツと、何かが爆ぜる音が男の耳に届く頃には  
男は輝かしくもどす黒い光に包まれていた

……

sideステイル

ステイルは黒フードが逃げた後サイトを追いかけようと思ったが何処に居るか分からず

10分程度走り回ったところで、諦め、フライで空高く、浮き上がる

ステイルの居た、土塔とは真逆の火塔付近で黒い鉄の箱に覆われた砂嵐を見つける

あれは・・・ギーシュだな・・・ってことはサイトは・・・居た居た・・・なんか物凄い早さで芋虫やってるな・・・

「おーい、無事か？」

「お？赤毛の小僧、あの黒フードを退けたのか？」

「まあ、逃げられたけどね・・・ギーシュはあの中かい？」

「うむ、はよう行ってやらんと死ぬやもしれんぞ？」

相手は、姿が見えなければ、放つ魔法も見えぬ」

「ああ、なるほど、だから囲んで砂嵐巻き起こしてるんだ・・・それより・・・ルイズ・・・何やってるの？」

「うっさいわね！いい加減下ろしなさいよこのゴーレム！！」

ルイズはワルキューレに担がれたまま

ワルキューレに拳を放つが、1年前の様な柔らかな青銅とは違く  
堅い鉄で出来たワルキューレには傷一つ付けられず  
逆に殴ったルイズが手を抑え唸る

「か、堅過ぎよ・・・ギーシュの奴覚えてなさい・・・」

「ま、まあまあ・・・ギーシュが戻ってくるまでの辛抱だから・・・  
それより、貴方に聞きたいことがあるんですけど」

「うん？わしか？何を聞きたいんじゃ？」

「貴方誰ですか？サイトじゃありませんよね？」

「わしは・・・わしじゃ

他に言い様がない・・・

あえて言うのならば・・・2代目・・・かの」



サイトはステイルの問いかけに声を絞り出すような  
弱弱しい声で答えると、両足を拘束されているにもかかわらず  
難なく立つと、ステイルの懐に手を入れ、短剣を奪い取る

「ッ!？」

「待て待て、やり合うつもりはない・・・ただ  
これが邪魔なだけじゃ・・・ふん！」

サイトはそのまま両手を拘束していた枷を力任せに引きちぎると  
足の拘束も外し、短剣を振るう  
すると、ルイズを担いでいたワルクューレの肩が切断され  
ルイズは頭から地面に落下する

「きゃ!？」

「おっと・・・運動神経ないのう・・・お主」

「うっさいわよ! って言うか何すんのよあんだ、危ないじゃない  
!..」

「ぬお!・・・良い蹴りを放ちおる・・・

先ほどの言葉、訂正しよう」

「避けるんじゃないわよ!」

ルイズはサイトに放った蹴りが軽く受け止められたことに腹が立ったのか

もう一度、サイトに蹴りを放とうと振りかぶったところでステイルに抑えられる

「まあまあ・・・落ち着いて落ち着いて・・・」

「むきいー!その顔が腹立つのよあんた!笑うんじゃないわよ!」

「ふおふお・・・若いのは元気があつてよいのう・・・」

サイトは髭を弄るような動作をしながら

ステイルに取り押さえられるルイズを眺め、カラカラと笑みを浮かべる

そんなやり取りをしていると、大気を震わせ、耳を覆いたくなるような

轟音が響き、ステイルは溜息を漏らす

「・・・向こうも終わったようですし・・・行きましょうよ

ね？ルイズももう良いだろ？」

「はあ・・・はあ・・・分かったわよ・・・」

「なんじゃ、あの小僧勝ちよったか・・・人は見掛けによらぬの  
う」

「それより・・・僕の短剣、返して下さいよ」

「おお、すまんすまん」

サイトはステイルに短剣を返すと  
急に、方膝をつき、肩で息をし始める

「ちよっと、どうしたのアンタ？」

「・・・少し、無茶をしすぎたかのう・・・  
すまんが・・・寝かせてもらうぞい、明日には・・・多分・・・  
元通り・・・じゃ」

「お、おい、大丈夫か？」

サイトはそのまま、唯一の支えであった足から力が抜け  
地面にドサッと倒れこむ

「ちよ、ちよつと・・・死んでないでしょうね・・・」

「息は・・・あるから大丈夫だと思うけど・・・傷口が開いてるね  
念のため、保健室に運んでおこう・・・ルイズ、悪いけどギ  
シュ呼んできてくれるかい？」

「え、ええ、分かったわ」

ルイズはステイルが言った通りにギーシュが居ると  
思われる火塔に向かって走り出す  
そして、ステイルはサイトの体を持ち上げると  
保健室のある水塔へと足を運んで行った



## 五十話（後書き）

ふー・・・やっと、一区切り

なんかすいません戦闘戦闘戦闘って

次回からはちゃんと物語進めますんで

かなり急展開になると思うけど、ね

ここまで駄文を呼んでいただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 五十一話（前書き）

ふー・・・やっとできました・・・

っと、どうも、駄文な作者です

いやー、すいませんここ3日も日にちを置いてしまいました

しかし、これにも訳が・・・まあ、後書きを見てくれれば分かり  
ますので

気が向いたならばどうぞ、それでは、本編へ・・・GO!!

## 五十一話

sideサイト

ああ？・・・なんか、体がズキズキと痛みを・・・  
蹴られてる？

「なあ・・・こいつ起きないんだけど・・・死んだ？」

「あんたねえ・・・私達の意識があるんだから死んでるわけない  
でしょ？」

大体、なんで主人格の8代目がここに居んのよ  
こんなこと過去に無かったわよ」

「おそらく・・・デルフリンガーが居なかったのと  
あれが表に出てしまったからであろうな・・・  
担い手に止められはしたものの、未だ体を狙っておるしな  
2代目が入ってはいるが・・・何時まで持つものか・・・」



誰だこいつ等・・・ってうお!？  
何だこれ！俺浮いてるぞ!？

「あー?・・・なんだ起きてるじゃねえか  
気分はいかがかな？馬鹿やった8代目様」

「だ、誰だあんた等・・・」

サイトは何とも言えない浮遊感を体に感じつつも  
膝に手を置き体を起こすと、辺りを見渡す

「なんだ・・・ここ・・・俺は・・・一体」

「まあ、混乱するのも分かるが・・・  
とりあえず自己紹介でもしておこう  
私は、4代目、そっちの男が3代目で・・・  
この女性が6代目だ」

「・・・え？終わり?  
って言うか何その・・・4代目だとか・・・」

「ちょっと、いきなり言っただって分かるわけないでしょ？

今は何も言わない方が良くないんじゃないの？」

「しかしだな・・・」

4代目は6代目に手を引かれサイトに背を向けながら  
ひそひそと何かを話し始める  
サイトはそんな2人を見つめ、頭を掻きながら、2人に問いかける

「それより・・・えっと、4代目・・・さん？」

ここは一体どこなんだ？

俺は確か、学院で・・・ああ！そうだ、あのメイドさんは？

それにあの貴族は？」

「・・・呆れた・・・アンタ何も覚えてないの？」

「え？・・・俺、確か貴族の魔法を喰らって・・・そこから・・・」

「・・・まあ、初めて力を使ったのだ

しかたないとも言えような・・・見せてやろう」

4代目と名乗った男はそう言い

腕を前に突き出すと、空が割れ、映像が流れ始める

え……あれ……俺なのか？  
ちよつと待て！今耳を……

「お、俺が……あんなことやったのか？」

「いんや、お前さんはあの後、自分の『部屋』に閉じこもったから違つぜ

「やったのはこの女だ」

「別に良いじゃないあれぐらい  
あんだだつたらあの生徒バラバラに刻んでるでしょ？」

「あー？俺は強いやつ以外切りやしねえよ  
ザコとやり合つたつて楽しくもなるともねえ  
だが……こいつは、本当に楽しかったなあ……」

3代目は流れる映像を見つめ恍惚の表情を浮かべると  
サイトはそれから目を逸らし、映像に目を向ける

「カカカ……なあ、8代目、また体貸してくれよ  
あんな楽しい奴、俺が生きていた時にはいなかったからよお……

「

「貸すって……あんた等俺の体で何したんだよ!!」

サイトは映し出された映像を見て行くと、どんどん顔が青ざめる  
女生徒の耳をそぎ落とし、なお且つその女生徒を盾としたり  
そんな自分の姿が映し出されれば誰でも不快に思うだろう  
サイトは最後までその映像を見ると目を逸らし  
横で楽しそうに笑う、3代目を怒鳴りつけるが  
6代目が呆れたように溜息を漏らすと、言葉を返す

「何言ってるのよ、あんたが行き成り体手放すもんだから、  
仕方なくあたしが入ってあげたんじゃない  
逆に感謝してほしいわ、あのままだったらこいつに殺されてた  
わよ?」

6代目が映像に指を向けると

映像が逆再生して行き、

楽しそうに笑いながらサイトに魔法を放つ、ヴェリエの姿が映し  
出される

「あー……腹立つわねえこの顔

やっぱあたしが刻んどけばよかつたかしら」

「元はこの小僧のくだらぬことから始まったからな

しかも、なんだこの表情は、完全に力に酔った者の顔ではないか……

やはり私が出て行った方が良かったのか？」

「こんな餓鬼どうでもいいからよお

爺さんの戦いのとこみようぜえ……

しっかし相変わらず爺は化け物だな、俺を軽く倒したこいつを倒しちまうなんて」

3代目は映像を指差し、パツと映像が変わると  
「またも楽しそうな表情を浮かべる

「そうよねえ……まさか2代目がここまで強いなんて……  
しかも剣から出てるこれ何？  
どうやって出してるのよこんな物」

「2代目は言うには……確か、周りの光を集めるだとかなんだとか……」

「ああ……良いねえここ……もっかい見よ」

3人はいつの間にかサイトのことなど忘れたかのように  
それぞれが勝手な行動を取り始める  
サイトはそんな3人の姿を見つめ

口をわなわなと振るわせると、あるはずのない地面に拳を叩きつける

「「「!?!?」「」」

「テメエ等……いい加減に……シロヨ?」

サイトはドンツと鈍い音を響かせ、体に黒い靄の様なものを纏わせながら

ゆらりと1歩、3人の元へ踏み出した瞬間、サイトは地面に叩きつけられる

「グオ!?!?」

「あー……懐かしいわねえ……私も初めてここに来た時はこうだったけ?」

「いやはや、あの時は苦労させられた

何分、そなたの投擲術は私とは相性が悪かったからな」

「最後には爺にぶん殴られて気を失ったんだっけ?  
いやーあれは笑った」

「うっさいわねえ、昔の事よ……って言うかあんた弱過ぎじゃない？」

「なんでガンダールヴに選ばれたの？」

「コノ」

「動かぬ方が良いぞ？」

「ここに死と言う物はないからな、最悪5代目や7代目の様に精神を破壊した後、『部屋』に放り込まれたいか？」

4代目はそう言いサイトの首筋に振れば折れてしまいそうなくらい薄く長い刀をそえる

しかし、そんなことをせずとも、背中に6代目にのしかかられなお且つ頭を3代目に押し付けられているので動こうにも動けなかった

「全くよお……今期外れも良いとこじゃね？」

「震えの幅は断トツだろうけど、こんなトーシロどっから引つ張ってきたんだよ」

「そうよね、あんな貴族のボンボン相手ですら一発も入れなかつたんですもの」

もう、このまま私達で体回さない？」

「……お前は……」

4代目は2人の言葉に呆れ  
口を開いたところで止める

他の2人も同様、カラカラと笑っていたのだが  
それを止め、一斉に飛び上がると、サイトの体から先ほどとは比  
べ物にならない

黒い澱みが現れ、それが右腕に集中して行くと  
サイトの右腕が、肩から指まで真っ黒に染まる

「ちょっとこいつ……精神まで奪われた？」

「あーあー、こりゃ、廃人コース一直線だな」

「いた仕方あるまいな……」

3人はサイトから遠ざかると  
それぞれ斧、刀、ナイフを構え、サイトと向き合う

「ウウ　　オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ、オ」

「うっさいわねえ……静かにしなさいよ!!」



「おいおい、手、出すなよ  
俺がブツ壊・・・ぶえ!？」

「ちよ、はや!？」

「ぬ?・・・こいつ・・・」

「おいおい・・・痛えじゃねえかコノヤロウ

ちつたあやるようだが・・・この程度・・・って爺!?  
何時戻つてきやがった?」

「うん・・・ほ?なんじゃ、なんじゃお主ら殺気立ちおつて  
うん?おお小僧、なんじゃそのなりは  
全く、これでは『座』に戻すことはできんのう」

突如部屋に現れた、奇妙な恰好をした老人がサイトをみるや  
溜息をつき、スラリと、腰に差した剣を抜き放つ

「ほれ、この老人が遊んでやるわい」

「ちよ、爺ちゃん『座』はどうしたのよ!

まさか無人にしてきたんじゃ・・・」

「別にかまわんじやろ

奴は今そこに居るんじやから

まあ・・・わしが適当に相手しておるから・・・そうじやの  
4代目、お主『座』に入ってくれ」

「私がか？ふむ・・・周りに居るものをすべて切ってくればいいのか？」

「お主なあ・・・つとと！・・・ほつと

別にそんなことせんでいいわい

多分起きれば質問攻めにあうじやろうからその相手を任せるっ  
と言っことじや

ホレ行け、道は開いてやる」

老人はサイトの攻撃を捌きつつ

足を小刻みにならすと、4代目の目の前に人ほどサイズの穴が開ける

「そうなのか・・・では、久々の現世、精々楽しませてもらおうか」

「間違ってもむやみに刻むんじやないぞい」

「やらんさ・・・多分な」

4代目は不敵笑みを浮かべ

その穴に身を投じると、4代目を飲み込んだところで  
穴は閉じて行く

「全く・・・あやつも大概3代目よりじゃな・・・

さて・・・これで何度目じゃろうかのお？

いい加減もう飽いたわ、今期で終わりにしてほしいものじゃのう

老人は手に持った剣をサイトへと向け

サイトを睨みつけると、剣が光を帯びて行く

さて・・・かれこれ6000年

わし等も良くヤツとるものじゃの・・・化け物」

.....

sideセツタ

ハーク領

マダガスカルの森

ざわざわと蠢く森に囲まれた湖の畔に

木で造られた小さな小屋が1つ建っている

そして小屋の前に小さなパラソルが据え付けられた、

テーブルに腰掛け何とも言えない表情で目の前にある人の山を

見つめるセツタは小さく呟く

「・・・一体今日はなんだと言うのだ・・・やけに客人が来るな・  
・  
つと、またか・・・」

(侵入者、確保)

「うむ、御苦労だミラ・・・ってまた随分と・・・」

セツタは上空から籠を銜えたミラが降りてくると

その籠を受け取り、テーブルの前に積み上げられた山に籠の中身を追加する

「ふむ……20人くらいか、何処で捕まえた？」

(其処)

「……まあ、良い、引き続きよろしく頼む  
くれぐれも通行書を持った者に危害は加えるなよ？」

(了解)

セツタの言葉にミラは答えると

また、空高く飛び上がり何度も上空でグルグルと旋回し始める  
セツタはそんなミラの姿を見つめ、一瞬だけ高く積み上げられた  
山に視線を送ると

また、テーブルに戻ろうとしたところで足を止める

「うん？なんだリユーガよ、貴様、サハラとやらに行ったのでは  
ないのか？」

「あー……ジヨゼフに急用が入ってな

長めの休暇になったから、久しぶりに領地周り  
それより……今日はやけに多くないか？」

「私も困っていたところだ

お前の放った獣どもが働き過ぎる」

セツタは、突然現れたりユーガに驚くこともなく先ほどの様に席に腰掛けると、水を操り、積み上げられた山を近くに寄せる

「ふむふむ・・・まあ、メイジ崩れや山賊やらがこの噂をちらっと聞いて

来たってところか・・・俺の可愛いペット達に被害は？」

「ディアブロスが右角をへし折られたぐらいだ

まあ、折った輩は今その山の中で息絶えておるがな」

「そつか、まあ、後で望めば綺麗に治しといてやるか・・・それで？ちゃんと結界は維持してあんだらうな？」

「抜かりない、何処から誰が見ようと関係なく、隠し通せるさ無意識にその場所を避けるようにも工夫してある

まあ、お前や私と言った、力ある魔族や勘の良い奴ならば気づくだらうがな」

「なら良いさ、くれぐれも面倒だからって解くなよ？」

3日後にロマリアの坊主どもがここに査察しに来るから、そんなときはより嚴重にな」

「全く、簡単に言ってくれ」

セツタはそう言うと積み上げられた人の山から1人引き抜き持ち上げ、指を打ち鳴らすと、手に持った人が一瞬でミイラのように干からび

代わりにセツタの手のひらに赤い結晶の様な物が出来上がるとセツタはテーブルの上にある小さな籠に結晶を放り投げる

「結構貯まってるんだな」

「毎日毎日、絶えることなくここに運ばれてくるからなそれに、残ったこれの処理も一瞬で終わるから、楽でしょうがない」

セツタは手に持ったミイラを森に向かって投げると何処からか蔦が伸び、ミイラを掴み取ると森から大きな口が開け、ミイラを飲み込む

「相変わらず気色悪いな」

「そうか？別に私には何も手を出してこないから何とも思わんまあ、向こうにも知能があるから」

私に手を出さぬ方が良いと判断したんだろ？」

セツタは次々とミイラを量産し

赤い結晶を籠へ、ミイラを森へと繰り返すと10分も立たぬうちに山は綺麗になくなる

「慣れたもんだな、って、なんか木の身が一杯降ってきたんだが・

・・・」

「ああ、餌撒きしたからその例だろ

食ってみるか？中々うまいぞ」

セツタはすぐさまパラソルの下へと来ると

周りの森が揺れ、小屋の周りがあったという間に様々な木の身で埋め尽くされる

「これってまさか、あの植物の？」

「ああ、試しにこれの種を育ててみたら・・・ほれ」

そう言い、小屋の横の花壇の様な場所を指差すセツタ

リユーガはセツタの指の方向に視線を向けると

そこにはギヤーギヤーと口を開く植物が



「気色悪ッ！」

「酷い言い種だな

ここを守ってくれているのだぞ？

知能もあり、何でも食べるから、一家に一台なるぬ一鉢でもい  
いぐらいだ

誰も欲しがらんな

「誰が欲しがるとだよ、幾ら便利だからってそりゃ誰も欲しがら  
んわ」

「ふむ……可愛くないか？」

「何処がッ！？」

俺にはお前のセンスが分からん！！」

セツタは花壇に近寄り

蠢く植物を撫でると、植物は喜んだのか、またもその口を大きく  
広げ

歌うかのように不気味な鳴き声を響かせる

この植物はマダガスカル

種類は豊富で、俗に言う食人植物である

セツタの住む湖を中心に約3キロ程の広さの森にのみ生息しており  
周りからは、禁忌の森や食人の森など呼ばれるのはこの植物の所  
為でもある

リユーガは嫌がらせのつもりでセツタにこの住処を与えたが逆に  
セツタは

この到底人はおるか動物すら近寄らぬこの森を気に入り  
今や森からも歓迎されていると言った具合である

「どうだ、1鉢持って帰らぬか？」

お前の屋敷の花壇が物凄く映えると思うぞ」

「家の花を根絶やしにするつもりか」

「ふむ・・・番犬ならぬ番植にもなり

餌も塵でいい・・・素晴らしく効率的ではないか・・・

何が不満だと？」

「外見で即アウトだ、屋敷に居るバーちゃんが見たら卒倒するわ  
つーかそれも成長したら動き回るのか？」

「ああ、今も元気に森の中を駆け巡っているのではないか？」

私が新しい木の実を見つけたらすぐに育てては、花壇から消えて  
いくから」

「俺の領地内で化け物量産しないでくれますかね

まあ、この森からは出ないからここがどどん魔窟化するだけ  
だがな・・・

つと、そう言えばサンはどうした？」

リユーガは不気味な声を上げ続ける植物から目を逸らし  
辺りを見渡しながらセツタに問いかける

「サンなら日が昇っているうちには起きんよ

私が折角日の光を浴びても大丈夫の様にしてやったのに

なんでも、純血種たる私がくっとかなんとかいつて

未だ逆転生活満喫中だ」

「太陽サンなのに太陽を嫌うとはこれいかに・・・

いつソルナに改名したらどうよ」

「名前などどうでもいいのでは？」

私としてはいい加減夜に動きまわるのを止めてほしいのだよ

時たま私の寝込みを襲ってくるので最近寝不足だ」

「血ならここにあるじゃねえか」

リユーガは籠から赤い結晶を数個手に取り、お手玉をして見せるが

セツタは億劫そうに溜息をつくと口を開く

「それも純血種がどうのこうの言ってな  
強い者や美しい者の血を欲するようなのだよ……全くはた  
迷惑な」

「ああ、だから前俺に襲いかかってきたのね  
軽くあしらってやったが  
つと、そんな俺を狙う奴が居たんじゃ休暇にならねえな  
さっさと退散するとしますか」

リユーガはそう言うと立ち上がり  
羽根を背中から生やす

「今日はラークはどうした？」

「絶賛お昼寝中、おかげで1人虚しく、領地周り……  
んじゃな」

「ふむ……一体あいつは何をしに来たのだろうか……  
まあ、いいか……ん？」

セツタは飛び去って行ったリユーガを眺めていると

キイと扉の開く音が聞こえ、そちらに視線を向ける

「珍しいな、まだ昼だぞ？」

悪夢でも見たか？サン」

「見ませんよそんな物・・・おいしそうな血の匂いがしたので  
もしかしてリユウガ、来てました？」

小屋から現れたのは黒で統一された服を身に付け  
長い紫色の髪を蝙蝠の様な髪留めでまとめた小さな少女  
サンである

「今帰ったところだ、残念だったな」

「はぁ・・・だったらセツタの血を寄しなさい!!」

サンは、口を開けキラリと光る牙を露わにすると  
セツタ目がけ飛びかかる、しかし

「きゃうー!？」

「遅い遅い

その程度では後百年は必要だな」

セツタは、飛びかかってきたサンの額に指を向け

デコピンをかますと、サンは空中で何回も回転しながら湖へと着水する

「ゲホ、ゲホッ・・・怒りましたよ・・・」

「はッ、私に水を向けるとは相変わらず学習しないようだな」

「五月蠅いです!!」

サンは自分の頭上に、3本の巨大な水の槍を作り  
そのまま手を振り下ろす

「だから無駄だと・・・」

セツタは、唸りをあげて迫る水の槍に片手をかざすと

槍はパンツと音を上げ空中で破裂し唯の水に戻ってしまう

しかしサンは、片腕に火球を作り出し、空中で破裂し

地面に落ちる水に投げつけると

舞い上がる水蒸気によって、セツタの視界が狭まる

「ここです!！」

「どこなんだ？」

「え?・・・は、離しなさい!!」

と言つか何故私の居場所が・・・」

「水蒸気とて水は水、私に御せぬ水などない

まあ、頭を上手く使ったことだけは褒めてやろう、よしよし」

セツタは舞い上がる水蒸気など関係なく飛びかかってきた

サンの頭を鷲掴みにした後、そのままサンを抑えつける様に頭を撫でる

「ムキイーーーーー!!良い作戦だと思っただのにーーーーー!!」

「まあ、頭を使った褒美として、チャンスをやろう」

セツタはそう言い、湖に片腕を突きつけると、水がと浮き上がりグネグネと動くと、人型の水が出来上がる

「私の人形を倒せたらコップ一杯分くらいならばくれてやる  
10分以内なら、リユーガの血も手に入れよう、それでどうだ  
?」

「……良いでしょう、受けて立ちます……不死身じゃないで  
しょうね?」

「体のどこかにある核を壊せば倒せる  
まあ、精々頑張れ」

そのままサンを人形の方へと放ると、サンはその勢いに身を任せ  
人形へと拳を叩きこむ

セツタはそんなサンの姿を見つめ、椅子に座り直すと  
横から鳶が伸び、テーブルに幾つも木の実が置かれる

「悪いな」

「ギユワー……ギャワ!」

「食に困らず、無粋な者も居おらず  
玩具も居て退屈しない

「こんな良い住処が他にある物か」



セツタはテーブルに置かれた木の実を咀嚼しつつ  
奮闘するサンを眺め呟く

辺りに響くは木々が揺れ、木の葉のざわめく音だけとなり  
セツタは迫りくる酔魔に身を任せ、瞼を閉じて行った

## 五十一話（後書き）

つと、やっとの思いでオリキャラ全員出し終えました・  
後は立ち絵もないモブ程度

これから、物語は始まる！！・・・今さらかよぉor z

まあ、まだ名前も出ていないけど、主要オリキャラ後1人居るんですが

それはもうちよつと先に登場させます

つとそんなことより3日も投稿できなかった理由をお話しましょう・

・

なんと！リユウガこと相馬龍牙、誕生秘話（別に秘話でも何でもない）

が近日公開予定？

その名も・・・『人と魔を分かつ者』！！

・・・題名ありきたりでサーセン

正直題名にいちばん時間をかけ、結局、題名は設定考えた作者の友人W・Tの考えの物となりました

そっちの方をちよくちよくと書き貯めしてたらどんどん楽しくなっていくの間にかゼロ魔ほつたらかしに・・・と言う訳なんですよ

あ、だからと言って、こつちを遅らせるとかそんなことをはしませんよ？

その為に書き貯めしている最中なんです・・・ここ一週間はちよつと毎日更新できるか？ぐらいの更新スピードになってしまいましたが、ご了承ください

まあ、そんなこんなで近々公開予定の『人と魔を分かつ者』をよろしく願いますm（）（）m  
以上、作者のいい訳兼報告でした

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 五十二話（前書き）

とうつとるゝ・・・これ二度目だorz

どうも、ホントに前書きが思いつかない駄文な作者です

いやー、人と魔を分かつ者の方、進む進む

今ざつと10話ぐらい出来ちゃいましたよ・・・

一応7月が終わる前にはあげたいんですが・・・

難しいかな？・・・ま、此方の更新が遅れないようがんばります

それでは、本編どうぞ

## 五十二話

ハーク領

ハーク公爵屋敷

うすす……どうも龍牙です……あ、失礼、リユーガです  
奈何せん作者があつちの話ばかり書いてるもんで、文字変換がつ  
られて……

って、何をいつとるんだ俺は  
ま、いいか、そんな訳でジョゼフの急用の所為で暇になった俺は  
セツタを冷やかに言つた後、領地内の生態やら、鉱石なんかを  
調べてたら……

懐かしいものを見つけてしまった……まあ、その話は後で、と  
そんな感じで領地をのんびり散策してたら……いつの間にか  
1日どころか3日も経つてたよ……

いやー、明るいなあーやら、暗いなーとかは思っていましたけど、  
まさか3日って

俺、その間飲まず食わずで生きてたんだぜ？凄くね？

いやー、楽しい時って時間が直ぐに過ぎて行くから困るね

とまあ、思考できる生物は分かかってしまうと急激に来るもので

今や、迫りくる空腹、渴き、眠気、気だるさに耐えつつ、屋敷に  
帰ってきたんですが……

「おい、何時からマイ・ハウスは学生の溜まり場になったんだコラ  
お？なんとか言ってみろやハゲ」

「うぐぐ……ちょ、洒落になってないって団長……無理無理  
しにゅ」

リユーガは自分より一回り大きなギークの首をギリギリと締め上げながら

ギークに問いかけるが、ギークの表情はみるみる青ざめて行く  
そしてリユーガはそんな顔を青ざめさせるギークの後ろでプルプルと震える

黒装束の男達に視線を向け、問いかける

「おいおい、早く答えないと副団長が、こいつ……死んでるんだ  
ぜ？ッて感じになっちまうぞ」

「だ、団長……これには訳が……」

「どんな理由で俺の家が、餓鬼共の遊び場になつとんじゃ  
見る、俺の可愛い竜トックスの子供達が嫌そーな顔で学生たちを睨んで  
いるじゃねえか」

リユーガはギークを片腕で締め上げつつ

柵で囲まれた、野原を指差すと

柵の周りに数え切れないほどのマントを付けた同い年くらいの子  
中と

その群がる人に向かってギャーと吠える小さな様々な竜が居る

「つーか、何こいつ等？俺の2つしかない安住地にこつても群が  
れると殺意わくんですけど」

なに？やって良いの？殺っちゃっていいの？」

「そ、それは勘弁願いたいんですが・・・それと副団長が動かなくな  
ったんですが」

「気にすんなこの程度じゃこのハゲは死なん

ってあーあー、可哀そうに、こつても鬱陶しい視線向けられると

お前らも嫌だよなあ？

ホレおいで」

「「「ギユワー！！」「」」

リユーガは動かなくなつたギークを放り投げると

柵に群がる人をどかし手を打ち鳴らす、すると

備え付けられた小屋や、辺りで寝転がっていた様々な種類の竜達  
がリユーガ目がけて一斉に群がり始める

「ゲホツ・・・ゲホツ・・・あー、団長もうちよつと手加減してくれたって・・・」

あー、坊ちゃん方、怖いお兄さんが帰ってきちゃったんで今日の触れ合いはなしで、後日もう一度機会を作る様に私の方から

学院長の方に話しを付けるので

今日のところは・・・ほら！団長が戯れている間に早く坊ちゃん方馬車に詰めねえか

今なら何とか誤魔化せるから（ボソ）」

「了解（ボソ）・・・はい、皆さん、此方へ」

ギークはむせながらも団員達に指示を飛ばし

手際良く、柵に群がっていた人たちを馬車に詰め、送り出すとふーと、息を漏らし、体中に小さな竜を乗せるリユールガを見据えこっそり逃げようとしたところで、足元に何かが絡みつく

「はい、一名様ご案内です」

「・・・団長・・・これは？」

「いいから早く来なさいな」



「ぬお！？あ、足が勝手に！！」

ギークは足に絡みついた何かに操られ  
柵を越えると、数多の竜の頭を撫でる、リユーガの目の前でひざ  
まずく

「で？あの餓鬼どもなんだ？

ガリア魔法学院の生徒かなんかか？」

「お、仰るとおりです……」

「その、魔法学院の生徒が何故に俺の家に群がってたわけ？

しかも今日だけじゃないらしいな

一体どう言つつもりだ？」

リユーガが半目でギークに向かって声を放つと

ギークはビクッ！と肩を一度揺らすと重々しく口を開く

「それが、ガリア魔法学院の校長が何処からかこの屋敷に多くの  
幻獣が居る事を知り

使い魔を召喚する前の、つまり1年生に幻獣と触れ合う機会を  
与えてくれないかと

頼まれたからで……」

「ほう・・・と、言うことはギーク、お前、俺の許可なしに勝手にそれを了承したと？」

「勿論確認はとろうとしましたよ？」

ですが、イザベラ様が勝手に学院長にOKサインを出して

おまけに希望すれば、誰でも来れるようになってしまったので  
今や予約数が半端な数じゃ・・・」

ギークはそう言い、懐から紙の束を取り出しリユーガに差し出すと  
リユーガはそれに目を通す  
すると、其処には『見たこともない数多の幻獣が君を待っている』  
と言う

キャッチフレーズの下にガリアの貴族だけでなく、他国の（ロマ  
リア以外）の貴族の名前が

約10枚ほどびっしりと書き込まれている

そして最後のページには、リユーガの親であるリユーブの署名と  
ブラットリーの家紋、そして極め付けにはガリア王家の家紋まで  
付いている

「・・・パピー・・・あんたまで・・・それにホイホイと王家  
の紋乗せるんじゃないやねえよ・・・」

ギーク、全部キャンセルで」

「うええ！？これだけ予約入ってるんですよ？」

おまけの前金まで貰ってるんですから・・・それはちょっと・・・  
第一、王家の家紋が付いてるんですから幾ら団長でも・・・」

「黙れ、俺にそんな物が通用するか

第一こいつ等が嫌がっているんだからしょうがないだろ？」

「そんな無茶苦茶な・・・」

「あのなあ？幾ら幻獣つったて

竜つてのは知能高くて、嫌なもんは嫌って言うんだよ

何なら聞いてやろう、見られるの嫌な奴この線の内側に来なさい」

リユーガは一本の線を引き、竜達に言葉を発すると  
竜達は何のためらいもなく、線の内側にすっぱり収まる

「これで分かっただろ？」

大体、良く怪我人出なかった、こいつ等ストレスためまくって  
るぞ

ッて痛いつての髪を食うな！！」

「はあ・・・じゃあどうするんですかこの予約  
まさか全部に断り入れてくるんですか？」

「あーん？そんなもんお前らが勝手にやったんだからお前からでなんとかしろや

ちなみに、次見かけたら、そいつら炭も残さない程燃やしつくすんで

そこんところしく

つか分かったからちよつとは離れるお前ら！

鱗が当たって痛いんじゃ！！

あー、はいはい、今飯持ってきてやるから其処で大人しくしてんしゃい・・・

ってだから髪の毛を食うな！」

リユーガは纏わりつく竜達を引っぺがし小屋の方へと足を進めると  
竜達もぞろぞろとリユーガの後に続いて行く

ギークはそんなリユーガの姿を見つめ涙目で小さく呟く

「はあく・・・騎士団の仕事も溜まってるのに・・・

仕方がない、おい、馬回せ」

「何処まで？」

「今の時間ならきつと学院に居るはずだ・・・  
機嫌が悪いだろうから丁重に扱えよ？」

「・・・分かりました、では」

ギークが団員の1人にそう告げ  
団員が馬に跨り駆けて行くのを見つめギークは頭を掻きながら  
聳え立つ大きな屋敷へと足を進めた

.....

sideギーク

ギークは鉄の箱から天に舞い上がる炎を見つめ  
頭を掻きながら呟く

「うん・・・流石に100メートル全部火薬に変えたのは  
やりすぎたかな・・・」

ギークは尚も舞い上がる炎に向かって杖を振るい  
約10秒ほど燃え上がっていた炎が次第に勢いを失い  
残ったのは熱によつて赤みを帯びた鉄の箱だけになると  
ギークは鉄の箱に穴を開け、中の様子をうかがう

「1人相手にやりすぎた感がひしひしと伝わってくるよこれ  
死体、残ってるかな……」

ギーシュはそのまま中へと足を進め

キョロキョロと辺りを見渡すと、中は一面焼き尽くされており  
様々な物が焼けた匂いが漂う中

ギーシュがある違和感を感じると、口に指を当て甲高い音が響くと  
焼けた地面がボコツと盛り上がり、中からエコーが現れる

僕の勘違いだと良いんだけど……

「エコー、頼めるかい？」

「ガル！」

エコーはギーシュに向かって大きく首を縦に振ると  
スンスンと鼻を鳴らし、真っ黒な地面を嗅ぎまわり  
エコーが全体を歩きまわると、エコーに刻まれたルーンから  
ギーシュの頭に情報が流れ込む

……やっぱり、か

人の焼けた匂いが無い、となると

「偏在か・・・逃げられたってことかな・・・  
でもやけに堅かったから偏在じゃ・・・ん？  
何をやっているんだい？」

ギーシュは1人先ほどの黒フードの事を考えていたのだが  
横からザクザクと奇妙な音が聞こえ  
音のする方を見つめると、エコーが前足を器用に使い  
黒く焼けた地面を掘り返し、開けた穴に顔を突っ込むと  
ギーシュの方にトテトテと近寄ってくる

「何だいこれ？・・・随分と気味の悪い造形だな・・・」

ギーシュの手のひらにエコーが掘り返した穴から持ってきた物を  
置くと

ギーシュはそれを眺める  
全体が黒く煤けているものの、所々から光を反射するそれは  
手のひらに収まるほどの大きさではあるが、見た目以上にずっし  
りと重たく

ギーシュは手に持ったそれにダイレクトマジックをかけ  
頭の中にその物体の成分が流れ込んでくる

未知金属4%・・・鉄12%・・・銅3%

金 81%！？

「……嘘だろ……ほぼ純金の塊じゃないか」

ギーシュはディレクトマジックにより判明した成分に驚愕し服の裾で拭いて行くと

先ほどまで黒かったことがウソの様に鮮やかな金色の光を放つ物体に変貌する

「これ……幾らぐらいするんだろ……  
ってまだあるのかい？」

「ガルウ？」

ギーシュはまたも穴を掘り始めたエコーに気づき

エコーの方へと駆け寄ると

今度は先ほどの物より大きな物をエコーが穴から掘り返し

ギーシュの目の前に置くと、ギーシュは再度ディレクトマジックでその成分を調べて行く

……未知金属ほぼ100%  
所々に鉄やら銅つてところ、か



「・・・エコー、他にもあるのかい？」

「ガル・・・グルウ・・・」

ギーシュがそうエコーに問いかけると

エコーは辺りの匂いを何度か嗅ぎ、せつせと穴を掘り始めると  
1つ2つと黒く煤けた、物体が地面から掘り起こされる

ふう・・・最初の奴以外は僕じゃ分からない物ばかりだったな・・・  
それにしてもこれってまさか・・・

ギーシュは様々な形をした物体を全て地面に置き  
1つ1つ確かめるように並べて行くと  
物体は、人の形をした物に姿を変える

「・・・スキルニル？」

いや、スキルニルだったらこんな風にはならないはず・・・  
だとしたらガーゴイル？

いやいや、さっきの奴は魔法を使っていたし・・・」

「ふむふむ、轟音が聞こえたから何事かと思いきや  
これまた私好みの物があるじゃないか」

「・・・何時から其処に？」

と言つか心臓に悪いのでいきなり現れないでくださいよウィルさん」

ギーシュは突如出現したウィルを半目で睨むと

ウィルはそんなギーシュの視線を気にすることなく

目を燦々と輝かせ、地面に並べられた物体を見つめ、ギーシュに  
問いかける

「これは何かな？ギーシュ君」

「さあ？先ほどこの中で爆破させた黒フードだとは思っていますが・

・・・」

「ふうむ・・・見たこともない金属だね

リユーガならば何か分かりそうだが・・・それでは面白くないな

やはりこう言うものは自分で調べ、理解せねば  
クククク・・・」

「あ・・・目が怖いですよ」

ギーシュは、どんどん顔を歪ませ不気味な笑い声を上げるウィルから遠ざかると

エコーも体を震わせ、ギーシュの後ろに隠れてくる

「おつと失敬、最近こう言った面白い物が無くてね

少し溜まっていたのだろう・・・すまないがギーシュ君

これは貰って行くよ、さてさて、どんなものか非常に楽しみだ・

」

「あ、これも調べてくれませんか？」

「うん？・・・これは？」

「エコーが持ってきた物で

それも金属みたいなんですけど・・・僕には何が何だか」

「ふむ、まあ、これのついでに調べておくとするよ

何か分かったら、伝えに来るので、それじゃ」

ウィルは地面に並べられた物を一気に抱えると物凄い早さで、その場を後にする

「どれだけ、楽しみなんですか・・・まあ、いいか  
それよりここ、直さないとな・・・」

ギーシュはそう言い杖を取り出すが

視界がぼやけ、足がふらふらとおぼつかない足取りとなる

と、つと？・・・ああ、アースウォールにサンドストーム、おま  
けに広域錬金までしたから

精神力切れたかな？

「ふう・・・あー、気持ち悪・・・オエ・・・

ごめんエコー、ここ直しておいてくれる？」

「クウン？・・・ガル」

エコーはその場で腰を下ろしたギーシュを心配そうに見た後  
前を向き大きく息を吸い込み、耳まで裂けた口を大きく開く

「！！！！」

ビリビリと空気を振動させ、エコーの発した遠吠えは人の耳に聞

こえる音域を突破すると

地面がゴゴゴと唸りを上げ揺れると

真っ黒に焦げた地面がみるみる、元の姿へと戻って行く

「ありがと、相変わらず凄いなお前は」

「ゲルルル」

ギーシュはエコーを褒めながら優しく撫でると

エコーは気持ちが良いのか目を細めながら喉を鳴らす

少しの間そうやってギーシュがエコーを撫でていると

ピンクの髪を揺らし、ギーシュの方へと走ってくるルイズを見つけ

ギーシュは立ち上がり、ルイズの方へと足を進めて行った

.....

side???

## ロマリア連合皇国

様々な物がごちゃまぜに置かれた大きな空間

その中に、大きなドームの様な物幾つもあり

1つのドームの中から奇妙な格好に身を包んだ男が顔を青くして出てくる

「はあ・・・いかな、なるべく早く圧覚超過の機能を付けねば此方の身が持たぬ・・・」

「また壊したのか貴様は・・・あれが幾らすると思っっているのだ」

「・・・学生と思って油断したに過ぎない、実戦ならば俺が勝っている」

「またまた、お前生身の方が弱いだろ？」

現に最初に受けた一撃でお前、死んでいるぞ？

他にも・・・おーおー、合計5回は死んでるなこれ」

シュペルは手に持った書類に目を通し

そう、顔を青くする男に声をかけると

男は鼻を鳴らし、シュペルに言葉を返す

「大体、ステイシーの奴が足止めされたから保険の私が出張ったのだから？」

やはり混ざり者なんぞを使うから・・・」

「それでも、貴様が弱い事に変わりはない」

「チィ・・・俺は制作に戻る

ある程度データは取れたからな・・・それで？

予言とやらの方はどうなっている？」

「万事抜かりはない、一週間後には行われるそうだ

心酔された者ほど扱いやすい物はないな・・・だが

あのヴィンダールヴとか言ったか？あの小僧、少し邪魔だな」

「あん？んな奴殺しちまえばいいじゃねえか」

「向こうのかなり深い所に関わっているらしく

そう簡単に手を出すわけにもいかないのでな、本当に面倒なのだ

よ

「まあ、そっちはあんたに任せるよ

俺は俺でやることあるんでな」

奇妙な格好の男はそうシユペルに告げると

キビツを返し、物が乱雑に置かれた方へと消えていく

シユペルはそんな男の後ろ姿を眺めつつ、手に持った書類をほか  
ると

懐から一枚の写真を取り出す

「そろそろ潮時・・・か  
混ざり者も、いい加減始末しなければな・・・  
神と忌まわしき下等種の子、か

写真に映っているのは、二対の羽根を生やし  
漆黒の鱗に身を包んだ異形の者

その存在、それだけで・・・万死に値する」

シュペルはそう呟き手に持った写真を  
握りつぶすと、炎が拳を包み込み  
辺りを怪しく照らし

燃えカスが宙を舞うと

シュペルはその場を後にする

そして、宙を舞った燃えカスが

力なく下へと落下し、地に落ちた瞬間

小さな漆黒の炎が巻き上がり

燃えカスをこの世から消滅させる

大きな轟音を響かせ・・・





## 五十二話（後書き）

はいはいっと・・・話し進まねえorz

やばい、これホント夏の間に終わらせれるのか？

まあ、なんとかなるっしょ・・・なんやかんやの55話目、如何でしたか？

この駄文な作者に優しく文の書き方を教えて下さる方

募集中です・・・本読んでチンプンカンプン、意味分かんね

まあ、それでも何とか書いて行くんで

これからも、この駄文をよろしくお願いいたします

ここまで駄文を読んでいただきありがとうございます

この作品への感想、意見、指摘をお待ちしております

## 五十三話（前書き）

激しく鬱だ・・・まじでやばい

どうも初っ端からローテンションな作者です

まず皆様に・・・すいませんでしたああああああああああ  
投稿がここまで遅れてしまって・・・ホントもう・・・何も言えま

せん

そして次に・・・すいませんでしたああああああああああ  
人魔を分かつ者、かなり遅れます

ホントもう・・・駄文な作者の無駄に生きてきた人生の中で  
トップ3に軽く入る大事件・・・その名も！

USBメモリお亡くなり事件  
全てはこれの所為なんですよ

実は先日、この魔人と分かつ者の原稿が入ったUSBメモリが  
何故か起動しなくなりました・・・ああ

あれには魔人の10話分と分かつ者20話分が入っていたのに・・・  
一気に上げて皆様を驚かせようとした結果がこれですよ・・・笑  
えねエ・・・

と言う訳で現在作者の脳内に残っている文をサルベージ中ですんで  
少し更新が遅れます・・・

本当に申し訳ございません、なんとか8月までにはサルベージ完  
了させますので

• そんな訳で今回、色々可笑しいやもしれませんが・・・どうぞ・・・

## 五十三話

sideアルトリアル

「ふう……なんとか……なツたのかのお……」

「ガ……ア……」

「やれやれ、戦う度にこれでは……わしに身が持たんわい  
それに今回のこれ、銃……なのか？」

連射やら長距離射撃やら……全く冗談じゃないの」

2代目はサイトの周りに転がっている

真っ黒な銃の形をしたものを、蹴り飛ばすと

右腕に金色に光る剣を突き刺し

サイトの右の手の甲で怪しく光る文字を見つめる

「ふむ……知恵を持たずに3割を開放とは……」

ガンダールヴに選ばれたのはこう言う訳か、

やれやれ、偉大な始祖とやらも何を考えているのやら……

まだ、この化け物を抑えようとしているのかのお。」

「やっと終わったか・・・爺！ちよつとは抑えられんのか？  
『部屋』がブツ壊れるかと思っただぞ！！」

「すまんすまん、8代目がやけに強よかったのにな  
少しばかり本気でやってしまった」

「あー、まだ頭がくらくらするわ・・・」

「大丈夫かの？  
つとそう言えばあれから何日経ってある？」

「3日、ついでに言うなら4代目がある程度話したところ  
どうすんだ？一応奴は引っこんだみだいだから・・・このまま  
8代目無理やり

『座』に戻すのか？」

「・・・ふむ・・・そうじゃのお  
わしも本気でやったし、この通り右腕に光剣も突き刺した・・・  
まあ、保険で知恵を与えておこうかの」

2代目の言葉に2人はぎょつと目を見開き、声を荒げる

「おい！こんな餓鬼に知恵なんて与えるのか！？  
下手すりゃマジで蘇っちまうぞー！！」

「いやー、知恵なしに3割も解放したんじゃ  
わし以上に奴を御せると思うぞ？」

「だからてよお・・・こんな餓鬼絶対墜ちるだろ  
大体爺もそれが原因で・・・」

3代目がそのまま言葉を続けようとしたところで  
2代目が口に指を当て、首を横に振る。

「言ってくれぬな、6代目もおるんじゃ・・・  
おそらく8代目は奴を御するために選ばれた、それにの  
いい加減6000年もこつは疲れたじゃろ？  
そろそろ賭けに出ようではないか。

停滞していた時を未来へと  
賭けるはこの老いぼれの魂一つ、負けたとしても安いものじゃ  
ろ？。」

「・・・？・・・爺ちゃん、それってどついう意味？」

2代目の言葉に6代目が問いかけるが返事はなく

ただ3代目は時々し始め、腕を振るい赤い扉を出現させる。

「……チイ！勝手にしろ

俺はしらねえからな！」

「もし負けたならば、次はお主じゃからな  
後は頼むぞい。」

「……知るか、そのまま死んどけ、クソ爺」

「え？ちよつと爺ちゃん？私にも分かるよう説明してよ！」

「……『部屋』に戻んなさい

お主はまだ知るべきことじゃない、まだ3代目と4代目がある  
からの

ほれ」

2代目が指を打ち鳴らすと、6代目の足元に橙色の扉が現れ  
6代目を吸い込む

「ちよつとー！じいちゃ  
」



「……さて、長かったのお……」

約束を違ひ、お前の見たかったものを見ると宣言した様かこれ、

か  
6000年、ひたすらに目指し……結局若いもん託して消える、

これで……良かったのかのお……ブリエル」

2代目は手に持っていた剣を手放し、膝をつく

と  
サイトの右腕で怪しく光るルーンに自分の左腕のルーンを合わせると

2代目の金色に光るルーンが、点滅し、サイトの左腕にあるルーンが白く光る

「ふむ……一度に全てを与えるのは……ちと不安じゃ

刺激と同時に与えられる……でいいかのお……」

はあ……次にわしが見るのは

望んだ物か……何も覚えておるぬ赤子に戻るか……

何もない闇か……まあ、偶には冒険せねばなるまいて

後は……神のみぞ知る、か。」

2代目の咳きが終わると、2人の左腕のルーンが大きな光を放ち

2人が光に包まれる

目を覆いたくなる程の光が続き、やっとの思いで光がおさまると

其処には、倒れ伏すサイトと

小さな金色の扉があるだけであった。

.....

sideサイト

サイトは何も見えぬ真つ暗な空間で胡坐をかき  
唯一見える、目の前の蠢く何かの話を聞いていた

「そうか・・・それでお前はこんな所に6000年も居たのか・・・

」

」

「!!」

「そうだよなあ・・・こんな所に居たら、そりゃ退屈だよなあ」

蠢く何かが生を出すと、サイトもそれに逐一答えて行く

そんなやり取りを何度か続けていると、急にサイトの体が発光し  
始め

前に居た蠢く何かが生をあげる

」

「!!」

「うお！？体光ってる！？

・・・え？これ嫌いなのか？

どうにかして・・・あ、消せた」

「  
」

「ふーん、今のお前を縛り付ける力なんだ

あ、安心していいぞ、俺はそんなことしないから」

サイトが蠢く何かにそう言つと、喜んだのか

奇妙な叫び声を上げ、サイトの体に生暖かいものが当たる

「舐めんなって！

それにお前の体が当たるとごっごっして痛いんだからぞ」

「  
」

サイトはそう言い、体にのしかかってきた蠢く何かを突き放すと蠢く何かは落ち込んだのか、しょんぼりと悲しい泣き声をあげる

「そう落ち込まれるとなんだか・・・って言うかお前ここから出

れないのか？」

「

「ふーん、さっきの光が邪魔してんのか・・・  
どうにかできないのか？」

「

「バカ言っなって、さっきの話聞いてたら  
お前俺の体に入ったとたんに暴れ出すんだろ？」

「

「え？だったら代わりにやってくれって・・・  
無理だよ、俺、そんな人を殺すとか・・・」

「

「そりゃ、お前の言う通りなら、それは腹立つけど、さ・・・  
え？殺さなきゃ、こっちが殺される？まっさかー  
そんな訳・・・え？」

サイトの右目に誰かの視界と思われる映像が流れ始め、サイトは  
啞然とする

「お、おい！何だよこれ！……え？こいつが見てるのって……  
俺？」

右目に映し出されるのは包帯で身を包んだサイト  
横にルイズもいるがそちらを見ていると言う訳ではなく  
ただ、サイトに視線を注ぐ誰か。  
そして次の瞬間、視界の端に腕が映り、緑色の霧が放たれると  
サイトは慌てて横に居たルイズを抱え窓から飛び降りる  
そして緑色の霧が先ほどまでサイトの居た場所を腐らせて行く

「な、何だ今の……って言うか、また誰かが俺の体を！  
いい加減にしるよホントに……人の体を何だと……  
え？……其処じゃない？……今、殺されかけた……ッて、  
ああ！？」

「た、確かに……っーか俺なんか殺してどうするんだよ。」

「知らないって・・・あー、もう訳わかんねえ・・・」

サイトはそのまま寝転がり、目を閉じる。  
目を閉じていようが、右目に映し出される映像にうんざりしつつも  
サイトは蠢く何かに尋ねる

「なあ・・・お前、出たいんだよな？」

「そうだよな、だったらさ、一緒に出ないか？  
俺1人で出るつてのもあれだし」

「いや、無理じゃない・・・と思う。

さつき来た光を使ってお前も取り込めば2人で出れる・・・様な気がする。

だからさ、力貸してくれよ、  
そんで一緒に外に出ようぜ。」

サイトはそう言い姿の見えない蠢く何かに手を差し出すと  
蠢く何かはプルプルと震え、高らかに笑い始めると、サイトの手  
を握り締める

すると、先ほどまではなんとなく理解できた泣き声ではなく  
ハッキリとした声が頭の中に響いてくる

『クカカカカ・・・』

寄せせではなく・・・貸せ、か

面白い・・・実に面白い、

今までの6人とは違うな、人間。

まあ、出られるとは思えんが・・・やらずに後悔するぐらいならば  
やって後悔しようではないか!！」

「お、おお？なんか行き成りテンション高くなったな

あ、そう言えば、お前名前なんて言うの？」

『俺か？・・・さあ、シャイターンの右腕とか呼ばれてた気がする  
けど・・・』

元々の名前・・・あつたような・・・なかつたような・・・』

「何だかあいまいだな・・・んじゃ適当に・・・

俺のやってたゲームの主人公の名前でいいか？

確か・・・意味は邪なとかそんな感じだった気がする名前。

正直厨二臭いけど」





『まあ、そうだろうな、人間に扱えるもんじゃねえし  
でも・・・良くやった方だよ』

「おい！諦めるのか？まだ俺は大丈夫・・・」

サイトが口を開こうとするが、何とも言えない疲労感に襲われ  
そのまま倒れ伏せると、瞼が強制的に閉じられて行く

「起き・・・たら・・・もう・・・一回・・・  
次・・・は・・・大・・・じょ・・・う・・・」

『バカ、次なんかねえよ、  
言っただろ？良くやった方だって』

「ふ・・・ざ・・・」

サイトはそのまま瞼を閉じ、規則正しい寝息を立て始める  
ウーブはサイトが眠りについたことを確認すると、  
楽しそうに笑う。

『カカカ』

ホントに・・・良くやった方だねえ・・・  
空間割つちまいやがるなんてよオ』

ピシッ！と真っ暗な空間のどこかから亀裂の入る音が聞こえ、  
徐々に闇に包まれた空間に光が差し込む  
亀裂はさらに音を立て、最後にパリン！と大きな音が響くと  
暗闇が完全に取り払われ、サイトの居る場所が照らし出される  
すると、サイトは立ち上がり床に落ちている、闇を纏った何かを  
持ち上げると  
右腕の中にそれを納める。

『さて・・・6000年ぶりの外  
縛りは一切なし・・・最高の気分だな』

サイトは虚ろな目でそう呟くと  
不気味に笑い、歩きだして行った

## 五十三話（後書き）

どうでしたでしょうか？

正直作者は一度書いたものを必死で思い出しながら書いたんで  
違和感ありまくりです

ああ・・・USBメモリ・・・何故壊れたし・・・

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます

この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 五十四話（前書き）

かふつ・・・ダルが・・・パパ・・・だと

分かる人には分かる、まあ実質上の言葉に意味はありません  
そんな訳で・・・どうも、少しだけ立ち直った駄文な作者です  
復興作業・・・正直しんどい、  
こんな感じか？こんななんだっけ？とかいろいろ考え、改文すれば、  
あら不思議

まったく別の話しに・・・orz

まあ、過ぎたことをいつまでも愚痴愚痴と言ってもしょうがない  
なんとか頑張るんでこれからもよろしくお願いいたしマッスル  
そんな訳で・・・どうぞ

## 五十四話

S i d e イザベラ

フラン領　ハーク領、西門

「……ねえ、何時になったら進むの？」

「申し訳ございません、どうも前が立て込んでいるようで……  
何があったんでしょうね？」

「はぁ……全く、リユーガも面倒な物作ったわね」

イザベラはそう溜息をつく

馬車の窓から見える、高さ5メートルほどの大きな門を見つめる

イザベラは王都リュティス近郊にあるガリア魔法学院からハーク

領へと向かう為

リユーガの父、リユーブの管理するフラン領を通、フラン領から唯一安全にハーク領へと

入れる西門で止まっていた。

リユーガが管理するハーク領へ安全に入るには、

まずゲルマニアのツエルプストー領との領域沿いにある北橋

次に国が管理する国域に沿って立つ南門

そして最後にフラン領から入れる西門である

北側は深い谷になっており。橋を通る以外は空を飛ぶ以外に、入ることは不可能。

南側は門は立っているものの、実質横から抜ける事は可能。

しかし、南にある平原にリユーガが従えた竜達が放たれており、南門で許可証を貰わなければ、問答無用で殺されてしまうので、

ここも無断で入ることは不可能。

そして西側は、西門を通る以外は森に入ることになり、森は大きく2つに分かれており、

1つはセツタが住む、マダガスカルの森、

1つは幻獣達が棲む、獣の森であり、入ったらまず生きて森を出る事は出来ない。

最後に東側は、サハラとなっているため、此方からは誰も入ってこないと言う

空を飛ぶ以外は無断で侵入することは不可能。

まあ、空を飛んだところで、空にはミラを始め、リユーガが選んだ知能の高い竜が旋回しているので、入りこむことは不可能なのである、

「安全は保障されても・・・使い勝手がねえ・・・

現に今、詰まっているわけだし・・・で？何が原因なのかしら

？」

「今使いを出しましたので……っと、おい、前はどうなっていた？」

「それが、先頭の貴族の団体様がごねているようです。パツと見、後一刻は動かないんじゃないかと……」

馬車に顔だけだした男が頭を掻きながら困ったように言うと  
イザベラは溜息をつき、仕方がないと杖を取り出す

「……はあ……後ろの事考えなさいよね……  
もういいわ、迎え呼ぶから帰って良いわよ」

「お、お待ちを！！万が一、イザベラ様に何かあったら私たち護衛は……」

イザベラが杖を取り出し呪文を唱えて行くと  
馬車を操っていた男が慌ててイザベラを止めようとするが遅く、  
馬車の横に大きな水柱が立ちあがると同時に、イザベラは馬車から飛び降りる

「あんだ達よりあの子の方がよっぽど安全よ」

「で、ですが……うわっ!?!……お、落ち付けお前ら!?!」

男がイザベラに言葉を返そうと口を開くが

馬車を引つ張っていた2頭の馬が急に暴れ出し、男はそれを宥め、

やっとの思いで落ち着かせると

いつの間にか巨大な影に覆われており、上空からミラが降りてくる

(我、呼、姫?)

「ええ、屋敷まで乗っつけてくれないかしら?」

(了解)

降りてきたミラは、反論することなく

イザベラに従い、身を屈ませる

「ありがとね、リユーガに良いご飯上げるように言っというて上げるわ  
それじゃ、あんたら帰って良いわよ」

「ま、待ってくだ……」



イザベラは男の言葉を無視し、ミラに飛ぶよう促すと  
ミラは強烈な風を巻き起こしながら、空高くへと舞い上がる。  
イザベラは先ほどまでの馬車とは違う、解放感に包まれ  
大きく伸びをすると、上空から地上を眺める。

何が一刻は動かないよ、

明らかに半日かかって動きそうにないじゃない。

はあゝ・・・お父様ももう少し融通の利く、護衛にしてくれないか

しら・・・

いや、そもそも護衛なんて要らないってのに・・・

ホント王女って立場は良い時と悪い時の差が激しいわね。

っと、あれが先頭の貴族たちかしら？どれどれ・・・

イザベラは真下になって見えなくなったため

ミラから身を乗り出して、丁度真下にある行列の先頭を見つめる。

門兵に何やら文句を言っている男とその後ろでピシッと綺麗に並ぶ  
甲冑に身を包んだ団体が見える

「なに？あいつ等バカなの？

武装して入れるわけが無いのに。

それにあんなに引き連れちゃって・・・あー、やだやだ

どうして貴族って見栄張りたがるのかしら」

イザベラはそう呟くと、地上から目を離し

ミラの上で大の字で寝転がると、体を包む心地よい風に身を任せ

ゆっくりと瞼を閉じて行く

「あー・・・私ちよつと眠るわ。

付いたら起こして頂戴ね、ミラ。」

(了解、休)

「おやすみ」

そのままイザベラはミラのもふもふとした毛を布団に眠りについて行った

.....

ハーク領、公爵屋敷

リユーガ自室

大きな天窓から太陽の光が差し込み

天然の光によって照らされた明るい部屋

日の光を反射する綺麗に磨き抜かれた、刀や槍と言った武具が飾られていて

他には本棚一つと、引き出し付きの机。

そして屋敷の主であるリユーガは、太陽の光を目いっぱい浴びるかのように

天窓の真下にあるベットですやすやと、静かに寝息を立てている。そして太陽の日を遮る様に雲が太陽を覆い、リユーガに日の光が当たらなくなると

リユーガの寝息が止まる。

「・・・はあ

折角の日の光が・・・台無しだなホント」

リユーガは酷く不機嫌そうに呟くと、ベットから体を起こし

手の届く範囲にあった刀を腰に差すと、大きな伸びをし

パキ、ポキと固まった関節が音を鳴らすと、

グ、と腹から空腹を求める音が響き、

リユーガは机の上に置いてある干し肉をかじりつつ、

壁から垂れ下がっている紐を引っ張る。

すると、すぐさま扉をノックする音が聞こえ、扉の向こうから声が聞こえる。

「団長、お呼びで？」

「腹減った、婆ちゃんに適当に飯作るよっ言っとけ」

「了解」

簡単なやり取りの後、スツと扉から気配が消えていく。リユーガの屋敷は執事やメイドと言った従者はおらず、代わりに中央騎士団の団員が管理しており、それ以外はハイスペックな老婆1人でやり繰りされている。以前イザベラに人を雇わないのか？と尋ねられたところリユーガは屋敷など寝る場所程度にしか思っていないのか全く他の人を雇う気はない。

だが、1人で全ての家事をこなすには奈何せん、リユーガの屋敷は広すぎるので

中央騎士団の団員が家事をこなしているという現状。最初こそ団員達は、冗談じゃないとそれぞれが愚痴を漏らしつつも初めての事に右往左往しながら、なんとかこなしていたのだが、1年もすれば楽しくなってきたのか、皆自分から進んでやるようになり

中には、騎士団止めてどっかに仕えようかなと思う者まで出てくるほどの変わりようである。

それでも、リユーガの屋敷に居るのは、騎士団員として国から払われる給与のほかに

リユーガ個人から払われる給与が破格すぎるからなのである。

「・・・なんだが金だけみたいなの言われようだな、おい」

普段訓練と称してボコってるお前に人徳があるとでも？

「・・・否定できない、俺が居るorz・・・ハッ！俺は何を言っているんだ？」

リユーガは怪しげな電波発言をした後  
机の引き出しにかけられている、かなり嚴重な鍵を外し  
中に入っている紙の束を取り出すと、リユーガはベットに寝そべり  
紙の束に書かれてあることを眺めて行く

ギーシュの件をヴァリエの奴と考えて・・・  
デルフ購入とフリーケ騒動は俺が返る頃にや終わってるな、  
それで次がアルビオンと・・・はあゝ  
ギーシュ魔改造したせいであいつ等が脱出できるか分らんし・・・  
マザコンワールドも面倒だ・・・やっぱ俺が行くしかないかねえ。

紙に書かれているのはリユーガが覚えている範囲で書き記した  
これから起こる出来事についての物で

以前何かの役に立つのでは？と考えたリユーガが書いたのだが

もう、あんま意味無いなこれ・・・

既に大きく変化しているためか、

そう思ったリユーガは紙の束を黒炎で焼き払うとベットから起き  
上がり、

自室を後にする。

.....

side ジュリオ

燦々と太陽が輝く中

門兵と口論する査察団を率いるヴィヴァルディ司祭を  
呆れたように見つめジュリオは溜息を漏らす。

全く……教皇様ももう少しマシな人物を選べなかったのでは  
うか……

彼是一刻……何時まで言い合えば気がすむんでしょうね？  
それにしても……この格好……暑い

ジュリオは白基準で所々に無駄では？と思う装飾の施された騎士  
甲冑に身を包み

その圧迫感とずっしり来る重量、極め付けには燦々と光り輝く太  
陽によって

額から汗を流しつつ、手で自分を仰ぎ、横でジッと沈黙する人物  
目を向ける

「貴方は暑くないのですか？」

「……」

ジュリオより少し背が低く、全身を黒のフードで包み、見るからに暑そうな格好の者に声をかけるが黒フードからの返答はない。

「はぁ・・・少しぐらい喋ってくれないと、どうも調子が出ないな・・・」

「じゃあ、呼び方を変えましょうか・・・混ざり者さん？」

「ッ!?!」

ジュリオがニヤツと口を吊り上げ、その言葉を口にした途端ピクリとも動かなかった黒フードの首がグルツとジュリオに向けられ

黒フードですっぱり隠れていた腕がゆらりと伸び、

ジュリオの首を掴むと、目の前の黒フードは小さく呟く

「腐れ」

「なッ!?!?・・・」、「これは・・・」

黒フードから透き通るような声が響くと

辺りの様子が一変し、ジュリオの目にはまるで時が止まったかのように見える。

黒フードは辺りが変わったことを確認すると腕に力を込め、  
ジュリオの首をギリギリと締めて行く

「ウゲッ!？」

「誰から聞いたの？」

「ハハ・・・や・・・やっと・・・喋ったね・・・」

黒フードに片手で持ち上げられたジュリオは、勝ち誇ったかのような顔で

苦しそうに呟くと、黒フードは無言でさらに力を増して行く

「・・・」

「わ、分かった!話す!話すから!!それ以上は・・・ゴフッ!」?

ドズンと重い音と共にジュリオの着こんだ甲冑の上に、拳がねじ込まれ、

ジュリオの肺から強制的に空気が吐き出されると、ジュリオはむ



せながら地面に落され  
うつ伏せに倒れると、胸に黒フードの足が乗っけられギリギリと  
力を込められる

「まさど・・・シュペルか？それともグラスゾの変態ヤローか？  
早く答えなさい。」

「き、聞いた訳じゃない・・・ただ、シュペル殿がそう呟いたから  
もしかして君なのかな？って思っただけなんだ・・・だから足  
をどけてくれない・・・」

「って、メキメキと肋骨が唸りを上げるうううううう！！！！？」

軽快ながらも重い音がジュリオの耳に響き

「何とも言えない痛みがジュリオを襲うと、手足をじたばたと暴れ  
させ

「なんとか脱出しようとするが、足に込められる力が強く  
ジュリオは逃げ出すことができず、ただ地面でのたうち回った。

「次に言ったら殺す。」

「わ、分かったから・・・早く退けて・・・  
って何故に足をお振りかぶりに！！！！って無理無理！！」

「とりあえず一発。」

「ウボア!？」

ゴスツ!と強烈なトーキックがジュリオの顔に突き刺さり  
ジュリオは空中で何回転も回り、ベチャツと顔から着地する。

あたたた・・・全く、ちょっとからかっただけなのに・・・酷い  
ことするね、

・・・鼻曲がってないかな?

「おい新入り!何ぼさつとしている!！」

「え?・・・あれ・・・」

ジュリオは痛む鼻を押さえつつ、立ち上がると

先ほどまで正面にいた黒フードが居ないことに気づき、目を見開く。

「あ・・・僕の横に居た方は？」

「はあ?お前の横なんて最初から誰も居なかっただろ?」

「え、あ……そう……でしたね……」

「寝ぼけてんのか？まあ、こんな領地査察なんて面倒なだけだからな。」

だからって仕事は仕事なんだから……」

ジュリオの横で男が何やら説教じみた事を口にしてているがジュリオはそんなものを右から左へと受け流し辺りを見渡す。

後ろには、今だある行列、前には自分と同じ格好をした集団至って変わったところはない、だが、突如発生した強風により木々が揺れ

木の葉が辺りを舞うと、ジュリオはある一点を見つめる。

ひらひらと舞いあがった木の葉が、重力に従いゆっくりと落ちる中。

ジュリオの見つめる先に一枚の木の葉が空中でピタリと停止しており、

良く目を凝らすと、その周りに何やら緑色の何かがちらちらと見え隠れし、

それが森の中へと入っていくと、ジュリオは緑色の何かが入っていった森へと駆けだした。

……

side???

非常に腹立たしい・・・唯の人間が・・・  
私だって好きで混ぜた訳じゃないのに・・・

「次に言ったら殺す。」

「わ、分かったから・・・早く退けて・・・  
って何故に足をお振りかぶりに!?!?・・・って無理無理!」

うざいんだよ、お前

「とりあえず一発。」

「ウボア!?!」

うん、綺麗に決まった・・・もつとやりたいけど、こいつ殺し  
ちや駄目なのよね。

はあ、それにしてもさつきから見えてるあの馬鹿デカイ膜・・・  
あれって結界よね?

この人間達が探し出したものってあれ?  
あんな大規模な結界で覆ってるなんて・・・何があるのかしら・・・

あー・・・待ってるって暇だし・・・ちょっと先に覗いて行きましようか

黒フードはジュリオを蹴飛ばした後

懐から杖を取り出し、右手に構え

左手から緑色の煙を漂わせると、

ウインドアーマー

風の鎧を唱え、黒フードを吹き荒れる風がすつぱりと包み込み、

左手から漂う煙を、身を包む風に流すと

黒フードの姿が消え、黒フードは先に見える大きな薄い膜を指し森の中へと突き進む。

道なき道を進み、ただひたすらに遥か上空で薄く輝く膜を目指し黒フードが歩みを進め、やがて、木のざわめきさえも響かぬシンと静まりかえる、開けた場所に出ると、黒フードは動きを止める。

へえ〜・・・良い所ね

湖もあるし・・・って何？あの子

「はあッ！！・・・ああ、もう！ちょこまかと！！！」

「お〜い・・・いい加減諦めたらどうだ？」

と言うか五月蠅くて敵わん、3日もこれでは・・・」

「うるさいです！もうここまで来たら意地ですよ！！  
絶対にこの人形倒してやります！！！」

湖に波紋一つ立てず、水の上で跳ねまわる少女  
そしてその少女を攻撃を、難なくかわし、挑発している水で出来  
た人型の何か。

黒フードはそんな現状を見つめ、一瞬だけこの景色に見惚れたの  
が馬鹿らしく思えたのか、  
大きな溜息を漏らすと、堂々と開けた場所のど真ん中を通過して  
行く

はぁ・・・何処にでもいるのよね、こう言う輩。  
折角いい景色だったのに、台無しだわ・・・

黒フードは、鬱陶しそうに目の前で奮闘する少女を見つめるが、  
少女はほんの数？まで近寄られたのにもかかわらず、気づかない。  
しかし、黒フードは湖のそばにあった小屋から視線を感じ  
ゆっくりと振り向くと、小屋の近くにあるテーブルの椅子に腰か  
けている青年と目が合う。

気づいてる？・・・まさか、ね

「・・・」

青年は黒フードと目が合うと、無言で立ち上がり  
真っ直ぐ黒フードに向かって足を進める

なッ!?・・・こいつ、気づいてるの？

最短距離でゆったりと歩み寄る青年に黒フードは驚愕し、  
とつさに身構えるが、思いとは裏腹に、青年は黒フードの横を素  
通り

そのまま、湖の上を歩いて行き、今もはね回る少女の襟首を驚掴  
みにする。

「幾らやっても、もう無理だ。

全く、精々化け物レベルに作ったと言うのに、倒せんとは情け  
ない。

それでも真祖とやらなのか？」

「う、五月蠅いですよ！

大体まだ私は本気を出していません！

だから黙って見てなさい、10分もすれば、こんな固体だが液  
体だか分からない人形

この世からって・・・おーろーせー!!!」

青年につまみあげられ、ジタバタともがく少女

だが、どれだけ暴れようと、手足の長さには差があり過ぎるので少女は青年の体に触れる事すらできず、ただもがき続けている。黒フードはそんなやり取りをポカンと見つめ、一瞬だけ身構えたことが恥ずかしくなったのか  
早足でその場を離れようと足を動かす。

全く、脅かさないでほしいわ  
そうよね、私の魔法のランクはAAA、それこそ7魔レベルじゃなきゃ到底……

「何が本気を出していないだ、日を増すごとに動きが鈍りあまつさえ目元に大きな隈を拵えているのに、誰がどう見ても限界だ。」

「うう……」

はぁ……一生やってなさいよ

「でも……倒してないからセッタの血が……」

「まだ言つか……もう其処に居る、なんか訳の分からん黒衣の少女ので我慢すればよからう」



「「え？」」

2つの透き通るような声が重なり  
場に沈黙が降りる

「・・・何です？今の声。」

しまッ・・・

「キヤア!？」

黒フードは青年に襟を掴まれ、軽々と持ち上げられる  
目の前の少女は、行き成り目の前から声が聞こえ  
ギョツと目を見開くと、口を開く

「誰か・・・居るんですか？」

「ん?・・・ああ、そう言えば、サンは人間の使う魔法を知らな  
かったな。」

「馬鹿にしないでください！」

幾ら私が格好通りの年齢だからと言って、知らない訳無いでし

「ようがッー!!」

「うん？言っておくが、貴族とやらが使う、火の玉やら風の剣と言った

魔法と言つ名の宴会芸ではないぞ？」

「え、宴会芸？・・・何を言つて・・・」

「まあ、これも勉強だな・・・ホレ、何か使つてみる」

「素晴らしい青年は黒フードを持ち上げた手をブンブンと振るい魔法を使えと促す

少女の目には、青年が虚空に向けて口を開き

何も持っていない手を振っているようにしか見えない。

しかし、急に視界がブレ、青年の右腕に黒フードに身を包んだ者が現れ

青年に杖を向けている。

「調子に・・・乗るんじゃないわよ!!」

杖から無数の風の球が放たれ、青年の体の至る所に当たり

ゴキッ、メキッなど骨の碎ける音が聞こえるが、青年は気にすることなく

黒フードに向けて口を開く

「だれが宴会芸を見せろなど言った

先ほどの隠術を見るに、貴様、余程の使い手であろう？」

それとも何か？貴様の魔法は隠れる事にしか使えぬのか？」

「……言つて……くれるじゃない!!」

黒フードは自分の襟首を掴んでいる青年の右腕をがっしり掴むと青年の腕から嫌なにおいを放つ、煙が立ち上がる。

それでも青年は気にすることなく、残念そうな表情になるとポイツとまるで、ゴミを捨てるかの動作で、黒フードから手を離す。

すると黒フードは勢いよく湖に叩きつけられ、水きりの様に何度も水面をはね

湖の中に沈んで行く。

「はぁ……あの状況で腐敗しか使わぬということは

その程度か……詰まらん、頭を吹き飛ばすくらいしてほしいものだな」

「つてセツタ、腕！腕が落ちてるです！なんか臭いです！」

「気にするな、お前にもこれは通じん、ただ大げさに見えるだけ

だ  
」

焦る少女だが、青年は果てしなくどうでもいいと言った表情で、  
地面で煙をあげる腕を掴むと

グチョツと元あつたように腕を乱暴に繋げると、先ほどまで立ち  
込めていた煙が消え

何事もなかったように指を動かす。

そして青年は気だるそうに頭を掻くと、指を湖に向け、億劫そう  
に呟く。

「最早どうでもいいが

魔法を使う奴を逃がせばリユウガがうるさいのでな……」

青年の呟きと同時に、湖の中央から水が押しあがり

黒フードを包む水牢となって、青年の手元にやってくる。

「この程度で気を失うとは……やはり、私の期待に応えられる  
実力は無いな」

「……人間なら、湖を幾重にも跳ねれば気を失うぐらい当然な  
んじゃ……」

あれ？でもこいつ……なんか、違う匂いが混ざっているような  
……」

「……違和感はこれか、まさか此方の世界に混ざり者が居るとは……」

まあ、私はもう知らんがな、後は好きにして良いぞ。」

青年はそのまま水球を置き去りに小屋へと戻っていく

「ちょ、ちょっと!!自分でやっておいてまる投げは酷いです!!」

少女は置かれた水球を指差し、青年に言葉を投げつけるが

青年は聞く耳を持たず、そのまま小屋へと入って行ってしまった。

「……どうしろと?……面倒だから殺して植物の餌にでもしましようか?」

ああ……でも勝手してお仕置きされるのは……うう……」

少女が涙目で、キツと水球を睨むも

中に居る黒フードは起きる様子がなく、少女は面倒なと再度咳くと水球を運び小屋へと戻って行った



五十四話（後書き）

うん・・・一応記憶掘り起こした話なんだけど・・・  
なんか可笑しいような・・・まあ・・・いつか  
・・・いいのかなあ？

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

五十五話(前書き)

(、'、)クックック・・・(、'、)フハハハハ・・・  
(。、)ハァーハツハツハツハ！！

鬱だorz

どうも、テンションの上がり下がりが酷い私こと  
駄文な作者です・・・サルベージつらす

ホント、10話分は痛すぎる・・・それに書いていた時にちよっ  
ぴり

アから始まってルで終わる物を撮取していたので、記憶があやふ  
や・・・

やっべ、八月までに何とかなるかな・・・間に合わなかったらこ  
めんなさい

m ( ( ) m

全ては計画性のない駄文な作者の所為です

つと、まあ、こんなことうだうだと言ってもしょうがないので・・・  
・本編どうぞ



## 五十五話

トリステイン王国

トリステイン魔法学院

女子寮前

月が闇夜を薄く照らす深夜

女子寮の前で3人の男達が屯しており、傍から見れば良からぬことを考えていそうな雰囲気であるが

彼らの表情からはどこか真剣さを感じられ

話が一区切りついたのか、その中のステイルが立ち上がり口を開く。

「まあ、大体の事は分かりました

えっと、今はサイトじゃないんですよね？」

「ああ、4代目・・・では不便だからサイトと呼べばいい。」

「名前は無いんですか？」

「私が生きていたのは・・・およそ3000年前  
覚えていると思うか？」

まあ、私達もいろいろやったから歴史書になら名前ぐらいのっ  
ているかもな。

それより、先ほど言ったように今、8代目は不安定な状態だ  
出来ればデルフが欲しい・・・どうにかならないか？」

サイトは体に巻いてある包帯を取り外し、  
パキパキと関節を鳴らしつつ、問いかけると  
ギーシュはどこか困った表情で言葉を返す。

「あー・・・確かインテリジェンスソードでしたっけ？  
幾ら珍しいからって・・・流石に・・・ねえ？」

「探す範囲が広すぎる、  
リユーガならまだしも、僕等じゃ無理だと思う・・・  
一応は聞いてみますけど・・・あまり期待しないでくださいね

「？」

申し訳なさそうに、ステイルが言葉を返すと  
サイトは少しだけ残念そうな表情になり、呟く

「そうか・・・まあ、最悪2代目がなんとかするだろ・・・  
あ、もう1つ貴殿等に頼みがあるのだが良いか？」

「うん？僕等に出来る事なら構わないよ」

「ならば、丈の長い刀をくれぬか？」

「貴殿等が守ってくれるとは言っても、丸腰では何もできん故。」

「うん・・・刀ってリユーガが使ってるやつだよね？」

「ギーシュ作れる？」

ステイルがギーシュに声をかけると、ギーシュは杖を取り出し  
ブツブツと何かを呟くと、ふうと息を漏らし、口を開く。

「多分無理、出来ても形だけ似た鉄の塊ぐらいしかできないと思  
う。」

「でも確か・・・トリスタニアの武器屋にそう言うのが入ったっ  
て聞いたことあるから  
行ってみるかいい？」

「だが、私は金などもっていないぞ？」

「あー・・・僕が払っても良いけど・・・ルイズがなんて言うか。」

「確かに・・・何とかルイズ説得できないかな？」

「うーぬ・・・見た感じ今期の担い手は我が強いと見えるからな・  
・

これの話でもすれば一発だろうが・・・まだ目覚めていない主に言うのはちと危険だ・・・

まあ、なんとか説得して見せよう」

「んじゃ、上手く説得できたら明日ってことで  
まだ明りが付いてるから・・・まあ頑張って」

ステイルとギーシュはそのまま横にある男子寮へと帰っていき  
サイトはそれを見送ると、女子寮の中へと入っていく。

「・・・なあ、ギーシュ、信じれると思うかい？」

「さーね、いきなり伝説やらなんやらッていわれても、ねえ。」

「ガンダールウ神の左腕、か・・・」

ステイルは立ち止り、先ほどまで自分達が居た場所を暫く見つめ

男子寮へと帰っていった。

・・・・・・・・・・・・・・・・

翌日

トリステイン王国

王都トリスタン

魔法学院より馬で3時間

道幅は5マイル程の道の遙か向こうには大きな城が見える通り  
そんなせせこましい道を人がごった返す中。

ステイル、ギーシュ、サイト、ルイズの4人の内3人はうんざり  
した表情で

今も蠢く人だかりの中、同時に溜息をつく。

「はぁ・・・いつ来てもここは・・・匂いがキツイ・・・」

「ホントこう言うところに来ると、リユーガのとこやガリアの街  
がどれだけ綺麗か思い知らされるね。」

「何言ってるの？裏に比べたらここなんて綺麗なもんじゃない、ほ

ら、さっさと行くわよ

後、スリが多いんだから財布気をつけてね？」

ルイズがサイトに向かって注意すると、さらに狭い路地裏に入っ  
ていき

辺りをキョロキョロと見渡し始めた。

「えつと・・・確か秘薬屋の近くだから・・・」

「あそこだろ？」

サイトは路地裏に入るや、何の迷いもなく剣の看板が吊るされて  
いる店を指さし

ズンズンと進んで行く。

「ちよっと！主を置いてくんじゃないわよ！

てか、アンタ何で知ってる訳？」

「うむ・・・色々と汚くなっではいるが、

昔のままが変わっておらぬからな」

「？・・・アンタの故郷、異世界だとか言っただけ？」

それに昨日から思ってたけど、アンタ性格やら話しかた変わっ

て無い？」

「あ、……気にすんなって、  
唯の独り言だからさ。」

「……？」

ルイズとサイトはそう会話しつつ、先に進んで行くと  
少し後ろで、並んで歩くギーシュとステイルが何かに気づき  
小声で会話をし始める。

「なあ、ステイル。」

「……気づいてるよな？」

「……下手くそ2人、ちょっと上手いの1人

……後は……何人かチラホラと」

「下手2人とちょっと上手いのは敵意は感じられないけど……

他はなんか、気配が希薄な上にちょっと不気味じゃない？  
先にやつとく？」

「……まあ、仕掛けてきたら、ってことで

放っておくしかないね。」

ステイルはめんどくさそうに頭を掻きつつ  
そう言つと早足で先に店に入った2人を追いかけて、店の中へと入  
っていく。

店の中は昼間だと言つのに薄暗く、小さなランプだけで照らされ  
た店の中には  
所狭しと槍や剣が並べられ、店の奥でルイズに声をかける店主の  
後ろには

鞘に収まった刀が数本、並べられている。

「これはこれは、また貴族様ですか  
此方の貴族様のお連れで？」

「ああ、それで？ サイト、良いのはあつたかい？」

ステイルは、サイトに声をかけると  
サイトは一度だけ店をぐるりと見渡し、息を漏らすと  
店主に声をかける

「……店主殿、そちらの刀を見せてもらつても？」

「うん？……ああ、これに目を付けるとはお目が高い



こいつは、最近入れたもんでして、東方の剣なんですよ、こいつなら使い魔さんの体にも会ってて丁度いいかと・・・」

店主は割れ物でも扱つかのように丁寧にサイトの体に見合った長さの刀を

刀掛けから取り外し、サイトに手渡す。

サイトは渡された刀を抜き、細く銀色の光沢を見せる刀身を見つめる。

「どうです？中々のもんでしょ？」

なんでも東方の剣士はその剣で鉄をも切り裂いたとか・・・」

「・・・はぁ・・・お返しいたそう」

「お気に召さなかったの？」

「まあ・・・そんなところだ」

サイトは残念そうな表情に変わり別の場所へふらふらと歩いて行く

「何が気に入らなかったのかしら・・・」

「ハツ、貴族の娘っ子、オメエの目は節穴か？」

んな飾り刀じゃなーんも切れやしねえぞ？

大体今の奴だつてちよつとは目があるかもしんねえが

あんな体で剣振つたら体がイカレちまうよ！！」

「む？」

「何今の声……」

突如、奥にあつた無造作に剣やら槍やら、ボロボロに錆びた武器が納められた

樽が揺れ、低い男の音が店の中に響く。

「やい！デル公！お客様に失礼なこと言つんじゃねえ！！」

「お客様だあ？そのお客様に飾り刀売りつけようとしてたのか？」

「で、出鱈目言つんじゃねえや！

その口閉じねえと、貴族に頼んでテメエ溶かしてもらつぞ！！」

「おもしれえ！やってみろ！いい加減次の使い手が現れなくて寝

てんにも飽きてきたところだ！

溶かせるもんならやってみるやー！」

「やってやらあー！！」

「デル・・・まさか・・・」

店主がカウンターから身を乗り出し、ズンズンと声の聞こえた方へと歩き出すと

それより早く、サイトが樽へと駆け寄り、一本のボロボロに錆ついた剣を抜き出す。

「・・・何をやっている、デルFRINGER」

「お？・・・おお？・・・おでれーた、なんだ、オメエ使い手か？」

「なんだ、私を忘れたのか？」

つと、今は姿が違ったな・・・どれ、嫌でも思い出させてやる  
う。」

サイトは抜き出した剣に手をかざし、そのさびが浮かび上がる刀身をなぞっていくと

剣から奇声上がる。

「ぬひよおおおおお!!???!?!?」

「ほれほれ、思いだしたか？」

「・・・お、お前・・・なんで！お前等が表に出てんだよ!!」

「やっと思い出したか、まあ、その話は後で、だ  
主殿、私はこの剣で良いのだが、よろしいかな？」

「え〜〜。もっと綺麗なのにしなさいよ  
どうせステイルが払ってくれるんだから、さっきの剣見たいな  
綺麗な・・・」

「ステイル殿」

「はいはい・・・店主・・・これで足りるかな？」

ステイルは立ち上がり行き場を無くした店主に袋を握らせると  
店主は中身を確認し、目をギョツと見開く、

袋の中にはぎっしりと金貨が詰まっており、店主は慌てた様子で  
言葉を返す。

「あ、あんなボロ剣にこんな……か、勘弁してください  
あんな剣、これだけで十分でさあ」

店主は、袋を大事そうに握り、10枚だけ金貨をとると、ステイルに袋を返す。

「なんだ、結構安く済んだな」

「す、ステイル？……アンタ何でそんな大金……」

「え？……そんなに言う程の大金かい？これ」

ステイルは返された、袋をポンポンと弄ぶ  
袋の中に舞う度、ジャラジャラと音が響き、店主やルイズは苦笑  
い。

するとギーシュがステイルの脇を突き声をかける

「君ねえ……リユーガに比べればそりゃ少ないかもだけど  
他から見れば僕らだって異常なんだよ？」

「あ……なんだか、段々価値観が狂ってきたな……」

これもリユーガの所為だ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ガリア王国  
ハーク領、屋敷

「ハックシヨイ!!」

「なんです？風邪ですか？」

「バカ言っんじゃないさね、リユーガがどうやったら風邪にかか  
るんだい？」

「好き勝手言いやがって・・・ってそうじゃねえや。  
んで？混ざり者を確保したってホントか？それも魔法を使うっ  
て。」

「そうです！あれは何なんですか？行き成りセツタの腕がポトリ  
って・・・」

あんな魔法見たことが無いです!」

「まあ・・・ねえ、その内教えてもらえるからきにすんな、それより、今、その黒フードだっけ?どうしてる?」

「家に居ますよ、セツタの水牢の中です。

念のため眠りスリープ・クラウドの雲置いてきたから

大丈夫だと思いますよ?それに寝てはいますがセツタも居ますし。」

「・・・」

サンが何の心配もしていないような軽い口ぶりで言葉を出すとリユーガは無言で立ち上がり、窓を開け放つ。すると、遙か向こうからものすごいスピードでミラが飛来しガラスをビリビリと振るわせながら空中で停滞する。

(主、我、呼?)

「今すぐ湖行って水牢持ってこい、なるべく早くな」

(了)

ミラはリユーガと短く言葉をかわすと  
すぐさま上空へと上がり視界から消える。

「そんなに急いでまで確保する必要があるのかい？  
その・・・混ざり者？ってやつを。」

「と言っか混ざり者ってなんなんですか？  
セツタに聞こうとしても起きませんでしたし・・・」

「あー・・・知って得するようなもんじゃねえぞ？」

リユーガは最初にそう告げると  
口を開いて行く

「まず、魔族と人つてのは、流れてる血が違っつてされてる。  
それはサンが良く分かるだろ？」

「そうなのかい？」

「ええ、まず匂いが違います・・・味は・・・飲ませてくれたら分  
かるんですけどねえ。」



サンはそう言いキラツと牙を光らせリユーガを見つめるが  
リユーガはそれを無視し、言葉を続ける。

「で、混ざり者つてのは、簡単に言っちゃえば  
人間の血を取り込んだ魔族つてこと」

「……？……そんなことして、何か意味はあるのかい？」

「意味ならあるぞ、魔族が魔法を使えるようになるってこと  
ああ、言つとくが系統魔法じゃねえからな？  
俺が使つてる方の魔法の事な」

「あの、貴族じゃなくても使える魔法の事かい？  
でも、それに何の意味が？」

「単純に強くなるんだよ  
魔族の肉体のスペックは人以上  
魔法はそんな魔族に対する唯一の武器、  
その唯一の武器を魔族が使えるようになるんだよ、血を混ぜる  
事だな。」

「へー……でも、そう言つことならどつしてセツタは血を混ぜ  
ないんですか？」

それだけで魔法が使えるようになるんでしょ？  
それに、話だけ聞くと人間も同じことができると思いますが？」

「そりゃ、魔族にしても人間にしてもリスクがあるからだ。」

「リスク？」

リユーガの言葉に2人が同じタイミングで言葉を返すと  
リユーガは一口紅茶を啜り、再度口を開く

「魔族なら身体能力の弱体化・下手すら魔族化が出来なくなるし  
死にやしないが寿命縮むは体の一部動かなくなるわってな感じに  
魔法が使えるようになる以外にメリットはない。

人に至っては生きるか死ぬか、この2択だ。

まあ、生き残ったやつはかなり身体能力が上がって  
寿命が延びるとか俺の様に魔人化できると言われているが  
実質生き残るのは1割程度らしい」

「うん？・・・それって魔族側のメリット少なすぎじゃない？  
それってやる意味あるのかしら？」

「まあ、そうなんだが、稀にただ魔法が使えるようになるだけっ  
て奴も居るから」

セツタみたいな力のある魔族じゃない、弱い魔族は進んでやる

んだよ

「なんの努力もせず、賭けに勝てば力が得られるからな人間もまた然りつてな」

リユーガはそう言い捨てると、席を立ちあがりテラスの方へと歩いて行く

「・・・じゃあ、リユーガはどうなの？」

「あんたは何でが知らないけど魔族の血も混ざってるんでしょ？」

「俺は血統で、生まれながらに混ざってるもんだから・・・所謂両方の中間つてところだ、人間でもなく魔族でもなくつてな・・・」

「バチイツ！とリユーガの周りに赤黒い稲妻が駆け巡りリユーガの姿が変わると、2人は目を見開く。そしてリユーガはそのまま腕を前に突き出し手のひらにバチバチと音を立てる球体を生み出す」

「人間はこんな姿を・・・魔族はこんな力求めてるんだぜ？」

リユーガはそのまま生み出した球体を優しく弾くとゆっくりと球体はを進んで行き、ピタリと止まると真っ青な空一面に赤黒い稲妻が走る

「凄……」

「ま、そんな訳でなつちまったもんはしょうが無いが、これ以上増やさないようにしなきゃらんですたい。どっかに混血剤を作れるやつが居るはずだからな。」

「ふーん、ま、適当に頑張んなさいよ」

どうせそのまま領地ほったらかしてお父様と何かするつもりなんですよ？

その間、帰る場所ぐらい見といてあげるから。

それにしても、なんであの動物園？ってやつだめな訳？  
アレあんたが考えたんですよ？」

リユーガは空に放った稲妻を納め、魔人化を解除しながらイザベラに返事を返す

「……は？俺が？……んなこと言った覚えがねえんだが……」

「お父様が言ってたわよ？」

「ジョゼフが？・・・言ったかな・・・そんなこと」

「違うわよ、あなたのお父様の方よ」

「ああ・・・そう言えば何年か前に咳いたことがあった様な・・・  
なかった様な・・・」

「ってちよーまち、何故にマイパピーをお父様と？」

「あんたねえ・・・まさか忘れちゃったのかい？  
式こそ挙げていないものあんたは私の旦那だよ？」

「イザベラがそう言葉を投げかけると、  
リユーガはポンと手を打ち鳴らし、思いだすと  
頭をぼりぼりと掻く。」

「・・・あー・・・すっかり忘れてた  
ってか、聞いてなかったけどお前、それで良い訳？」

「何が？」

「いや・・・何が、って・・・相手が俺で良いかってことだよ。  
俺は別にお前が嫌ならジョゼフにどうとでも・・・ん？」

そのまま言葉を続けようとしたリユーガだが  
イザベラの指が口に当たり、それを遮ると、  
ニッコリと微笑んだイザベラが口を開く。

「嫌じゃないけど？」

大体、もし嫌なら私がお父様を止めない訳がないでしょ？」

「……？あー？……なんだ、つまり、俺が好きってことか？」

「そう言ってるのだけど、まだ分かんない？」

リユーガは笑みを浮かべたまま、呆気からんと恥ずることなく  
口を開くイザベラに啞然とし、数秒の沈黙の後  
無言で立ち上がる。

「……ミラ帰ってきたから行ってくるわ」

「はい、行ってらっしゃい」

そのままリユーガは早足で部屋から退出すると

イザベラはそれを見送り、ふうっと息を漏らし椅子に深く腰掛け  
る。

「なんなんですか？今のは・・・私を忘れないでほしいですよ。それにしてもリユーガが逃げてくなんて・・・人は見掛けによらないって言葉、的を得てるです。」

「うん？・・・サンはどうしてリユーガが退出したと思ってるんだい？」

「そんなの、決まってるじゃないですか、  
どう見たって恥ずかしくて・・・うひゃ!？」

サンが言葉を続けようとすると、イザベラがサンの頭に手を置き撫でまわす。

「やっぱり吸血鬼だったって、子供は子供だねえ・・・  
アレが恥ずかしいからって、逃げる様な奴に見えんのかい？」

「だ、だって実際・・・ええい！手を離すです！撫でるなです！  
！」

「おっと、ごめんごめん、撫でやすい位置に頭があるもんだから  
つい・・・。」

「全く……それで？　だったら何故リユーガは部屋を出て行ったんです？」

サンは撫でられ崩れた髪を整えると、再度イザベラに問いかける。イザベラは冷めきった紅茶を一口啜り、息を漏らすと、口を開く。

「リユーガは受け取り方も流し方も知らないんだよ。

なまじ、自分が弄る方だから直の事、ね

特に、自分に寄せられる思いなんかはからつきし、ってやつ。

まあ、良く良く考えれば、最初に会った時もそうだったしね。」

「最初？　つてことはリユーガがまだ子供の頃の話ですか？

是非聞かせてください！　出来ればリユーガが赤面するようなこ

とについて深く！」

「な、なんだい？　やけに食いつくね……

でも、リユーガは今も昔も大してかわりゃしないよ？

それでも良いてんなら……

そうさね、最初は……」

イザベラはテーブルに肘をを付き

どこか懐かしそうに、昔の事を語っていった。





## 五十五話（後書き）

はい、っと中途半端に切ってしまっただけで申し訳ない

作者の頭に残っている文を繋げたからどうにも半端になってしま  
うとです

ホントはデルフ購入で一話ぐらい使ったはず・・だと思っただけ  
どうにも思っただけでなくて、仕方なく過去話突入って感じになっ  
てしまいました

少し後味が悪いかと思われませんが、ご了承をm（| |）m

五十六話（前書き）

ぐはッ！？・・・も、もう・・・勘弁してください・・・

どうも、初っ端から吐血、駄文な作者です。

もう駄文な作者の心のライフは0なんですよ・・・ま、気になる方は後書きをご覧ください。

それでは、何時ものように変なところで切れていますが、本編へ銅像

## 五十六話

トリステイン王国

トリステイン魔法学院

日も傾きかけてきた夕刻

辺り一面が赤に染まり、空に輝く双月が姿を現し始めた頃

サイトは1人、目の前に錆ついた大剣、デルフリンガーを突き刺し言葉をかわしていた。

「全く、オメエさん等は・・・アルトのバカも一体何やってんだ？  
良く見てみりゃ、軽く表に出てこられてんじゃねえかよ。」

はあゝ・・・マジ、抑えてくれた坊主と嬢ちゃんに感謝だわ。」

「すまぬな、とはいっても8代目が何故か、奴と波長が合うよう  
でな、どうすることも・・・」

ま、そのおかげで私達が出てこられた訳でもあるのだが・・・  
む？」

「あー？なんだ、またなんかやらかしたのか？

あいにくオイラはそっち見れねえから実況頼むぜ。」

「・・・今、殻が破られた。」

「はー、そら大変・・・だ？」

カシャンつとデルフが鐸を鳴らし、数秒沈黙する。

「っておiiiiiiiiiiii!!??」

何やつちゃってんだ!?!言つたそばからまたこれかよ!!!

てか、封印はどうした?あれはそう簡単に破れるもんじゃ・・・

「

「・・・8代目が・・・奴の力と、2代目が与えた知恵を使って封印ごと殻を破りおつた・・・」

「はあああああああ!?!」

ちよ、おま・・・何やってんのおおおおおおおお!!?!

知恵を与えたことにも突っ込みたいが、破つたのが今期の相棒  
ってどう言つこつた一体!!!!

なんなの?バカなの?死ぬの?・・・ってこんなこと言ってる  
場合じゃねえ!

それが本当なら、今すぐにも・・・

「いや・・・今2代目が対峙している

それもあの姿・・・本気だな」

片目を閉じ額に指を添えながら呟くと  
サイトは閉じていた目を開き、息を漏らす。

「もう見れん、あの2人のやり会いはどうもな……  
ま、後は『部屋』が壊れないことを祈るぐらいしかできぬな。」

「ったく……それにしてもどうすんだ？」

幾らアルトがガチでやったからって向こうじゃ決着つかねえだ  
ろ？

精々時間稼ぎ程度にしかならねえんじゃねえの？」

「さあ、もうどうすることもできんしな、いつその事死んでみる  
か？」

「アホ、殻破られたんなら、それこそあいつの思つ壺。」

オメエさん等がまた次の腕に宿ってる頃にや、惨劇の後になっ  
てらあ。」

「ふむ……それもそうか……ではどうする？」

古き戦士たちは居るが体一つではどうにもできんだろ？」

「……まあ、アルトが何とかしてくれるのを待つか……」

可能性薄だが、今期の相棒が何とかしてくれるのを……って

駄目か、

そもそも破つたの今期の相棒だし・・・ハツハツハツ  
・・・詰んだ、はい皆さんさよーなら、来世が会つたらまた  
会いましょ。

ハルケギニア、ブツ壊れてるかもだがな！」

カシャンと先ほどまで動いていた唾がピタリと動かなくなると  
サイトは深いため息を漏らし、地面に突き刺したデルフを鞘に納  
める。

「・・・困つた時の主頼み・・・っとわ言つたもの、秘宝どころ  
か指輪も持たぬ主ではな・・・

本当に望み薄・・・だな。

やれやれ、以前はサハラ森林だけで済んだものの・・・今回は  
どうなるやら・・・」

サイトは諦めたように赤く染まった空を見上げ、呟くと  
ずりずりと重い足取りで歩きだして行った。

.....

時は進む事

日は完全に沈み、辺りを双月が薄く照らす頃  
サイトは本塔の壁にぶら下がっていた。

「なあ、アレは良いのか？僕等護衛だろ？」

「別に良いんじゃない？それにシルフィールドが飛びまわってる  
から

落ちてでも拾うでしょ？」

2人は男子寮のから本塔の前で口論する  
ルイズとキュルケ、それを呆れ顔で眺めるシャルを見ていた。

「しっかし、キュルケもあんな剣もってサイトに渡そうだなんて  
一体幾らぼったくられたんだろっね？」

「さあ？ま、どっちが勝っても最終的にサイトはデルフを選ぶから  
そもそも意味がないと思う・・・ん？」

ドゴンツ！とサイトのぶら下がっていた横の壁が爆発し  
本塔の壁が深く抉れる。  
ステイルは目を細め、ルイズと本塔を交互に見る。



「はー、あの騒動でも辛うじて無事だった本塔の固定化ふっ飛ばすって

流石伝説？<sup>ファイヤーボール</sup>ってか炎球唱えてアレってどう考えてもおかしいだ  
る。」

「因みにステイル、あの固定化炎球<sup>ファイヤーボール</sup>で破る自信あるかい？」

「冗談、せめて火炎球<sup>フレイムボール</sup>ぐらいじゃなきゃ、あんなふうにはならな  
いよ。」

ま、焼き尽くすんだったら爆炎球<sup>フレアボール</sup>使わなきゃ無理だけど。」

「おいおい、君の四乗呪文<sup>スクウェアスベル</sup>だったら、学院全体が焼けるだろ？  
あれはホント見た目太陽だからなあ。」

「あー、あれはホープの力も借りての事だから・・・あ、落ちた。」

キュルケの杖から、人の頭ほどの火球が放たれ  
サイトを吊り上げていた縄が焼き切ると、サイトは重力に従って  
真っ逆さまに落下。

それをシルフィードが回収しようと急降下したところでサイトか  
ら声が発せられる。

「主と其処の女生徒を回収しろ!!」

「うわっ!?!壁走ってるよ……って、なんだい?あのゴーレム

」

サイトが地面に向かって縛られたまま壁を走ると  
学院の外に巨大なゴーレムが現れ、学院にゆっくりと歩み寄る。

「おいおい、あれってもしかして怪盗ってやつ?

また大胆な……宝物庫でも狙ってるのかな?」

「そうなんじゃないの?……って、あのままだとサイト君、  
潰されそうだな、っと!」

ギーシュは杖を振るい、10メートル程のゴーレムを3体作り出し  
巨大なゴーレムを足止めすると、錬金でサイトを縛っていた縄を  
切る。

するとステイルが感心したように声をあげる。

「結構伸びたじゃないか、以前は全然だったのに。」

「そりゃ、リユーガにあれだけ言われれば練習するって。

それよりどうする?簡易で作ったからあんまり長く持たないよ。

それにこれだけ離れてちゃ・・・」

ギーシュは杖を使って、3体のゴーレムを操るが

巨大なゴーレムの拳によって、一体、また一体と破壊されていく。

「うーん・・・あの大きさだからなあ・・・」

しかも足元にサイト、上空にルイズたちが居たんじゃ僕の魔法の巻き添え食らう・・・

ってなわけでギーシュ、あのゴーレム使いに、本当のゴーレムってやつを教えてやりな。」

「はいはい・・・僕にゴーレムで挑もうなんて・・・見せてやるよ。」

ギーシュは小さく笑うと、懐に手を伸ばし

何かを掴み取った所で手を止める。

遙か向こうでギーシュの最後のゴーレムを破壊した巨大なゴーレムがピタリと止まり

まるで絵がずれる様に、ゴーレムの腕が切り落とされたからだ。

2人は少しだけ驚き、遠見の呪文を唱えると、2人の前に見たこともない人の背丈を優に超える

長刀を握ったサイトの姿が映し出される。

.....

「ふむ……どうしてこうなった。」

サイトはぶらーんと本塔に縄で括りつけられ  
深いため息を漏らすと、地上で言葉を交わしている2人を見つめる。

「いいこと？あのロープを切って、サイトを地面に落した方が勝ち。」

使う魔法は自由、ただしあたしは後攻で良いわ、それぐらいハ  
ンデよ。」

「わかったわ……」

「やれやれ……私はデルフを使うと言っているのに……」

サイトがそう呟くも、ルイズは呪文スヘルを唱えて行く  
そして最後の言葉を言い終わると同時にルイズは気合を入れ、杖  
を力強く振る。

ファイヤーボール  
「炎球!!!」

「ぬお!?!」

ドゴンツ!とサイトの横に爆発が起こし、壁を深くえぐると  
サイトは冷や汗を流し、顔を青くする。

「こ、これ程とわ……この塔にかけられた魔法も弱いものでは  
ないだろうに……」

「ロープじゃなくて壁を爆発させるなんて器用ね!」

「う、うるさいうるさいうるさい!!どうせキュルケだって失敗  
するわ!」

「あらあら、あたしが外すとも思ってるのかしら……」

キュルケは杖の先に火球を生み出し

軽く振ると、火球は真っ直ぐサイトへと向かい

サイトに当たる直前でクンツ!と曲がり、ロープを焼き切る。

「ふむ……中々良い腕だな。

ま、戦場では役に立たぬが……っとなんだ?あれは「

サイトは落下しているにもかかわらず、そう眩き学院の外に現れたゴーレムを見ると、危険を察知したのか上空から急降下してくるシルフィードに声を発する。

「主と其処の女生徒を回収しろ!!」

「え？それって・・・うわッ！？何あれ!!」

シルフィードに跨るシャルも巨大なゴーレムを見るや急停止。一直線に今だ気づかない2人を摘み上げると上空へと飛んでいく。

それを見たサイトは落下する中、体制を整え地面に向かって駆けだし、地面に直撃するすんでのところで壁を蹴り、くるりと1回って着地する。

「ふむ、体は・・・まあ大丈夫だな。」

サイトは何事もなかったように体を見渡したところで縛られた縄がボロボロと崩れると、地面に放かられているデルフリンガーを手に取りゴーレムへと駆けだす。

「デルフ出番だ・・・」

「……はあ……どうせ吹っ飛ぶんだからが頑張らなくていいじゃねえかよ……」

ま、最後の戦闘になるかもしれないし、オメエさんに合わせてやんよ。」

デルフが愚痴を零すも、

ボロボロと茶色の錆がはがれ、美しく輝く長剣となり

其処からさらに姿を変える。

「見やがれ！これが俺様の！3000年前の姿だッ！！」

デルフがそう叫ぶと、サイトの左腕のルーンと同じ物がデルフの刀身に現れ

そのルーンが青く輝くと、デルフは姿を変える。

切断力を増すために反りのある形状、

先ほどの太く厚い、刀身とは裏腹、細く薄い、触れれば折れてしまっ様な刀身

叩き切る為の長剣ではなく、引いて切る為の長刀へと。

サイトは姿の変わったデルフを握り2度ほど振るうと、デルフを力強く握る。

「ふむ……久しき感覚だ。」

「はい！皆様お離れをー！ありえないことが起きるぜえええええええー！」

デルフのテンションのあがった叫びと共にサイトは長刀を真っ直ぐ横に構える。

双月の光を浴び、キラッとそのなんの飾り気もない刀身が一度だけ光を反射し

巨大なゴーレムの腕を小さく照らすと、ゴーレムがピタリと動きを止める。

「ふむ・・・聊か不安ではあったが、腕は衰えておらぬな。」

「ハッハー！！速い速い！俺様もびっくりダこらあー！！」

サイトがそう呟くと、まるで絵がずれた様にゴーレムの腕がずれズンツ！と音を立て切り落とされる。

「さて・・・止めと行こうか。」

サイトは大きく腕を振り上げ

長刀が再度月の光を反射し、ゴーレムの額に一瞬だけ光が当たると、

いつの間にかサイトは長刀を振り下ろしており、デルフが元の姿へと戻る。



「我が一刀、影すらも追いつかず……ま、2代目の様に光の速さとまでいかぬが、

音は越えていよう。」

サイトの吹きと共に、巨大なゴーレムは真つ二つに裂け地響きと共にゴーレムはただの土へと姿を変えた。

## 五十六話（後書き）

ハハハハ・・・私は心に大きな傷を負った・・・  
アレは一日前の事（投稿日的な）サルベージした人魔（10話ぐらい）を友人に見せたことがきつかけだった。

駄「どーよ？出来れば感想kws k」

友A「・・・意味不、読みずらす、読み手ポカン」

友B「俺の設定・・・どうしてこうなった」

駄「え？そんな酷い？・・・結構うまくかけたつもりなんだけど・・・」

友A「いや、なんか・・・何とも言えない後味の悪さが・・・俺に合ってないだけかも知れないけど。」

友B「魔族いらねえジャンこれ」

なんか其処らの戦争ものに無理やり魔族突っ込んで有耶無耶になつてね？ぶつちやけ俺の設定要らなくね？

文才お前以下の俺が言えたことじゃないけど・・・これは無いわ」

とまあ、こんな感じで設定考案者＋熟練の読み手（5年ぐらい）に駄目だし喰らって・・・

人と魔を分かつ者・・・没にされますた(ＴＴ)

正直オリジナル舐めてた・・・

楽しみにされていた方・・・もう、ホントすいませんm(´`´)m  
まだ一作も完結してないクソの様な作者がオリジナル書こうなんて  
調子乗って

現実を見せられたよ・・・所詮カスな作者にはオリジナルは無理だ  
と・・・

しかし！この作品を完結させた後には(決定ではない これ重要)  
なんとか2人を納得させる程度の物は書きあげたいと思います

八月までには~~~~とか言って期待させてしまった皆様、本当に申し  
訳ない

人と魔を分かつ者・・・作者の意地(？)で2人を納得させるまで  
は上げないことにします。

さて、ゼロ魔の続きをサルベージしますか・・・

## 今回の報告

人と魔を分かつ者・・・執筆停止

ゼロ魔サクサク上げるよ！

ってなわけです、それでは皆様、次回をお楽しみに？

ここまで駄文を見ていただき、ありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

五十七話（前書き）

うおおおおおお！！！！

思い出せねええええええええええええええええ

どうも。半分発狂中の駄文な作者、略してダブルH、DSこと駄文な作者です

もう……思い出せ寝えよ……

しょうがないから本編さっくり進めよう、これで一応準備は整った……はず

そんなどうでもいい話を挟みましたが、本編どうぞ

## 五十七話

トリステイン王国

トリステイン魔法学院

学院長室

オールドオスマンは夜遅く、学院長室で雑務をしていたところ不意に外が騒がしくなり、遠見の呪文を学院中に張り巡らさせ、一体のゴーレムが  
真つ二つに割ける場面がオスマンの前に映し出される

「ふむ・・・状況から察するに、あのゴーレムは噂の土くれとやらじゃな。

はてさて、どうしたものかのおゝ

こんな死にかけた老人と無駄に長い時を共にした宝物を奪おうとは・・・よよ・・・

で？そこで何をしようと言うのかね？

入りなさい。」

オスマンが手に持つ長い杖を振るうと  
扉がゆっくりと開き、暗い廊下の奥から、ロングビルが現れる。

「あらやだ、私ですよ学院長。」

「おお、ミス・ロングビル、  
このような時間に何か用かの？」

「それは勿論、現れたゴーレムの対処について……」

「心配いらんじやろ？ホレ、この通り、ミス・ヴァリエールの使  
い魔が

見事に倒して退けたぞい……ま、お主がこれ以上何もしなけ  
れば。の話じゃ……」

「……これこれ、いきなり杖を抜くでないわ。」

オスマンは言葉を言い終える前に、ロングビルは杖を抜き放ち  
土の弾丸がオスマンへと放たれるが、オスマンの杖の一振りによ  
って

虚しくかき消される。

「……この狸が」

「こんな老いぼれ捕まえて狸とは、の  
それよりどうじゃった？わしの昔の肉体は？興奮したじゃろ？」

「ふ、ふざけんじゃないわよ！宝物庫に忍び込んだはいいけど、  
中は何も無くて

代わりに気色悪いアンタの裸体が映った魔法紙なんか入れやが  
って!!！」

「き、気色悪い……orz」

ロングビルは顔を真っ赤に変えつつも  
何度もオスマンに向かって土の弾丸を放つが、オスマンは顔をうつ  
伏せたまま

見もせず、飛来する土の弾丸を相殺して行く。  
机に突っ伏せるオスマンと、必死の表情のロングビルの弾幕戦  
先に膝をついたのはロングビルだった。

「はあ……はあ……あ、ありえない……」

「ほ？なんじゃもう終わりか？  
いかなのおく、最近の若いのは、

感情に身を任せて魔法を放つから、直ぐに魔力切れを起こすんじゃない。

わしが学生の頃は、それはもう、色々大変じゃったんじゃない？  
まず、水の魔法で精神を……」

オスマンは前で肩膝をつき、辛そうな表情を浮かべるロングビルを尻目に

思いだすように昔話をし始める。

同じ魔法であれば、ランクの違いからオスマンが精神力、魔力で上回るのは当然なのだが

オスマンは、系統をこころ変えながら応戦していた。

同じ魔法を連続で放つのは容易いことではあるが、

違う魔法、しかも別系統とあらば話も違ってくる。

ロングビルが、同じ筆、同じ絵の具で一本の線を引く時に、筆が魔法、絵の具が系統

線を引く速さが魔法を放つスピードと仮定するならば。

オスマンは何度も筆を変えつつ、4種類の絵の具で線を引いている。

そのスピードがロングビルと同じなのだから異常とも言えよう。

その中でロングビルは息切れをしたのにもかかわらず、オスマンがケロッとしているものだから

ロングビルからしてみれば、明らかに実力の差を明確にされたのだ。

「は、ハハハ……あーあ、折角アンタのセクハラに耐えて、  
アンタの持つ宝物、根こそぎかっぱらってやるうと思ったんだ  
けど……」

失敗ね、もう魔力も残って無いし、頭くらから……」



ロングビルは諦めた様に愚痴をこぼすと、体の力を抜き  
床に大の字で寝転がる。

「殺す？いや、あたしも結構好き勝手やったから王宮に突き出せば恩賞ぐらい

貰えるんじゃない？最もアンタの立てた武功に比べりゃちっぽけなものでしょうけどね。」

「ほ？わしが立てた武功とな？

わしが戦争に出ていた頃何ぞ、お主の母親も生まれてないと言  
うのに

良く調べられたの。」

「偶然よ、名前は忘れたけどトリステイン貴族の  
屋敷から盗った古ぼけた本に書いてあったわ、  
全ての系統を極め、千の呪文を自在に放つ、  
系統王、またの名を千の<sup>サウザンド</sup>・・・「待てい」・・・？」

「何やらよく分からぬがそれ以上言っては行けぬ気がする。  
それはお主の心の奥で留めておくが良い・・・」

「・・・？・・・まあ、アンタの後に現れた  
かの有名な烈風殿が名を馳せたせいで

「あなたの名前は忘れ去られたってとこなんでしょ？」

「昔の事じゃ」

ある意味わしの黒歴史、忘れられて良かったとさえ思つとる。しっかし、今だわしの名が書かれた物が残っているとはのお・

後で没収じゃ。」

「没収？好きにすればいいじゃない。」

どっちにしたってあたしゃ、牢屋の中か、あの世に逝つちまうんだからさ。」

「なんじゃ？自殺でもするのか？」

「いかんのお、まだまだ若い命なんじゃ。」

「何も捨てればいいと言つ物ではあるまい。」

「はて・・・そう言えばわしは何をやっていたのかのお」

「いかんのお、どうやらわしお迎えが近いようじゃ・・・ほ？」

「ミス・ロングビルや、そんなところで寝転がって何をしておる？」

「良い大人が、大股広げてはしたないぞい。」

「は？あなた何言つて・・・」

急にコロツと表情を変え立ち上がったオスマンに

ロングビルは啞然とし、言葉をかけるが、オスマンはそのまま

寝転がるロングビルを素通りする。

「仕事に疲れたというのなら

休暇を認めよう。どうせ近々ここから生徒は出ていってしまう、  
嘆かわしい事じゃがな。」

「……」

「何時もの学院に戻る頃に、帰ってくればいい。

むさい男ばかりになると言うのも、これもまた

嘆かわしい事じゃからの。」

オスマンはそのまま扉をゆっくりと開き

廊下へと一歩足を進めたところで、足を止め、  
思い出したように手を打ち鳴らし、口を開く。

「ロングビルや、帰ってくるのなら

いつその事、空に置いてきた連れも連れ帰ってくると良い。

無論、子供達も、な。」

「なッ！？アンタどこまで……」

「はてさて、何処までとは何のことか、

ほんに最近は記憶が混ざってしまっておるのぉ」

オスマンはそのままカツカツカと笑い声をあげると  
真っ暗な廊下へと、足を進め、パタンと扉が閉じられる。

「ま、待ちなさいよ!!」

ロングビルは気だるさの残る体に鞭を打ち、  
ふらふらとよろけながらも立ち上がると、扉に手をかけ  
勢いよく開くが、廊下にはオスマンの影すらない。

「な・・・なんなの・・・」

.....

コツ、コツと静まり返った廊下に響く足音、  
月の光に照らされているだけの廊下を無言で歩き続けるオスマン  
は、ふと

月明かりが多く差し込む、大きな窓の前で立ち止まると溜息を漏  
らす。

「……何時までそうしておるのかの？」

正直に言うて、人様の影許可無く、そう何度も入り込むものは……

ないぞい！！」

オスマンはそのまま勢い良く、手に持った長い杖を自分の影めがけ  
思いつきり突き立てると、杖は床に当たることなくズブツと入り  
込み。

影に波紋が立つ。

すると、影に突き刺した杖に、黒い大蛇、キャスターが巻きつき  
赤い両眼がオスマンを見据える。

「あらあら、行き成り長い突き立てるなんて、せっかちなえく  
歳をとると、人間はみくんなそうなっちゃうのかしら？お爺ち  
やん？」

「はてな、わしはわし以上長生きをしておる人間は見たことがな  
いから分からぬなあ。

それより、何用じゃ？」

「何用もへったくれもないわよ……」

何故マスターの言う通り動かなかったのかしら？

貴方はいいかも知れないけど、怒られるの私なのよ？」

「別に小僧にああしろ、こうしろ等の支持を受けた覚えもなければ

それを聞いてやる義理もないのじゃが？

単に、小僧の独り言をわしが盗み聞きした、それだけのことじやろ？

しかし、あれは関心できぬな、幾らサイレントをかけていようとあのようなことを口にしては、な。

この御時世、どこに目があり、耳があるかわかったものではないからの。

最も、端からわしに聞かせ、いいように動かそうなんて世の中そう、上手くは出来ておらん。」

薄く笑みを浮かべたオスマンがそう口にする  
杖に巻きついていっているキャスターが反応する。

「あらあら、少し頭が回った位でつけ上がるのは良くないわよ？  
私は勿論、マスターがマジになれば貴方の命なんて紙より軽いんだから。」

「無論心得ておるよ、唯でさえ風前の灯、  
いつ消えてもおおかしくなくらいじゃからのお……」

と、どこか馬鹿にしたように呟くオスマン  
しかし、じゃが、と言葉に一区切りを付けた後  
オスマンから、ふざけていると言った空気が取り払われると  
表情が一変し、オスマンは口を開く。

「幾ら幾重にも惚け、道化を演じていようと、小僧に踊らされるほどわしは愚かではない。あくまで演じ、踊るのはわしであって誰かの思惑通り踊ってやるつもりなどない。小僧に伝えよ、今後もわしを謀るつもりならば貴様も覚悟はしておけ、とな。」

「……へえ……そんな顔もできるんじゃない。ずっとそつちでいた方が慕われるんじゃない。」

感心したような声をあげ、キャスターはそうオスマンに問いかけると

オスマンの表情も戻り、いやいやと手を振るとオスマンも言葉を返す。

「なに、ずっと気を張って居るよりは、メリハリをつけた方が楽じゃからな。それよりもう夜も更けてきおる、さっさと小僧の元へ帰るが良  
い。  
わしも年をとってからと言うもの、直ぐに眠気がきおる。」

「あら？もうそんな時間かしら？  
貴方、妖怪なのにそんなに早く寝て大丈夫なの？  
これから脅かしに行くんでしょ？」

「誰が妖怪じゃ誰が、ホレ、さっさと去ね。」

グイグイとキャスターを影へと押し込むオスマン  
するとズブズブとキャスターは影の中へと入っていき、最後に顔  
だけが

飛び出ている状態になると、口を開く。

「言い忘れてたけど、マスターから一言。

抱えるのは構わんが、最後まで面倒は見ろよ？

ま、爺が俺の思い通りに動いていたのならの話だな。との事  
よ。」

「思い通り・・・じゃと？」

オスマンはキャスターを押し込む手を止め、

啞然と口を開くと、キャスターを引っ張り上げようと力を込めた  
ところで

キャスターはすりとオスマンの腕から逃れ、影の中へ頭を引っ  
込める。

「それじゃあ、バイバイキーン

演じるだの踊らされるだの、

中々に滑稽だったわよ、お爺ちゃん。」



「ぬんツ!!」

オスマンは杖を影に向けて突きつけるも、先ほどの様に杖が深く刺さることは無く、ガツと杖が軽く床に埋まる音だけを残り、辺りに静寂が訪れる。

「・・・はあ。こんな老人弄んで何が楽しいのやら・・・」

力無く、肩を落とし、大きな溜息を吐くと  
オスマンは軽く埋まった杖を引き抜き、歩き出して行った。

.....

## 五十七話（後書き）

やっとだ・・・これで、使い魔評論会に入れ・・・  
あ、捕獲した黒フードの話し、まだだった・・・

決死の覚悟で思い出してくるんでちよいと御待ちを・・・  
それさえ終われば・・・更新スピードがダンチに上がる・・・はず。

奈何せん中途半端に覚えているものですから違和感半端ないんで、  
どうもっシツクリこない・・・こんな駄文で本当に良いのだろうか。  
・  
・

ここまで駄文を見ていただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

## 五十八話（前書き）

お久しぶりです、  
どうも、駄文な作者です。

とりあえずは・・・すみませんでしたあああああああああ  
あ！！！！

いや、あの今回かなり遅れちゃったのにはそれはそれは深い深い  
訳が・・・

あ、やめ、石を投げないで・・・

と、とりあえず、言い訳をば

今回遅れてしまった訳は

ある程度知識を得た私こと屑がこの作品を読みなおし思った事が

- 1、設定がややこしい上に中身スカスカ
- 2、文が酷過ぎる、首をつるレベル
- 3、無駄に伏線ばら撒きすぎング
- 4、色々と矛盾し過ぎ
- 5、時間軸？時系列？が無茶苦茶

結果、もう、なんか色々と酷過ぎる。

と、当初

ゼロ魔なら知り尽くしてる（キリッ

二次創作なんて楽シヨ―楽シヨ―とお花畑な

私に現実が見えました。

よって、今回の大遅延、約二カ月の間に

1は設定強化？というか、友人が考えてくれた設定を自分で勝手に  
完結

2は・・・良くなつてると、良いなあー（願望

3はやってしまったものはしょうがない、なんとか回収

4はとりあえず矛盾点チヨコツと改正、他にも「此処おかしいぞカ  
ス！！」

と言うものがあれば感想、メッセージでどしどしと

5はややこしい部分全カット！後に過去編？として上げるつもりで  
す。

と、まあ、こんな事をしていたから遅れた訳で・・・え？

これだけだったなら二ヶ月も遅れないだろ？

ふっふっふ、まさにその通りです

ワタクシめ事駄文な作者、幾ら脳みその回転が常人以下のカスだか  
らと言って

二カ月もの長い間、これだけの事をやっていた訳ではあくりません

実は！この二カ月の間に！！！！

・・・最終話まで書きちゃいました（テヘペろ

いや、途中で面白くなつてずいずい進めてたら終わってましてえ  
上げるのも忘れてたと言うかー何と言うかー・・・

と、大げさに言つてはいますが

まだ見直しもしてはならず、恐らく酷い事になっていると思つので  
一気に上げるなんてことはできません

まあ、一気が上がつても面白みに欠けると勝手にワタクシ考えてい  
るので・・・

とりあえず見直し修正した一話をあげた所存でございます

次投稿はとりあえず、かなり分かりにくい魔族紹介、人物紹介を描  
き直した後

になるので3日ぐらいお時間をください

長々と失礼いたしました

とりあえず・・・ゼロの使い魔、魔人の転生者

再 活 動!!!

あ、百万アクセスありがとうございました・・・え？

## 五十八話

ガリア王国

ハーク領、街道

太陽が落ち、代わりに異なる輝きを放つ双月が辺りを薄く照らす頃、

舗装された一本道を避け、ズンズンと進む黒い巨躯な生物の上でリユーガは寝そべり、大きな欠伸をしていた。

ふあ~~~~つと失礼、お久しぶり・・・になるんだろうかねえ  
どうも、リユーガ・・・。

です！・・・いやいや、名前忘れた訳じゃないよ？

ただその・・・最近ド忘れが激しいと言うか何と言うか・・・  
え？

結局忘れてんだろ？・・・ハイ、その通りです。

だって、もう正直面倒なんだよ、考えてみ？

幾ら外見10代だからって精神年齢もう30よ？

心は永遠に少年のままだろうと

前世と比べ無駄に長い名前なんて覚えてらんないって、これ、マシで。

まあ、その辺はどうでもよかですね。

あ、ちなみに俺が乗ってるの、家のペット軍で

お気に入りNo.3のナルちゃんです・・・ナルガグルガだから

ナルちゃん・・・

え？名前もつと考える？

うるせいやい、俺にネーミングセンスなんか無いっての。

名前なんてそいつがそいつって分かりやそれでおけですたい。

ミラ然り、ティガ然り・・・

つと、またまたどうでもいい話を失礼。

現在時刻は見ての通り月が昇りたての浅い夜。

昼の眠気を誘う陽気な雰囲気とは一変

身が引き締まる様な、少し肌寒い風が流れる頃

わざわざ普段小屋で鼯掻いてるナルちゃん引つ張り出して外歩き

回ってるのには

もう、それはそれはふか〜い理由が・・・

ま、ぶつちやけて言えばミラが帰ってこないんだよね。

家の屋敷から森までミラなら往復3時間ってな距離にある訳なん  
だが

ミラが家を発つてもう6時間近く、心優しい俺はもう心配で心配  
で・・・

まあ、のんびり移動すればそんぐらい掛るだろうけど

俺の頼み事には、常に全力な可愛いミラに限ってそれはほぼありえない。

故に出張ったが・・・何処に居るのやら  
このままだと森に着いちまう・・・

ああ、所でさ・・・

「あんた等何やってんの?」

.....



ガリア王国  
ハーク領、領域外上空

さて・・・困ったことになってしまった・・・

(入、殺)

「おいおい、僕はそちらの領地に入って居ないじゃないか  
そっちに入らなければ

僕が何処を飛ばすと僕の勝手だろ？」

目の前には僕がこれまで侵入しようと思

一度も出しぬけなかった白い竜が鎮座している。

本当にやっかいな相手だ、

何故かヴィンダールヴの能力が効かないし・・・

もっともあちらさんが睨んでるだけで僕の乗ってる子供の風竜じ

ゃあ、

ビクついて動こうとしてくれないんだけど・・・

はてさて・・・どうしたものか

空から入ろうとすればこの竜に邪魔される。

かといって地上から行くこうにも、また無事に行ける保証はない。

横の森からかなり強そうな獣の気配を感じるんだけど

何故かあその獣たち、こっちの森には入ろうとしてくれないし

偶に力が通じない相手も居るから行っても下手を打てば殺される、

か・・・。

「ホント・・・どうしたのか・・・」

一応、横の森から速そうな鳥？みたいな動物を使って  
文を送っては見たけど

どう足掻いてもついて今頃。

其処から援軍が来ようにも恐らく丸一日は掛るだらうしなあ・・・

「うーん・・・」

査察団を使って・・・

いや、恐らく無駄だろうね。

今回借りられたのは聖堂騎士隊 パラディン 一個小隊。

それも保険として駆け出しを集めただけのバラバラな部隊。

一応スクウェアやトライアングルなど粒がそろっているらしいの  
だけだ

誰も我が強いらしく、連携も出来ていなければ賛美歌詠唱など以  
ての外。

最も、例え讚美歌詠唱が使えたとしても

一個中隊と1人でやり合えるような黒フードさんを軽くあしらった  
あの男の人相手じゃあどうしようもない。

ああ、こんなことなら、僕の小屋からあの子たちを連れてきてれ  
ば・・・

ト

「……ん？」

ト  
ト  
ト

なんだい？この音。

不意にジュリオの耳に入った、微かな音。

どうやら、ジュリオが跨る風竜と目の前に鎮座する竜もその音に気が付いたのか、辺りに視線を向け始め首をせわしなく動かし始める。

ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト

(……)

ふとジュリオの目の前にいる竜が首を動かすのを止め真正面に居るジュリオの方をキラリと睨む。

最初ジュリオは何故こちらを、と首をかしげるが、ジュリオはその視線が自分に向けられているものではないと気づきでは後ろに何かあるのか、と首を後ろに回す。

「・・・なんだい？あれ・・・」

舗装された道が何処までも続く殺風景な風景の中  
遥か向こうに赤い揺らぎの様が視界に映る。

トトトトトトトトトトトト

つい先ほどまでは微かな音であったが、今は体がムズ痒くなるよ  
うな

轟音となり、舗装された道がありえないような速さで進む何か。  
ジュリオはそれが何かを見極めようと目を細め、唯ジツと眺めて  
いると

不意に背後から嫌な寒気を感じ、視線を正面へと戻すと・・・

「あら〜ん、折角可愛い顔してるのに残念ねえ・・・  
あと3、4歳あなたが若ければお姉さん。  
貴方にアタックしてたのに・・・」

「ヒイ!?!?」

振り向くジュリオは短く畏怖の声を発する。

目の前にはいつの間にか風竜の背に立ち

マジマジとジュリオの顔を見つめる黒いコートに身を包んだ・・・

・

・

「あんら〜・・・驚いた顔も可愛いわね？」

ジュリオに向かってウィンクする

化粧の濃い赤毛のおっさんが居た。



五十八話（後書き）

再活動につき、やってみたかった後語り〜〜

カス「ひゃほおおおおおおおおおお百万じゃ！

百万じゃあああああああああ！！！！じゃあああ  
あああああ

じゃあああああああああああ

リユーガ「五月蠅いカス」

カス「ぶべらッ！！

ぶ、ぶったな！ブライトさんにもぶたれた事無いのに！！！」

リユーガ「逆にブライトさんにぶたれた奴を見てみたいわ。

つーかよお、そう言うのはよオ

前書きで盛大にお礼を言うんじゃねえの？

なに唯でさえ見てくれる人がいねーよーな後書き

でひっそり言ってる訳？」

カス「だ、だって、前書き良い訳でかなり使っちゃったから・・・

あんまり長くすると読者様神がうんざりするかなって・・・」

リユーガ「安心しろ、この二カ月で殆ど読んでくれている人は消えた」

カス「……………」

リユーガ「つーか、こんな塵作が百万行つた事に疑問だわ」

カス「主人公がそう言うこと言っちゃ駄目でしょう!？」

だ、だが、まだお気に入りが消えている訳ではない!

523人の方々が居る限り、私は……………」

リユーガ「あ、それ消すのも忘れてるだけだから

きつとお気に入り小説の所が上がつても

あゝこれもう話忘れちゃつたから良いや

ツてなるだけだから。」

カス「ぐふつ……………」

リユーガ「まあ、以前は、一ヶ月だつたからまだ覚えてくれていた人も

いるだろーけど、流石に二カ月じゃどーしよーもねーな。

あーあー、俺もなんでこんな奴の作品の主人公なんだが

文は酷いし、構成で来てないし



矛盾だらけ。終いにや自分で書いた事忘れる始末  
どうせだったらもつと良い人に……」

カス「……なんか、もう、ホント……すみません

遅れてすみません……ぶつぶつ……

カスですみません……生まれてきて……すみません……

」

リユーガ「あらら、ちよつと傷口に塩塗ったら鬱つてやんの……

あ、どうも後書きでダラダラとすみません

まあ……百万アクセス、あざっした」

カス「すみません……すみません……ありがとうございます

すみません……すみません……ありがとうございます

（以下無限ループ」

リユーガ「……うじうじとキモイ！

謝るかお礼を言うかどっちかにせいッ！！！！」

カス「ゴルバチョフツ！……ぶ、ぶったな！二度もぶったな！！

ブライドさんにもry」

リユーガ「……無限ループしそうなんでこの辺で。

これからもこんな時間つぶしにもならねえ様な

癒しに

お粗末な物でよろしければ、このかs・・・作者の心の  
なつてくださいな。」

此処まで読んでいただきありがとうございます  
この作品への感想、指摘、意見をお待ちしております

五十九話（前書き）

よく考えたら……話、す・す・ん・で・な・い！！！！

二か月前の俺……何故話盛り上げたし……

どうも、駄文な作者です。

現在魔族の紹介書きなおしてはいたんですが、思うように削る部分が見当たらず

先に此方上げる事にしました。

一応、誤字脱字、文脈の変なところは直したつもりですが……  
あればビシバシとご指摘をば。

## 五十九話

???

チカチカと点滅を繰り返す機械が  
「ごちゃごちゃと足も踏み場もないまでに散乱した部屋。」

その一室には幾つものモニターが置かれており  
その前で一心不乱にカタカタとキーボードを打ち続ける男の姿が  
あった。

「おーおー、やっぱりあの脳筋共は俺と違って適合率高いわー  
見てみるよまさ・・・シユペル、クロエ・・・じゃねえや、ブラ  
ツクの奴89%だつてよ。」

「これなら異能デュナミスも問題なく使用可能だねえ」

「あくまでシユミレーション内での話であろう？  
実戦でその数値が維持出来て始めて使える一品だ。  
後グラッゾ、いい加減名前位覚えろ。」

「うつせーなあ、始めっからある名前です呼ぶのに慣れてるだけだよ  
っーか、何でこのわけわからん世界だとお前ら名前忘れてる訳？  
ハッキリ言ってお前らがブラックだのレッドだの違和感なく  
呼び合う事に

バリバリ違和感感じまくりなんだけど？」

カタカタと手を動かしつつ、後ろで積み上げられた  
機械の山に腰掛けるシュペルと目を合わせる。

「そんなことを言われてもな。

私にはグラッゾが言っている事の方が分からん故なんとも・・・

「・

「俺だけじゃなくて風美<sup>カザミ</sup>・・・ステイシーや

後何人かもそう言う違和感感じてるんだぜ？」

「・・・」

打つ手を止め、体を向けるや腰掛けるシュペルを睨むグラッゾ。

グラッゾの瞳には先ほどまで無かった四角や三角などで構成された  
魔法陣の様な物が浮かび上がっており

まるでシュペルを射殺さんばかりに睨むが、シュペルは物応じる  
事無く

変わらないの無表情で唯ジツとグラッゾと視線を合わせたまま。

部屋に沈黙が舞い降りること数秒、グラスゾの前に置かれた画面に『馬鹿』と文字が表示され沈黙した部屋の中、置かれたスピーカから音声が流れる。

『おーっす、此方レツド。』

最速無事に目的地にとーちャーく

家の兄貴が何時も通り、気持ち悪いんでさっさと帰りたいですー  
おーヴァー。』

机の上に置かれたスピーカからノイズが混じりの間抜けな声が響くと

グラスゾは溜息一つ、ガチャガチャと辺り無造作に散らばった  
機材の中から

マイクを取り出し、返事を返す。

「・・・状況報告しんさい、おーヴァー。」

『状況って今言った通り』

家の兄貴がキショインで帰りたいです、つかもう帰って良い  
？おーヴァー。』

「分かったから、辺りに魔族の臭いは？」

ステイシーの馬鹿が捕まったつーから結構ヤバメな奴いるんじゃないのけ？

オーヴァー。」

『あー……。現在進行形で目の前に居まつせ。

人化状態だから何かまでは分からんけど恐らく水系相性最悪、補足で向こうさん何故かキレ気味。

ヘルプミー。オーヴァー。』

「よし、そのまま死ぬ。オーヴァー。」

『酷いッ!?……。つておわっ!?向こうさん攻撃してきたッ!?』

予想通り水系だよ!死ぬ死ぬ!!!!……。オーヴァー。』

スピーカーから破裂音などが聞こえ始め

その中でも何処か余裕そうに返事を返す声にグラッゾは呆れつつも

キーボードをカタカタ打ち始め口を開く。

「……。っと、ハイこれで準備おつけ。

後はテメエのポンコツに積んだモン放てば脳筋共が何とかしてくれっから。

くれぐれも壊さないようにな。

オーヴァー。」

『うーいりょーかい……って俺の愛馬ジヨゼフィー又は  
ポンコツじゃ……』

画面から『馬鹿』と言う文字が消え、数秒後再びに画面に

『MTRロボ起動』と言う文字が浮かび上がるとグラッソはキー  
ボードを打ち始めると同時

グラッソは目の前に置いたマイクに向かって口を開く。

「もう見えると思うが適当に頑張れや、

あくまで性能テストだからヤベエと思ったら逃げる。

絶対に壊すなよ？」

「既に一機自分で壊しておいてその言い草か？」

「うっせ。

アレは良いんだよ。

姿は機械のまんまで性能<sup>スペック</sup>以上の動きは出来ない試作品<sup>プロトタイプ</sup>だかな。

だが、今回あの変態兄弟に持たせた四機の完成品は訳が違うぜ

「……！」

力強く立ち上がり、腰掛けるシュペルに向かって画面を突きだす  
グラッソ。



「惜しみなく錬金鋼タイトを使い、直径20cmの球体と持ち運びが簡単。

起動には『氣』が必要だが

一度起動すればそこから操従者から送られる『氣』によって行動可能！

操従者の骨格から肉質まで完璧に再現可能で

人化、魔族化なんでもござれ！！

動作性能は

操縦者の動作を1/1000秒以下の誤差で正確に模倣して動き、

五感全てを忠実に操縦者に伝えることが可能！！

だが、操縦には適合率を有し、高くなければ動作模倣以外の性

能は落ちるが

高ければ異能デュナミスの再現も可能！！

やったね！これで引き籠ってても戦地に赴く事が出来るよ！！！！

おっとまだまだこんなもんじゃねえぞ？他にも圧覚超過こそ付

けられなかったもの

まだまだ俺の頭脳をフル活用した機能が盛りだくさんと……

「……………はあ。」

グラスゾは楽しそうに舌を回し、画面に映し出された物の説明をして良いくと

シュペルは呆れたように深い溜息を一つ、グラスゾのマシニングトークを右へ左と受け流し

ゆっくりと立ち上がると部屋の外へと歩き出す。

「はあ・・・ああなつては歯止めがきかんから困るなグラッゾ  
は。」

部屋を出てもまだ微かに聞こえる声に再度溜息を吐くシュペル。

「さて・・・どうせ後1週間やる事もないし・・・  
暇つぶしに誰かと代わるとするか。  
偶には運動せねばならんしな。」

誰に言うでなく、虚空に向かってつぶやいたシュペルはそのまま  
通路を歩いて行った。

.....

ガリア王国  
ハーク領、領境付近

あ、ありのまま今起こった事を話します、  
僕は何時も邪魔される竜と対峙していたと思ったら

何処からか音が聞こえ、振り返ったら化粧の濃い中年男性？が居ました……

な、何を言っているか分らないでしょうけど……  
って、何故此方をガン見？……ってウイंकしてきた!?

き、気持ち悪い……無駄に美形なだけより一層。  
せめて髭をそればいいものを……

ってかその髭は明らかにミスマッチでしょ!!!

それに化粧が濃い!顔真っ白じゃないですか!!

「あんら〜?私の髭に目を付けたのね、坊や見る目あるわね〜」

「……あ、あの貴方は……」

「言わなくていいわ。」

私に惚れてしまったんでしょう?

でも駄目よ、私は全ての憧れでなければならぬの。

坊や1人だけの物になるなんて事は……」

「え、ちが……」

「分かってるわ、全ては私の美しさがいけないのよ。」

「ハッ・・ハハ」

・・・なんて言ったらいいか・・・もう、分からない

ジュリオはそのまま目の前でくねくねと自分の体を抱き  
そのまま独り芝居を始め出した男に苦笑いすることしかできず  
スツと男から距離を取った所で  
ジュリオ達はスツポリと頭上に現れた何かの影に覆われる。

「・・・ん？」

「・・・ツきなり飛びだすんじゃないやねえ！！クソ兄貴がああああ  
あああああああ！！！！」

「あふんツ！？」

刹那、ジュリオ達の頭上に現れた何かは  
ジュリオの目の前で独り芝居をしていた男を叩き落とし  
そのまま地面へと着地する。

「……もう、何が何だが……」

状況の展開について行けず啞然とするジュリオだが  
ヴィンダールヴの能力で風竜に命令を出し  
ゆっくりと地面へと近づく。

「つたく、この糞野郎がッ!!」

俺のジョゼフィー又ちゃんのシート踏み砕きやがって!!!!  
謝れ!俺のジョゼフィー又ちゃんに謝れやゴルアッ!!!!」

「あ、あの……」

「ああん!痛いわマイ弟!!」

仕方が無かったのよ。私の美少年センサーにピンピン反応が来たんだからあん!!」

「す、すみませんが……」

「んなもん知るか!!」

つかいい加減男だつて自覚もてやゴリア!

チ コついてんだろ!?キン マぶら下げてんだろ!?

キメエんだよ、鏡見て来い!この世の汚物の権化が見れっから  
よおッ!……!!」

「ああん、そんな汚らしい言葉どこで覚えたのよ……お姉ちゃん悲しいわ。よよよ……」

ブチッ!!

「え?……おわっ!?!」

上空から2人の元へと近づいていた風竜が突如発生した強風によって揺れ

バランスを崩したジュリオはそのまま地面へと落下する。

幸いにもそれほど地面から離れていなかったので軽傷ですんだジュリオだが

目の前で2つの車輪の付いた物に跨る男から強烈な熱気が放たれジュリオの体全体から汗が噴き出す。

「このカマ野郎が……」

体から熱気を放つ男はわなわなと震えながらゆっくりと倒れる化粧の濃い男へと歩み寄る。

一歩足を進めるたびに男から発せられる熱気が強まり

果てには男の両腕が発火。

しかし、男は両腕から炎が燃え上がっているにもかかわらず構いなしと言った感じで

地に倒れ伏す男の襟首をつかみ無理やり立たせると首の残像が残る程素早く男の肩を揺さぶる。

「俺は！そう言う！なよなよ！したのが！大嫌いなんだよおツ！！  
大体兄貴がそんなんだから周りの奴らに『変態兄弟』だの何だの言われるんだぞゴラァ！！

女装しようが、男に走ろうが

テメエの性癖にとやかく言うつもりはねえがそう言うのは家中だけにしろや！！

わざわざコートの下にフリフリの服きやがって！！周りの目を気にしろ！

見苦しいんじゃないボケツ！！！！」

ブチッ！！

「『周りの目』・・・だとおく？」

こ、今度はなんだ！？

再度ジュリオの耳に響く何かが切れる音、

すると、やられるがまま首を振り続けていた男から

先ほどの甘い声と打って変わり野太い声が響き、ガシッと襟首を

掴み返す。

「おい、ゴラ、レッド。」

俺がどんな生き方しようがテメエにや関係ねえだろうが、  
あん？

確かに俺は幼い男の子が好きだがなあ……

テメエだつて小女（、）ハアハア……とか言ってる輩だからだろうが！！

テメエに俺の小男性愛者シヨタコンとやかく言われる筋合いねえぞこの小  
女性愛者ロリコンがツ！！！！」

ドガッ！！！！

「あーん？何時俺がテメエのシヨタコン否定したよコラ。

俺はそつ言つての表でやんなつて言つてんだよ！！！！」

ドガッ！！！！

「ハア？自分の性癖テメエに何を恥ぢずる事があるつか！！！！

堂々と晒さらけ出してこそ漢女おんなだろうがツ！！！！」

ドガッ！！！！



「それが見苦しいって言うてんだよ！！何度も言うが鏡見て来いやー！！」

つかさりげなく女混ぜてんじゃねえぞ！！！！」

ドガッ！！

い、色々と突っ込みどこ満載なんですが……

2人は叫びつつ何度も互いの額をぶつけ合い

互いの額からは血が流れているが2人はそんなことを気にするこ  
となく

睨み合い、威嚇し合う。

「上等だオラ、表でろや。

今日こそ白黒はつきりつけてやんよ。」

「もう表出てますけど。」

そんなことも分かんねエのか脳筋。

良いからホレ、サツサとかかってこいや

兄より優れた弟なんていねえってこと証明してやんよ。」

「誰が脳筋だオラ。」

優れるツツーよりテメエが劣ってるだけだから、

その醜い面<sup>ツラ</sup>少しはマシにしてやんよ！！！！」

そして2人は互いに右腕を振り上げ強く拳を握りしめる。

2人の拳に真つ赤な炎が灯り、血管が浮かび上がる程

肌の色が白く変色してしまう程

強く握った拳が互いの顔へと吸い込まれようとした瞬間。

「あ、あの！！その辺に……」

「「あゝあゝ？」」

「……し、しといた方がいいのではないのでしょうか（ボソ）」

最初こそ勢いのあるものの2人の睨みに臆したジュリオの言葉はどんどんと小さいものへと。

しかし、2人はジュリオを見たたんパチクリと目を開け、互いの顔を見合つと……

「「……あー……忘れてた。」」

.....

ガリア王国

ハーク領、マダガスカルの森 中心部。

沈みかけの太陽の光を反射し朱色に染まる湖。

その畔では湖と同じく朱に染まった水で出来た人形と

きめ細かく長い銀色の髪をなびかせ

まるで舞うかのようにその水人形の攻撃を避け続けるユーリの姿。

そして、そのさらに奥にある小屋の近くでパラソルの下

大きな隈を拵え欠伸をするセツタの姿があった。

は、果てしなく・・・眠い・・・

ああ、サンで遊ぶのに楽しくなり過ぎてつい三徹・・・

それに加えいつの間にか来た主の相手までさせられるなんて・・・

・ z z z ・ ・ ・

ハッ！？・・・いかんいかん、危うく眠るところだった・・・

主を放って寝てしまと直ぐに不貞腐れてしまう故

後の機嫌取りが面倒だ……  
ああ、速く飽きてはくれないだろうか……

「~~~~ド~~~~ン？」

セツタの思いとは裏腹、  
湖の畔で水人形の攻撃を楽しそうにかわし続けるユーリ。

傍から見れば戯れているだけにしか見えないのだが  
時折水人形の拳が木々をなぎ倒し、地面を陥没させているので  
あながち笑えなくなってくる。

しかも、まだ幼いとは言え、真租の吸血鬼であるサンが魔法まで  
使用し

3日間戦い続け倒す事の出来なかった人形を3体同時に相手取っ  
ている。

ふーむ……幾ら、私の1/10程度とは言え  
こつも相手にならんと自信が無くなるな……  
全く、リユーガの奴は主に何と吹き込んでいるのやら。

だがまあ……主が勝手に強くなってくれるのは喜ばしい事だ  
私達水鬼にとって契約者を殺されるが一番厄介だからな。

「……ふあゝ……少し段階をあげようか……」

欠伸交じりに指先から何かを飛ばすセツタ。  
するとユーリに向かって休みなく攻撃を放っていた水人形が一斉に動きを止める。

「……うー」

急に動きを止めた水人形に首を傾げるユーリ。

すぐさまユーリはセツタの方へと頬を膨らませ視線を投げつける。

まるで「調子出てきたから止めんなよ」と言わんばかりに。

しかし、そんなユーリの表情は一変、満面の笑みとなる。

目の前で動きを止めた水人形達は各々に体の一部を変貌させた、

1体は右腕に当たる個所がボコツと膨れ上がり。

1体は両腕を鞭の様に細く長く。

1体は両足がまるでカモシカのように膨れ上がる。

「戦いにおいて、先ほど主が相手取った木偶のように

同じ力、同じ速さの相手などはありません。

それぞれに個性がある。」

セツタの言葉と同時に姿を変えた1体の水人形がユーリへと飛びかかる。

飛びかかった足を変貌させた水人形は先ほどとは比べ物にならない

い速さで

一瞬でユーリの目の前に現れ拳を突き出す。

「!？」

「力はなくとも、速さが在り  
それを武器に戦うものもいるだろう。」

セツタの言葉通り、飛びかかった1体は  
拳に重みはないものの、ジャブのように素早い攻撃の連打を繰り返す。

先ほどまで余裕の表情で避けていたユーリだが  
その顔からは余裕の表情は消え、避けるので手いっぱいとなって  
しまう。

「……ッ!?!……このッ!?!」

次第に何発か貰うようになったユーリは  
避ける行動を止め、一歩前へと踏み出し蹴りを繰り返す。

「うむ、避ける事が難しいのなら

貰う覚悟で前に出る、悪い判断ではないぞ、だがな。

そう言う者たちほど……」

ピシャンッ!!

「ッ~~~~!!?!?!?」

「良く群れる。」

蹴りを繰り出そうと足をあげた所で、ユーリの足に強烈な痛みが走る。

ギロリと自分の足に当たった何かの元を睨むユーリ。視線の先には両腕を長く変貌させた水人形がまるで鞭を振り終えたかのような動作で立っている。

「攻撃の速さに対応できず、貰う覚悟のカウンター。その受けると言う意思を感じ取り、

其処に注目を向ける攻撃で自分へと視線を向ける。

ほれ、そっちに視線を向けたら

視線を向けたとたん、目の前の水人形に脚を刈り取られ仰向けのまま地面に倒れ込むユーリ。

「体勢を崩され

「うえー!？」

仰向けに倒れ込んだユーリの視界には映ったのは朱に染まった空ではなく。

「必殺の一撃、と、な。」

右腕が膨れ上がった水人形がその右腕を振りおろしながら落ちてくる姿だった。

「まあ、此処まで、と。」

パンツー!!

その言葉と共に水人形達は一斉に弾け唯の水へと戻る。

当然ながら、1体の水人形の真下に居たユーリは唯の水へと戻った水人形だった水をモロにかぶりずぶぬれとなる。

「あ~~~~~~~~」



「個性の強いものほど、その個性が生かさせなければ  
それほど扱いやすい者はない、が。  
それを補う面子とやり合つとかなり面倒なんだよ。  
分かつたか？」

体だけ起こし座り込んだままボーツとするユーリに  
セツタはタオルを被せわしゃわしゃと濡れた髪を拭く。

「うん？・・・何となく？」

でもさ、それと遊んだらどうすんの？」

ユーリはセツタにされるがまま髪を拭かれる中  
疑問を繰り返す。

「うん？それを相手取つた場合か？」

そんなものは簡単なことだ。」

「・・・？」

ユーリの問いかけに軽く笑みを浮かべ口を開くセツタ。

「1人潰してしまえばいい。」

そう言う輩達は自分達のリズムを大事とするからな。

そのパターンをさせぬまま……  
まあ、簡単に言うなら。

何もさせぬまま先に潰してしまえばいいだけの事だ。」

「……ひきよくない？」

それに、それってごわごわとかビューンぐらいじゃなきや……

「

「だが、そう言うものだ。」

「……うう？……あれ？？」

セツタの言葉に納得いかないように首を傾げるユーリ。

「まあ、あくまで私の考えだから

鵜呑みにするのも止めておけ、

そう言うものは自分で積み上げていくものだ。」

「うう……ん？……もいつかい！」

「……はあ……もういい加減私は眠いのだよ。」

そろそろ限界が近いので今日はここまでにしてはくれまいか？」

「もいつかい!!」

「いや・・・だから・・・」

「もいつかい!もいつかい!あ~~~~そ~~~~ぶ~~~~の~~~~」

そのまま地面でジタバタと暴れ出すユーリ。

これぞ子供のみが使える究極の奥義、『駄々をこねる。』

その効力は、全ての『親』と言うものに大きなダメージを与える。だが、厳しい親ならば一喝して終了、使う相手には要注意奥義である。

あと大人になってからやんなよ!唯痛いだけだから!

フリじゃないからな!お兄さんとの約束な!!

と、まあ水鬼にとっての契約者と言うものは

関係でいえば、『家族』とまでいかない親しき関係。

この2人では、

年齢の差から偶にしか構ってやらない(セツタの自由尊重の為)

親子。

ユーリが甘えてくれば甘やかすと言う構図になるので、

その究極奥義にセツタは困った表情を浮かべることしかできない。

「あ……いや、だから私も限界と言つものが……ん？」

「……ぶ~~~~の~~~~……焦げくさい？」

セツタは何かに気づいたように森の方へと視線を向ける。

それに続き、ユーリも駄々をこねる事をピタリと止め

セツタと同じ方向へと視線を向ける。

「……」

「う〜？……ビューン……じゃなくて……」

「主。」

「家の中へ。」

「うゆ？な……して？」

先ほどの困った表情一変。

冷やりと感じる程冷たい表情でセツタは家へとユーリを促す。

「早くしろ。家から出てはならんぞ。」

「……………」

森へと視線を向けたままセツタは変わらぬ表情でユーリに言葉を投げかける。

それにはユーリも大人しく従い、小屋へと駆けだして行く。セツタはユーリが小屋へと入ったことを確認すると湖の水を操り、空に浮いた水が小屋をスッポリ包むと水が色を変え、最初から無かったかのように小屋を隠す。

「……………全く……………何処の誰かは知らんが

私の縄張りに土足で踏み入るだけに飽き足らず睡眠時間まで奪おうとは……………」

苛立ちの感じられる声で呟くセツタ

それと同時にセツタの見つめる先から黒煙が立ちあがり木々を焼き払うように真っ直ぐ炎の道が出来上がる。

「あまつさえ私の庭を荒らすとは……………」

セツタは出来上がった炎の道の先に殺気を飛ばし炎の道を塞ぐようにその道の中央で仁王立ちした瞬間。

ト  
ト  
ト

何処からか、ムズ痒い轟音がセッタの耳に届いた。



五十九話（後書き）

ふうむ・・・なんか書くことねえや！

リユーガ「んなわきやねえだろ！！！」

izumry「たわばッ!？」

リユーガ「おいコラ、どう言うことだこれ

なんか新キャラ盛りだくさんでて来てんぞ

それに他にも居るッポイフラグ立ってるんですけど何これ  
終わるのこの作品？」

izumry「いや、もうオワてるんだってヴァ

ア」  
ただ見直すのに仕事が忙しくて時間無いだけなんだってヴ

リユーガ「ああ、そういやそうだったな・・・そうそうラストはまさ  
かの・・・」

izumry「言つなああああああああああああああああああ  
あ！……！

主人公がネタばれって何考え点ノオオオオオオオオオオオ」



リユーガ「じょーだん、じょーだん。んな叫ぶな  
鼓膜に響く。」

izumry「ハ、ハ、ハ。あかん手！冗談でもあかんて！

もしかしたらこの作品楽しみにしてくれてる人が  
ラスト先に知るとか

最早死ねるレベルだよ！！！」

リユーガ「安心しろ、そんな神様みたいな人いねえから」

izumory「主人公が自分の物語disってんじゃねええええ  
えええ

もつと自信を持ってよ！どうしてそんなに悲観的なんだよ

！！！」

リユーガ「だつてねえ？・・・ねえ？」

izumry「その含みある言い方やめろ、イラツと来る。」

リユーガ「あーん？イラツと来たから何だツてんだ？

テメエの妄想から生まれた俺に勝てるんでも思ってるの

かーい？」

izumry「自分の存在メタんなよ・・・」

リユーガ「まあ、んな事さて置き

先が出来るとは言え、一気にバンツッと出さないと  
ややこしくなるんじゃない？」

izumry「大丈夫だ、問題ない

次話で恐らく敵キャラ含め

モブ以外のオリキャラは全て出る・・・等。」

リユーガ「なんで自信ねえんだよ、つづきもうあるんだろ？」

izumry「いや、その・・・なんていうか・・・」

リユーガ「まさかまた消えたとか言うじゃないねえだろうな

二度目は切腹通り越して殺してって言うまでの拷問だぞ」

izumry「いや、そうじゃなくて・・・あの・・・スツゲエぐち  
やぐちやなんだよ」

リユーガ「何が？」

izumry「だから、話は全部メモ帳として1つのフォルダにちやんとあんだけど」

題名がぐちゃぐちゃで……今までのも含め100軽く越えてっから探すのが面倒で……」

リユーガ「もう良いよ、とりあえず拷問な」

izumry「え？……ちよ、いまどき木馬はちよっと……ってアツーーーーー」

リユーガ「とりあえずこのカスはシバキ倒しとくんで

次回、お楽しみにしてくれたら……いいなあ」

izumry「ちよ、おま、そんな無理だつてば！！！！うぎゃああああああああ

あ……ああ……ガク」

リユーガ「返事がない……ただの変態のようだ……」

izumry「そこ死体だろ！？」

ここまで読んでくださってありがとうございます。  
この作品への感想、指摘、意見などをおまちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8485r/>

---

ゼロの使い魔～魔人の転生者～

2011年10月13日02時21分発行